
異世界旅行

汐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界旅行

【Nコード】

N3647K

【作者名】

汐

【あらすじ】

最強オリ主を夢見た主人公。神に与えられた能力を元に色んな世界でやりたい放題……になるかも。＊注意――原作崩壊、アンチ、テンプレなど、作者にも今後どうなるかわかりません。それでも良いという方のみどうぞ。 完結しました！ 今までありがとうございました！ ございます！ これからは『異世界旅行／真・リリカル編』に移行しますのでそちらをよろしくお願いします！！

プロローグ（前書き）

初投稿、処女作です。

誤字脱字等、素人じみしているところがありますがそれでも良いという方はご覧になってください。

プロローグ

「……ッ」

意識が覚醒する。

視界に入ってきたのは眩いばかりの光。
やはりここは言うべきなのだろう。

「知らない天井だ」

「天井なぞ無いぞ？」

うん……何だか幻聴が聞こえる。
とりあえずは現状把握だろう。

上……光。

右……光。

左……光。

「現実逃避とは……何とも醜い事をするの。ちなみに天井はもちろん壁も無いからの」

さて、さっきから爺口調の声が聞こえるんだがどこから聞こえるのだろう。

周りを見渡しても何も無いし。

「いや、渡すってそなた目が無いであろうが」

目が無い？

何を言っているのだろうか。

この通り俺の眼にはちゃんと見えているのに。
……というか俺の考えている事が読まれてる？

「当たり前じゃろうが。我を誰じゃと思うとる」

いや、誰ですか？

「おお！ 紹介がまだじゃったな。我は……ふむ。そなた等が言う所の神見たいな者じゃ」

へえー、そう。で？ ここどこ？

「どこと言われてものお。この場に名は無いのでな。強いて言えば狭間かの。それともこう呼んだ方がいいかの？ “あの世”と」

俺が死んだってことね。

それなら納得。死んだなら目も無いだろうしね。

「面白い奴じやのう。流石は自我を保つだけの事はある。どれ……
！ ほう！」

何か喜んでるんですけど。

「そなたであつたか！」

いや、だから誰だよ。

というかいいかげんに姿が見えるようにしてください。幻聴と話す気はないんで。

「ふむ。記憶が無い所を見るとどうやら力の全てを使い果たした様

じゃな。どれ……これで良いか？」

視界に入ってきたのは……全裸の少女。

「……なんでさ」

思わず言ってしまった俺に罪は無いだろう。

「少し待っておれ。記憶を戻すからの……」

暫くして襲ってきた頭痛。

想像を絶するような痛みした後で……っていうのは嘘で頭を小突かれた程度の痛みだった。

「おっけー。思い出した」

そう言えば何だかこの少女に能力を貰ってやっちゃまったんだ。

「にしても世界を創造するとはの……いくら0からではないとはいえやり過ぎじゃ」

「いや、しょうがないじゃん。やっぱりこんなに素晴らしい能力を貰ったんだからやらなくちゃ。人類の夢ですよ……最強オリ主は」

そう。俺は世界を作ってしまった。

まあいろんな事があってこの少女に能力を貰い、これから最強オリ主として過ごすのだ。

「しかし……人間とは本当に分からの。何でこんな世界を作ったのやら。まあ良い。我も暇じゃからの、観察ついでに世界の面倒も

見ておいてやろう」

「サンキュー。じゃあ、行ってくる」

そうやって俺はその場を後にしようと水晶のような球体に手を突っ込んだ。

直後、神が声を上げた。

「あ！」

「え？ 何そのやっちゃった、みたいなの！ おい！」

「……行ったか。ふむ時間軸を少し間違えたの。まあ良いか。……しかし人間は本当に面白い。やはり能力を与えてよかったの」

プロローグ（後書き）

どうだったでしょうか。

感想、こうした方がい良いなどありましたらどんどんお願いします。

主人公設定（前書き）

設定です。

今後の展開によっていろいろと変わる予定？

主人公設定

名前

真柄まがら 拓真たくま

外見年齢

17歳

身長

170cm

容姿

一般的な日本人タイプ。能力使用時に目の色が金色に変化する事以外は割と普通。

顔は悪くはないと言った程度。

性格

基本何も考えていない。

味方にはとことん優しい。敵は別。

能力

創造…ぶっちゃけ時間をかければ何でもできる。

神眼…いろんな力を持つ目。発動時に金色に変化。

貯蔵…入れたり出したり、何でもござれ。

不老不死…時間軸を間違えた為に神によって追加された。真祖の吸血鬼とは違う。

第一話 最強オリ主ここに極まり（前書き）

面倒だったので一気に大戦まで

第一話 最強オリ主ここに極まり

「……誰？」

目の前の血まみれの少女が俺に問いかけてきている。
うん。あの時の神の「あ！」っていうのはこの事か。
紅き翼結成時ぐらいに居る予定だったんだけどな……まさかこんな
に前に来てしまうとは思ってもみなかった。
しかも目の前の少女は絶賛警戒中だし。

「えっと……真柄 拓真です。君は？」

「……エヴァンジェリン」

「……」

会話が続かない……。

「あなたは何をしに来たの？」

「何ってというか適当に転移してたらここについたというか……」

「私を殺しに来たんじゃないの？」

「君を？ 何のために？」

まずは警戒を解くことだろうな。

「……吸血鬼だから」

「それで？」

「ッ！？ 私を殺さないの？」

「別に吸血鬼だからってどうこうする気はないよ」

これで警戒が解ければ良いけど。まあ、無理だろうな。チャチャゼ口も後ろに居るみたいだし。

「……チャチャゼロ、この人大丈夫」

警戒解けた！？

「ケケケ、御主人ガソウ言ウンナラ仕方ネエナ」

「あー……その、俺が言うのも何だけど、そんなに簡単に警戒解いて良いの？」

「殺気が無いから」

あ、納得。

今まで近づいてくる奴は皆そういう奴らだったって訳ね。なら――

「あのさ、俺に魔法を教えて欲しいんだけど」

「私と一緒に居ると狙われる」

「いや、身を守るだけの力はあるから大丈夫。だから一緒に行かな

い？」

「……良いの？」

「ああ」

ふむ。テンプレ通りだったけどこれで心を開いてくれただろう。後は……原作が始まるまでに死ななければ良いなあ。

――数十年後

「なあ」

「何だ？」

「何で貴様は一向に死なないんだ！ 吸血鬼では無いと言っただろうが！」

「いや、でも牙生えて無いし」

うーん……考えられるのは神が何かしたってことだけなんだけど。

『そうじゃ』

「うおっ！」

「な、何だ!？」

俺の声にエヴァがびっくりしてる。

「あー……何でもない『おい、何の用だよ』」

「そ、そうか」

『いや何。そなたに一つい忘れていたのです。そなたを不老不死にしておいたからの。それだけじゃ』

ふむ。ってことは傷ついてもすぐに治ったりするのはその影響ってことか。

ならこんなに身体を鍛えなくても良かったってことじゃん!!
くそっ、あんなに頑張ったのにほとんど無意味とは……。

「エヴァ、何だか俺不老不死らしい」

「らしい、とはどういう事だ!　ちゃんと説明しろ!」

「あー、ずっと前に神について話しただろ?　そいつから今念話が
あつて、そう言われた」

「真祖の吸血鬼でも無いのに不老不死か。お前はとことんバグだな
ごもつともです。」

それにしても一向に紅き翼が出てくる気がしないし、修業も殆ど終
わってるし……これから何しよう。

「なあエヴァ。魔法世界に旅行しに行かないか？ どうせやることも無いし」

「そうだな。お前が不老不死だと言うなら時間は無限にあるのだからうからな。行くか」

――数百年後

いつの間にか結構な時間が経っていました。

え？ 修業とか日常生活の事？

まあ面倒なんで気が向いたときにでも。

それよりもいよいよ何だよね。

ええ。エヴァと別れて旅をし始めてから数年。漸く、漸く紅き翼が結成されました。

そして目の前ではあの有名な場面が繰り広げられています。

「我が騎士よ」

「だから、その「我が騎士」って何だよ！ 姫さん！？ クラスでいったら俺は魔法使いだぜ？」

「もう連合の兵ではないのだじゃろ？ ならばお主は最早私のものじゃ」

「な…っ」

「連合に帝国…そして我がオスティア。世界全てが我らの敵という訳じゃな」

「じゃが…主と主の「紅き翼」は無敵なのじゃろ？」

「世界全てが敵―良いではないか、こちらの兵はたったの7人、だが最強の7人じゃ」

「ならば我等が世界を救おう！ 我が騎士ナギよ、我が盾となり、剣となれ」

「…へっ、だから俺は魔法使いだっつーのに…」

「やれやれ、相変わらずおっかねえ姫さんだぜ…」

「いいぜ―俺の杖と翼、あんたに預けよう」

やっぱり介入するとしたらこのタイミングだよな。

「失礼」

俺の声に反応して紅き翼の面々が一齐に戦闘態勢を取った。空気が張り詰め、戦場独特の緊張感が漂う。

「姫さん、絶対に俺から離れるな。おい、お前誰だ？」

ナギがアリカ王女の傍に、タカミチがテオドラ皇女の傍に、そして世界最強と名高い面々が俺を警戒している。

「ナギ。目を離したら終わりだと思っておいてください。今我々の目の前に居るのはかの“剣聖”です」

クウネル……いや、今はまだアルビレオだったか、そいつが警戒をあらわにしている。

「初めまして皆さん。タクマ・マガラという者だ。とりあえずやこしいのは抜きにして……かの“紅き翼”と戦りに来たのでお相手願おう！」

——side ジャック

そいつがそう言った瞬間、姿が消えた。
おそらく知覚出来た奴はいなかっただろう。

「姫さん！？ くそっ！」

ナギがそう言った瞬間、紅き翼の面々が同じ方向に目を向けた。
視線の先に居たのは、テオドラ皇女とアリカ王女、タカミチの三人だった。

「安心しろ。この三人には手を出さないから。それから三人の周りには結界が張ってあってな、どんだけ攻撃しても壊れないから安心しろ……いくぞ！」

いつ手に取ったのだろうか、どこから出したのか、奴の手には剣が握られていた。

剣が放つ魔力。それだけでまずい状況だと認識させられる。

「エクス……」

奴の持った剣が発光し出し、魔力が集束してく。

——気合い防御ッ!!

「カリバー！」

斬撃が放たれ、まばゆい光が視界を埋め尽くしていた。

数秒が経ってから二本の足で立っていたのは俺とナギの二人だけ。

「二人残ったか」

何ともなかったかのようにそいつが眩き、いつの間にかさっきの剣が消えていた。

「何が二人残ったか、だ。二人残したんじゃないか」

ナギが吐き捨てるように言う。

あいつはまだ喋れるだけの力が残っていたのか……

「いや、本当はお前だけを残すつもりだったんだけどな。予想外に“千の刃”も残った。流石と言うところかな。まあ、もうしゃべれるだけの体力も残ってないみたいだが」

「へっ！ 上等だ！ 俺一人でも勝ってやるよ！ オラッ “千の雷”」

——side タクマ

いつの間に詠唱を終わらせてたんだか……にしても“約束された勝利の剣”の出力上げすぎだな。口ではあんな事言ってみただけ本当はもっと残ると思ってたんだよなあ。

「よそ見してんじゃねえ！」

やっぱりこいつバカだな。

俺に近接戦闘で挑んでくるなんて。

俺が何で“剣聖”って言われてるか分からないのかねえ。

「神鳴流奥義“極大 雷鳴剣”」

「へっ！ んなもん当たるかア！」

と言っても俺が影分身した事にも気付いてないみたいだしな。これで終わりだろう。

「ガアッ！！ クソッ……どこから……」

……何か凄い一方的に終わっちゃったんですけど。と言うかまだ一分経ってないよ！？

やっぱり修業のしすぎだったか。いくらなんでも不老不死なのに別荘使って千年近く修業するとかやり過ぎだったな。

「さて……」

そう言って残った三人に近づく。
何だか随分と俺悪役っぽいなあ。

「ここで一つ提案」

「……何じゃ？」

タカミチは二人を庇う形で前に立ち、アリカ王女がいぶかしげに俺に問いかけてきた。

テオドラ皇女は震えたままタカミチの後ろに居る。

……これどう見ても俺が悪人じゃん。

まあ、賞金もついてるし今更へこむことでも無いだろうけど。

「俺の事も仲間に入れてくれない？」

「……何が望みじゃ？」

「戦争が終わった後に賞金の取り消し。どうせ俺が居れば何とかなるだろうから」

第二話 決戦（前書き）

話の展開が早い………というかいつの間にかこんな事態に………

第二話 決戦

まさかな……一番ビビってたテオドラに雇われるとは……。
テンプレ通りとはいえ、流石に無いと思ってたけど。

「暇なのじゃ！ タクマ、何か出すのじゃ！」

「ヘイヘイ。っても何が良いものか……ああそうだ。これ食うか？」

「何なのじゃこれは？」

「いつだったか忘れたけど間違えて龍を倒した時に作ったステーキ
やっぱり“貯蔵”使ってこれしまっておいてよかったわ。こんな場
所じゃ王族が満足するような食事なんてできないだろうからな。

「り、龍の肉など食べられるのか？」

「え、食ったこと無いの？ 無茶苦茶上手いのに」

「な、ならば食べるのじゃ！」

そう言って恐る恐る口に運んでいく。

「~~~~ツ！！ 美味しいのじゃ！」

「だろ？ 熟成されてて尚且つ魔力も回復できるからな。こんなに
良い食べ物他には無い。どうだ、タカミチ君も食べるか？」

「け、結構です！　　というかそれよりもナギさん達を起こして下さい！」

あ、忘れてた。

「えっと、プラクテ・ピギ……ああ！　　もうメンドイ！　　起きろ！」

詠唱が面倒だったので適当に魔力を放出して紅き翼の皆さんを起こす。

――side　ナギ

「ッ！」

意識が戻りいつの間にか小屋の中に居たことに気付く。

「起きたか、我が騎士よ」

「姫さんか……あいつは？」

どうやら助かったらしい。

「……あそこで第三皇女と食事をしておる」

――は？

「い、いや何で？」

「何でも主等と戦ったのは暇潰しだったらしい。真の目的はこの戦争に参加して賞金を取り消してもらう事だとか……とにかく良く分からん男じゃ」

賞金、ねえ。そんな奴には見えないんだけどな。

今も第三皇女に頭叩かれてるし。

「なあ、あんた……紅き翼に入らねえか？」

「な、ナギ！ 何を言ってるんだ！ そんな事「良いぞ」」

復活した詠春が異議を挟もうとしていたがそれに被せるようにあいづが受け入れてくれた。

「その方が賞金を取り消すのにも役立ちそうだしな」

それが理由か。なら信用しても大丈夫そうだな。
それにしても……

「なあ、あんたさっき俺とやった時に神鳴流使ってたよな。何でだ？」

「本当か！？」

詠春が驚くってことは知らなかったのか。
でも確かに神鳴流って言ってたしな。

「ずっと前に京都に行った時に見て覚えたんだよ。まあ、詠春が知

らないのも無理ないな。大体400年くらい前だから」

なるほどな。それなら詠春が知らないのも無理ないか。

「“剣聖”の名はだてじゃないってことか。まあこれからよろしく頼むぜ、タクマ！」

――数日後

俺の役割はテオドラの護衛に決まり、特に“完全なる世界”の奴らと戦ったりすることも無く、数日が経った。
暫くした後でタカミチとテオドラが帝国の説得に向かったが、それも間に合わず、ついに“墓守り人の宮殿”へと舞台が移ってしまった。

「見事……理不尽なまでの強さだ……“千の呪文”の男そして“剣聖”」

とまあ、俺とナギVSアーウェルンクスだったので勝負が速攻でつき、奴は現在ナギに持ち上げられていたりする。

つまりはこの後に造物主の攻撃がある訳だ。

……来た！

「ロー・アイアス！」

用意してあった宝具を取り出し、俺とナギの前に置く。

造物主の攻撃はその花弁を一枚ずつ砕いていき……あれ？ やばくね？ 砕けるの？

「ちょ、待て——」

攻撃が俺の身体に当たった瞬間、意識が途切れ、視界が真っ黒に染まった。

「何であー!!」

「お！ 起きたのか」

俺の意識が戻り、視界に入ってきたのは何を隠そう神。

「……ねえ、まさか俺死んだ？」

「あー……何というかの。その、本当だったらあの攻撃はそなたに当たらないはずだったのだがの、我が少し細工をして当たるようにしておいた」

「いや、何でそんな事したんだよ」

「そなたが居なくなってから我もアニメとやらを見たのだがの、意外にもはまってしまったの。そこで先に別の世界に行って欲しくなったから連れてきたのじゃ」

泣いても良いでしょうか。

漸く原作崩壊の狼煙が上がろうとしていたのに。

「では行くのじゃ！」

「ちょ、待て——」

おんなじように俺の声は無視されて俺の意識は再び沈んだ。

第二話 決戦（後書き）

まさかの事態です。

次なる世界は……まだ決まってる。

もちろん“ネギま”には戻ってきます。

第三話 彼が初めに発した言葉は……（前書き）

とりあえず会話はほとんどありません。

状況説明みたいにしようと思ったらそうなっちゃいました。

第三話 彼が初めに発した言葉は……

「知らない天井だ」

二度目です。ええ。

そして今回は本当に天井があります。

しかも何故か身体が以上に小さくなってるし。あれですか？ 今回
は不老不死じゃなくて普通の人間として過ごせと？

「あ、あなた！ タクマが喋ったわ！」

うおっ！ その女性。急に大きな声で喋らないでください。頭に
響きます。

……というか誰ですか？ 知らないのは天井だけじゃなくてあなた
も何ですけど。

「本当か!？」

だからうるさいって。頭に響くから大きな声を出すな。
というかもうそろそろ眠く……お休み。

『忘れておった!』

『だからうるさいって!』

『おお、すまん。というかそなたに言い忘れていたのじゃ。そなた

のその世界での設定じゃがな……名前は変わっておらん。それからこの世界では不老不死では無いので、大きなけがなどをしたら世界からはじき出されるからの。後はそうじゃな……原作は崩壊させても構わん。というか寧ろそなたがおることによってどうなるか知りたいでな。頑張るのじゃぞ。ではな』

あいつ一方的に喋るだけ喋って帰りやがった。

しかもここがどういう世界なのか言っていないし。

……まあ、何とかなるか。

――二年後

え？ また早い？

気にするなって。赤ん坊の内はする事なんてそんなに無いんだから。とにかく変化して修業三昧の日々でしたよ。

貯蔵の能力を使って経験だけを溜める別荘を取り出し、そこで修業してたんですけど……何故かそこに茶々丸が居ました。

彼女、神によって送られてきたらしいです。

曰くおまけだとか。

しかもこの世界での立ち位置は俺付きのメイド。

宝くじが当たった時に家を改築し、ついでにメイドを一人雇ったという設定です。

「マスター？ 何を呆けておられるのですか？」

「ああ、ちよつと現実逃避を」

「そうですか。なるべく早く終わらせて下さい」

了解しました。

……ええ、俺は今五歳です。ですから小学校に通う事も分かってはいました。

今日は入学式という事で茶々丸に連れられてやってきたのですが……

「“私立聖祥大学付属小学校”、か」

まさかの魔“砲”少女の世界でした。

……ええ、分かっていましたよ。何せお隣さんが家に道場を持ち、そして“翠屋”という喫茶店を経営していましたから。

しかもまさかの“なのは”という栗色の髪の毛の娘さんが俺と同年でしたから。

——幼馴染ルートかッ！

そう思った理由の一つには昨年、高町さんの家の大黒柱、土郎さんが退院したからです。

そして茶々丸が寂しくないようにと、家に連れてきて俺と彼女で遊んでいました。

なのはさんが一人でさびしくしているというルートは回避した訳ですが……。

まあ、これ以上は語らないでいきましょう。

何はともあれ今は入学式です。

「――」

校長の長い話しが眠気を誘ってくれます。ちなみに俺はまさかの最後尾。

う行とかワ行の男子が居ませんでした。

まさかのア行の男子が十人。びっくりです。

というか校長の話が長すぎだと思えます。

もうかれこれ一時間近く話しこんでいます。

「校長先生ありがとうございました。次は理事長の――」

まだ続くのかッ！

「な、長かった……」

いくら名門だからって話しが長すぎる。

気付いたら入学式が終わってたし。

まあ、その後は何も無かったんですけど。

「マスター」

「何？」

「私は買い物をしてから帰りますので」

「ああ、分かった」

という事で帰りは一人で帰ることになりました。
なのは家族と一緒に帰るそうなので。

だから今日の俺のスケジュールは一日訓練です。

――数ヵ月後

「痛い？ でも大事なものを取られちゃった人の心は、もっともつと痛いんだよ」

そんな声が聞こえたと思っていた時期が俺にもありました。

しかしそんな声は聞こえるはずがないんです。

なぜなら……小学校に入学する前に既に三人娘は知り合いだったからです。

母さんは無駄に商才があったらしく、宝くじが当たってからというもの、それを元手にして事業を立ち上げ、成功してしまい、今では真柄の家はバニングス、月村の両家に次ぐ資産家となってしまうました。

そのおかげで、俺はツンデレお嬢様とお近づきになり、そのままツンデレとなのはが友達になったことで、ツンデレはわがままな子ではなくなりました。

原作通りにしようと思ったのに……母さんに原作崩壊されてしまいました。

ああ、原作崩壊と言えば今無双中の吸血鬼のお嬢様も既にお友達です。

ちなみに友達になるまでの経緯はこちら。

茶々丸が猫と戯れる↓その猫はすずかの家の猫↓茶々丸が月村家に
↓茶々丸がすずかを家にご招待↓エンカウント

こんな感じでした。

まさか母さんに続いて茶々丸まで原作をぶち壊すとは……。

ピーー！！

笛の音が上がリ、ドッジボールが終了となりました。

ちなみにクラス対抗だったんですけど、俺のクラスは負けました。
何せ相手のお嬢様が“すずか無双”をされてましたから。

……認識阻害の魔法でも使っておられるのでしょうか。

何でこんなに常人離れた弾を投げているのに変だと思わないんでしょうか。

……ああ、皆小学生でしたね。

こういう現象も凄いの一言で済んでしまうんですね。

もうお気づきかと思いますが、俺と三人娘は別のクラスです。

幼馴染ルートかと思っていたのにまさかの違うクラスでした。

それでもって三人娘と仲良くしてるもんだから俺には同じクラスの
友達が一人もいません。

嫉妬ですね。分かります。

……とは言ってみたものの、一年生の時点で嫉妬とかするものなの

でしょうか。

ちなみにいつの間にか昼食の時間になっていた訳ですが、俺の弁当は常に茶々丸が作っています。
毎朝二人分も。ご苦勞な事です。

え？ 何で二人分なのかって？
それは……

「あかん。拓真君またトリップしとる」

とまあ、関西弁のお嬢様が俺の家に住んでいるからです。
ここでそうなった経緯を説明しておきましょう。

茶々丸買い物へ↓スーパーではやてと出会う↓茶々丸が荷物を持ってあげる↓茶々丸、はやてが一人で暮らしている事を知る↓家に連れてくる↓茶々丸がその能力のあらん限りを駆使して母さんをはやての保護者に

こんな感じです。

ちなみにはやての家には結界がかかっていました。

流石に小さい子が一人暮らしをするのはありえないですから。

一般人が八神家に行った時にその疑問が無くなるように結界が張られていました。

……グレアム、死ねば良いのに。

というのは茶々丸と母さんのお言葉ですが、それには激しく同意です。

ちなみに茶々丸がネットを駆使し、母さんがバニングス家の伝手と金を使って法的にはやてを引き取り、俺がグレアムにばれないようにはやてに変化した分身を置いてきました。

原作崩壊も良い所ですね。

何せ既にはやてはなのは、アリサ、すずかと友達の上、学校にも通っており、クラスも一緒ですから。

なのにどうして俺だけが違うクラスなんでしょうか。

何か作為的なものを感じます。

……まさか神と書いて幼女と読む奴の仕業か？

ありえそうです。うん。

ああ、ちなみに闇の書の対策はまだしていません。

ヴォルケンリッターが出てきてからにしようと思っています。

それに未だジュエルシードも出てきてませんしね。

というかジュエルシードが出てくるまで後二年もあるんですよ？

長いったらありやしない。

これからジュエルシードが落ちてくるまでどうしよう……。。

第三話 彼が初めに発した言葉は……（後書き）

ということで次なる世界は魔砲少女になりました。

ヒロインはなのはさん一人……の予定です。

しばらくは日常の風景……の予定です。

感想とともに、こうしてほしいなどありましたらお願いします。

第四話 ……あれ？（前書き）

なんでこんな展開になったんだろう……。
っていか前話との矛盾が出てきそう。

第四話 ……あれ？

隣に居るはやては泣きじゃくって顔をぐしゃぐしゃにしている。
茶々丸はそんなはやてを宥めようとしている。

今、この家に居るのは俺とはやてと茶々丸の三人だけ。

そしてこれから暫くの間も三人だけの生活になるだろう。

士郎さんから高町家に来てもし良いと言われたが、それは断った。

「茶々丸、暫くの間はやてを頼む。少し出てくるから」

「了解しました」

家を出て、海が一望できる場所に歩いていく。

大海を眺めることで少し気分が晴れるかと思ったが、その海の上に見える空はあいにく雲がどんよりとしていた。

「バカ野郎が」

ぽつりと出てきた言葉。

逝ってしまった父さんたちへと届かないであろうその言葉は虚空に
吸い込まれる。

『済まぬ』

どこからともなく聞こえてきた声。

それが知っている声だと気が付くまでに数秒を要した。

『……神か。何の用だ？』

『そなたの両親の死を止められなかったからの』

それを聞いて改めて俺が親に愛情を感じていたのだと思い知らされる。

『お前のせいじゃないだろ』

『……少し話しをしようか。そなたが第一の生を送った場所は特殊な世界での、神と呼ばれる我が唯一干渉できない世界なのじゃ。そなたはもともと存在するはずの無い者じゃ。そして創られたとはいえそこは世界、そして星。それぞれに意思がある』

一つ一つの言葉を確認しつつ、やがてそれを理解しながら結論に辿り着く。

『つまりはその意思にとって俺はありえないものだから排除しようとしたと？』

『少し違うがの。そなたが意思に受け入れられないという事はない。そなたは世界や星の意思よりも上位の存在じゃからの』

俺が？

しかしだからと言ってそれが父さんたちの死因に結びつく訳が……
ああ、なるほど死因じゃなくて、か。

『俺は人間じゃない』

『そうとも言えるし、そうでもないとも言える』

『あんたの息子とかになるのか？』

『まあ、そんなような者じゃな。分かりやすく言えばそなたはキリストのようなものじゃ』

『だからと言って俺が両親を認めない訳にはいかない。それにそれが理由で悲しまない何て事もない』

『そういう事を言いたかった訳ではないのだが。やはり人間の心は良く分らん』

やがて生み出される正解。

『神でも人の意思に手を加えることはできないのか』

『じゃからこそ、そなたがおるんじゃよ』

『つまりこの世界において俺が為すべき事があると？』

『その通りじゃ。やってくれるかの？』

『ああ。何をすればいいんだ？』

『プレシア・テストロッサがおかしくなったのは理由があつての、それを元に戻してほしいのじゃ』

『そうか……なあ、一つ頼みがあるんだけど。原作知識を消してくれないか？』

『そなたなら知識がなくとも辿り着くから良いが……やはり人間の心は良く分からの』

最後にぽつりと呟かれた言葉を聞きながらやがて俺は意識を失った。

眼前に佇む曇り空と海。

どうやらあれからそんなに時が経ってはいないらしい。

ポケットに入れていたデバイスを二つ取り出す。

どちらも丸い宝石のように見え、父さんと母さんが使っていた兄弟機だ。

両親が死んだ理由は身を犠牲にしてロストログアを抑え込み、そこをアルカンシエルで打ち抜いたことによる。

「ウイング」

デバイスの名を呟く。

それに応答する二つの機械音。

二つで一つであり、片方ずつでもウイングと言う名を持つ。

形見として残されたデバイスは俺が使うには——というよりも俺の魔力に耐えられるデバイスが無いのだが——強度がたりなかった。

二つのデバイスを再びポケットにしまい、やがて家に向かって歩く。途中で先ほど見た映像が思い出される。

ロストログアを抑え込んでいた両親、そこに入る通信、やがて遺言のように言葉を残し、映像はそこで終わった。

遺骨も何も無かった為に遺言をテープレコーダーに入れて流し、簡単に葬式を済ませた。残った遺産を巡るいざこざはバニングス家にお任せし、後残っている憂いは管理局からの接触だ。

それさえやり過ごせば再び日常生活へと戻れる。

はやては少し時間がかかるかもしれない。

何せ二回目の死だ。

茶々丸やなのは達が居るとはいえ、暫くは時間が必要だろう。

「しかし……」

父さんに詳しい事を云わずにはやてを引き取ったとはいえ、母さんまでグレアム提督を知らなかったのだろうか。

或いは同姓同名の違う人物だと考えたのか。

どちらにしても管理局からの接触が今まで無かったことから、両親がそれを気にしなかった事が伺える。

どちらにしても詳しい状況を知る必要があるみたいだ。

「君が真柄 拓真君かな？」

急に声をかけられそちらに振り向くと、初老の男性が居た。

少し探ってみると魔力持ちの様だ。

おそらくは管理局の者だろう。

「あなたは？」

「これは失礼。私は君のお父さんと同じ所で働いていたものでね。

君を引き取る為に伺ったのだが……お父さんから何か聞いていないかね？」

白々しい事を。

俺が小さいから何も分かっていないと思っているのだろう。

「管理局という所ですか。あいにくと俺はお世話になるつもりはあ

りませんので」

「そうか。一つ聞かせてくれないかね？ 君は両親の死をどうやって知ったのかね？」

「両親のデバイスから聞きましたよ。死ぬ直前の状況の映像と一緒に」

そう皮肉って言うてみると、男の顔が焦っているのがわかった。

「……そのデバイスはとても貴重なものでね。渡してもらおうか」

「残念ですが両親の形身なのでお渡しできません」

「そうか。それは残念だ。では力づくでもデバイスは貰い、君を連れて行くでしょう」

そう言っただけで男の身体から魔力が放出され、俺の身体にバインドがかかる。

何でこんな道の真ん中で魔法を使うのかと思ったら、いつの間にか結界が張られていた。

どうやら俺も相当に参っているらしい。

「……民間人への魔法使用。これであなたは犯罪者な訳だ」

「何を言っているのかね？」

「ウイング、記録したな？」

〈はい〉

「という事で魔法が使われたので反撃しても俺は罪に問われませんね。ではさようなら」

バインドの術式を崩し、背後に回って手刀で首筋を一打。

それだけで男は崩れ去り、同時に結界が崩れる。

俺はその男に不可視の魔法を使い、浮遊の魔法で運んでいく。

殺してはいない。

生きているだけで利用価値があるからだ。

……それにしても、本気で管理局の意図的な殺害を疑った方がよさそうだ。

直接的に殺害した訳ではないだろうが、身を犠牲にせざるを得ない状況に追い込んだかもしれない。

「何にしても疲れたな……帰って寝るか」

――数日後

管理局局員と名乗る者の来訪が五人を数えた所でピッタリと止まり、それ以降は無くなった。

取り上げたデバイスは全て分解し、それぞれに使われている物を組みなおし、ウイングをベースに新しいデバイスを作り上げている。

幸運なことに手に入ったデバイスは全てがインテリジェントデバイスだったので、使われてる部品もなかなかの物だ。

どうやっても俺が使えるようなデバイスには仕上がらないので、い

っそのこと茶々丸用のデバイスを組むことにした。

一つ一つの部品を強化で強くし、インテリジェントの部品でもアームドデバイスと打ちあえるようにしていく。

五つの人工知能は茶々丸の演算能力の補助に、ウイングの人工知能はピットが自立稼働する時に使えるように残しておいた。

そのおかげか茶々丸は演算速度が上昇し、戦闘時の予測ができるようになった。

要するに茶々丸は写輪眼を得たかのようになり、戦闘が格段に上手くなった。

そして余った部品で使える物は随時茶々丸に組み込んでいき、茶々丸が強化されていった。

「しかし……魔力をどうするかが問題だな」

魔力を使うたびに補充し、そのたびに茶々丸のあの声を聞かなきゃならないってのは考えものだな。

いつかはこっちの我慢の限界がきそうだし。

そう考えるとまずは魔力の自己生成機関を作る必要があるか。

「といってもそんなものは作れるはずがないからな……さてどうしたものか」

魔力を溜める効率が一番良いのは宝石だ。

とはいっても宝石自体に魔力を吸い込む力がある訳でもない。

そう考えると……。

「保留だな。寝るか」

時計を見てみるといつの間にか今日が終わっていた。

小学生にしては遅い時間だろう。

茶々丸の改造案が次々に浮かんできて、楽しくなってしまった。
明日はまだ学校も忌引きで休みだから……明日の事は明日考えるか。

「ん……」

意識が覚醒し、寝ぼけ眼を摩りながら……摩すれなかった。
いつの間にか右腕がなのはに抱え込まれていた。
……え？ 何で？

「オーケー、拓真、落ち着け。まずは状況確認だ」

上……俺の部屋の天井。

右……なのは。

左……机。

下……ベッド。

どう見ても俺の部屋になのはが来ているだけだ。
というかいつの間に来たんだろうか。

今日は学校もあるはずなのに。

……とりあえず起こすか。

「おい、なのは、起きろ」

「……にゃ……あとごふん」

随分と眠そうだ。

ついでに言うと抱え込んでいる俺の右腕に顔を擦りつけながら言うのは止めてほしい。

何というか何かが決壊しそうだ。

……。

——俺はロリコンじゃない。俺はロリコンじゃない。俺はロリコンじゃない。

「あれ？ よく考えたら同い年だからロリコンにならないのか？

……いや、落ち着け。そんなことはない」

第二次性徴を迎えていなかったのが幸いだったか。

もし始まっていたらやばかったかもしれない。

「……そんな事言ってる場合じゃなくて、なのは、起きろ！」

「にゃ！ にゃに！？」

「お前は何でこの部屋で寝てるんだ？」

「あ、たくまくん、おはよお」

何か字足らずなところが可愛いんですけど……はっ！ そんなこと言ってる場合じゃない。

「だから何でここで寝てるんだ？」

「？ あ、うーんとね、拓真君が寂しいと思って一緒に寝てあげようかなと思ったの」

「それは……まあ、良いとして何ではやての所に行かなかったんだ？」

「はやてちゃんはもう起きてたからなの」

あー、あいつ朝早いからな。
それなら納得だ。

「……って、それじゃ俺の所で寝る理由にならないだろ！」

「ひゃっ！ えっと……嫌だった？」

上目使い＋涙目で攻撃してくるなのは。

「い、いや！ そういう事じゃないんだ！ えっと……何ていうか、
そう！ お前今日は学校だろ？」

「にゃっ！ 忘れてたの！ 行ってきましたす！」

そのまま走って俺の部屋を出て行ったけど……結局何しに来たんだ？

「まあ良いか。俺もそろそろ起きるかな」

それから居間に行く。

ちなみに俺の部屋は一階にある。
その方が色々と好都合だからだ。

「茶々丸、なのはは何をしに来たんだ？」

「はあ……」

え？ 何そのお前分かってないな、みたいなの……。

「マスター、いいかげんにしてください」

え？ 何？ 俺が悪いの？

「いや……何か、その……すみません。あの……朝ごはんを食べに来ただけ」

「マスターの分は机の上に置いてあります」

見れば、机の上に既に用意されていた。

それを食べながら再び茶々丸に問いかける。

「はやては？」

「先ほど気分転換にと図書館に行きました」

「そっか……大丈夫そうか？」

「……多分ですが、明日辺りには元通りに元氣になれるかと」

それなら大丈夫かな。

「茶々丸ははやての事を頼む。俺は引きこもるから」

「さてと……」

どうやらここ数日で分かった事には、俺の存在がグレアムにばれて
いるらしい。

五人ほどで管理局の襲撃が止まったのも、あきらめたという事なの
か、それとも別の要因があるのか。

どちらにしても八神家に置いてある影分身は破棄して良いだろう。
それにこれ以上の襲撃は無いとみていいだろう。

「今の内に鍛錬をしておくか」

といっても魔法関係は殆ど修得しているからな。

後は……体術か。

「まあ、体術って言ったらアレしかないよな」

某漫画の会長がやっていた一日一万回の感謝の正拳づき。

ずっと前から続けてたから、あの技を習得するまでには後少しだか
らな。

第四話 ……あれ？（後書き）

たぶん次回あたりから本編に突入します。

第五話 いよいよ原作開始？（前書き）

ようやく辿り着いた……

第五話 いよいよ原作開始？

――二年後

「ここまで長かった……」

え？ 何？ 修業風景はどうしたって？

そんなもの別荘に暫く居てひたすらに感謝してただけだって。そのおかげであの技も習得できたしな。

しかし……難しかった。

感卦法は魔力と気を外側で合成させれば出来る、内側で合成させればチャクラ。

感卦法を右手に、チャクラを左手に、それを合成させて漸く百式観音が出来上がった。

ちなみにチャクラは俺が世界に方法として組み込んでいるから、忍術もできる。

百式観音はそれらを組み合わせただけあってとってもない威力だった。

一つの手が豪殺居合拳の数倍の威力を持つ。

発動までに一秒とかからないから、とてつもない技になっただろう。

「……やり過ぎた感があるな」

そして何でなのはまた俺のベッドに忍びこんでいるのでしょうか。

「……気にしたら負けか。なのは、起きろ！」

「にゃあー……もうあさなのー？」

耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ！

手を出しては駄目だ。

俺はロリコンじゃない。

いや、ロリコンだったとしてもyesロリータnoタッチのはずだ。

「なのは、いいかげんに俺の布団に忍び込むのは止めろ」

「どうして？」

いや、そんな風に聞かれても困るんですけど。

「あー……あれだ、とにかく駄目なんだ」

「でも茶々丸さんは良いって言ってたよ？」

茶々丸ううう！

お前何許可してるんだああああ！

「とにかく駄目だ。それに学校に遅刻したらどうするんだ？」

「大丈夫だよ。遅刻しそうになったら茶々丸さんが起こしてくれるし、それに拓真君のベッドが寝るのに凄く気持ちいいんだもん」

止めろおおお！

理性が！ 理性があああ！

「と、とにかく起きるからなのはも家に戻れ！」

「はーい。じゃあ、また後でね」

そう言ってなのは部屋から出て行く。

「朝から疲れた……」

居間に向かえば既に茶々丸とはやてが居る。

二人が作るご飯は無茶苦茶上手いので、箸も進む。

……はやてのにやけた顔が無ければ。

「何や兄ちゃん、お楽しみやったんか？」

「お前……分かってそういう事言うの止めろ。って言うかなのはを止めてくれ」

「ええやん。なのはちゃん可愛いんやから」

「そういう問題じゃねえ。それになのはの感情はそういうのじゃなくてただ単に甘えたいだけなんだよ。いわばさびしがり屋ってことだ」

「それも含めて、なんや無いの？」

「いや……もういい。それより何で士郎さんも恭也さんも止めないんだよ」

「お二人には許可をいただきましたから」

「茶々丸！？　ちょっと待て！　それ何の許可だ！？」

「なのはさんを嫁にもらう許可です」

「ちょっと待て！ 何で俺の嫁をお前が決めてるんだ！」

「？」

だからお前も何言ってるのこの人、みたいな視線止めろ！

「しょうがないやん。兄ちゃんはお金もあるし、頭もいいし、剣だって恭也さん達よりも強いんやろ？ こんなに良い物件はそうそうないで？ 顔はそうイケ面でもないけど」

人をそんな風に言うな！

というか恭也さんのシスコンとかはどこに……。

「はあ……もう疲れた。はやて、そろそろ行くぞ」

「え？ 奥さんまだ来てへんけどええの？」

「誰がだ！ 勝手に決めるな！」

「なのはちゃん、はやてちゃん、拓真君」

「三人ともこっちこっち」

バスに乗ると二人とも最後尾に座っていた。
本当ならはやての足の事を考えて茶々丸に車で送ってもらった方が

良いんだけど、はやてがバスで皆と同じように登校したいって言うからバス通学になった。

はやての足は魔力がらみで、それにかかわる夜天の書……闇の書が起動しない事には治せない事がわかったので、今は俺が創った薬で進行を止めているだけだ。

しばらくすれば治す目途も立つだろう。

「おはよう三人とも」

すずかの言葉を筆頭に四人が挨拶していく。

唯一助かったのは通学のバスがノンステップだったことだろうか。

車いすは一番前に置いておいて、俺がそこからはやてを持ち上げて最後尾まで連れて行く。

最後尾は六人席なので一人分余る形だ。

「どうしたの？」

俺に問いかけてきたのはなのはだ。

今は昼食の時間だからか、周りの視線がやばい。

特に、とうか全て男子からの視線なんだけど……まあ、なのは、はやて、アリサ、すずかと一緒に居ればそうなるか。

「いや、何でもない。唯の現実逃避だ」

「兄ちゃんもええ加減にせんとまた酷い目見るで？」

そんなことは日常茶飯事だからどうでも良い。
それよりも問題なのはどうしてそうなっているかだ。
多分幸運がEランクほどなんだろう。

「まあ、今現実逃避してるのはもっぱらお前らのせいだけだな」

「？ 私たちが何かしたの？」

なのは、分からないのか……。

「なのはちゃん、私らが悪いんや無いで？ こんな美少女を四人も
侍らせてる兄ちゃんが悪いんや」

「自分で美少女って言うなよ……」

確かに四人とも可愛いのは認めるけど。

それよりも気になるのは昨日の魔力反応。

相当にでかい反応が二十一で、全てが同じくらいの魔力保有だった
から人ではないだろうけど……またメンドイことになりそうだ。

それにその後で一つの魔力反応もあったしな。

おそらくは先に落ちた二十一個の反応を追ってきたんだろう。

すぐさま結界を張って家の認識阻害を強化したからその後どうなっ
たか分からないけど。

——ふむ。やっぱり今日あたり調べてみるか

「ほら、あんたもとつとと動く！」

アリサにせかされて漸く昼休みが後少しで終わりそうなことに気付
く。

ちなみに小耳にはさんだ情報によるとアリサとすずかは既に将来の目標を決めているらしい。

「じゃあ、私たちはこれから塾だから」

いつものメンバーで塾に通っていないのは俺だけだ。
というか通う必要がない。

「なのは、はやての事頼むな」

それからなのはにはやての車いすの世話を頼む。

四人と別れ、俺は一人で家へと戻る。

家に帰れば昨日の魔力反応について調べられる。

星からの情報が無いってことはさほど危険な物が落ちてきた訳ではないんだろうけど……。

家に着いて部屋に入ろうとした所で茶々丸に声をかけられた。

「マスター、今日家の前にこんな物が落ちていたんですが」

「これは……昨日の反応にあったやつか。ふむ……魔力の量は結構あるな。それに……」

これ一個体が自分で魔力を大気から補充してるみたいだ。
これなら……。

「茶々丸、暫く引きこもる。何かあっても放っておいてくれ」

「了解しましたマスター」

「さてと……神眼発動、解析」

これは……願望を魔力によって叶える為の器か。

名は……ジュエルシード、数は全部で二十一、って言う事は昨日落ちてきたのはこれで間違いないだろう。

これなら俺の魔力を逸脱して無いし、それなりに魔力保有もある。創れるか。

「創造開始、対象を複製、必要情報を選択、器としての概念を除外、魔力収集を強化、魔力の引き出しを簡易化、創造終了」

出来上がったのは願望器としての力を失った青い宝石。

魔力としては多いであろうなのはの二倍近くある。

これを茶々丸に組み込めば或いは……。

とにかく試してみれば良いだろう。

「茶々丸、これを組み込むからちょっと来てくれ」

「マスターこれは？」

「さっきの宝石、ジュエルシードを元に創ってみた。お前用の魔力炉だ」

早速それを茶々丸に組み込む。

「どんな感じだ？」

「……日常生活の分には問題ありませんが、戦闘で魔力を使った時にはマスターからの補充が必要かと」

やはりそんなものか。

流石にこれだけで魔力を補給するというのは態が良すぎたか。

「それよりもマスター、私はこれからはやて様を迎えに行きますので」

「ああ、分かった。……ああ、そうだ、さっき拾ってきた宝石は今後無視して良い」

拾うと厄介事に巻き込まれそうだからな。

「了解しました」

さてと、この宝石をどうするか……とりあえず海に捨てておくか。

「ただいま」

「もう、遅いで兄ちゃん。そや、あのな、家でフェレット飼ってもええ？」

フェレットか……。

「何でだ？」

「今日塾に行く途中で見つけたんよ。それで誰の家で飼うかってことになったんやけど……」

「茶々丸？」

「はい。……フェレットを飼う際の注意事項は温度調節です。一般的に15℃から22℃を保つことが肝要です。また避妊、去勢、肛門腺の手術が為されていない場合には早急にそういった事が必要となります。さらに壁の穴や電化製品の裏側に好んで入り込むので、配線やファン、配管などに留意が必要です。以上の事を踏まえれば飼うのは犬や猫よりも簡単かと」

相変わらず凄い能力だ。

「まあ、はやてが世話出来るなら俺は良いと思うぞ？」

「ほんま!？　じゃあ、早速皆に……あれ？　メールや。『あの子は家で預かれることになりました。なのは』……兄ちゃん、ほんまに帰ってくるの遅いで」

「いや、何とかいうか、すまん。まあ、あれだ、飯にしよう」

居たたまれないまま俺は飯を食う事になった。
飯が冷えてる様な気がしたのは気のせいだと思いたい。

――！！

結界に反応、これは……念話か。
宛先は……マジですか。

『茶々丸、済まんがなのはの様子を見に行つてやつてくれ。介入はなるべくしなくて良い。命が危なくなりそうな時だけ介入は許可する』

『了解しました、マスター』

「……明日の朝ごはんの買い物を少しし忘れたので出かけてきます」

そう言つて茶々丸は家から出て行つた。
面倒なことに巻き込まれなければ良いけど。

――side 茶々丸

さて、なのはさんの魔力反応は……こちらですね。
その先に二つの魔力反応があるようです。

一つは結構衰弱していますね。

もう一つは……今日私が拾ったものと同じ魔力反応のようですね。

ドンッ！！

どうやら戦闘があるようです。急いの方が良いかもしれません。

「何が何だかよくわかんないけど、何なの？ 一体何が起こってるの？」

あれは……なのはさんのようです。

どうやら何かを腕に抱えているご様子。

それに急いでいる所を見るに何かから逃げているようです。

「君には資質がある。お願い、僕に少しだけ力を貸して」

何やらイタチのような生き物が言葉を発しているようです。

あの首にぶら下げている物は……デバイスでしょうか。

となるとあのイタチは……人間が変化しているのでしょうか。

「資質？」

「僕はある探し物の為にここでは無い世界から来ました。でも、僕一人の力では思いを遂げられないかもしれない。だから……迷惑だとは分かっているんですが資質を持った人に協力してほしいくて」

あのイタチはバカなのでしょいか。

一人で達成できないなら何で一人でこの世界に来たのでしょうか。しかも戦力は現地調達ですか、とことんバカなイタチのようです。

「お礼はします、必ずします。僕の持っている力をあなたに使ってほしいんです。僕の力を……魔法の力を！」

何かかっこよく言ってるような気がします、何であのイタチは地面に降りたんでしょうか。

……はっ！ まさかなのはさんのスカートの下から覗きこもうと！

許せんせん。

マスターですらまだなのに。

「魔法？」

なのはさんが首を傾げています。

可愛いです、可憐です、萌えます。

……はっ！ 上空から接近する物体あり。

ドォン！！

どうやら上手く避けられたようです。

「お礼は必ずしますから！」

やはりあのイタチはバカなのでしょいか。

今はそれどころではないのに。

これは……私も準備をした方が良くかもしれませんね。

「お礼とか、そんな場合じゃないでしょ！」

その通りです。

流石はなのはさんです。

「どうすればいいの？」

それはもちろん……なのはさんが魔法少女になれば！
こうしては居られません。

カメラの準備を……カメラ五つを展開、全て高画質かつ超音質で録画。

さあ！ 魔法少女誕生の時です！

「これを！」

「あたたかい」

やはりあの赤い球体はデバイスだったようです。

「それを手に目を閉じて、心を澄ませて、僕の言う通りに繰り返して」

そんなことで分かるのでしょうか。

説明が些か感覚的すぎるような気が……いえ、大丈夫でしょう、なのはさんなら。

「いい？　いくよー！」

「うん」

「我、使命を受けし者なり」

「我、使命を受けし者也」

「契約のもと、その力を解き放て」

「えっと……契約のもと、その力を解き放て」

「風は空に、星は天に」

「風は空に、星は天に」

「そして、不屈の心は」

「そして、不屈の心は」

「「この胸に！ この手に魔法を、レイジングハート、セットアップ！」」

「……どうやら無事にセットアップが完了したようです。」

「それにしても改めて分かりましたが凄い魔力です。」

「ジュエルシードの化け物がおとなしく待っているくらいですから。」

「服は……小学校の制服のようです。」

「な、何なのこれ？」

「漸くあの化け物も動き始めるようです。」

「ちゃんと録画しておかなければ。」

「それにしても……あのバカイタチはいつまでなのはさんのスカートの中を除くつもりでしょうか。」

！ 何か電波が届きました。

これからあのイタチの事は淫獣と呼んだ方が良いでしょう。

どうやら移動するようです。

それにしてもあの淫獣は何て分かりにくい説明をするのでしょうか。

……。

「リリカル・マジカル！」

いつの間にかクライマックスのようです。

二十一という事はこれから後少なくとも二十回は魔法少女として活躍するでしょう。

帰ってDVDにフルでダビングしなければ！

――side 拓真

茶々丸が帰ってきたようだ。

はやてはもう寝たことだし、何があったのかを聞いておこう。

「マスター、あの淫獣は抹殺すべきです！」

え？ 一体何があったんですか？

何か茶々丸が凄く怒ってるんですけど。

「あの、茶々丸？ 何があっただ？」

「そうでした。これを御覧になればわかると思います」

そう言って壁に移された映像は……なのはが面倒事に巻き込まれた映像。

「マジすか……また面倒な。所で淫獣ってこのイタチのことか？」

「はい、そうです。即刻抹殺すべきだと提案します」

「いや、そうしたらなのはに助言者が居なくなるでしょ」

「マスターが助言者になれば良いのでは？」

「いや、俺は面倒事に巻き込まれるのは断る。……これから暫くは茶々丸が見てやってくれ。介入は命にかかわる時だけだ」

「……了解しました」

何か凄く不機嫌そうなんですけど。

あのイタチの事を殺さなければ良いけど……。

第五話 いよいよ原作開始？（後書き）

茶々丸が……壊れているような気がする。

第六話 フェイト登場（前書き）

オリジナル路線になかなか進めない

第六話 フェイト登場

今日は久しぶりになのはが俺のベッドにもぐりこんで無かった。

……別に寂しくなんて無いんだからねっ！

……止めよう。

『ジュエルシードは僕らの世界の古代遺産なんだ』

うおっ！

いきなり念話飛ばしやがって。

範囲限定しろよ。

はやてがネックレスをしてなかったらはやてにも届くところだったろうが。

『本来は手にした者の願いをかなえる魔法の石――』

な、長かった。

ジュエルシードが落ちてきた理由は分からずか。

もしかしたら任務の事と関係あるのかもな。

プレシア・テストロッサか……誰なんだろうか本当に。

……というか既になのはは分割思考ができてるのか。

「……ちゃん、兄ちゃん？」

「何だ？」

「なのはちゃんは歩いて帰るみたいやけど、こちらはどうする？」

「あー、鮫島さん、はやての事を頼みます。俺は少し寄る所があるので」

「分かりました」

「そうなん？　じゃあ兄ちゃんまたな」

「おう、アリサもな」

「ええ、また明日ね」

ツ、ツンデレがそのまま挨拶しただと？

「……あんた今何か失礼な事思ったでしょ」

す、鋭い。

流石はバーニング……じゃなくてバニングス。

何が流石なのか分からないけど。

「大丈夫だ。アリサが想像したのとは違うはずだから」

「何が大丈夫なのよっぴり思ったんじゃない！」

「じゃ、鮫島さんお願いします」

「承知しました」

「スルーするなあああ！」

やっぱりアリサはからかいがあるな。

そういう反応が可愛いし。

さてと、俺はジュエルシードを探すかな。

しかし……魔力を追うか、“円”を展開しながらじゃないとイタチに気づかれるな。

なのはにはまだ気付かれないから大丈夫だとは思うけど。

……才あるものは自然と道に入るか。

高い魔力保有量だとはいえ、陰陽術の基礎しかないこの世界では裏にかかわることはないと思ってただけだな……読みが甘かったか。とりあえずは百式観音を業に昇華させとくか。

「今は拍手^{かしわで}を打つようにやってるから、それを一動作にするとなると……感卦法を瞬時に片方に移してその反対側と合成か」

やべえ、思ったたよりも難しいかも……別荘使うか。

時間もそんなにないことだし……いや、影分身使って分身に修行させとけばいいか。

ジュエルシードの探索もあるしな。

今は……なのはが二個、海に七個、学校に一個、ってことは残りは

十個。

さて、残りはどこに……こういうのは運が良いというんだろうか。あるいてたら目の前に落ちているというのは。

まあ、多分スキルの悪運が発動したんだろう。

ジュエルシードが発動してなかったただけましとするか。

——ドクンッ！！

あー、これは発動してるな。

方向は……神社のほうか。

あそこって確か久遠がいたような……。

や、やばい。

転移魔法は……感知されるからだめか。

なら気を使って瞬動連発させるしかないか。

頼むから久遠が取り込んだりしてないでくれよ。

これは……子犬が取り込んだのか。

願望は強くなって主人を守りたいってところか？

それでそれが破壊の形になって衝動として現われてるってところか。

早くなのはがこないかなあ。

魔力の感じではあと少しで……来たか。

それに茶々丸も着いたか。

さて、観戦しておくか。

――side 茶々丸

今日の戦闘場所は遮蔽物が多くて上手く録画できそうにありません。
仕方がないですがカメラは三つにしておきましょう。

「原住生物を取り込んでる！」

「どうなるの？」

「実体がある分手ごわくなってる」

「大丈夫、多分」

「なのは！ レイジングハートの起動を」

「え？ 起動って何だっけ？」

そうやって悩むしぐさもまたかわいいです。

なんだか和んではいけない場面なのに和んでしまいそうです。

「我は使命を、から始まる起動パスワードを！」

「えー！？ あんな長いの覚えてないよお！」

それはそうでしょう。

あんなのを一度で覚えられたらそのほうがおかしいですから。

……でも、なのはさんならパスワードなしでも大丈夫でしょう。

「もっかい言うから繰り返して！」

「わ、分かった！」

パスワードは間に合いませんね。

後はデバイスが主にふさわしくなるかどうか。

〈stand by ready set up〉

これで大丈夫でしょう。

マスターもいるようですし、ここからはビデオに専念してもよいでしょう。

「なのは、防護服を！」

〈barrier jacket〉

ドオン！！ バキッ！！

〈protect condition all green〉

実体がある分、強くなっているとのことでしたが……果たしてシルドだけでのされてしまうのは強いといえるのでしょうか。

「リリカルマジカル——」

ハッ！ 私としたことが見逃すところでした。
いつの間にやら花形の封印の場面に。

封印の場面だけ編集してまとめておきましょうか。
高町家の皆さんもご覧になりたいでしょうから。

――side 拓真

昨日でなのはが封印したのは五個。

ほとんど夜に探索に出かけてるからな。

疲れも溜まってるだろう。

俺の修行のほうもいい感じに一動作にまとまってきたから……介入
するとしたらそろそろか。

なのはの体に関しては茶々丸にマッサージをさせておけば幾分か楽
になるだろう。

それにしても……管理局の対応が遅いな。

情報は既に入ってるはずだし……やはりたかが管理局ということか。

それにグレアムに情報が入ってるはずだしな。

管理外世界はどうなっても良いということか？

そうだとしたら……いや、よそう。

すべては自分の目で見てからだ。

スパアンツ!!

「聞かんか!」

「！ 何だはやてかどうかしたか？」

「うちじゃなくて士郎さんが呼んでるで？」

「あ、そう。士郎さん、何か用ですか？」

「メンバーが足りなくてね。代わりに出て「嫌です」早いね」

サッカーとかマジ難しいんだぞ！？

間違えて全力で蹴ろうものならボールが破裂するし、無意識で瞬動とか使わないように気をつけなきゃいけないし。

「何よアンタ、足りないんだから出なさいよ」

「俺が運動できないの知ってるだろ？ アリサ」

「嘘はあかで兄ちゃん。私知ってるんやから。兄ちゃんが毎朝特訓しとるの。それにこの間はジャンプだけで木に登ってたやないか！」

いや、そんな情報要らなかったです。

しかも何で探偵が犯人に突きつけるみたいに言うんだよ。

ああ……士郎さんの目が輝いてるし。

「拓真君！」

「……ゴール一回につき翠屋のケーキ一個で」

「それで手を打とう。……ちなみに君のポジションはセンターバツ

くだ」

何iiiiiiii!?

シュートどうするんだよ!?

くっ、こうなったら意地でもシュートしてやる。

ピーピーピー、試合終了!

「6対0で翠屋JFCの勝利!」

ふ、ふははははは!

五回だ。

五回シュートを決めてやった。

「士郎さん、約束は守ってもらいますからね」

「しょうがないな、確かにそういう条件だったからな」

「どうも。じゃ、お前ら一人一個な」

そう、俺は全員分のケーキを獲得するためにがんばったのだ。

センターバックだからシュートチャンスがなかなかやってこなくて苦勞したけど。

まあ、最後の一本はキーパーから渡されたのを自陣のペナルティエリアからシュートしたしな。

少しやり過ぎた感はある。

「ちょっとアンタ聞いてないわよ！　すずかよりも運動神経良いじゃない！　何でそれで勉強もできるのよ！？」

「それが自然の摂理だからさ」

「兄ちゃん、あんまそれかっこよくないで？」

うるせえ、言われなくても分かってら。

「それにしても、改めてみると何かこの子フェレットとはちょっと違わない？」

「そういえばそうかなあ。動物病院の院長先生も変わった子だねって言ってたし」

「それに茶々丸さんが説明してくれたのよりもずっと飼いやすそうやよ」

ふむ。

それは知能が高いからだろう。
って言ってもこの中で分かってるのはなのはただけか。

「兄ちゃん、これからまっすぐ家に帰るん？」

「まあな。どっか寄りたい所あるか？」

「うーん……茶々丸さんが買い物行ってくれてると思うし、本はまだ読み終わってないし、何もないから家に帰るわ」

「じゃあまっすぐ家に——クソッ!!」

何で街中で発動させるんだよ！

「なあ兄ちゃん、頬つねってみたら痛かったんやけど」

「ここにいろ。すぐに茶々丸が来る」

あんまりやりたくはなかったんだが……仕方ないか。

「ゲート・オーブン、草薙の剣」

取り出したのは昔に創った野太刀。

切れ味は最高位。

日本で伝説とされるだけあり、俺が持つ中でも相当に良い剣だ。

——神鳴流奥義 斬魔剣 弐ノ太刀

人に当たりそうなものだけを選択して切り落とす。

もうこうなってしまうたらできるだけ忘却魔法を使いながら核に向かうのが良いだろう。

……見つけた！　っと、なのはもか。

ピンクの魔力光が木にあたるけど少し足りてない。
少しだけ補助してやるか。

――斬岩剣

核から少し遠い部分を壊していき、そこが補強されることで核に届くようにしてみたが……巧くいったようだ。

これは……介入せざるを得ないか。
じゃないと一般人にまで被害が及ぶかもしれない。

「ふむ、相変わらず無駄にでかいな」

「そうやなあ、でも猫が多いからええんとちゃう？」

お茶会という名目で呼ばれてきたが、正直ジュエルシールドが月村家になければこなかっただろう。
なぜならいつ茶々丸の体について忍さんに聞かれるか疑心暗鬼だからだ。

『疲れてますなあ』

『だあほ、勝手に話しかけるなっっていうも言ってるだろうが』

それでもう一つ困るのが猫の多さだ。

少し時を長く生きた、知能を持った動物と話せるから動物の多いところに行くとうるさくて仕方がない。

といってもこの家に多いのは子猫だから念話もどきができるのはそう多くないけど。

『暇なのですよ私も。何せ飼い主さんは新しい子猫に夢中ですから』
ちなみに今話してきてるこいつは一番の古株で、体軀もでかい。

『おい、膝の上に乗ってもいいから話すのを止めろ』

「その子、私よりも拓真君になついてるみたい」

すずかが俺の上に猫が乗ったのを見てすかさずそういうが、それはない。

こいつは俺となら話ができていい暇つぶしになるから俺のところに来るだけだ。

もっとも、なついてるということについてなら茶々丸が一番なのだろうけど。

——ドクンッ！！

ジュエルシールドが発動したか。

「ユーノ君!？」

どうやらユーノが逃げ込んだことにしてそれをなのはが追いかけるという設定にするようだ。

「あらら、ユーノどうかしたの？」

「うん。何か見つけたのかも。ちょ、ちょっと探してくるね」

「一緒に行こうか？」

「大丈夫、すぐ戻ってくるから待っててね」

さてと、俺は……影分身の術、ステルス発動。
これで本体がここにも分身が対処してくれるだろう。

「にゃーお」

結界の中で猫が大きくなっていた。

多分猫の大きくなりたいたいという願望がかなえられたのだろう。

それにしても……破壊の形で願望を叶えなかったか。

純粹な思いにはそのまま発動するのか？

それとも……いや、止めておこう。

今はこれの行く末を見守ることが先決だ。

結界の中にもう一人知らないやつが現れたみたいだな。

ルディツシュ、フォトンランサー連撃」

＜photon lancer. Full auto fire.
＞

その声と機械音によって雷に変換された魔力が猫に叩き込まれ、猫が声を上げる。

それを見たなのはがレイジングハートを起動させ、もう一人の魔導師と猫との間に入ろうとした。

＜flier fin.＞
＜wide area protection.＞

猫が倒れ、もう一人の魔導師——金髪の少女が近づいてきた。

＜scythe form setup.＞
＜evasion. Flier fin.＞

なのはの足を刈りに来た少女に対し、なのはが上に飛んで行った。どちらもそこまで戦闘上手ではないが、幾分か少女のほうが魔法の使用においては一日の長があるようだ。

おそろくなのはではなにも対抗できずに終わるだろう。

＜arc saber.＞

機械音に続き、魔力刃が飛ぶ。

一撃だけを飛ばしたのはなのはが素人だと見たからなのか、それとも様子見で放ったのか。

どちらにしても有力な手ではない。
おそらくは戦闘に関する師が欠けていたのだろう。
魔法に関しては教えてもらったとはいえ。

〈p t o t e c t i o n . 〉

「なのは！」

淫獣が叫ぶが、なのはは無事なようだ。

それにしてもインテリジェントデバイスで打ち合うとか……二人ともなに考えてるんだ？

〈d e v i c e f o r m . 〉

〈s h o o t i n g m o d e . 〉

〈d i v i n e b u s t e r s t a n d b y . 〉

〈p h o t o n l a n c e r g e t s e t . 〉

にらみ合いが続くかと思われたその瞬間、なのはが猫に目を取られる。

それを直に喰らい、なのはは意識を失ったようだ。

非殺傷設定で撃たれていたし、淫獣も向かったから大丈夫だろう。

それよりも……“ごめんね”か。

そんな風に謝るなら最初からしなければいいだろうに。

〈s e a l i n g f o r m . S e t u p . 〉

「捕獲！」

どうやら魔力はほとんど雷に変換させて使っているようだ。
にしても、魔力の無駄使いが激しいな。
なのはには何もしないで帰るようだから俺も分身を解いてから本体
に向かわせるか。

「三人とも、なのはが遅いから探してくる」

「そういえば遅いわね」

「まあ、すぐに見つかるだろう」

そういつてから一直線になのはのもとに向かう。
淫獣が向かってこなかったが……回復魔法でも使っているのだろう
か？

にしても……探索者がもう一人現れたか。

淫獣の言っていることが本当かどうか知らない以上は……どちら
か一方に付くべきではないな。

もし、淫獣の言っていることが正しければ……船を落としたのはあ
の少女なのだろう。

第三者を装って介入するか、分身を使って両方に近づくか……どち
らにしたものか。

「あらら、ここにもあるのね」

海鳴温泉なるところにやってきたが、ここにもジュエルシードがあるようだ。

話題性に事欠かないことだ。

……もしかしたら俺の悪運が引き寄せたのかもしれないが。

「マスター、どうしますか？」

「そうだな……作戦通りお前がなのはを手伝って俺がもう一人の探索者のほうに近づく」

それが一番いいだろう。

両方に居れば、俺と茶々丸が戦うことになり、下手なけがを二人にさせない。

淫獣が余るかも知らんが、それは俺たちの知ったことではないだろう。

「来たか。茶々丸、俺はもう一人のほうに行ってくるから」

「了解しましたマスター」

気配は……断っておくか。

それに……リンカーコアもちがもう一人か。
また面倒なことにならないければいいが。

「こんにちは。木に登ったりなんかしてどうしたんだ？」

「ッ！！ 誰！？」

「誰って言われてもなあ、私の名は詠春……君は？」

すまん詠春、お前の名前を語らせてもらうぞ！

「……フェイト」

「そうか。で？　そこで何をやっているのかな？　魔力もちのお嬢さんが」

今の姿は十後半ぐらいの姿だから、同い年ぐらいのフェイトに対してもお嬢さんで通る。

それに本来の姿を隠すためのものでもあるので、サングラスも掛け
ており、いかにも怪しい人だ。

「何者ですか？」

魔力、という言葉を使ったからか、警戒が半端なくなる。
ここを切り抜けさえすればあとはこちらのものだ。

「何者といわれてもね。ここら辺一帯の管理者といったところか。
ああ、あとは危険な代物が落ちてきているのでその回収もしている。
見たところ君はこの宝石を探しているようだが？」

そう言って“創って”おいたジュエルシードを取りだす。

「!! それを……渡してもらえませんか？」

「ふむ……いいだろう。ただし条件がある」

「条件？」

「私はこんなものはいらないのでね、この地から早く持ち去ってほしいのだよ。そこで君に助力をさせてほしい。一人でやるよりも複数で行ったほうが早く終わるのでね。……ああ、それともちろんこの宝石についての情報も頼むよ」

「……わかりました。だけどこの世界には魔法はないはずでは？」

「ないこともない。一般には秘匿されているがね。それに見たところ君が使う術式とはまた別のようだ」

こう言うっておけば魔法を使ったとしてもこの世界独特のものとして認識されるだろう。

詠春の名を語った以上は剣を主に使うわけだし。ともかく第一関門は突破かな。

「ああ、そうだ。私には封印とか探索とかはできないのでね、そういったことは頼むよ」

「なら何が？」

「戦闘だな。もっぱらそれに特化している」

「分かりました。もうひと組の探索者にも助言者が付いたようなので詠春さんはそちらの相手をお願いします」

ということとは……茶々丸がうまくアルフと接触したか。

あとは俺が茶々丸と簡単に戦闘して、見極めさえすれば大丈夫だな。

「フェイト、誰だい？ このいかにも怪しい男は」

アルフが敵意むき出しで俺のことをにらんでくる。

「これから探索を手伝ってくれる人だから大丈夫だよ……バルディッシュ、起きて」

それにこたえるように機械音が鳴り、デバイスが起動される。目の前には魔力がほとぼしっており、ジュエルシールドが目下発動中だ。

「フェイト、アルフ、お客さんだ」

なのはたちが来たようだ。

「あーらあらあら。子供はいい子で、って言わなかったっけか？」

「それを……ジュエルシールドをどうするつもりだ！ それは、危険

なものなんだ!」

淫獣が叫んでいる。

それを茶々丸がにらみつけるようにしている。

「さーねえ、こたえる理由が見当たらないよ? それにさあ、あたし親切に言ったよねえ? いい子でないとがぶつといくよ、って」

それになのはたちが身構える。

相変わらず茶々丸だけが淫獣をにらみつけたままで、その様子はどこかおかしい。

「フェイト、アルフ、少女とイタチはともかく、その隣にいる女性
は強敵だ。君たちでは荷が重い。私がやろう」

狼形態になったアルフが茶々丸の魔力の高さを肌で感じ取ったのか
素直にうなずき、フェイトは無言でいる。

「行くぞ!」

ほどほどにして茶々丸に斬りかかる。

とんだ茶番だが、やらないよりはましだろう。

「転移か!!」

なんとも驚いたように言ってみせるが……つまらない。
いつの間にかアルフは淫獣に転移させられてるし。

「マスターこの後はどうしますか?」

「あの子の名はフェイト・テストロッサというらしくてな。俺の任務にも関係あるから様子見だな」

プレシア・テストロッサ……フェイトの関係者のはずだ。
そろそろ……かな。

「茶々丸、家に戻ったら記憶封印を解除する」

「……了解しました」

「何か不満か？」

「いえ、ですが封印したのにはそれなりに理由があったからなのは？」

「ああ、だが佳境を迎えつつあると判断したからな。俺も一歩踏み出したほうがいいだろう」

お、なのはが負けたか。

まあ、仕方ないかな。

戦闘民族の末娘とは言え、素質だけでどうこうなるわけでもないしな。

「マスター、もしかしたら今後なのはさんが特訓をしたいと言われた時のために別荘を出しておいて貰えますか？」

「まあ、いいけど。俺の部屋にあるから持って行つて行ってくれよ」

そのあと、俺はフェイトと一緒に戻り、そこからまた温泉宿まで転移して戻った。

第七話 KY登場(前書き)

なんだかクロノの扱いがひどいことに……。しかも大体の人物がキャラ変ってるし。

第七話 KY登場

「いい加減にしなさいよ！」

アリサが机をたたきながらなのはにどなった。

ここら辺は原作通りだ。

ああ……記憶を戻したから今後どうするかは計画を立てた。

今後はプレシアのもとに辿り着くためにも、なのはとフェイトの決闘までは原作通り進めるほうがいいだろう。

「この間から何話しても上の空でボーっとして！　まるで拓真じゃないのよ！！」

え！？　そこで俺が出てくるの？　しかもダメな例としてかよ。

「ご、ごめんね。アリサちゃん」

「ごめんじゃない！　あたしたちと話してるのがそんなに退屈なら、一人でいくらでもボーとしてなさいよ！　行くよ、すずか、はやて」

俺は！？　俺はないの！？

「あ、アリサちゃん」

「あかんなあ、アリサちゃん怒ってもうた」

そう言うってはやてがせっせと車いすを動かしながらアリサを追いかける。

「あ、なのはちゃん」

それをみてすずかがなのはに声をかけた。

「いいよ、すずかちゃん。今のはなのはが悪かったから」

「そんなことないよ。とりあえずアリサちゃんも言いすぎだよ、少し話してくるね」

そう言ってすずかも教室を出ていく。

「怒らせちゃったな……ごめんね、アリサちゃん」

俺は！？ 俺はスルーですか！？

寝たふりしてたから起きるタイミングを見失ったし。
はやてが出て行くときに俺のことを見て少し首をまげていたような気がするし。

あれですか？ 俺はここに残ってなのはを励ませと？
……いいだろう、やってあげようじゃないか。

「んあ……なのは？ 他の奴らはどこ行っただ？」

さも今起きたかのように見せかけてなのはに話しかける。

「私がアリサちゃんを怒らせちゃったから……」

すっげえ暗いんですけど。

士朗さんがけがをしたときは俺がそばにいてやったから根暗モードは現れないと思ってたのに……どこかでミスったか？

「オーケー、話は分かった。お前にも言いたくないことがあったんだろう。それにアリサもお前に怒ったわけじゃなくて自分に起こったんだろう」

「え？ 拓真君それだけで分かったの？」

し、しまったあああああ！

さっき起きてたのばれてんじゃねえか！

「い、いやほら、状況を見れば大体は分かるっていうか……まあ、とにかくあれだ。お前が決めて黙ってることならそれを貫け。それがここでの優しさだからな」

くせえ、くせえぞこのセリフ。

言ってる自分が恥ずかしいし。

「じゃ、じゃあな。俺は帰るから」

すごすごと退散するように俺は逃げ帰った。
というかアリサの中での俺の扱いって……。

――side 茶々丸

どうやらビル街の中心あたりでジュエルシードが発動したようです。

夕御飯の支度も終わっていますし、向かうとしましょうか。

！ 淫獣が広域結界を発動させたようです。

それにしても……なぜマスターは前回の戦闘の時に淫獣を亡き者にしなかったのでしょうか。

こんなことなら私がフェイトのほうに行って、マスターがなのはさんの方についてもええよかった。

そうすれば私が……いえ、考えるのは止めておきましょう。

今は発動したジュエルシードの対処が先です。

「なのはさん」

「あ！ 茶々丸さん」

「どうやらあちらも来たようです」

それから自己紹介が始まりました。

そして戦闘の開始。

二人の魔力にあてられてジュエルシードが発動しかかっているようですが……マスターが方って置いているということは何もしなくても大丈夫なのでしょう。

「フェイトちゃん！ 話し合うだけじゃ、言葉だけじゃ何も変わらないって言ってたけど、だけど話さないと、言葉にしないと伝わらないこともきつとあるよ！ ぶつかりあったり競い合うことになったりするの仕方のないのかもしれないけど……だけど！ 何も分からないままぶつかりあうのは私、いやだ！」

いい言葉です。

これは永久保存に決定ですね。

最近容量が足りなくなってきたので困ったものですが……マスターに外付けのメモリーを増やしてもらいましょうか。

ガキンッ！！

二人のデバイスが同時にジュエルシードに当たったようです。

そこから魔力が奔流して……これは次元震ですね、まずいのではないのでしょうか。

マスターは……まだ動いていませんね。

どうするのでしょうか。

もしなのはさんがけがをするようなら……マスターの命令を破ってでも助けましょう。

どうやら二人ともデバイスが大破したようです。

フェイトは素手で封印しようとしているようですが。

「フェイト、離せ！」

マスターが駆け寄って手を離させましたが……どうするつもりなのでしょうか。

「でも！」

「私がやろう……神鳴流 四方封鎖！」

そのような術は聞いたことがありませんが……マスターのオリジナルでしょうか。

まあ、どちらにしても封印ができたようなので大丈夫でしょうが。

「帰ろうか、フェイト。傷の手当てをしなければ」

マスターは何をかつこつけているのでしょうか。

はっ！ まさかあのフェイトという少女を懐柔しよう……ありえ
ませんね。

マスターはそこまでの度胸はありませんから。

「なのはさん、戻りましょう。帰ってレイジングハートの具合を確
かめなければ」

今日はここまでですね。

帰ってレイジングハートの状況を確認したら今日の記録をまとめな
ければ。

――side アースラ

「みんなどう？ 今回の旅は順調？」

「あ、はい。現在、第三船速にて航行中です。目標次元には、今か
らおよそ、160で到着です」

「前回の小規模次元震以来、特に目立った動きは無いようですが、
二組の探索者が再度衝突する危険性は非常に高いですね」

「そう」

報告を受けていた女性が、椅子に腰を下ろした。

「失礼します。リンディ艦長」

そう言いながら入ってきた女性は、手にお茶を持ちながら近づいて、それを目の前に置いた。

「ありがとうね、エイミィ」

そう言ってから、リンディは一口含んだ。

直後には溜息が洩れる。

「小規模とはいえ、次元震の発生が……ちょっと厄介なものね。危なくなったら急いで現場に向かってもらわないと。ね？ クロノ」

「大丈夫。分かっていますよ、艦長。僕は、その為に居るんですから」

——side 拓真

さてと……この後はKYの登場か。

茶々丸には奴の登場について言っているし……問題はフェイトのことか。

かわいそうだけど、もう少し待ってから時の庭園に乗り込むか。

アニメでも思ってたけどプレシアのあれは異常だったからな。
何らかの原因があるのは間違いないだろう。

プロジェクトFATEでフェイトが生まれたとはいえ、遺伝子から読み取った者が利き腕を違えたり魔力があるだけで虐待をするだろうか。

そんなことはないだろう。

それに魔力を持たせたくないなら最初からそうすればよかったはずだ。

発動か！

このタイミングは……公園だな。
漸くか。

さて……超長距離瞬動。

足に魔力を込めて一気に向かう。

「！ 早いな、フェイト」

「詠春……あなた飛べないの？」

今更驚いたように言うなよ。

「ああ、飛べない」

空中を歩くことはできるけどな。

「やろうか」

「うん。バルディッシュ」

フェイトの攻撃が木に向かって飛ぶ。
が、こいつはバリアを張れたはずだ。

「オウ♪ 生意気にバリアまで張るのかい」

「今までのより強いね」

そうでもないと思うけどな。

これならまだ美由希さんの方が強いと思うけどな。

あ！ ユー……じゃなくて淫獣逃げやがった。

「アークセイバー、いくよ、バルディッシュ」

「お手伝いしようか……神鳴流奥義 雷鳴剣」

魔力を使った剣で木の根を切り刻む。

そのまま抑え込みが完了し、二人が空に上がった。

「ストップだ！ ここでの戦闘行動は危険すぎる。時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせてもらおうか」

なんか無駄にかっこいいな。

俺も今度名乗りを上げるみたいに登録してみようかな。

実際に目にしてみると。

しかしさっきからK Yの視線が茶々丸にいつてるが……茶々丸がサーチャーを破壊したからか？

っていうか気づかれる監視とかまったく意味ないだろう。

そして管理局来るの遅すぎだな。

さらになんでなのはおとなしく従ってるのか……管理外なんだから従わなくてもいいのに。

やっぱりここは剣じゃなくてあれでやるべきだよな、せっかく修行して完成させたんだし。

お！ やるねえアルフ。

問答無用で攻撃か……ってしまったこの後！

「フェイト！」

「フェイトちゃん！」

フェイトにK Yの攻撃が当たり、地に落ちる。

それをアルフが支え、さらにK Yが攻撃を加えようとする。

「フェイト、大丈夫か？ ……ダメそうだな。アルフ、帰ったらフェイトにこれを飲ませろ」

「あんたは？」

「私はあの馬鹿に少しお話してから帰る。心配するな」

「……分かった」

アルフがやや不服そうに帰っていく。

どうやら少しの間だったとは言っても信用を得られたらしい。

なのは茶々丸が押さえてくれるからな……何の気兼ねもなくやれる。

「逃がすか！」

KYの攻撃に居合拳をあてて相殺——いや、こちらの威力の方が強かったのでそのまま魔力弾がKYの方に飛んでいく。

「チッ！ 公務執行妨害だぞ！ 分かっているのか！」

「これはまた異なことを。ここは管理外世界、そして君は警告もなしに攻撃を当て、さらには追撃までしようとした。これのどこが公務なのかね？ さらに言えば君は不法侵入をしている。どちらかといえど犯罪者は君の方だ」

「な、何を！」

そう言って俺の方に攻撃が飛んでくる。

「やれやれ。自分が間違えていると知ったと勝手に攻撃か……君は言葉が使えないのかね？」

それでも俺の方に攻撃が飛んでくる。

「しょうがない……こちらもそれ相応の態度を取らせてもらおう。……警告は一度だけだ次はないぞ？」

「何を言っている！」

「“百式観音 一の手”」

手を合わせ、右手に感卦法、左手にチャクラ、それを合成させて発動。

元となる魔力も気も、できるだけ抑えて合成させる。

業の発動から直撃まで実にコンマ1秒ほど。

人間の神経伝達速度を超えたスピードでの攻撃なので回避するすべはない。

さらに一度目をよけても残り九十九の手が襲いかかるこの技はまさに絶対無敵。

まず人間ではよけられないだろう……ナギやラカンなら或いは全力で防御すれば手加減したこの威力に間に合うかもしれないが。

KYが一瞬にして気を失い、その場にいた者が言葉を失う。

「では私も帰らせてもらおうよ」

——side 茶々丸

マスターが帰られました。

マスターの話によればこの後はリンディ・ハラOWNという名の、先ほどのKYの母親が現れるとのことでしたが……来ましたね。

「あの……ちょっといいかしら？ さっきの子を起こしてくれる？」

さて……この後もマスターの予想された通りにことが運ぶのでしょうか。

「なるほど、そうですね。あのロストログア、ジュエルシードを発掘したのはあなただったんですね」

「それで僕が回収しよう」と

「立派だわ」

「けど同時に無謀でもある」

淫獣がしゅんとなっていますが……まあ、どうでもいいですね。

「あの、ロストログアって」

リンディ艦長からなのはさんにロストログアの説明がなされました。そして次元震と、次元断層についての説明も。

……この人たちはマスターがジュエルシードを作れると知ったらどうするのでしょうか。

それに私の魔力供給装置がジュエルシードを模したものであると知ったら。

……まあ、分からないでしょうけど。
マスターが認識阻害魔法を使っていますし。

「これよりロストログア、ジュエルシードの回収については時空管理局が全権を持ちます」

いつの間にか話が進んで、マスターが胆だとおっしゃっていた部分に話がさしかかったようです。

「君たちは今回のことは忘れてそれぞれの世界に戻って元通りに暮らすといい」

「でも……そんな」

なのはさんが不満そうですね。

ここまではマスターの言ったとおりにことが運んでいますね。

「次元干渉に関わる事件だ。民間人に介入してもらうレベルの話じゃない」

その民間人にやられたのはどこの人だったのでしょうか。

「でも！」

「まあ、急に言われても気持ちの整理もつかないでしょ。今夜一晩、ゆっくり考えて二人で話し合って、それから改めてお話をしましょう？」

マスターがおっしゃられていたのはこのタイミングですね。

「なのはさん、帰りましょう。彼らがやってくれるというならその方がいいです。それにこんな組織なのはさんの力を預ける必要は

ありません」

心拍数増大、体温の上昇。
マスターの言ったとおり、この女性はなのはさんに協力させようとしていたようです。

「何のことかしら？」

「ご自分でお考えになったらどうでしょうか？ まあ、探索の方は頑張ってください。あなた方ではあの男性には、かすらせることができないでしょうが」

転移魔法発動。

「さて、なのはさん、帰りましょうか」

「えと……」

迷っているようですね。
それなら。

「なのはさん、あちらはジュエルシードについて全権を持ったのです。あなたがフェイトさんと話をすることを禁止したわけではありません」

「そ、そっか！」

やはりかわいいですね。

これでマスターの意図したとおりにことが運んだわけですか。
あとはフェイトのことをどうするかですね。

――side アースラ

「すごいや！ どっちもトリプルAクラスの魔導師だよ！」

モニターを操っている少女が歓声に近い声を上げる。

「ああ」

それにこたえるのは隣に立った少年。

先ほどもらった一撃からはだいぶ回復したようだ。

「こっちの白い服の子はクロノ君好みのかわいい子だし」

「エイミィ、そんなことはどうでもいいんだよ」

「魔力の平均値を見てもこの子で127万」

映し出されているのは白いバリアジャケットを身にまとっているな

のは。

「黒い服の子で143万。最大発揮時はさらにその3倍以上」

そしてそのあとに映されたのは漢字が書かれたバリアジャケットを身にまとい、羽が生えているかのように見える茶々丸。

「この人に至っては平均値が300万……クロノ君より魔力だけなら上回っちゃってるねえ」

「魔法は魔力値の大きさだけじゃない。状況に合わせた応用力と的確に使用できる判断力だろ」

黒い少年が不満げに言う。

「それはもちろん。信頼してるよ？　アースラの切り札だもんクロノ君は」

だんだんと声が小さくなっていく少女。
その手はいまだにモニターを操り続け、映し出されたのは青年に近
いようなサングラスをかけた男性。

「……こいつは？」

顔がこわばった少年が少女に聞く。

「……魔力値はさっきの女の人とほとんど同じ。この二人だけで管理局の誰よりも魔力値が高いよ」

半ば泣きそうになりながら少女が答える。

それは青年がバリアジャケットを展開していなかったことからなのか、それともデバイスを使っていなかったからなのか、はたまた茶々丸の協力を得られなかったことからなのか。

「あ、艦長」

「彼らのデータね。……あの青年のデータはどう？」

「茶々丸さんと同じくらいです」

再び少女が答える。

それにうつむく女性。

やはりその表情は茶々丸となのはの協力を取り付けられなかったことからくるのだろう。

自分の策がうまくいかなかったことへのいら立ち、そして嵌めようとしたことへの後悔。

そして少年は思う。

世界はこんなはずじゃなかったことだらけだ、と。

——side 拓真

「そうか、計画通りか。あとは俺と茶々丸が互角に戦って管理局に協力要請させるだけだな」

「ですがマスター、マスターが犯罪者となる恐れがありますが」

「問題ないだろ。こっちは管理局の弱みも握ってるわけだし」

地下室に入れてある局員。

こいつらはこっちが持つ最大にして最高のカギだ。

これさえあれば管理局などどうとでもなる。

だがしかし、これは最後の手段だ。

それに犯罪者となって管理局が全員でかかってきても俺が捕まることはない。

というか捕まっても肉体的能力だけで逃げられるし、管理局は潰せる。

――十日後

「アルカス・クルタス・エイギアス。煌めきたる天神、今導きのもと降り来たれ。バルエル・ザルエル・ブラウゼル。撃つは雷、響くは豪雷。アルカス・クルタス・エイギアス。ハアアアア！」

さて、どのタイミングで飛び込むか……ここはやはりふつうになのはと同じタイミングかな。

プレシアからの攻撃は……防いだら今後に響くか。

ってそうだ、なのははアースラにはいないからすぐに来られるんじゃない。

「フェイトちゃん！ 手伝って、ジュエルシールドを止めよう」

来たか。

なのはに茶々丸、そして淫獣。

「二人できっちり半分個」

「ふむ、すまんが私も混ぜてもらおう」

「詠春！ あんたどこ行ってたんだい！？」

「すまん。管理局とかいう組織に目を付けられたのでね、身を隠していたのだよ。それよりも今はこれの封印が先だ。なのは嬢、フエイト、抑えるのは私がやろう。君たちは封印をしてくれればいい」

俺が一個増やした分もあるからな。

七の手で一つずつ攻撃すればいいだろう。

「行くぞ！」

——“百式観音 七の手”

その動作で一瞬にしてジュエルシードが沈黙し、なのはとフエイトが封印術式を叩き込む

……ってやりすぎじゃボケエ！

「友達に……なりたいんだ」

いつの間にか名シーンが終わってるし。

「きゃあああ！」

そしてプレシア女史の雷か。

実際に目に見てみるとそこまで脅威でもないな。
って茶々丸がかなり怒ってるし……やばいな。

「では私はこれでな」

急いで戻ろう。

とぼっちりを喰らったたたまったもんじゃない。

――side 茶々丸

さてと……なのはさんが攻撃に当たってしまいました。

これは誰が責任を取ってくれるのでしょうか。

「ジュエルシードについてはこちらが全権を負うと言ったはずで

うるさいですね、無能のくせに。

「別に私たちはジュエルシードには手をだしていませんよ。それに私たちはフェイトさんを助けようとしただけです、それに住んで

いる街に危害が加えられたらたまったものじゃありませんから」

馬鹿なのでしょいか。

もしもフェイトたちの魔力が切れて結界が崩壊し、ジュエルシードの余波が街に及んだらどうするつもりだったのでしょうか。

「そ、それは……とにかく話を聞かせてもらいます」

「結構です。遠慮しておきます。なのはさん帰りましょう」

「あの茶々丸さん？　話を聞いてあげた方が……」

「彼らはなのはさんを利用しようとしたんです。そんな組織の言うことに従うことはありません」

「それについては謝ります。どうか力を貸してください」

さてと……マスターの計画通りになっていますが。

「一つ目、私たちには単独行動を許可すること、二つ目、この事件が終わり次第関わらないこと、三つ目、正しい判断を下すこと、四つ目、こちらの意見を聞き入れること。これが守られない場合には協力はしませんし、場合によってはそちらを攻撃させてもらいます」

即時念話盗聴。

やっぱりこれ便利だな。

魔力のパターンは魔道具でごまかしてるし。

なのはと淫獣も行ったことだし、そろそろかな。

「アリサ、俺キーホルダーをどっかに落としたみたいだから探してくる」

さてさて。

『アルフ、詠春だ。私に向けてだけ念話を飛ばすようにしろ』

『な、あんた！ どこに行ってたんだい』

『そんなことはどうでもいい。そろそろこの件を終わらせたくてな。時の庭園への行き方を教えてくれないか？』

『ダメなんだ。移動を続けてるから私にも今どこにあるのか分からない』

『そうか……では私は行くよ。フェイトのことは心配するな。私がなんとかする』

いつの間にか海上での決闘。

何だか俺はおいてけぼりになってる感じがする。

なのは別荘は使わずに修行したみたいだが……原作でも勝ってたから大丈夫だろう。

どちらが勝ってもこの勝負はどうでもいいわけだしな。

それにしても……管理局の船がもう一隻ぐらいは来て闇の書の回収をしようと思ってただけだな。

家には結界が張ってあるし、俺の影分身も置いてあるから何があってもどうってことはないが……ここまで動きがないと逆に不気味だな。

いったいどういうつもりなのか……。

「受けてみて、ディバインバスターのバリエーション」

いつの間にか最終場面に移行してるし。

「スターライト……ブレイカー!!」

あれ？

これ本気でフェイト大丈夫か？

——縮地

「あ、やべえ。空飛べない設定じゃん」

仕方ない。

海の上に立つか。

んでもって来たか。

「ゲート・オープン ロー・アイアス」

花弁は一枚も割れずにプレシアの攻撃を防ぐ。

ジュエルシールドはわざと逃したから局が追えただろう。

「茶々丸、そろそろだな？」

「はい、マスター。もうよろしいかと」

「解除つと。よお、なのは」

「ふええええ！ な、なんで拓真君が！？」

「あ、そういえばもう姿ばらしたから飛んでもいいんじゃない」

「さてと、そろそろアースラに向かうか。いよいよ物語の終幕だ」

「お疲れ様。それから……フェイトさん、詠春さん、初めまして」

「俺は詠春じゃなくて拓真だ」

「そうですか……後で話は伺いますので」

警戒は解いてないか。

まあ、警戒していようとしていなかろうと同じことだけだな。

暫くしてから時の庭園内の映像が映し出され、アリシアの映像に変わった。

——“神眼”発動 解析開始

体は……完全に復元されてるのか。

それにプレシアの体は……あらら、変な魔力が渦巻いてやがる。人間のじゃないってことはそれが原因か。

「私のアリシアに近寄らないで！」

「危ない！ 防いで！」

リンディ艦長の叫びもむなしく、局員が全員吹き飛ばされる。

「もう駄目ね、時間がないわ。たった九個のロストログアではアルハザードに辿り着けるかどうかはわからないけど。でも、もういいわ。終わりにする。この子を亡くしてから暗鬱な時間を、この子の身代りの人形を娘扱いするのよ」

ひどいな……人形はあんたの方なのに。

いや……あれはもはやひとではないか。

「聞いていてフェイト、あなたのことよ。せっかくアリシアの記憶を上げたのに、そっくりなのは見た目だけ。役立たずでちっとも使

えない、私のお人形」

その後にエイミーからの通信が入る。

「よく調べたわね。そうよ、その通り。だけどダメね。ちっともうまくいかなかった。作り物の命はしょせん創りもの。失ったものの代わりにはならないわ」

ならなんでもう一度アリシアの命を創りだそうとするのか。自分で言っていることの矛盾に気づいていないのだろうか。自分がアルハザードに辿り着きたいがためにプレシアを操っていることに気付くものがないとでも思っていたのだろうか。

「アリシアはもつと優しく笑ってくれたわ。アリシアは時々わがままも言ったけどあたしの言うことをとてもよく聞いてくれた」

「止めて……」

なのはが見かねて口をはさむ。

「アリシアはいつでも私に優しくかった。フェイト、やっぱりあなたはアリシアの偽物よ。せっかく上げたアリシアの記憶もあなたじゃ駄目だった」

「止めて、止めてよ」

「アリシアを蘇らせるまでの間に私が慰みに使うだけのお人形。だからあなたはもういらないわ。どこへなりと消えなさい！」

「お願い、もう止めて!!」

なのはの悲痛な声が艦内に響く。

だけどここで止めさせるわけにはいかない。

だから俺はただ唇をかみしめて見守るだけ。

「ははははははっ。いい事を教えてあげるわ、フェイト。あなたを作りだしてからずっとね、私はあなたが大嫌いだったのよ！」

その声でフェイトの手からバルディッシュが落ち、それが割れる。

フェイトの目からは生気が消え、崩れ落ちそうになる。

そして屋敷内には魔力反応が多数生まれ、プレシアー——いや、ロストロギアが次元震を起こそうとする。

一人でAランクの傀儡兵数十機を動かせるはずがない。

さすがはロストロギアというところか、人間の範疇を超えている。

「茶々丸、フェイトを運ぶぞ」

「はい、マスター」

さてと、どうしたものか。

「アルフ、茶々丸、行って来い。フェイトは俺が見ておく。それから茶々丸、まだ（・・・）壊す（・・・）な（・・・）」

「了解しました」

それから二人が駆けていく。
部屋に残ったのは俺とフェイトの二人だけ。

「さて……早く起きてほしいものだな。また起きたところに声をかける」

「私の……私たちのすべてはまだ始まってもない。そうなのかな、バルディツシュ。私、まだ始まってもいなかったのかな」

〈get set.〉

バルディツデュが答えるように動く。

「そうだよね、バルディツシュもずっと私のそばにいてくれたんだもんね。お前もこのまま終わるのなんていやだよね」

〈yes sir.〉

「うまくできるか分からないけど……一緒に頑張ろう」

〈recovery〉

「私たちのすべてはまだ始まってもない。だから、ほんとの自分を始めるために！」

ここだな。

「では真実を見る勇気ができたということでもいいな？」

「詠春……あ、拓真」

ここで間違えるとは……やはり天然だな。

「行こうか、場所が分からないだろ？」

「なのは！」

＜t h u n d e r r a g e .＞

上空からなのはの前に向かってサンダーレイジが飛び、傀儡兵がすべて吹き飛ぶ。

「大型だ、バリアが強い」

「うん、それにあの背中」

「じゃあ、俺がやろう」

俺の見せ場がなくなっちまうしな。

「茶々丸、どれぐらいなら出しても大丈夫だ？」

「雷の暴風一つ分ならこの壁でも耐えられるかと」

「そうか、なら」

——豪殺 居合拳！

感卦法による居合拳。

その一撃で傀儡兵が地に伏せる。

「フェイトちゃん！」

「フェイト、フェイトお！」

あれ？ 俺は空気ですか？

「マスター、早めに向かいませんと」

「そうだな……茶々丸はフェイトについてやってくれ、もう制限は解除してもいいから」

「了解しました。ウイング、セットアップ」

＜stand by ready. Setup＞

茶々丸の背に、かのモビルスーツのような羽が付き、ドラグーンシステムが展開する。

さながらその姿は自由の翼。

おそらくは魔導師としては管理局最強だろう。

「――どこの誰にもありはしない!!」

どうやら間に合ったらしい。

駆動炉までは俺が一緒だったからだろう。

そのあとで時の庭園の床をぶち抜いて真下に降りてきたけど。

「では真実をここにさらそうか。……フェイト、いいんだな？」

その問いかけにフェイトがうなづく。

「さてと……プレシア・テストロッサー――いや、ロストログアよ」

その声にKYを中心として驚嘆の声が上がる。

「私がロストログア？ 何を言っているのかしら？」

「押し問答を繰り返している時間はないのでね、手短に済ませてもらうよ。プラクテ・ピギ・ナル閨の吹雪」

無詠昌による攻撃が直撃し、プレシアが端の方に吹き飛んだ。

「何を！」

ハラオウン親子が声をあげて詰め寄ろうとする。

「よく見る。あれは人間ではない」

プレシアの背中が裂け、黒い物体が現れる。

「クカカカ」

奇妙な音を立ててそれが魔力を発する。

今までよりも数倍は大きな波動。

それによって次元震が起こる。

「残念だが話を聞いている時間もないのでな。力で終わらせてもらう。茶々丸、この場にいるもののフォローを」

「了解しました」

「さて、なのはの砲撃はディバインだったかな？ 本物のディバインを見せてやろう……神眼、発動」

魔力を抑えていた指輪をはずし、目が金色に輝く。
世界とのリンクをつなぎ、そこから魔力を得る。

「これが……神の砲撃だ！」

放たれた魔力砲はプレシアだったものを跡形もなく消し、庭園の背後に大きく穴をあけた。

「さてと、仕事は終わりだな。帰るか」

「マスター、全員腰が抜けているようです」

「拾っておけ。じきにここも消えてなくなる」

第七話 KY登場（後書き）

まさかの速さで無印編が終了。
この後どうしよう。

第八話　そしてA，S編が始まる（前書き）

もはや自分でも何を書きたいのかわからなくなってきた。

第八話　そしてA，S編が始まる

「さてと、これで用は済んだからな。あとは……フェイトはどうした？」

「アルフと一緒に護送室へ行った。彼女はこの事件の重要参考人だからな」

俺の問いにKYが答える。

「茶々丸」

「はい、マスター映像は取っております」

「そうか。ハラOWN艦長、プレシアー……いや、あの黒いものが黒幕だったわけだが、それでもあなた方にフェイトを拘束する理由があるのかな？」

「しかし……フェイトさんは」

「では一つ聞くがフェイトは何の罪を犯したのかな？　輸送船を落としたのは次元跳躍攻撃が可能だったプレシア、それに操られていたのはフェイト。アースラに攻撃したのもプレシア。そしてフェイトはあろうことか執務感と名乗る傲慢者に無差別に攻撃を加えられた。これのどこに罪があるのかな？」

そう、フェイトは何の罪も犯していない。

「そんなへ理屈が通るか！」

KYがどなっているがそれはお門違いというものだ。
それにこちらには茶々丸達との約束もある。

「あなた方は茶々丸に協力を求めた時にこう言われたはずだ。「条件が守られなければこちらから攻撃する」と。そして今その条件は違えられようとしている。おわかりかな？」

「ですが……事件の重要参考人を野放しにするわけには」

「それには本人の同意が必要だろう？ それにここは管理外世界。君たちの法は適用されない。さらに言えば、私はこの世界の管理者として君たちを排除する用意もあるのだが？」

「それは脅迫ですか？」

「いやいや、この世界の意思を伝えただけだよ」

「君は神にでもなったつもりなのか!？」

「言わなかったかね？ 私は人間というよりも神に近い」

まあ、本当は半分半分だが。

「それに君らには別の任務もあるのではないかね？ 闇の書の回収という」

「そ、それをどこで!？」

「闇の書の主は私の義妹でね。どうする？ 連れて行くかね？」

「……できればそうしたいのだけど、あなたはそうはさせてくれないのでしょうか？」

やはり頭はそこそこ回るようだな。

ここで俺を敵に回すことを恐れたか。

「君たちが責任を持って義妹を救ってくれるというのなら預けよう」

「君は……闇の書をどうするつもりだ！」

「どうもせんよ。強いて言えば義妹を救いたいというだけだ。で、君たちに預けても大丈夫なのかね？」

「できるだけの努力はします。ですから！」

ふむ。

ここであずけてみるのも一興か。

はやてには悪いが、な。

「いいだろう。ただし期限はこちらの世界での十月に入るまでだ。護衛として私も行くのでそのつもりでな」

「あ、あの……拓真君？ 何が何なのかなのはには分からないんだけど」

「要するにはやてがこれからすこし治療のために時空管理局に行くということだ」

茶々丸は相変わらず録画に戻ってるし。

さてと、それじゃあ今回の一番の目的を果たすのでしょうか。

「茶々丸、フェイトと、アルフを呼んできてくれ」

「了解しました」

「な、何をするんですか？」

「何ってハラオウン艦長、アリシアを生き返らせるにきまつてるだろ？」

さも何を言っているんだこいつは、というように言ってみる。

「な、死者蘇生ができるわけが……」

うるさいなKY野郎。

少しぐらい黙ってればいいのに。

「マスター連れてきました」

「ご苦労さん。淫獣とKYはここから出ろ」

「断る。君のことを監視させてもらう」

馬鹿め、引かなかったな。

「二人ともそんなにアリシアの裸を見たいのか？」

「！ し、失礼する！」

二人があわててバタバタと駆けて行き、部屋から出て行った。

「さて、茶々丸、何か服を着せてやってくれ」

言葉通りに茶々丸が持っていた服をアリシアに着せていく。

体は完全に保存されているし、魂、というよりも霊が漂っている。

『ねえ、本当にできるの?』

『多分な。少しお前の指を切るからな』

「さてと、フェイト、少し痛いかも知れんが血をもらっていいか?」

その問いにフェイトがこくと頷き、一歩前が出る。

その指先を少し切って血を地面に垂らす。

同時にその横にアリシアからも血を垂らす。

「神眼」

両方の血を解析し、相違点を見比べる。

「やっぱり違うな。遺伝子情報は同じだけど、少しだけ血が違う」

『それギャグ?』

アリシアからの突っ込みが入る。

零体状態だから俺にしか見えていないのだろうけど。

『最初に試すだけやってみるから』

そう宣告してから自分の中にある力を切り替える。

「オーバーソウル」

零体を体に戻す。

それによってアリシアの霊が体に入り、どんな具合かを知ることができる。

「どんな感じだ？」

「うーん……足が動かないや」

「それは筋力の衰えだな。……一回離脱させるぞ」

ならば体力を元に戻せば何とかなるだろう。

「い、今のは？」

リンディさんが驚いたように聞いてくる。

「零体だったアリシアを体に憑依させた。まあ俺の力が切れたらまた動けなくなるんだけど」

そう言いながら生き返らせるための手段を頭の中で構築する。

「やっぱりあれか……ゲート・オープン」

取りだしたのは士朗さんを助けた時に使ったエリクサー。

これで筋力も元に戻るはず。

だけど心配だから微量の電気も流しておく。

「さてと、“世界樹の葉”」

次に取りだしたのは龍の探索物語で使われる蘇生のための葉。
これで生き返るだろう。

「ん……んう」

「起きたか。どんな感じだ？」

「うーんと、大丈夫、かな」

首をコテンと傾けて答えるその姿は無茶苦茶可愛かった。
さながら……いや、止めておこう。

「で、あれでいいのか？」

「うん。私はいいよ。あとはフェイトが良ければ大丈夫だけど」

「だそうだが、フェイトはどうだ？」

「？」

あ、まだ言っていなかったっけ。

「俺の家に住むか？　ってこと。なのはの家ともお隣さんだしな」

「え、えっと……」

感触は大丈夫みたいだな。

ああ、そうだ。

アリシアの体の調子も確かめておかなきゃな。

「あの……私は間違っただけをしておかなくていいから」

「ああ、それならお前は無罪になったから」

「え？　どうして」

「まあ、いろいろとあったんだ。気にするな」

「……えっと、拓真がいいならお願いしたいかな」

「じゃあ、決まりだな。茶々丸」

「はい、マスター」

さて、あとははやてのことか。

「それでは我々はこれで失礼するよ。フェイト、アリシア、なのはの近くに……では転送」

魔法が行使され、茶々丸を含めた四人が俺の家に転送される。そして俺も帰ろうとしたところでKYからの声がかかる。

「ま、待て！　闇の書はどうするつもりだ！」

「心配するな。明日こちらに連れてきてやる」

それから光を媒体にした転移で自分の家に戻る。

影や水を使ったものよりも汎用性が高いが、ネギまの世界でも俺のような規格外にしか使えない。

今日は帰ってからはやてと話して……やることが山積みだな。

「ということで、お前の足が動かないのは魔法が原因だ」

「あ、あの……いきなり、ということで、とか言われても何も分かんし、それに魔法？　なんやそれ」

ふむ。

物分かりの悪い義妹だ。

すぐに理解してくれるものだと思ったが。

「要するにだ、お前には魔法を使える才能があって、それでお前の足が動かないのはこの本が原因。だからそれをどうにかするために専門の所に行くというわけだ。Understand？」

「アンダースタンドや。けどしまったなあ。……兄ちゃん、この話ばらしてもよかったんか？」

「？　誰にだ？」

「今スピーカーでアリサちゃんとすずかちゃんと電話がつながってるんやけど」

え？ マジですか？ こんなに早くにばらす予定はなかったのに。

「アー……それはミスったなあ。まあ、明日出発の予定だから今日のうちにアリサたちとはお別れ言っとけよ。まあ、長くても十月までだけど」

そう言ってから俺は準備のために部屋に戻る。

あとは……守護騎士が言うことを聞いてくれればいいんだけど。

それに蒐集のために魔法生物——いや、幻獣とか神獣を集めとくか。その方が早く終わるしな。

大神は召喚獣にしてあるけど、それだけで足りるかどうかわからないしな。

あとは……レヴァンティンでも創っておくか。

バンツ！！

「あんた！ どういうことよ！」

「アリサ！？ それにすずかも！？ 何人の部屋に勝手に入ってきてるんだよ」

「そんなことはどうでもいいわよ！ 魔法ってどういうことよ！」

「ああ、そのことね。だからはやての足の原因なんだよ。それからなのは魔法がつかえるぞ？ んでもってはやては明日から行く予定だから、今日ははやてと話しといてくれ。俺は準備があるから」

はあ、どうしたものかね。

はやての足が治ってから魔法のことはアリサとすずかには言うつも

りだったんだけどな。

……にしても二人とも来るのが早かったな。

鮫島さんあたりが車を飛ばしたか？

「茶々丸、多分アリサとすずかが泊っていくと思うから両家に電話しといてくれ」

「了解しました」

なんで俺がそんなことにまで気を配ってやらなきゃならないのか。

ああ、あとははやて用に護身の魔道具も持たせなきゃな。

まったく面倒臭いものだ。

こうスパッとルール・ブレイカーの改良版で直してもいいんだけど、出力をミスったら大変だしな。

あ、そうだあいつ等のこともあるしな。

はてさて、このタイミングで返していいものか、それともいざという時の切り札のために取っておくか……。

後者だな。

切り札は温存して、いざという時にきってこそだからな。
その時が来るかは分からないけど。

「んで、準備はいいんだな？」

「準備って言うてもそんなになかったけどなあ」

「まあ、足りないものがあつたら俺が持っていてやるよ。それから餞別というかお守り代わりだが、このペンダントを身に付けとけ。いろいろと魔法効果を付加してあるから」

「はやて、頑張りなさいよ！」

アリサ、何をがんばるんだ？

それからすずか、もう会えないわけじゃないんだから泣くなよ。

「それから魔法らしい魔法を一つ見せてやろう。結界展開、プラクテ・ピギ・ナル 魔法の射手 連弾 全属性 多数の矢」

詠昌とかは適当だ。

こんな魔法はないし、ただ単にきれいだったから作ってみたただけだ。本当はこれはばらさずにすべてを合成させることで絶大な威力を誇る。

「きれいやなあ」

「まあ、俺のほかには誰にも使えないけどな。さて、行くぞ。転移」

「さて、それではよろしく頼むぞ？ 管理局の諸君。……ああ、そうだ。影分身の術」

「に、兄ちゃんが増えた！ これも魔法なんか？」

「これは魔法じゃない。忍術だ。まあ、気にするな。俺はいろいろと規格外だから」

――数日後

「さてと、アリシア、体が変わってどういうことだ？」

「うーんとね、何だか前の時よりも動きがいいっていうか私にもよくわからないんだけど」

「どれ」

解析を試みる。

……はい。

「すまん。体に微量の電気が流れてる。多分電気製品とかには影響はないだろうけど、神経伝達速度が速まってるから体がスムーズに感じるんだろう。まあ悪いことはないからそのままでも大丈夫だ」

「ふーん、そっか」

アリシアは納得したようだ。

もとはと言えばフェイトも運動神経はいいからアリシアもいいはず

なんだよな。

何が変わって運動が苦手だったのかは知らないけど。

「あの、そう言えばどうして拓真はアリシアが生き返る前から知り合いだったの？」

「ああ、そんなことか。フェイトと一緒に時の庭園に乗り込んだ時にアリシアが幽霊になっててな、それを俺が見つけたんだ」

「ええ！？ 拓真君幽霊が見えるの？」

なのは、何をそんなにあわてることがあるのか。そうじゃなかったらアリシアを生き返らせられないだろうが。

「当たり前のことを聞くな。それからフェイト、アリシア、明日から学校だから」

「え？」

「いや、だから学校だから。戸籍も取っておいたから、これからはフェイト・T・真柄とアリシア・T・真柄だな」

まさか名前が原作と変わるとは。

まあ、俺がそういう風に動いたんだけど。

「じゃあ、魔法の訓練だな。なのははコントロール、フェイトは鎌を扱えるようになる訓練だな」

「ねえねえ拓真？ 私も何かやりたいんだけど」

アリシアがねえ。

リンカーコアがないからこの世界の魔法は使えないし……。

気は……使えるかもしれないけど訓練が大変だよな。

となると……。

「あれか。……ちよつと待っつけ。アリサとすずかも纏めてやっておくから」

やっぱりあれしかないよな。

まさか俺がネギ坊主みたいなことになるとは……。

世の中分らないもんだな。

「ということでお前ら三人にも魔法っぽいものを使ってもらおうと思う」

「何がというわけなのよ！ あんたはいつも話が唐突過ぎるのよ！」

「要するにだ、魔法を使ってみるということだ。さっそくやるぞ？」

さすがにキスで済ませるわけにはいかないからな。

「ゲート・オープン 契約の書をここに」

取りだしたのはキス以外の方法で済ませるための仮契約の書。

ここに名前を書けばカードが出る。

「三人ともここに名前を書いて……じゃあ始めようか。その魔法陣の中からでるなよ」

いつの間にかなのはとフェイトも見に来ている。

「パクティオー」

光がほとぼしり、カードが三人それぞれの目の前に現れる。

「これを三人にやる。手に持って“アデアット”って言って」

「「アデアット」」

三人が同時に言い、それぞれの眼前にアーティファクトが現れる。
アリシアはバルディッシュのような鎌、というかバルディッシュそのものの。

すずかは……猫？ あれ？ これって生き物が出てくるの？

アリサは……普通だな、金色の指輪か。

「アリシアはバルディッシュだな。訓練すれば扱えるようになるだろう。アリサは多分動物と話すための指輪だな。名前は……お前が決める。すずかはよくわからん。そんなに知能も発達してないみたいだからな。あ！ そうだアリサ、指輪をはめてこいつに話を聞いてみてくれ」

「う、うん」

なんかアリサがびくびくしてるのって珍しいな。

無駄に可愛いし。

「……なんだかこの子すずかのえっと、召喚獣？　そういうのらしいわよ」

「ってことは、札に戻るか？」

「にゃ！」

その声とともに猫が札に戻る。

「ふむ。あっちの世界の召喚獣みたいだな。こいつは……ありゃりゃ、無茶苦茶強いじゃんこいつ。まあ、三人ともこれから特訓だな」

——影分身の術

「一人ひとりに俺が付いて修行だ」

「あの、拓真君？　なのはもそれできないかな？」

「前に試したことはあったんだけどな、リンカーコアもちほできないみたいだ」

そう、いつだったか茶々丸に言われて仮契約をやってみたことがあったが、ダメだったのだ。

――六月三日 深夜

「さて、そろそろ闇の書が覚醒するが、はやて、意識を失うなよ？」

「分かつとるよ。私が気いうしなったら兄ちゃんが攻撃されてまうんやろ？」

「多分だけどな。俺の話を聞こうとはしないだろうから」

それから数分後、時計が12の部分で長針、短針、秒針ともに重なり、闇の書が宙に浮かぶ。

「お、おお！ 浮かんどる！ すごい！！！」

なんかはやては興奮してるし。

足が悪いのがこいつのせいなのになあ。

それに怪しげな光も放ってるし。

＜Ich entfere eine Versiegelung
g＞

その声とともに闇の書がページを開き、そのあと本が閉じられる。

＜Anfang＞

「おお！」

何がそんなにうれしいんだか。

ここからが重要なのに。

まあ、俺にとってただけだけど。

はやてのリンカーコアから魔力が飛び出し、それが宙に浮く。

「闇の書の起動、確認しました」

黒い服に身を包んだシグナムが言う。

「われら、闇の書の収集を行い、主を守る守護騎士にてございます」

続くのは一番左に控えたシャマル。

「夜天の主のもとに集いし」

そしてザッファイーがつなげる

「ヴォルケンリッター。何なりと命令を」

最後はヴィータ。

そしてはやては口を開く。

「あんな、私が主なんやけど、兄ちゃんの話聞いてもらいたいや」

「さて、俺がこいつの兄なんだが、落ち着いて聞いてほしい。ここは管理局だ」

最初に重大なことを発表する。

「な、貴様!!」

シグナムがキレたようにレバンティンに手をかける。

「はあ、はやて」

「やっぱり兄ちゃんの言ったとおりやったな。あんな、もうちょつと落ち着いて聞いてほしいんや」

それからはやての説得に応じたヴォルケンリッターが渋々俺の話を聞く。

最初になぜ管理局に居るのか、そして十月までの期限を設けていること。

そして闇の書が本当は夜天の書であること。

「……理解しがたい話ですが」

シグナムも意外と物分かりがいいみたいだ。

「まあ、あんたらの役目は変わらないよ。はやてを守ること、それから話し相手になること、時期が来るまでは蒐集は行わないこと」

これさえ守れば後はどうにかなる。

はやても何の罪にも問われることもないしな。

あとは魔力を集めればどうにかなるか。

……あ、でもリンカーコアがなくちゃだめなんだっけか。

面倒くさいな。

「じゃあ、ちょっと出かけてくる」

あとはヴォルケンリッターが出てきたことと、闇の書が起動したことをKYに言っておけばどうか……なるわけがないか。

今まで何もしてこれなかったわけだしな。

いくらなんでもグレアムの凍結プランは採用されないと思うが……はてさて、管理局はどういう対応を取ってくるか。少し楽しみではあるな。

『茶々丸、局の掌握はあとどれくらいでできる？』

『おそらくは今日中に終わると思います。アーティファクトも使っていますから』

『分かった』

茶々丸のアーティファクトはこの世界では無敵だな。

なんせ機械の中枢部に自分を接続して操ることができるしな。

デバイスで魔法を操ることの多いこの世界での使い方はかなりあるしな。

あ、そうだ。

なのはとフェイトのデバイスにカートリッジシステムを組み込んでおかなきゃな。

それは管理局に任せるか。

俺がやると強くなりすぎそうだし。

間違っって違うシステムを組み込むこともありそうだしな。

多分茶々丸あたりに任せたら超高性能のデバイスになっちゃいそうだし。

……いや、確実になるな。

あいつの中での優先順位はなのはが最高だし。
なんでなのかは知らないけど。

そういえばシグナムのデバイスは蛇尾丸っぽくもなるんだったな。
蛇尾丸も創っておくか。

当分暇になるし。

そのついでに斬魄刀のシリーズも創っておくか。

……そういえば“吼えろ”って言うのはヴィータだったような。

まあ、いいか。

他に何か創っておくものを……アースラに対抗してアークエンジン、いや、エターナルを創っておくか。

それにジャステイスとプロヴィデンスも。

フリーダムは茶々丸が代わりになるしな。

さっそく家に帰って創作活動に勤しむとしますか。

第八話　そしてA，S編が始まる（後書き）

アリシア生存ルートに突入。

正直登場人物が多すぎて書くのがめんどい。

三期からはすずかとアリサは出てこないかも。

第九話　そしてA，S編終了（前書き）

感想にてオリジナルの展開がほしいと言われたので次の次あたりからがんばってみようと思います。

作者の努力足らずでなんかしらの二次創作と重なってしまうかもしれません。

第九話　そしてA，S編終了

――管理局

「さてさて、私としてはハラOWN艦長が出てくると思ったのだが……まさか噂に名高い三提督がでてくるとはな」

本当にまさかです。

予定ではこの三人とは闇の書事件が収拾してから会うはずだったんだが。

なかなか上手くいかないものだな。

「ほう。我々のことを御存じで？」

「ああ、知ってるよ。時空管理局黎明期に管理局の糞思想を広めた馬鹿どもだろ？」

「君は！　提督になんて口のきき方を！」

やっぱりこのKY野郎邪魔だな。

「第一何が“管理”だ。お前らはそんなに偉いのか？　誰が世界を管理していいと決めたんだ？　ろくに世界のことも知らない癖に」

「ふむ。耳が痛いすな。我々もどうにかしたいとは思っていたんですが」

へえ。

「その馬鹿と違って話は通じるみたいだな。いいだろう、三人とは話をしようじゃないか。ハラオウン執務官は御退場願おう」

「な！ 僕は――」

「執務官。結構です。私たちだけで話を進めます。皆も退出するよ
うに」

ラルゴ・キールの言葉に従って護衛であつたろう武装隊は退出する。
そのあとに続いてKYも渋々と部屋を出ていく。

「さて、約束が守られなかったわけだから闇の書を持って帰りたい
んだが？ ……とその前にそちらの御仁の紹介を願いたいな」

「申し訳ない。こちらは聖王教会の騎士カリム・グラシアさんです」

まさかこれがね……。

ここでも原作キャラ出現ですか。

「レアスキル持ちの騎士がねえ。局と教会は仲が悪いんじゃないかっ
たのかね？」

「組織としてはそうですが、個人としてはそうでもありません」

グラシアが答える。

このころから三提督とはつながりを持っていたのか。

……いや、預言を三提督が重視しているということか？

「騎士グラシアがいるということは預言に何か出たのかな？ それとも……夜天の書の回収が目的か？」

「その両方です」

へえ。

なかなか強かだな。

まあ、そうでもなければ教会騎士団と管理局の両方に在籍することなんてできないかもしれないけど。

「先に後者の方の話から入ろうか。結論から言えば俺はどうでもいい」

驚いているな。

ということとは……。

「断られると思って見返りを用意してきたか。それはつまり俺が管理局に悪い印象を抱いているということを知った上での行動だな？ まあいい。見返りが何だったのか気になるのでね、何なのだい？」

「そ、それは……教会騎士団への在籍です」

はあ？ 頭悪いのか？ やっぱり。

「それにどんな価値があるのだね？ まったく思いつかないのだが」

「ミッドチルダのベルカ自治領での特権などです」

「だから私にはあまり関係がないだろう？ 地球からでなければ行くこともないのだから」

そんなことは予想もしていなかったって顔だな。
教会騎士団から全権を任されているだろうに……こんなので大丈夫なのか？

「それにたとえ私にその話をしたところで夜天の主ははやてだ。はやてが地球で暮らしたいと言えばそれは関係ない。さて、前者の話に移ろうか。それもあって三提督も来ているのだろうか？」

「そうですね。それにどうやら小細工が通じる相手ではなさそうじゃ」

「今さらだろう。そんなことは」

「では早速。“司法の船は天の怒りを買う。やがて訪れる悲劇の前、天の御遣いが地に降り、その力を奮う。彼の者を止めることは誰にもできない”」

これはこれは……。

どうやらこの世界には俺は“天の御遣い”として認識されているようだな。

悲劇ってのはJS事件のことなんだろうけど……預言は数年先までしかできないはずだけだな。

十年後のことをすでに予測しているってことか？

それとも、何か別の事件が起こるってことか？

前者だな。

世界の修正力からして大きな事件が起きることはまずない。
あったとして……空港火災か。

「つまり御三方は怒りを買う前に鎮めようと思ったわけだ」

「それはつまりあなたが“天の御遣い”である？」

「さあ？ それはどうなのだろうな。少なくとも俺を止めることは誰にもできないがな」

ククク、と悪役が良くやるように笑って見せる。

「私たちも管理局の籍を用意したのだがそれでは不満かな？」

過程をすっ飛ばしていきなり本題か。
交渉のやり方としては五十点だな。

「それは一応もらっておきたいものだな。何か行動を起こすたびに
一々局のものが出しゃばってきたのでは鬱陶しくて仕方がないから
な」

「では局の特務官の資格を。それから大将相当の地位も」

それはまた好待遇な。

まあ、そうでもないと怖いってのが本音か。

「茶々丸、特務官というのは？」

「データ照合……ありません」

「そうか。で？ どういったものなのですか？」

「これから新たに設ける役職でしてな。まあ、あなた用のわがまま

がきくものだと思ってくださって構わないよ」

「そうか、ではありがたく頂いておくでしょう。名前と顔は非公開で頼みますよ。あとは……ああ、そうだ。“怒り”はいったん鎮めてあげましょう」

「怒り、とは？」

「その前に騎士グラシアの用事を済ませるとしよう。夜天の書についてのはやてが望み次第そちらに届けるとしよう。それからせっかくの御好意なのでね、その暁には騎士の件についても頂くとしよう」
そうすればヴィヴィオに関してもいくらかやりやすくなる。

「ではまたな、騎士グラシア」

「は、はい。それでは失礼します」

そう言ってカリムは出ていく。
残ったのは俺と茶々丸、三提督の五人。

「さて、騎士カリムを先に反したのには理由がおりなのでしょう？」

鋭いな。

さすがは三提督というところか。

「その通りだよ。これから話すのは局の闇についてだ。御存じないかな？ 私の両親のことを」

それを聞いたとたん三人の顔が一瞬で青くなる。

「そうか、知っていたか。ならば話は早い。……転送」

送られてきたのは地下室に入れていた五人の襲撃者。

「この者たちは私を無理やりに連れ去ろうとした馬鹿ものでね。管理局の者だと名乗ったので丁重におもてなししておいたんだが……茶々丸」

「はい。映像出します」

映しだされるのは両親が死ぬ前の映像と、そのあとで急に襲いかかってきた局の魔導師。

「……ご覧になった通りだ。怒り、というのはこれのことだと私は思うのだが、お三方はどう思うかね？」

「「「……」」」

絶句。

その二文字以外は今の三人には当てはまらないだろう。

何に言葉を失っているのか、それは俺の知ったところではないが。

「もうそろそろいいかね？ 私としてはこの馬鹿どもを送ってきた者を早急に処罰し、なおかつこの五人にはそれ相応の罰を与えてもらいたいのだが」

「……何よりも優先してやらせていただく」

「それは何よりだ。これで管理局は滅亡を免れたわけだ。おめでとう」

もはやすっかり悪役だ。

まあ、言っていることはそこまでひどくもないと思うが。それに武力行使もしていないしな。

「では私は帰らせてもらおうよ。これから闇の書を夜天の書に戻す作業があるのでね」

――次の日

「ではこれから闇の書改め夜天の書の修復作業に取り掛かる」

おおー！ という掛け声上がる。

第一級搜索指定ロストログアを相手にするというのにのんきなものだ。

見学として三提督、騎士カリム、アーススタッフも来ているが手は出さないでいてくれるようだ。

「じゃあまずは……そういえば今何ページだっけ？」

「まだ百ページにもいってないですよ」

闇の書を抱えたシャルルが答える。

この日のためになのは、フェイトからはコアを蒐集しており、今日蒐集するのは召喚させたもののコアだ。

「じゃあ、まずは……竜種だな。召喚」

その言葉で召喚されるのはついこの間、アリサを連れてアーティファクトの力で協力を取り付けたル・ルシエ一族に伝わる伝説の竜――ルソー。

ぶっちゃけて言ってしまうばなんでルソーとヴォルテールなんだよって感じた。

両方ともフランスを代表とする思想家で……止めておこう。

名前の由来なんて言い始めたらしきがない。

「シャルル、蒐集を」

その言葉に従ってシャルルが蒐集を始める。

伝説の竜だけあってコアもでかいらしく、ずいぶんと時間がかかっている。

「何ページ埋まった？」

「2、200ページほど」

なんだかものすごい効率が良かったらしい。

この分なら神獣を連れてくることもなかったかもしれん。

「んじゃ次は……っていうか多分最後になると思うけど」

そう言って札を取りだし、それに魔力を込めて放つ。

GYAAAAAAA!

けたたましい叫びとともに出てきたのは日本の神獣、八岐大蛇。
多分一つの首ごとにリンカーコアがあるはずだからこれで終わるだろう。

「シャマル、600ページあたりまで蒐集を」

先ほどよりも幾分か時間がかかって目標のページ数まで蒐集が終わる。

「じゃあはやて、管理者権限を発動させて」

「闇の書の主が命ずる。最後の守護騎士をここに」

闇の書がそれに答え、光を放ちながら最後の一人、管制人格が現れる。

「名前をあげる。もう闇の書なんて言わせへん。夜天の主の名において汝に名を与える。強く支えるもの、幸運の追い風、祝福のエール、リインフォース」

「自動防御プログラムを破壊しなければ認識ができません」

「じゃあ、出して。壊すから……なのはたちが」

「ふえええええ！ 拓真君は！？」

「だからこれは訓練だって言っただろ？ それにいざ危なくなったら助けてやるから頑張れよ。じゃあ計画通り自動防御プログラムはなのは、フェイト、アリシアで」

「リインフォース、お願い」

その言葉ではやてがリインフォースに取り込まれる。

……あれ？ 新名称は防御プログラムが破壊されないと認識できないんじゃないの？

あ、あれか。

仕様か。

それなら納得だ。

「じゃあ、今回は茶々丸とアリサ、すずかは見学な」

なんともものんきなものだ。

俺たちはほとんど遠足と変わらないかのような気分で来ている。

「みんながんばれー！」

なんともやる気のない応援が飛ぶ。

「ディバイン……バスター！」

……。

あれ？ 抵抗がなかったんだけど。

もしかしてはやてが中から動きを抑えた？

あっけないな、第一級ロストログア。

「なのは、自動じゃなかったみたいだからもう終わりだ。フェイトとアリシアも何もやってないから防衛プログラムの破壊にも参加な」

「う、うん」

どちらの声だったのか、双子の声が重なった。
正直拍子抜けというところだろう。

「じゃあ、あとは出てきた防衛プログラムをみんなでフルボッコな。多分頭が八つ出てくると思うから一つの頭に二人以上で当たるように」

そう言って俺は観戦席に戻る。

今回は原作と違ってページのほとんどを竜から取っているから手強いだろうが……まあ、なんとかなるだろう。
いざとなれば俺も茶々丸もいるしな。

「そうだ、三提督もやるか？ いい運動になるぞ」

「勘弁しておくれ。もう爺と婆なんだから」

「じゃあ騎士カリムと、アースラ組は？」

「私も遠慮しておきます」

「……僕はやろう」

そう言ってKY野郎が闇の書の防衛プログラムに向かう。

「あ、そうだアルカンシエルはいりませんから。起動準備はしなく

「ていいですよ」

「あんな召喚獣を見せられた後では信じるしかないわね。……あなたなら一人で何でもできそうだし」

そりゃまあ、なんでもってのは言いすぎだけど。

「ああ、そうだ。グレアム提督は？」

「私はデュランダルをクロノ君に渡したし、それにもう年だからね。遠慮しておくよ」

「猫姉妹は？」

「私は行くわ」

「あ、ちょっとロツテ！ もう」

そう言って猫姉妹も参加する。

「お、出てきたか」

出てきたのは八岐大蛇をベースにし、それにルソーの羽が付き、頭一つ一つにバリアやその他オプションが付いた防衛プログラム。原作よりか強いだろうが、こちらも原作よりも豪華人数だ。本当の意味でフルボッコになるだろう。

……そう思っていた時期が俺にもありました。

「なあ、兄ちゃん？ 全然バリアが破れないんやけど」

原作では一人で破れていたバリアが、全員の総攻撃を喰らっても破れなかった。

これは大きな誤算だ。

幸いにもスピードはそこまで早くないから誰も傷を負っていないが。

「……もういつか。あとは俺がやるわ」

そういつて俺も参戦する。

八つも頭があるから一度ですべて破壊するのではなく、一つに一つの技を使った方が面白いだろう。

「最初は……ゲート・オーブン レヴァンティン」

取り出したるは世界を焼くと言われた炎の魔剣。

そしてシグナムのまねを試してみる。

「紫電一閃」

バリアごと頭が焼かれ、消滅する。

「次は……やっぱ炎の次は氷か。プラクテ・ピギ・ナル おわるせかい」

詠昌はすべて破棄して、威力を絞って一つの頭のみを狙う。

少しだけ隣の頭に当たったが大丈夫だろう。

「次は……もうめんどいな。なんかやってほしいこととかある？」

声をあげて後方に居るみんなに聞く。

一々自分で何をやるか決めるのが面倒臭くなってきた。

「何といわれても」

「別に希望があるわけじゃないし」

「もう疲れたから帰りたいんやけど」

上からなのは、フェイト、はやての順だ。

「はやてえ、帰ってアイスたべようよ」

そしてもはやどうでもいいといった感じのヴィータ。

アリシアに至っては早くも帰る準備を始めている。

「兄上……」

シグナムが慰めるように俺の肩に手をかける。

「シグナム、お前は俺の味方だったか。お礼に究極の剣技を見せてやろう」

どうせコアを破壊しなければならぬのなら、最初からコアだけを破壊すればいいだろう。

——影分身の術

「全員ちゃんと見とけよ……これが魔法を使わない究極だ」

一応全員に見ておくように言っておく。

今から繰り出す剣技は神鳴流の最奥にして、俺だけが扱える斬魔剣。詠春でも扱えなかったことから、剣を志す者の至高。

「神鳴流 奥義 斬魔剣 終の太刀^{ついで}」

分身を使い、多方向から一斉に斬撃を飛ばす。
その斬撃は式の太刀と違い、そこで創られる。
よって回避は不可能。

一振りで無数の斬撃が生まれ、それが対象に必ず直撃する。
正確に敵を屠り、確実に終幕へと導く。
そして「マスター、もう皆さん帰りましたが」

――翌日

「ん？ どうした？ リインフォース？」

「私は……私が消滅しなければ闇の書は復活します」

あ、そういえばそうだったような気がする。
どうしたものか……ああ、今こそルールブレイカーの番か。

「ゲート・オープン　ルールブレーカー　これで多分大丈夫なはずだ」

サクッとリインフォースに剣を突き刺してから、神眼を発動させ解析をする。

「あ！　しまった……すまん。ユニゾン機能もついでになくなった」

あ、でもこれでリインフォース・ツヴァイの生誕ルートに入っただか？

そう考えるならまあ大丈夫か。

「……ありがとうございます」

そう言ってリインフォースは帰っていく。

漸くこれで闇の書事件も解決か。

この後は……戦闘機人事件か。

「と、いうことで冬休みなわけなんだが……どうしようか」

遊ぶ場所の候補はいくつかある。

別荘には海や山など、さまざまな娯楽のための場所が設置してある。もはや遊ぶ場所が多すぎて俺にもどこに何があるのか分からないが。

とは言っても学校が長期休みだからフェイトとなのはは管理局武装隊の訓練校に行っている。

はやては足のリハビリに勤しんでおり、アリシアは勉強に励んでいる。

先ほどの俺の眩きは虚空に消え入る。

「そうだ、ミッドチルダに行こう」

「ということで作ってきましたミッドチルダ」

軽いノリで作ってきたが……。

「ですから来る時には連絡を入れてください」

呆れたように呟くカリム。

俺よりも年上のはずだが、階級が俺の方が上なので敬語は崩せないらしい。

俺としては仲良くやっていきたいので適当にしてほしいんだが……。訪問もこれで何回目かになるのだが、いまだに壁は崩し切れてないようだ。

「おいそこ！　うるせえぞ！」

と、キレたようにいう男。

いつもながら悪運が発動して、強盗事件に巻き込まれてしまったみたいだ。

しかも、運の悪いことにカリムは今日は護衛を連れていないらしく、さらに言えば今人質に取られているのは管理局の理事らしく、突入ができないらしい。

かなり組織だった犯行らしく、犯人は十人に届くかといった程度で、人質も数か所に分けていることから頭もそれなりにいいらしい。

「何とかならないんですか？」

ひそひそと声をひそめながら俺に聞いてくるカリム。

念話を妨害しているらしく、声を出さなければ会話もできない。

「何とかって、考えられる手は数通りあるけど……俺は最終手段だから人命が関わらない限りは局に任せるよ」

というか、こんな事態で一々俺の手を煩わせるなど言いたい。

大体こんなことも処理できなかったら管理局はそれこそ終わりだろう。

それこそなのは達を管理局に入れるわけにはいなくなる。

「カリム、俺寝てるから終わったら起こして」

「あなたは……もういいです。あなたに協力を求めるのは無理だと悟りました」

それは重畳。

ではお休み。

――数十分後

「う、動くな！ こいつがどうなってもいいのか！」

いつの間にか救出作業が終わり、拓真は寝たまま最後の人質に取られていた。

寝ている間に突入作戦が実行され、その時に人質はすべて逃げ出したのだ。

「ええ。むしろ喜んで、とお答えしておきます」

そして犯人達の脅しに少しもあわてるそぶりすら見せずに、なおかつそれを強く勧める騎士カリム。

犯人たちはカリムのあらぬ言動に一瞬意識を取られかけた。

「て、てめえ！ 何を言ってやがる！」

「何と言われても……」

本気で困った様子の騎士カリム。

彼女はたかが一魔導師が拓真を傷つけられるとは思ってもいなかった。

当然のごとく彼らのデバイスは殺傷設定で組み込まれている。ともすれば魔力刃は拓真の首に届きそうな勢いだ。

「それにその方は気絶しているのではなく寝ているだけですから」
「またもや事件現場とは到底思えぬような事実が犯人たちに突きつけられる。」
「それにあっけにとられたのは犯人たちだけではない。」
「救出に來た武装局員もだ。」

「はっ！　でたらめなことを言ってんじゃねえ！」
「と言われても、カリムが言っていることはすべて事実なのだから仕方がない。」

「それにあなた方は人を殺す気はないのでしょうか？　そうじゃなければ彼が起きるはずですから」

「そう、拓真は殺気があればすぐに起きられるようにはなっていた。拓真が、人命が関われば介入すると言い、結局起きなかったのだ。それはつまり、殺気の少しも拓真に感じさせなかったということだ。」

「ふああ……」

「場が緊張に包まれていた時、拓真がなんとも場違いな欠伸を出しながら目を覚めました。」

「あれ？　カリム？」

「寝ぼけているのか、どこに騎士カリムがいるのか探しているらしい。魔力を感知するのではなく、視界に入れることで見つけようとしているあたり、本当に寝ていたようだ。」

「……ハア。拓真さん、今日は教会に行くのではないのですか？」

もはやカリムはこの事態がどの方向に向いてもいいと思ったらしく、のんきに今日の予定などを聞き始めた。

「あ、そうだった。じゃあ行くか」

と、まるで人質に取られていることを理解していないかのような口ぶり。

「てめえ、分かってんのか!？」

もはや犯人たちもこの状態が自分たちに有利な状況なのか、そうではないのかが分からなくって来ていた。

「そーいやおっさん、俺忙しいからもう行くね」

そういつて拓真は腕をふりほどいて普通に歩き始めた。

その堂々とした様は、その場にいた者に何が起きたのかを理解させるのに数秒を要した。

そしていち早く我に返った武装隊の指揮官が叫ぶ。

「と、捕えろ！」

その言葉にあわてて武装隊が包囲網を締め、事件は終幕を迎えることになった。

「ここが教会……か。聖王の聖遺物が盗まれたんだって？」

「……はい」

齒がゆそうにカリムが言う。

聖王教会の関係者としてはあまりいい思いのしない事件なのだろう。とにかくこれでヴィヴィオ生誕フラグが立ったわけだ。

戦闘機人事件がいつに始まるかは忘れたが、まだ起きていない以上はこれから起きる事件なのだろう。

「となると……接触を図った方がいいか」

そういえば悲劇って戦闘機人事件のことか？

この間は空港の火災事件のことだと思ってたけど。

なんにしてもゼストの部隊とは関わりを持っておいた方がいいだろう。

いつ事件が起きるのか分からないしな。

「カリム、さっきからシスター・シャツハの視線が痛いんだが」

「それならお相手してあげてください」

それは無理だというものだけだな。

最近じゃ手加減が……いや、あれでもやってみるか。

「シスター、やろうか」

そう言って訓練場に赴く。

この戦闘マニアにも困ったものだ。

シグナムもそうだったけど。

「では御覧に入れよう。最近習得した魔法だ」

そう言って発動させる魔法は影魔法。

闇属性に属し、脱げ女、カゲタロウが使っていた魔法。手加減するにはちょうどいい魔法だろう。

「千の影で編まれた——」

などと、適当にかっこよさげなものを言ってみる。

そして数分後、影を操るのを止めて闇の魔法に切り替える。

「そして次に御覧に入れるは吸血鬼が……止めた。言っても分からないしな」

野菜小僧と違って雷ではなく、光の精霊化をする。

「速さとはすなわち重さ。光の速さで——」

などと、某大将のように言ってみる。

その一撃でシスターは沈む。

……まあとにかく早く終わって良かった。

これから考えるべきはゼスト部隊のことだ。

シスターのおかげで体もいい感じにほぐれてきたし、ゼストに会いに行ってみるかな。

ということでは今日はゼスト・グランガイツさんの部隊にお邪魔しています。

この部隊にも脳筋っぽいのが多いです。

ぶっちゃけ今は訓練場でゼスト・グランガイツ、クイント・ナカジマ、メガーヌ・アルビーノと相対しています。

どうやらメガーヌさんのお腹の中にはルーテシア嬢がいらないみたいなので、戦闘機人事件はもうすぐ後のようです。

……あまりに予想外の状況が重なっているから丁寧語になってしまった。

今日はシスターとの戦闘で疲れたしな。

「アー……悪いですけど今日は疲れてるから一瞬で終わらせてもらいます。“百式観音 一の手”」

手を合わせて感謝する。

そして三人が崩れ落ち……あれ？

「凄いですね、まさか持ちこたえるとは思いませんでしたよ」

クロノに使ったときと同じ威力とは言え、ゼスト・グランガイツは持ちこたえて見せた。

「……ふっ、正直、立って、いるのが、やっとだがな」

それはそうだろう。

いくらバリアジャケットを着ているとはいえ、意識をしっかりと持っていていられたらこちらが困る。

「じゃあ、またあとでゼストさんの意識が覚醒した時にお話ししましょう」

「……分かった」

そう言ってゼストも崩れ落ちる。

武人だからなのか、無駄にかっこいい倒れ方であったとここに記す。それにしても……ここの部隊に来てから知ったことだが、なのはもフェイトもまだ訓練校に通ってるくせに既に有名のようだ。

なのはが白い悪魔として、フェイトが金色の夜叉として。

……なのはのことはまあ、分からないでもないが、フェイトまでそんな二つ名で呼ばれるとは思いもなかった。

いや、予想しなかったわけではない。

なぜならなのはもフェイトも俺と茶々丸のしごきで既になりのレベルまで到達しているからな。

KY野郎なんか目じゃない。

二人とももうSランク魔導師だからな。

第九話　そしてA，S編終了（後書き）

誤字脱字等は、暇を見つけた時に一気に直したいと思います。
もうひとつの方にも足を運んで（？）いただけたら幸いです。

第十話 やってしまった……（前書き）

S t S 編までの埋め合わせに書いていたらこんなことに……

第十話 やってしまった……

「ふう……」

溜息をつくも、状況が改善する訳ではない。

いや、むしろ状況は悪いという訳ではない。

完全に原作からは外れ、なのはが12歳にして航空戦技教導隊に入り、フェイトは執務官、はやてに到っては闇の書の罪もないので既に上級キャリア試験に合格してエリートのを道を進んでいる。

すずかとアリサは家を継ぐため勉強に励んでいるし、アリシアはデバースマスターになった。

俺も努力が功を奏して最強手としての力を完全に取り戻し、裏の世界のことに關しては順風満帆そのものだ。

戦闘機人事件も阻止したことを考えれば完璧と言っても良い。

——そう、裏に關しては。

俺が今悩んでいるのは表の、つまりは学校生活などといった日常のことに關してだ。

「何故、こうなった」

いや、考えなくとも分かっている。

全ては俺がやったことだ。

原作では女子中学だったはずの聖祥中が共学となっているのは、そして理事長兼校長が茶々丸になっているのは。

しかし理由というか、言い訳というか、原因というかはある。

茶々丸に何かを言われた時に考えなしに返事をしてしまったのだ。

……あれ？ 俺のせいじゃなくて茶々丸のせいだよな。

ま、まあそんなことはどうでも良い。

重要なのはそう、俺がなのは達と再び同じ学校に通うということだ。それはつまり、これから三年間、俺が再び殺気を浴び続けることを意味する。

正直、あの視線を毎日喰らうのはつらい。

仲にはゼスト級の殺気もあった。

小学生のくせに末恐ろしい奴らだと思ったものだ。

「マスター、あまり悩みすぎると禿げます」

と、紅茶を持ってきたティーカップを置きながら茶々丸がそう言う。確かに、もうここまで来たら受け入れてしまった方が楽かもしれない。

それに今は中学入学までの長期休暇。

せっかくの休みなのだから満喫しなくては勿体ない。

いや、そう言うものの、実際には十分楽しんでいる。

いつものメンバーで俺の別荘に旅行しているのだから。

そして今はプールにいる。

正直眼福ものだ。

まだ六人とも二次性徴を迎えていないためか、膨らむべき所が膨らんでいないが、それを差し引いても、六人とも絵になる美しさ——いや、可愛らしさだ。

「マスター、何を呆けておられるのですか？」

「いや、何か忘れてるような気がしてな」

あと、残っている事件といえばティアナの兄のことと、ヴァイスのこと。

……だけのはずだと思っていたんだが、どうにもしつくりと来ない。何かもう一つ大事なことが残っているような。

——ま、何か起きれば思いですか。

「マスター、そう言えば明日で春休みが終わりですが」

「じゃ、みんなに言って別荘から出る準備を進めておいてくれ。俺は何か別のことをやってるから」

とは言ったものの、別段することなんてないんだよな。
ヴォルケンリッターは今までの精算とか言って局の手伝いに言ってるから暇な奴がいないし。

「んじゃまあ、送りに行ってくるわ」

「了解しました。では私は夕御飯の買い出しに行ってきます」

ノエルさんがどうしても抜けられない用事があるらしく、すずかは俺が送っていくことになった。

何故だか送ろうとしている時に背中に冷たいものを感じたが……気

のせいだと思っておこう。

すずかが苦笑いしていたのが気になるが。

それにしてもやっぱり何かを思い出せて無いんだよなあ。

キキーンドンッ!!

「よし、連れていけ!!」

んー……何を思い出せて無いんだろう。

多分そんなに重要なことじゃないんだと思うけど。

――side すずか

どうしよう……拓真君にもらった猫のルナの紙は置いてきちゃったし。

それにこの人たちはただの誘拐犯じゃない。

夜の一族関連の人たちだ。

もしかしたらお姉ちゃん達の用事ってこのことだったのかも。

私にこの人たちから逃げる力はないし……それに拓真君に私の秘密がばれたら皆に嫌われるかも。

――side 拓真

「そうか!!」

エリオとキャロのことか。

そう言えばこちら辺ではもう既に産まれてたはずだ。

エリオは研究施設に預けられて、キャロはそのうち村から追い出されるはずだ。

「はっ！ 坊主、何の真似だ？」

あれ？

いつの間にか変な場所にいるし、縛られてる。

しかもすずかだけじゃなくて変な奴らもいるし。

「なあ、おっさんたち誰？」

みた感じ人間じゃないのは分かるけど……。

「教えてやろうか？ 俺はその月村の嬢ちゃんと同じ「だめ!!」
吸血鬼っていう化け物だよ」

「へえ」

で？

っていうかあんたらは吸血鬼じゃないだろうが。

ただ単に人間が少し変化してそれが受け継がれてるだけだろうに。
たとえ真相だって言っても血が薄れて言ってるからそこまで脅威でもないし。

「あ、そうだすずか、レナは？」

あれ？

すずかが泣いてるし。

もしかしてそんなに知られるのが怖かったのか？

「ヒグッ……グスッ」

「くはは、無駄だ。たとえば御神の剣士を呼んだ所で、今ここには十体の自動人形がいる」

自動人形が。

確かノエルさんとファリンさんも人間とは違ったはずだからそんなものか？

それなら茶々丸でも呼んでみるかな？

「なあおっさん。俺の家もかなりの金持ちだけど、要求とかしなくて良いの？」

「……小僧、何を考えている」

あれ？

このおっさんただのモブキャラだと思ってたのにそれなりに頭良いのか？

「まあいい。電話してやろう。おい、小僧の携帯をよこせ」

そう言ってから受け取った携帯を、おっさんは少しボタンを押してから茶々丸に電話をかける。

「――今から声を聞かせてやろう」

どんな話があったのか、俺に携帯が渡されて茶々丸と話することになる。

『マスター、何を遊んでおられるのですか』

しかも第一声がそれか。

少しは心配してくれても……いや、土台無理な話か。

俺相手に心配するなんて茶々丸クラスの敵が最低でも億は欲しいところだからな。

『茶々丸、来い。それから全て壊さずに一体だけ捕獲しておけ』

『了解しました。三十秒でそちらに向かいます』

そのやりとりをわずか二秒で終えて、男の手に携帯が戻る。

「ほう、なかなか勇敢なようだな、小僧。だが言わなかったか？
外には自動人形がいると」

「おっさん、何を勘違いしてるか知らないけど、一つ教えといてやるよ。俺があんたらにおとなしく捕まってるのは手加減が難しいから。そして今からくるのは自動人形だ」

「なっ！ 自動人形が月村家以外にいるだと！？ そんな話は聞いてないぞ！」

そりゃそうでしょう。

俺が作ったんだし。

かなりの魔改造してあるけど。

ドンッ！！

かなりの轟音の後で扉が開き、ドラグーンシステムを展開した茶々丸が入ってくる。

それを見る前に男は既に俺の背後に回ってナイフを突き付けていた。

「う、動くな！」

「マスター、私は夕飯の買い物があるので。それから月村家には連絡を入れておきましたのでもうそろそろで着くはずです。では失礼します」

流石の判断だ。

やるだけやってから俺を置いて帰りやがった。

しかも三十秒で来るって言ってたのに、二十秒で着いて、十秒で殲滅しやがった。

引き際も見事なものだ。

「その子を離さない！」

しかもすぐに忍さんと、恭也さん、メイドの二人が着いた。
すずかは既にファリンさんの後ろか。

「はっ！ 誰が離すものか。少しでもそこを動いてみやがれ、この
餓鬼の首が飛ぶぞ？」

どうしようか……出るタイミングを完全に逃した。

別に普通に解いても良いんだけど……それじゃあつまらないか。

「恭也さん、パス！」

そう言って俺は一本背負いでおっさんを恭也さんの方に投げる。

恭也さんは瞬時に反応してくれて、おっさんを小太刀で峰打ちにする。

「で？」

すずかが忍さんに、茶々丸に助けてもらったことを話してから、俺
は自動人形二体と、御神の剣士、夜の一族に警戒度マックスでみ
られている。

「で、と言われてもすずかの話した通りなんですけどね」

「そのことじゃないわよ。私とすずか、ノエルたちが人間じゃないことがわかったのに驚かないのは何でかしら？」

「あ、そのことか。んー、まあ、何と言うか俺も人間じゃないというか」

「っていうか、不老不死とか、細胞の活性とかいろいろと酷似点はあるけど、そもそもランクが違いすぎるしな。」

「どういふことかしら？ このあたりに私たち以外に裏関係の者はいないはずだけど」

「はてさて、どうすれば効率的に納得してもらえるのか……。」

「すずか、ルナを出してくれ」

「でも……」

「良いよ。ここにいる人たちまでなら教えても大丈夫だから」

「……分かった。ルナ」

すずかが声をかけながら紙を放ると、式神が現れる。

その様子に忍さん、恭也さん、ノエルさんと驚いているようだ。ファリンさんは表情が読めないけど。

「すずか、これは？」

「えっと……拓真君にもらったの」

「とまあ、そう言うことです。つまりは忍さんが言う“裏”よりもさらに“裏”の世界の住人な訳です」

もつとも厳密に言えば人ではないから、住人とは言えないが。

「もういいわ。あなたに常識は通用しないということね。それなら拓真君にはお願いがあるのだけど。私たち夜の一族は秘密を知られたら記憶を消すか、契約を結ばなければならないの」

「アー……それ、もうちょつと待ってもらって良いですか？　もう少ししたら茶々丸が皆を連れてくると思うので」

どうせならいっぺんに皆が知った方が良いしな。

「それにすずか、化け物だからといってあいつらがお前を嫌いになるわけがないだろ？」

と、そこにちょうど良くインターホンの音がなって、ファリンさんが門まで迎えに行く。

相変わらず恭也さんとノエルさんは俺のことを警戒しているみたいだが。

「お二人ともそんなに警戒しても意味ないですよ。俺がやろうと思ったらその瞬間に終わりますから」

その言葉に恭也さんの殺気が一気に膨れ上がる。

確かに御神の剣士と、大層な名が付いているだけあって、実力はそこそこにあるみたいだ。

だけど……なのはにも勝てないだろう。

なのはが恭也さんを相手にするなら、飛び上がってからひたすら砲撃を打てばいい。

フェイトの場合はそこまで射撃や砲撃が得意じゃないから少し時間がかかるかも知れないが。

そんな呑気な事を考えているうちに、なのは達に対する説明は終わってしまっていたようで、すずかたちが泣きながら抱き合っていた。

「それで？ 約束はして貰えるのかしら？」

「それ自体はどうでもいいんですよね。それにお二人は吸血鬼じゃないでしょうに」

「何を言っているのかしら？ 確かに私たちは夜の一族だから正確には吸血鬼という訳ではないでしょうけど」

「俺も正確にはそうではないですけど、俺の方が吸血鬼に近いですね」

そう言いながら俺は取りだしたナイフで左手の指を切る。

ナイフを出した瞬間に恭也さんが反応、切って血が出た瞬間にほかの人たちが反応したが無視しておく。

「分かったでしょう？ かなりの高速度で治るんですよ。それに俺は死なないですしね」

結局のところ、約定みたいなものは結んだけど、かなり意味がないだろう。

それに秘匿すべき存在としては俺の方が上だ。

「アルハザード……」

まさか地球のことだったとは。

昨日石油を掘りにアラビアまで行ってきたら、まさかの魔力反応を
ゲットしたのでたどってみたら、“アル・アジフ”だった。

それも原典の。

著者はアブドル・アルハズラット。

崩して読んでみれば――アルハザード。

まさか魔法の出発点が地球だったとは。

しかもそのあとで調べてみたら、“アル・アジフ”って“ネクロノ
ミコン”のことだったし。

死者蘇生の魔法は流石に書いて無かったが、ミッドやベルカに流れ
ている“魔導”ではなく、“魔法”が書かれた書物だった。

時間の経過を遅らせる魔法とか、予言に関する魔法だったり、まさ
かの真相の吸血鬼になるための儀式魔法だったり……。

正直、一番驚いたのは夜の一族が儀式魔法で真相になるためのそれ
が失敗した結果であったことだ。

そう言えばジェイル・スカリエッティはアルハザードに存在した人
物から遺伝子が取られていたはずだ。

ということはあるって……アラブ人？

いやいや、まさかそんなわけはないか。

あいつは紫の毛髪だしな。

ってことはあの三脳ミソがどっかの世界をアルハザードだと間違えたんだろう。

多分その世界はスカリエッティみたいなのが沢山いる星で……止めよう。

そんな星はあってほしくない所だ。

というか、そんな奴らばかりだからその世界は滅んだのだろう。かなりの発展を遂げてから。

そしてこの魔導書——いや、魔法書とでもいった方が良いでしょうか——は、俺には特に必要ない。

こんな書物が無くても、困ったら何かを創れば良いわけだし。

まあ、せっかくの掘り出しものだからもらっておくけど。

ついでに最近は分割思考を鍛えている。

今までは適当にやってたけど、最近になって漸く分割思考が仕えることに気がついた。

影分身で全てがまかなえていたから、一人で複数の思考を使う必要もないし、魔法を使うにしても多数のものを使うのではなく、一つのでかいものを使えばそれで事足りた。

「それにしても……」

やはり茶々丸が校長で良かった。

話がわずか三分もかからずに終わった。

最後に「長い話しが嫌いなので終わります」と言ったところでは歓

声も上がったくらいだからな。

そして何の陰謀なのか——いや、絶対に茶々丸がやったことなのだろうが——俺となのは達六人は同じクラスになった。

一学年約三十人三クラスなので、俺たちが全員同じクラスになる確率は2187分の1だ。

流石に宝くじの一等が当たる確率よりは高いが、それにしても数字だけみるとほとんど天文学的確率だ。

しかも何の導きなのか、隣の席はなのはだし。

しかもそれが理由でほかのメンバーがこの席に集まってくるから、男の視線が半端ない。

もはや視線だけで人が殺せそうな勢いだ。

……もう寝よ。

この状況は精神的に疲れる。

——ガラガラガラ

「席に付け。……よろしい。俺が今日からこのクラスを担当することになったゼスト・グランガイツだ」

——何いいいいいいいい！！！！！！？

バツと音が出そうなほどの勢いで顔をふりあげると、そこにはついこの間戦闘機人事件で会った、地上唯一のストライカー級魔導師がいた。

「趣味は鍛錬、教える科目は体育だ」

そりゃまあゼストさんが体育以外に何か教えるなんてできないだろうし。

「ちなみに結婚はしている」

と、顔をほころばせながら指輪をちらつかせる……って何!?

「結婚だとオオオオ!?!」

誰と!?

「そこ、出席番号14番、真柄。うるさいぞ。質問ならあとで受け付けるから話を聞いている」

……この際話で聞いてやろうか?

いくら脳筋だとは言っても魔導師のはしくれなんだから、分割思考くらいはできるだろう。

……というか、管理局はどうした!?

あんたが抜けたらかなりの痛手だろう!

今頃レジアスあたりが泣いてるに違いない。

「で?」

「フツ。早まるな」

なんかこのおっさん無駄にかっこいいし。
というか、なのはもフェイトもゼストのことを知らなかったらしい。
流石にはやては知ってたみたいだけど。

「教えてやろう……結婚したんだ」

「だからさっきも聞いたって言ってんだろ!? ……って、ちょっと待て、相手は誰だ?」

「聞きたいか? 教えてやろう。……メガーヌだ。二人で話し合ってたな、良い機会だからということで一線を退いたのだ」

待て待てまで!

百歩譲ってメガーヌさんまでは良いとしても、“良い機会”だと?
……まさか。

「おい、おっさん。まさか……出来ちゃったのか?」

「写真を見るか?」

そう言ってゼストが返事もしていないのに写真を見せてくる。
そこに映っているのは二歳ぐらいの女の子。

「ルーテシアだ」

やっぱりそう言うことかアアアアア!!!

「……ってことはメガーヌさんも来てるのか?」

「ああ、茶々丸さんの仲介で家を買ってな。そこに三人で住んでい
る」

まあ、ゼストとメガーヌさんだったら金もたんまりあるだろうから
不思議ではないけど。

というか、やっぱりルーテシアはゼストが父親だったのか。

原作でも父親が分からずじまいだったからそうなんじゃないかと思
ってたけど。

というか原作崩壊どころじゃないな。

ゼスト、メガーヌさん、ルーテシアの三人が地球に住むことになる
なんて。

これは流石に予想できなかった。

というか、このまま行ったらJS事件も起きないんじゃないか？

「残念だがゆっくりはできないと思うぞ？ シグナムとかシグナム
とかシグナムとかいるし」

確実に模擬戦を申し込まれる。

あれは戦闘狂だしな。

「だからこそだ。体を動かしたいからな。それに彼女は良い騎士だ」

やっぱりこのおっさんは脳筋だったか。

しかし……このおっさんがここにいてことは地上で有力なのは
クイントさんだけか。

彼女も大変だな。

……そう思っていた時期が俺にもありました。

何でクイントさんも引退してるんだよ!?

しかも理由がゼストとメガーヌさんが止めたからって……これで良いのか？ 管理局は。

……多分止められなかったんだろうな。

それに止めようと苦労したのはゲンヤさんなんだろう。

まだ若いはずなのに、ほとんど原作通りの白髪だったからな。

……今度精の付く物をあげよう。
うん。

第十話 やってしまった……（後書き）

なんでこんな展開になったんだろう……
しかもヒロインとか言ってたのに一向に恋愛シーンがないし。

第十一話 早すぎてベタすぎる展開（前書き）

つなぎです。

第十一話 早すぎてベタすぎる展開

「で？ 今日は何だったけ？」

「淫獣の無限書庫司書長就任のパーティーです、マスター」

ユーノも大変なことだ。

そんな頑張ったってなのはが振り向いてくれる様子は無いのに。

しかも茶々丸からは今後一切“淫獣”以外の呼び名で呼ばれることは無いだろうし。

本当にあいつが存在してた意味ってなのはにレイジングハートを渡すことだけだったな。

って言うか何で俺がこんなパーティーに参加しなくちゃいけないんだか。

「マスター、別に参加しなくてもいいのでは？」

「え？ そうなの？」

俺はてっきり参加するものだ。

「マスターは特務官としての身分を公にしておられないのですので」

「じゃ、帰るか」

「そうですね、帰りましょう」

「イタッ……何だよ」

「寝ちゃダメだよ？」

中学の授業なんか聞かなくても分かるからたるいんだよな。
しかもやること無くなったから暇だし。

「むう……そんなこと言っちゃダメだよ？　今はみんなで話しあ
ってるんだから」

いや、何も言っていないような気が……っていうか授業じゃなかった
のか。

今は……修学旅行についてだと？

「なのは、修学旅行ってどこに行くんだ？」

「京都だよ」

へえ。

って言うか何なんだこの班編成。

いつものメンバーって……いくら女子の方が人数が多いっていつ
てもこれはやりすぎだろう。

男子一人に女子六人って。

しかも担任がゼストだからほとんど適当だし。

……あのおっさんまた念話でメガーヌさんと話してやがる。
少しは仕事しろよ。

寝てた俺がいうことでもないけど。

「それで？ あんたはどこか行きたい所とかあるの？」

「いや、アリサ。俺に聞くんじゃなくてフェイトとアリシアに聞けよ」

というか京都にはネギまの世界の時に住んでたからな。

……まあ、何百年も昔のことだけど。

「うーんとねー、じゃあ私おいしいものが食べたい！」

そこはせめてお寺に行きたいとかいってほしかったです、アリシアさん。

というかおいしいものなんて茶々丸に頼んで作ってもらえば一発だろうに。

「じゃあ、俺は寝るから終わったら起こしてくれ」

そう言うってから寝る体制に入ったところで、なのはに起こされる。

「ダメなの！」

「無駄よなのは。そいつがそうなら起きないことはあんたが一番分かってるでしょ？」

「で、でも朝はちゃんと起きてくれるよ？」

「なのはちゃん？ まさか毎朝起こしに行ってるの？」

「え？ そうだよ、すずかちゃん。だって茶々丸さんに頼まれてるもん」

「……はやて？」

「凄いやろ？なのはちゃん小学生のころから毎朝一度も欠かしたことが無いんやで。これが幼馴染の王道や！ いやー、見てるこっちが恥ずかしくなるほどのラブラブぶり……でも無いんやよなあ、兄ちゃんは気付いて無いみたいやし」

「え？なのはって拓真が好きだったの！？」

「フェイト、今さらでしょ？」

「そんな……三年生から一緒にいるのに気付かなかった」

「何でもんなしてそんなこと言ってるの！」

「」「え？ 違うの？」「」

「なのはちゃん、みんなの言うとおりだよ」

「すずかちゃんまで」

「なのは……頑張ってるね！」

「うう……フェイトちゃんもなの？」

「まあ、ええ。それよりも作戦会議や。何としてもなのはちゃんにはこの修学旅行で兄ちゃんをゲットしてもらわなあかん。このままやと兄ちゃんがニートになってまうからな」

「やってきました、京都」

とりあえず意味もなく言ってみる。

そう言えば、この世界で京都に来るのは初めてだったりすることに、ついこの間気付いた。

「なのは……何で俺達二人しかいないんだ？」

そして気付いた時には二人きりになっていた……俺に気付かれないようにするとはなかなか大したものだ。

「えつと……その……」

何で顔を赤くしてるんだ？

「熱でもあるのか？」

やることは一つ。

額どうしを当てて熱があるかどうかを確かめる。

少し熱いみたいだけど……。

「少し熱っばいな。休んだ方がいい。……あそこに座るか」

ちょうど神社の中に設置されていたベンチに座って休むことにする。
なのはが休んでいる間にほかのメンバーを探そうと思って“円”を
使ってみたが、どうやらここからそう離れていない場所に六人であ
るようだ。

……六人ってあと一人は誰だ？

これは……茶々丸？ 何でこんなところにいるんだ？

「拓真君、あのね？」

「ん？」

「や、やっぱりなんでも無いの！」

「ん、まあ元気そうで何よりだ」

熱も無かったみたいだ。

そう思って安心すると、体の疲れが一気に襲ってきて、思わず欠伸
をかいてしまう。

「……あのね？ 膝、使う？」

「んー、じゃ、お言葉に甘えて」

流石に女の子の膝だ。
柔らかいし、良い匂いがする。
そんな当たり前のことを考えていたら眠気が襲ってきて……。

――side 茶々丸

「どうやら二人でいることに気がついたようです」

マスターを監視していることを気付かれないようにするのも一苦労です。

この日のために急いで人工衛星を作り上げた甲斐がありました。

「うっわ、兄ちゃんもべたなことするなあ」

どうやらマスターがなのはさんの額に御自身の額を当てて熱を測っているようです。

大方顔を赤くしているのを熱があると勘違いしたのでしょう。

流石はマスター、定石どおりに行動してくれます。

それにしても……マスターはいつなのはさんのお気持ちに気付かれ

るのでしょうか。

流石にこうも長い間、お二人を見ているとじれったくて仕方ありません。

第一、毎朝起こしに来てくれているのですから普通は気付くものでしょうに。

「おお！ 膝枕や！」

な、何と！

まさかなのはさんがそこまで大胆になっているとは。

しかもマスターが躊躇もせずに膝枕で寝てしまうとは。

これはもうゴールが近いのでしょうか。

「はやてさん、作戦を第二段階に移しても良いのではないのでしょうか」

「そうやなあ、これやったら問題は……あるな。問題は兄ちゃんがどう思ってるかや。今の反応を見る限りでも、なのはちゃんを女の子として見てないみたいやし。やっぱり幼馴染は一番成就しにくいルートなんやなあ」

そんな風に感心している場合ではありません。

本作戦はどうにかして成功させなければならぬのですから。

「では第二段階を飛ばして、第三段階に？」

「そやなあ、アリサちゃんは思う？」

「そうね……拓真に色仕掛けみたいなことをしかけるべきね」

「ですが具体的にどのようなことをなさるのでしょうか。マスターは朝なのはさんが布団に忍びこんでいても、最近は少ししか焦らなくなってきましたよ?」

「ふっ、そのあたりは大丈夫や。今日泊る宿は旅館やからな、つまりは浴衣っちゅうことや!」

何故なのでしょう。

はやてさんの背後に光が見えたような気がしました。ですが、それは非常に良い案だと言えるでしょう。

検索結果によれば、湯上がりの浴衣姿は90%以上の確率で女性のことを意識するようですから。

「はやてさん、第四段階はどうしますか?」

「アレは最終手段やな。流石にまずいやろ」

そうですか……少量でかなりの効果が望めるものを用意したのです
が。

一応準備はしておきましょう。

「あ!　なのはちゃんが……」

すずかさんが声をあげていたのでそちらを覗き込んでみると、どうやらなのはさんがマスターにキスをしようとしているようです。

「きゃー!　なのはちゃん大胆!」

まさかそんな行動に出るとは……流石なのはさん。
私の予想を良い意味で裏切ってくれます。

これは永久保存ですね。
あとで観賞会も開きましょう。

――side 拓真

「ん……」

そう言えばなのはに膝枕されてたんだっけな。
あんまりに気持ち良かったから本気で寝たか。

「ん？ 何か唇が湿ってるような……なのは、何か知らないか？」

「え！？ し、知らないよ！？」

その割には焦ってるな。

目も合わせようとしないうし。

まあ、何か変なことだったり殺気があったりしたら起きるはずだから気にしなくても大丈夫か。

「なのは、帰るか」

もう時間も時間だしな。

「ん？　なのはやっぱり熱でもあるんじゃないか？　顔が赤いけど」

「そ、そんなこと無いよ！？」

何で焦ってんだか……。

仕事のしすぎか？

やっぱり戦技教導官は忙しいのか。

それにいつの間にかエースオブエースにもなってたしな。

やっぱり管理局から引っ張りだこなんだろう。

「♪」

「何がそんなに嬉しいんだ？」

「うーん……秘密！」

ふむ……手を見てるってことは手をつないでるのがそんなに嬉しいのか？

そんなの小学生よりも前からそうだろうに。

今更になって何でそんなに嬉しいそうなのか。

やっぱり女の子は分かんないな。

この世界でも俺にすら分かんないものって言ったら女心くらいだな。

「温泉？」

そんなものがあるなんて聞いてなかったな。
っていうか京都に温泉なんてあったのか？

火山は……無かったと思うけど。

「――そう言う訳で、食事は7時からになる。それまでに各自風呂に入っておくように」

ゼストもなんか担任が様になってきてるし。

やっぱり一年もやってたら慣れるか。

それに意外と人気あるしな。

顔は言うことなくイケメンだし、運動も出来る。

魔導師だから数学系も出来るってことで女子にはもててるし、男子には“漢”として崇められてる。

まあ、メガーヌさんがきれいだから分らないでもないけど。

いつの間にか茶々丸、桃子さん、メガーヌさんを合わせて海鳴りの七不思議のうちのひとつに数えられてるし。

茶々丸は除くとしても、二人ともうそろそろ良い年何だけどな。

どうやってあんな若さを保ってるのか。

不思議なものだ。

「にしても意外と広いところだな」

京都にこんな宿があったなんてな。

流石に高い金を使っているだけはある。

「にしても広すぎて迷うとは……“円”とか、魔力、気を負えば分かるだろうけど」

「あ、拓真君」

「なのはか、丁度よかった。迷ったから食事しに行く場所に連れてつてくれ」

浴衣か……良いものだ。

流石に湯上がりの浴衣姿はこう、グッとくるものがあるな。

日本人の心を掴んでくれる。

六人で並んだらかなりの絵になるだろうな。

……その代わりにかなりのの、いや男全員から睨まれるんだろうけど。

「……何でこうなった」

かなりの悲惨な状況だ。

阿鼻叫喚と言ってもいいぐらいだ。

「拓真君、楽しんれる？」

「なのはに酒のませたやつ誰だー!」

ゼストも止めとけよ。

ミッドチルダでは成人の年齢だから合法だって言うのは分かるけど。フェイトとすずかはおろおろしてるけど……他の四人は楽しんでるし。

っていうか酒のませたの確実にはやてだな。

「むゝ。拓真君は、はやてちゃんのことを好きらのゝ?」

「何でそんなことになるんだよ」

完璧に酔ってるし。

収拾つかなくなるんじゃないか?

「うゝらって、さっきからはやてちゃんのところばっかり見れるんだもん」

「へえー、兄ちゃんは私のことが好きなんか?」

「はやてもそこで悪乗りすんな!」

「むゝ! そうらの!?」

「違うって言うってんだろ!」

酔ったやつの相手がこんなに疲れるなんてな。

今まで相手にしたこと無かったから分からなかったが。

「じゃあそれが好きらの!?」

「何でそう言う話に発展するんだ！」

「うっわ、修羅場やな」

「……そうせた張本人が何言ってやがる」

「むゝ！ またはやてちゃんのこと見れる！　なのはは拓真君のころが好きなんらよ？」

はい？

待て待て待て、フラグは確かにあったかもしれないがそれにしてもこんなところで言うことじゃないだろ。

「……拓真君は？」

上目使いと涙目に、酒を飲んでるから頬が上気してるし……これは卑怯だろ。

「……パスは？」

「らめ！」

「うわっ！　分かったから体重かけるな！」

危ないな。

後ろに物が無かったから良かったけど。

「ろうらの？」

もはや何言ってるか分からないし。

多分「どうなの」って言いたいんだと思うけど。

……どうなのって言われてもなあ、やぶさかではないけど、なのはも酔ってることだしなあ。

「って何で泣くんだよ!？」

「らって……らって……」

あーもう!

「……これで良いか？」

「! うん。えへへ」

はあ、泣きそうだからキスしてやったら収まったけど……。

はやてとアリサとアリシアはにやにやしてたし。

すずかとフェイトは顔を真っ赤にしてたけど。

やってる方も恥ずかしいんだからこっちの身にもなってほしいものだ。

しかも茶々丸に至っては録画してたみたいだし。

俺、海鳴に帰ったら士郎さんと恭也さんに殺されるかもな……死な

ないけど。

とりあえず今日の班行動どうしよう。

……なのはと顔合わせるの、気まず過ぎる。

にしても……二泊三日だから今日一日続くってことか？

しかも御丁寧に肝試しっぽいイベントがあったような気がするし。

「はあ……」

「何溜息ついてんのよ」

「アリサか。今日一日のことを思ってたらな……それより他の奴らはどうしたんだ？」

「なのはが行きたくないっていうから説得してるのよ。それで私が先生にそれを伝えるに行くわけ……ってあんた落ち込んでるの？」

そりゃそうでしょ。

キスした相手が翌日に顔も会わせたくないって言ってるんですから。流石に俺でも凹むって。

「……俺、朝ご飯食べに行ってくる」

班がそろってから朝食だったけど、もういいか。

多分ゼストも分かってくれるだろう。

あいつは意外と物分かりの良い奴だし。

「飯が美味しい」

そんな言葉に全く意味はないが、とりあえず何かしないと暇すぎる。それに飯が美味しいのは当たり前だ。

茶々丸が飯のまずいところを選ぶはずがない。

「真柄……歯を食いしばれ」

は？

ってアブな！

「ゼストてめえいきなり何しやる！」

思わず“硬”で頬を防御してしまった。

いや、防御自体は悪いことじゃないけど。

「くっ、貴様そこは素直に殴られる所だろうが！」

「だから何でいきなり殴りかかって来てんだよ！」

「貴様、高町はどうした。姿が見えんぞ」

「アリサに聞いただろ？」

何言ってるんだ？　このおっさん。

「そんなことは知っている。だから高町はどうした、と聞いている。何故貴様はこんな所にいるのだ？　男なら惚れた女のそばにいてやるものだろうが！！」

何でこのおっさんはここまで熱いんだよ！

しかも何か俺が悪いことになってるし！？

大体そう言うことを何で大声で言うんだよ……。

おっさんがそういうことするから周りがざわつき始めたじゃねえか

よ。

「早く行かんか！」

「分かった、分かったからどなり散らすな」

仕方ない。

ここにいっても暇だし、周りからの視線が痛いしな。

もう今日中には広まるじゃねえかよ……あのおっさんめ。
帰ったらメガーヌさんにあること無いこと言ってやろう。

「にしても男子が女子に会いに行くのはまずいだろ……」

女子の部屋の前まで行くのもかなりの精神拷問だな。

さっきから道行く人に変な目で見られてるし。

どうすれば……あ！

念話使えば良いんじゃない。

暫く使ってなかったから忘れてた。

『はやて、はやて』

『兄ちゃん？ どないしたん？』

『なのはは？』

『アー……かなりの重症でなあ。……そうや、兄ちゃんこっち来て』

『すぐ傍まで来てるから迎えに来てくれ』

これで第一関門は突破だな。

次は……なのはにどうやって話しかけるか、か。
そのために来てるのにそれが関門か。

「兄ちゃん、ほんまに何とかして」

「……話せると思うか？」

「……気付かれんように話かける」

それで上手く行くのかよ……。

「逃げられたら？」

「抱いてでも、キスしてでも止めえ！　うちらも早くご飯食べたいんや！　大体兄ちゃんがあそこでキスしたりするから」

「お前とアリサが酒飲ませたからだろ！？」

「男なんやからグダグダ言わんの！　しっかりとやったことに責任持ち！」

丸投げかよ……確かに俺が悪かった所もあると思うけど。

『おい！ お前ら全員出て行くのかよ！』

『ほな、あとは頼んだからな。……何なら二時間ぐらい二人つきりにしてもええよ？』

『変なこと言っていないでとっとと出てけ！』

流石に俺も中学生には手出したりしねえよ。

大体修学旅行の最中に真昼間からそんなことをする奴なんていないだろうが。

それこそ退学ものだったのに……いや、茶々丸だから退学はないか。

にしてもさっきから凄い状態だな、これは。

布団の中にくるまって悶えてるし。

……先に結界張っとくか。

逃げられても困るしな。

「なの「にゃあああああ！」……いきなり逃げるのかよ」

やっぱり結界張つという良かったな。

「け、結界！？ レイジングハート！」

〈I c a n , t d o i t . 〉

「な、何で!？」

「お前は俺が張った結界を壊せると思ってるか」

何かこのセリフやられ役の奴みたいだな。

「うう……だ、ダメ！ それ以上こっち来ちゃダメ！！」

いや、それはかなり傷つくんですけど。

しかも最初みたいに布団にくるまってるし……本当に重症だな。
だが……舐めるな！

最近暇だったからギャルゲーをやってたんだ。

この手のことはどうすればいいかは分かってる。

まずは……布団を引っぺがして抱えるだな。

「にゃ！？ だ、ダメ！ 離して！」

「そんなに俺の事嫌いか？」

「うう……好き、だよ？」

クッ……思ったよりもダメージが大きいな。

まさか反撃を受けるとは。

この展開は予想してなかった。

「じゃあ、逃げるな」

だがしかし、俺は主人公だ。

それしきの事でくじけたりはしない。

「で、でも恥ずかしいもん」

グハッ！ HPが……クソッ、半分以上持って行かれた。

な、なかなかやるな、なのは奴。

まさかここまで攻撃力が高かったとは……今のはデイベインバスタークラスだったな。

だがしかし！

俺が培ってきた力を舐めるな！

ここは……やはりキスだな。

「……んむ。あ……」

「どうした？」

「……もう一回キスして？」

ガハッ！ HPを度外視した攻撃だと！？

しかも今のはスターライトブレイカークラス……。

ふっ……もう……ダメ……だ。

「あかん、兄ちゃん起きんで？」

「は、はやて、どうしよう……」

「大丈夫やフェイトちゃん。幸い兄ちゃんにも外傷は見当たらない

し、魔力も以上はなさそうやから」

「で、でも血が沢山出てるよ？」

「すずか、良く見なさい。鼻からしか出てないでしょ？ ただの鼻血よ」

「そやな、多分萌え死んだんやろ……あれは画面を通してもかなりの威力やったからな。それに幸せそうやし」

「それよりはやて、どうするー？ 早く起こした方が良いんじゃない？」

「そやな。兄ちゃん、起きい！」

「イタツ！ ……ん？ 確か俺は……」

「起きたんか。幸せそうに寝てたで」

「？ ああ、そういうことか。で？ なのはは？」

「……いじけとる」

「は？ 何で？」

「兄ちゃんがいけないんやで？ 女の子に「キスして」って言われたのに寝るんやから」

「……そうか」

「まあ、あの時のなのはちゃんがとんでもない破壊力を持ってたことは認めるで？　せやけど寝るのはダメや。はようお姫様のご機嫌とり？」

「なのは？」

こっち向いてくれないし……ある意味でさっきよりも厄介だな。しょうがないから俺が正面に回り込むか。

——プイッ

顔そむけられた……。かなりダメージがでかいな。

「なのはさん？」

「……キスしてくれなかった」

いやいや、させないようにしたのはお前だからな？　って言っても聞いてくれないんだらうけど。しかも本腰入れていじけてるっぽいし。

頑固だからなあ、こうなった時が一番面倒くさい。

「じゃあキスしたら許してくれるか？」

「（コクッ）」

何か単純だな。

ま、そっちの方が俺としては助かるけど。

「えへへ。（ギュッ）」

「っと、抱きつくな」

「ダメ？」

「いいえ、全然問題ありません！」

これに弱いな、俺。

というか皆見てるんだよ。

例によって例のごとくフェイトとすずかは顔を真っ赤にしておろしてるだけだし、残りの三人はにやにやしてるし。

『はやて、どうにかしてくれ』

『お邪魔見たいやから出てこうか？』

『冗談言ってないで……』

というか既に昼近いんだけどな……今日は午後からは班行動じゃなくて全体行動だったはずだし。

二条城だったか、御所だったかを見学に行くはずだ。

「なのは、そろそろ出発しないと間に合わないから」

「イヤ」

イヤってそれはこっちが困るんですけど……。

しかもそんなに可愛く言われたら許しそうになるだろうが。

「なのは、頼むから」

「むうー……分かったの」

うん、物分かりの良い子は……って腕に抱きつくのかよ。

さて、京都めぐりも終わって今は夕食時。
夕食がすんだら肝試しをやるらしい。

基本は班行動なんだけど、別に好きな人と行っても良いらしい。
とは言え、俺の年から共学になったので、女子の方が男子よりも人数が多い。

そして男子のほとんどが六人の事を狙っているわけで……まあ、な

のは狙いだっただ奴は涙をのんでるけど。

「あの、真柄さん」

「あ？」

「何や？」

「？」

「うん？」

とまあ、話しかけてきた男子に一斉に反応する俺達。
五人とも苗字が同じだからこういうときは非常に困る。
ちなみに上から俺、はやて、フェイト、アリシアだ。

「あ……えっとフェイトさんに話があるんだけど」

「？ 良いよ」

ふむ。

フェイトは人気があるらしい。

それも当然と言えるけど。

あのなりで天然、なおかつ運動も出来るし、もちろん頭も良いからな。

まあ、三人とも嫁に出す気はないが。

俺を越えろとは言わないが、せめてヴォルケンリッターぐらいは越えて欲しいものだ。

出ないと守ることすらできない。

特にフェイトとかはやてを守るのなんて、それこそ表の世界で最強

クラスでないと難しい。

空を飛べるっていうのはかなりのアドバンテージだからな。

「お帰り、フェイトちゃん。どうやった？」

「何か肝試しを一緒に行かないか、って言われたんだけど私は、はやて達と一緒に行くから断ってきたよ」

「……ドンマイだな、あいつ」

フェイトはそれが何を意味してるのか分かってないっぽいし。

しかしやっぱりフェイトが一番モテルんだな。

それに次いでるのがすずか、それであれば順不同ではやて、アリシア、アリサか。

全員ファンクラブまであるしな……恐ろしいもんだ。

しかもフェイト、アリシア、はやてに至っては次元世界でファンクラブが存在してるし。

特にフェイトとかはほとんどアイドル状態だし。

「やっぱりフェイトちゃんは人気あるなあ」

「え、何が？」

「何でおんなじ遺伝子なのにフェイトの方が人気あるのかなあ」

「どうでもいいが、三人とも彼氏を選ぶ時は俺か茶々丸に言って許可をもらってからだからな」

「えー！ それやったら彼氏作れんちゃう？」

「大丈夫だ。条件はザフィーラよりも強いことだから」

「いや……それでもきついんちゃう？」

「盾の守護獣を越えられないぐらいならでん駄目だ。それにはやての場合はシグナムとかが許さないと思うぞ？」

そう考えたらはやてが一番ハードルが高いな。

多分シグナムとヴィータを同時に相手にして勝たなきゃならないだろうし。

「そんな男の子がどれくらいいるって言うんや……」

「まあ、最低でもゼストレベルだからな」

候補としては……エリオか。

でもあいつはキャロのだしな。

あとは……思いつかないな。

「ねえアリシア、やっぱり肝試しに出なきゃダメかな……」

「何言ってるの、フェイト。ダメに決まってるじゃない」

「だ、大丈夫やフェイトちゃん。何とかなるって」

そう言いながらも震えてるぞ、はやて？

というか……。

「お前ら二人とも怖いからってデバイス起動させたりするなよ？」

「大丈夫、だよ？」

いや、疑問形で言われても心配しかしませんから。
つうか、可愛いな、フェイトよ。

なんて言うか涙目で震えてるのが……。

「イタッ！ ……どうした？　なのは」

「知らないっ！」

ん？ ……ああ、俺がフェイト見てた事に嫉妬してるのか？
それで拗ねてるのか……可愛いな。

「ほら、時間だから行くぞ」

「うう……ズルイ」

そんな風に口を尖らされても困るけどな。

「……」

無言、か。

さっきまでは何ともなかったのにな。

そんなに怖いのか？

さっきから俺の手握りっぱなしだし。

——ビクッ

「そんなに怖いかな？」

「（コクコク）」

そんなんで良くジュエルシードの思念体と戦えたな。

——ガサッ

……物音がするたびに俺の腕をつかむのはこっちとしては嬉しい限りだけど、かなり胸が当たってるんだよな。

「つと、意外と怖いものだな」

「!! レイジングハート！」

＜All right my master. Stand by ready. Set up.＞

いやいやいや、何セットアップさせてるの!？

「待てなのは!」

「ディバイン……バスター!!」

「何やってんだあああ！」

何で俺が事後処理をしなくちゃならないんだ……。

ほとんど京都全域に認識阻害の魔法を使ったし……。

それに誰も手伝ってくれないし。

挙句になのは魔力でスクナの封印が解けたし。

大体何でスクナがこの世界にいるんだよ。

まあ全くもって敵にすらならなかったけど。

召喚した八岐大蛇が普通に潰したし。

第十一話 早すぎてベタすぎる展開（後書き）

あと二話ぐらいでリリカルな世界から別の世界に行きます。
そのあとはネギまに戻ると思います（多分）

第十二話 StS編? (前書き)

早く次の世界に行かせたい

第十二話 StS編？

あれから四年、いつの間にか空港火災事件が終わっていて、六課が設立されていた。

……いや、ティード・ランスターとか、ヴァイス何たらとかは解決したんだけど、はやてが原作よりも早く昇進したからいつ起こるのか分からなかったし。

気が付いたら終わってたって感じで。

ティアナはティードが生きてて、しかも執務官になってるから兄を目指すって意気込んでるから良い。

それにスバルもなのはに助けてもらったことで原作通りに魔導師になってるし、何よりクイントが生きてるからストライクアーツを教えてもらえてたから良かった。

何故かヴァイスは魔導師を止めてヘリのパイロットになってたし。だから別段心配することはない。

起動六課に関しては。

「問題は……俺の方だよな」

何かはやてみたいに俺も部隊を持つことになっちゃったし。

しかもメンバーが豪華すぎる。

時空管理局武装隊特別部隊隊長に俺、副官に茶々丸、隊長にゼスト、隊員はメガーヌさん、ルーテシア、クイントさん。

しかもバックヤードスタッフにアリシア。

さらにはずか、アリサも暇を見ては遊びに来るので一応隊に所属していることになっている。

魔導師ランクに含まれてるのはゼスト、メガーヌさん、ルーテシア、クイントさんだけだから保有制限に引っかからないし。

本部隊舎とかはないけど、後半で六課がやってみたいに俺が創っ

たエターナル、アークエンジェルが基本の場所だ。
それぞれにジャステイス、レジェンド、デステイニーが搭載されて
いる。

フリーダムは茶々丸がドラグーンシステムを搭載してるから代わり
になっている。

多分、聖王のゆりかごともガチでやれるだろう。

とは言っても、部隊員がそろうことはめったにない。

別に任務があるわけじゃないし、することもない。

部隊に所属していた方が動く時に楽だというだけだ。

そのせいでこんなくだらない会議に呼び出されてるんだけど。

「だからこれはどういうことなのか説明願いたい！」

ゼストとかが管理局を止めて俺の部隊に入ってるからってうるさい
んですけどこのおっさんたち。

なぜかレジアスは黙ってるけど……ゼストが生きてたから何とかし
たのか？

それとも別の思惑があるのか。

「何が問題なんだ？」

「だから何故騎士ゼストが所属しているのだ！？
これでは保有制
限に――」

「引っかかりません。マスターと私には魔導師ランクがついていま
せんから……マスターどうやら事件のようです。レリックを積んだ
車両が暴走、六課が対策に当たっています」

「ということらしいけど、このまま続けんの？」

というか、このおっさんたち面倒すぎる。
大体ゼストとかは数合わせに使ってるだけなんだからグダグダ言う
なよ。

それに何が魔導師ランクなんだか……俺は魔法使いだし、茶々丸に
至っては自動人形だったのに。

まあ、このおっさんたちが知るはずもないけど。

「……もういいだろう」

ありゃ？

やっぱレジアスって感じ変わったのか？

まあ、どうでもいいか。

「茶々丸、行くぞ」

うーん……やっぱスバルとティアナは原作よりもだいぶ強いな。

エリオとキャラは原作通りだけど。

目下最優先はライトニングの二人の強化か。

幸い優秀な先生もいることだしな。

というか毎回思うけど、なんでなのはバリアジャケットをスカ
トにするんだ？

あれじゃあ見えるじゃねえかよ。

ただでさえ航空魔導師なのに。

「茶々丸、とりあえず俺の荷物は全部六課に送れるようにしておいてくれ」

「全てですか？」

「ああ、とりあえず全部送っておいてくれ。いらない物はあとから送り返すから」

「どうも、はやて」

「兄ちゃん！？ どうしたん？」

「暇だから来た。しばらくはここににいるから三人分の部屋を用意してくれ」

「そんなこと急に言われたって困るんやけど……」

「いや、それなら俺が創るから別にいんだけど」

「まあ何とかするわ。なのはちゃんとフェイトちゃんにはもう会ったん？」

「いや、まだだ。今は訓練に行ってるんだろ？　終わってからで良いかなって」

確か今日あたりから個別スキルの訓練だったはずだしな。俺が来るタイミングとしては丁度良いだろう。

「うちはこれからゲンヤさんの所に行くんやけど……」

「ああ、行ってくる。それから……あんまりゲンヤさんを怒らせるなよ。また狸って言われるぞ？」

「……兄ちゃん何か知つとるの？」

「さあな？」

「まあええわ。そろそろなのはちゃんたちが帰ってくるころやと思うけど」

「ああ、一緒に下まで降りるよ」

それにしてもはやってこのころから戦闘機人事件になると読んだのか……。

流石に狸と呼ばれるだけの事はあるな。

どこからそんなに情報を手に入れてるのか……。

「あ！　皆お疲れさんや」

「はやてとリインは外回り？」

「ハイですう。拓真さんもいるですよ♪」

「よっ、なのは、フェイ——ゴフツ!!」

い、いきなり飛びかかってくるとは……流石なのは。
俺の予想を二段階ほど上回りやがる。

「どこ行ってたの!？」

「いや、別にふらふらしてたんだけど」

「何カ月も連絡しないで……拓真君のバカ!!」

グッ……流石に泣かれるとつらいな。

しかもフォワード陣がなのはの豹変ぶりに呆けてるし。

「なのは、他の奴らの目もあるから」

「知らない!!」

「……皆は着替えてからお昼にしようか。あとで紹介するから」

流石フェイト。

ナイスフォローだ。

正直俺もこの空気には耐えられそうにない。

「じゃ紹介するね、こちらは私たちの幼馴染で、八神部隊長と私のお兄さん、それからなのは隊長の彼氏の真柄拓真さん」

「どうも」

「えー！！ 八神隊長とフェイト隊長のお兄さん！？」

「なのはさんの彼氏！？」

あれ？

スバルとティアナには会ったことあるのに知らなかったのか？
それにはやては八神性を名乗ってるのか。

まあ、何人も真柄がいたら混乱するしな。

「あれ？ じゃあ八神隊長とフェイトさんって姉妹だったんですか？」

「違うよ。正確には私とはやてが引き取られたの。だから三人とも血は繋がってないんだけどね」

「そういうことだ。これからしばらく厄介になるからよろしくな。
そう言えばフェイト、出かけるんじゃないかったのか？」

「あ！ そうだった。じゃあ皆またあとでね」

そう言いながらフェイトは駆けて行く。

言ってくれば転送してやるのだが……あれ？

そう言えば転送も、飛行も有事以外は禁止だったか。

それでフェイトは車を買ったのか。

「ということで改めまして。真柄拓真だ。ちなみにさっきの紹介に加えるなら、なのは、フェイト、はやての魔法の先生だ」

「ええええええ！！ き、聞いてないですよ！？」

「いや、ティアナはティーダから聞いてなかったのか？ スバルは知ってるよな？」

「はい。お母さんとお父さんに聞きましたから」

「んで持って、ちびっこ二人は初めましてだな。俺はフェイトの兄だから、気軽に兄さんと呼んでくれて良い」

最近フェイトが「お兄ちゃん」って言うってくれるからな……あれはかなりの破壊力だった。

しかもそれに便乗してアリシアまで「お兄ちゃん」とか言うてくるし。

「えっとじゃあ僕は兄さんで」

「えっと……じゃあ私はお兄ちゃん」

ふっ、また妹が増えたぜ。

キャラの「お兄ちゃん」もなかなかの破壊力だな。

まあ、キャラはエリオにあげるけど。

「とりあえずはお前らに戦闘を教えてやることになると思う」

「え？ でもそれは私の役目なのに」

「隊長陣は俺が直々に鍛えなおしてやる」

最近少し気になることもあるしな。

なんだかガジェットその他に何か別の機械を作ってるみたい何だよなあ。

あのムラサキ。

まあ、ゼストとルーテシアがこっち側だから仕方無いのかもしれないけど。

「ほんなら改めて、ここまでの流れと今日の任務のおさらいや。これまで謎やったガジェットドローンの制作者、およびリックの収集者は現状ではこの男」

そういて全員が注目した方向にジェイル・スカリエッティの顔が映

し出された。

その後スカリエッティについての説明が為され、それに引き続いてリインが前方に飛んで、画像が表示される。

「で、今日これから向かう先はここ。ホテルアグスタ」

「骨董美術品オークションの会場警護と人員警護、それが今日のお仕事ね」

リインに引き継いでなのはが任務に着いて語った。

その後リイン、フェイト、はやての順に今回の任務についての補足説明をし、説明が終わった後で、キャロが口を開いた。

「あの、シャマル先生。さっきから気になってなんですけど、その箱って？」

「ああ、これね。隊長たちのお仕事着」

そして着替え終わった三人が姿を現す。

にしてもなのはが髪を下ろしたら桃子さんそっくりだよなあ。それにただでさえ三人とも有名なのに固まるなよ。

無駄に三人とも可愛いし。

確か今日のオークションにガジェットが襲撃に来るんだよな。

オークションの開始までは……三時間半くらいか。
暇だな。

金も持ってきてるし適当にオークションの商品でも買いあさるかな。
でも別に創れば全部手に入るしな……。

あ、そう言えばヴィヴィオは引き取るから、そのために玩具を買っ
とかなきゃいけないのか。

『マスター、準備が終わりました』

『ゼスト達は？』

『そちらも既に終わっています』

『分かった、ありがとう』

着々と準備は進みつつあるな。

あとはガジェットが出てくるのを待ってから、様子を見る程度か。
一応茶々丸も呼び出しておくかな。

『茶々丸、こっちに来ておいでくれ』

『了解しました』

「マスター、既に戦闘が開始されています」

「ん、映像を……いや、ここじゃまずいか。外に出るからそこで見してくれ」

そして外に出てみると、そこにははやてと緑の査察官がいた。確か名前は……ロ、いや、ベロ……でもないな。

「茶々丸、あいつの名前何だっけ？」

「ヴェロツサ査察官です、マスター」

ああ、そう言えばそんな名前だったような気がする。

あいつとはカリムと知り合った時からの付き合いなのにな、どうも男の名前を覚えるのは苦手だ。

それにどこことなくはやてを狙ってる感じがあるからな。警戒しておくにこしたことはない。

まあ、茶々丸の監視からは逃れられないけど。

「はやて、戦闘の映像を見るか？」

「あ、兄ちゃん。お願いするわ」

映し出されるのは副隊長陣がガジェットと戦闘を繰り返している映像。

……って、え？

「ジンと……ゲイツ？」

ここでまさかの種ネタが来るのか。
しかも御丁寧にこっちが主人公機を持ってるからなのか、その二機で来てるし。

「マスター、ガジェットの動きに精彩があります。どうやら有人操作に切り替わったようです」

え？

ルーテシアがいないのにそういうことはあるの？
しかも何でジンとゲイツがいるんだよ。

あれか？

指揮官機みたいなものなのか？

有人操作に切り替わったってことは。

それともあれ事態に高性能のAIでも積んでるのか？

「はやて、この二機の事知ってるか？」

「いや、初めて見たわ。アコース査察官は？」

「僕も初めてだね。教会でもそんな情報は知らされていない」

ってことは今日が初お披露目なのか？

「不味いな……」

もしかしたら人が乗ってるかもしれんな。

そうだったらシグナム達がそうと知らずに殺すかもしれないし……
俺が、いや、茶々丸に頼めば良いか。

「茶々丸、この二機を捕獲してきてくれ」

「了解しました」

ジンとゲイツが相手ならストライクフリーダム仕様の茶々丸なら負けないだろう。

しかも御丁寧なことに人間サイズだし。

そう言えばティアナはティーダが死んでないから無茶しないのか。ってことはなのはの「少し頭冷やそうか」もないのか。それはそれで良いことだ。

『マスター、二機とも捕えました』

早っ！

流石はチート仕様の自動人形。

『中に人が乗ってるか確認してくれ』

『……見当たりません。どうやら遠隔操作のようです』

『AIじゃなくてか？』

『はい』

うーん……ってことはスカリエッティの研究所で操作でもしてるのか？

コックピットを作って……あれか？

ゲーセンに置いてある戦場○絆みたいな奴か？

それならこっちも対抗してそういう風にするか？

別に創ってある奴を小さく改良して、遠隔操作を出来るようにすれば良いだけだし。

『データを取っておいてくれ』

『了解しました』

そのデータをもとに創れば良いか。

……いや、暇だって言ってたから作らせるのも良いか。

うん、そうしよう。

っていうか新人たちの出番なかったな。

まあ、召喚士がないから当然か。

「どうだ、アリシア。再現できそうか？」

「それは私に対する挑戦？ 良いわ、やってやろうじゃないの。ムラサキに出来て私に出来ない事はないわ！！」

うーん……いつの間にマッドになったんだろうか。

やけにスカリエッティに対抗意識を燃やしてるし。

しかも俺たちの間ではスカリエッティはムラサキって呼ばれてるし。

まあ、変な方向に走らなければアリシアも間違いなく歴史に名を残す技術者だけど。

俺が創ったエターナルとアークエンジェルも改良してたし。多分、近いうちに出来るようになるだろう。

「ついでに訓練用にシミュレーションシステムも開発しておいてくれ」

「ふふふ、絶対に造ってやるわ」

まあ、かなりの技術者であることは確かだし、茶々丸も付いてる事だからすぐに出来るだろう。

出来なければ創れば良いし。

あとは……新人たちの訓練だな。

まあ、講師陣も呼んであるから大丈夫だろう。

「では訓練を開始する」

「あ、あのお兄ちゃん？ 本当に私となのはもやるの？」

クツ……フェイトのお兄ちゃんはかなりの威力だな。

しかも天然でやってるからかなりやばい。

「当たり前だ。昨日の海上戦闘で気付いただろ？ あの一機はかなりやばいって」

昨日海上に改良された二型のガジェットと、ジン、ゲイツの二機が現れ、なのは達が相手をしたがかなり苦戦をしていた。
あれに対する訓練も必要だろう。

「新人たちには特別講師陣を呼んである。かのゼスト隊の三人だ。エリオはゼストに、キャロはメガーヌさんに、スバルはクイントさんに教えてもらえ」

今更だけど教師役が超豪華陣だな。
三人ともストライカークラスの魔導師だしな。

「あ、あの私はどうするんですか？」

「ティアナにはティータを呼んでただけだな、忙しいからこれないとのことだ。代わりに俺が直々に教える」

「よ、よろしくお願いします！」

「んで持つてなのはとフェイトも俺だ。それぞれ分かれて訓練入るぞ」

意外とこの空間シミュレーターも広いからな。
別々に分かれて練習しても全く場所には困らない。

「あ、あの……三人いっぺんにやるんですか？」

「いや、別々だ」

「え……でもどうやって」

「まあ、見てろ。“影分身の術”」

今回は二人影分身を作る。

本体である俺はティアナを教えれば良いだろう。

それに攻撃を喰らったら影分身は消えるけど、今回ののはとフェイトの訓練はそこまで模擬戦まがいの事をするわけじゃないからな。別にジンとゲイツについての対策ができればいい。

「じゃあ、ティアナは俺と訓練だ。まずは……これだ!!」

「チェス……ですか？」

「ああ。射撃とか、接近戦とかはティードに教えてもらえばいい。俺が教えてもかえって型を壊すことにしかないからな。そうじゃないくて今回は戦闘における相手を追い詰めて行く戦い方を学ぶ」

そのためのチェスだ。

これによって相手の二手、三手先を読むことを鍛える。

ティアナは兄を目指しているだけあってかなり頭の方は優秀だから、これを出来るようになればかなり戦力アップにつながるだろう。

「んでもってそれが終わったら幻影魔法の練習だ。あれはかなり役に立つからな」

正直、何でこの世界で幻影魔法が軽視されてるのか全く分からない。かの死神マンガの藍染とか、家庭教師ヒットマンの霧の守護者とか

もかなりの実力者なのに。

いやー……何というか、皆——特にティアナが強くなりすぎた気がする。

某忍者マンがの影使いみたいに相手を誘導する戦い方に、幻影を駆使してるし。

もしかしたら一対一ならティーダにも勝てるんじゃないのか？
それに他の三人も講師陣が良すぎたから原作で言う最終話ぐらいの実力は付いてそうだし。

まあ、そんな訓練を数日もしてたんだから当たり前か。

「はい。今朝の訓練と模擬戦も無事終了。お疲れ様。でね、何気に今日の模擬戦が第二段階見極めのテストだったんだけど——」

「え？」

「——どうでした？」

「合格」

「「早っ」」

「いやいや、お前らこんなに豪華な講師陣につきっきりで訓練受けておいて不合格とかだったら不味いからな？」

「これにて二段階終了、明日からはセカンドモードを基本にして訓練ね」

今日は新人たちは一日休みか。

確か今日にヴィヴィオが保護されるんだっけな。

玩具もお菓子も買ってあるから大丈夫か。

それよりもアリシアに頼んでおいたシミュレーションシステムが出来上がったって言ってたからな。

今日は俺はそれで暇を潰せるだろう。

「じゃ、転ばないようにね」

「大丈夫です。前の部隊にいた時はほとんど毎日乗ってましたから」

「ティア、運転上手いんです」

「そう」

「あ、お土産買ってきますね」

お土産か……別に欲しいのとかも無いしな。
っていつの間にかいなくなってるし。

「ライティング隊も一緒におでかけ？」

「「はい」」

「あんまり遅くならない内に帰るんだよ。夜の街は危ないからね」

そう言っても今のこいつらが危なくなる事態なんてジンとゲイツが出てくるか、若しくは戦闘機人が複数出てくるかしかないだろうに。つうか本当にフェイトの奴はお母さんしてるな。

「拓真君は今日はどうするの？」

「ん？ アリシアに頼んでおいた奴が出来上がったからそれを見に行くつもりだ。二人も来るか？」

「うん」

「アリシアが？」

「ああ、新兵器の訓練用シミュレーターのテスト運転だ。まあ、とは言ってもゲーセンでやるような奴とそんなに変わらないんだけどな」

「というかゲーセンにおいてある奴そのものだし。」

「ジャンジャジャン！　これが私の開発したマシーンです！！」

見た目はそんなに変わらないな。

「機能は？」

「画面にこだわっているのはもちろん、無重力状態での運転、重力のかかる負荷具合まで再現してあるわ。訓練用のメニューから対戦まで、さまざまなメニューも取りそろえてるわ」

何と言うか……俺としては嬉しい限りだけど、本当に才能の無駄使いだな。

「んじゃさっそく……」

……やばい。

マジで楽しい。

OSも原作と違ってアリシアが作った奴だから簡単な操作で的確に動くようにしてあるし、本当にゲームみたいな操作感だ。

「なのはとフェイトもやるか？」

「えっと……じゃあちよつとだけ」

「私も」

……何でなのははこんなに上手いんだ？

……ってデバイス使ってるのか！

「アリシア、デバイスでも仕えるようにしたのか？」

「うん。普通にも使えるようにしたけど、デバイスを使った方がフルに機能を扱えるんだよ。それにドラゴンシステムを使うのにはかなりの空間認識能力が必要だからね、普通の人にはできないからデバイスで仕えるようにしてみたの」

「ま、俺は空間認識を使わなくても大丈夫だからな、デバイスはいいらないだろ」

「うーん……なのはと、お兄ちゃんて戦ってみたら？」

「ふむ……良いな。なのは、負けた方が勝った方の言うことを一つ聞くてのはどうだ？」

「良いよ。負けないもん」

なのはは……フリーダムか。

なのはのリミットブレイクはドラゴンシステムだからな、扱いやすういと言えは扱いやすういだろう。

まあ、相手にするんならやっぱりレジェンドだろうな。

「レイ・〇・バレル、レジェンド、発進する！」

まあ出撃するときは言わなきゃダメだよな。
基本だし。

「バカな……負けただど？」

何がいけなかったんだ……。

「約束だからね♪　ひとつ言うこと聞いてもらおうよ」

「クッ……仕方ないな、何が――」

『こちらライトニング4』

通信？

……って忘れてた！

ヴィヴィオが発見されるんじゃない！

あんまりにこれが面白かったから忘れてたぜ。

なのはとフェイトは行ったか。

どうするかな……原作通りにはいかないみたいだし、俺も出るか？
とはいってもヘリを守れば良いからな……アレか。

「アリシア、アカツキも出来てるのか？」

「もっちらん♪　一番右の操作機がそうだよ」

ならそれで出るかな。

守るのにはそれが一番良いだろうし。

「そう言えばエネルギーはちゃんと魔力を使ってるのか？」

「うん。お兄ちゃんからもらった魔力結晶体を使ったよ」

それなら一般人が使うのでも、魔力が低い奴が使っても大丈夫だな。茶々丸に使ってる奴とおんなじ素材だし。

……よくよく考えたらこれがあればアインヘリアルとかいらんんじゃないか？

リンカーコアがなくても扱えるし。

でも、費用がかかりすぎるか。

実用化は無理だな。

そう言えば出撃するときは俺の名前で出撃するのか？

「なあ茶々丸、俺の名前のまま出撃した方が良いと思うか？」

「……正直どちらでも構わないのではないかと」

じゃ、良いか。

「タクマ・マガラ、アカツキ、行きます！！」

軌道上に展開しているアークエンジェルから金色の機体が飛び出す。

「アリシア、茶々丸、フォローは頼むぞ」

「まっかせなさい♪」

「大気圏突入まで三十秒です」

いよいよか。

まあ、ガジェットは問題じゃないけど、ジンとゲイツには負けたくないな。

こっちは一段階進化した奴だし、それに使ってる部品も一番高性能の奴だしな。

あれ？

そう言えば……シグナムにアギト渡してねえ！

「茶々丸、アギトは？」

「先ほどまでいたのですが……」

どこ行ったんだか……まあ、俺がロードに会わせてやるって言っときながら未だに引きあさせてないからな。
いじけたのか？

「大気圏突入、コンディションオールグリーン、全て順調です。目標までは三十五分で到着の予定です」

まあ、これが終わったら会わせてやるか。

「茶々丸、先にロングアーチに情報を送っておいてくれ。それから爺さんたちにも通信を繋いでくれ」

「了解しました。……三提督にお繋ぎしました」

『おお、爺さんたち、今起きてることは知ってるな？』

『ふむ。海上に現れたガジェットの事かね？』

『そう、それ。今から俺の新兵器が出るからもし本局のレーダーにアンノウンが出て抑えといってくれ』

『それは何なのかね?』

『まあ、敵さんが使ってる奴のより高性能の機械だよ』

『市街地にエネルギー反応』

これなら間に合うな。

『大きい! ……もうひとつ反応?』

『こちら……』

あ……部隊名とか決めてなかった。

『こちら真柄だ。そのもう一つの奴は俺だから安心していい。なのはにもそう伝えてくれ』

さて、アカツキの防御システムを展開してと……。

原作でもなのは一人で守れた奴だからな。

このアカツキのビット展開の防御は耐久テストもクリアしてるし。

「アリシア、どうだ?」

「……うん。完璧に防御、ビットの損害もなし」

「なかなかの成果だな」

あとはなのは達だけ……原作通りに行くかな？
でもルーテシアはこっち側だし……集団転送は出来ないか？

「なあ、そう言えばどうやって軌道上に戻すんだ？」

「あ……」

いやいや、そういうところは考えておけよ。

「しょうがないな……俺が転送で戻しておくか」

あとは……ヴィヴィオの治療は教会がやってるし、何もすることは
ないか。

転送用の魔法陣でも作っとくかな。
一々転送するのも面倒だし。

第十二話 S t S 編? (後書き)

そろそろ終わりそうなりリカルな世界。

気が付けば、昨日一日で三万アクセスがありました。

そして二十万PV超えでした。

皆さんありがとうございます。

第十三話 困ると大体こういう展開になる（前書き）

ヴィヴィオにお兄ちゃんって呼ばせることはできなかった

第十三話 困ると大体こういう展開になる

くっそ……アギトの奴どこに行っただ？

六課の中と戦艦の中は大体探したのにな……仕方ない。
疲れるけど“円”を使うか。

……おいおい、随分と遠い所にいるなあ。

何で山の方にいるんだよ。

くっそ……行くか。

「はやて、ちょっと出かけてくる」

「兄ちゃん車ないやろ？ 出そうか？」

「いや、飛んでくから良い」

「え？ でも飛行魔法は禁止されてるで？」

「問題ない。飛行魔法じゃないから。じゃ、行ってくる」

——縮地无疆

これならかなり早く行けるし、禁止もされてないからな。

「……やっぱ兄ちゃんは規格外やな」

そんな声がしたとかしなかったとか。

「アギト、何してるんだ？」

「旦那があたしのロードを紹介してくれるって言ったのに一向に紹介してくれないからだろ」

「アー……正直すまん。忘れてただけだ。帰ったら会わせてやるよ」

「……どういうやつなんだ？」

「古代ベルカの騎士で、剣を使う。それに魔力光もお前と一緒にだ」

「分かったよ。戻ってやる」

シグナムは……なのはと一緒にヴィヴィオを迎えに行ったんだっけな。
なら戻るか。

「アギト、俺にしっかりつかまっとけ。かなり高速で移動するから」

「はいよ。しっかり頼むよ、旦那」

――縮地

「なのは達は……あっちか」

シグナムがどこに行ったか聞きに行くか。

「旦那、こっちにあたしのロードがいるのか？」

「いや、そいつの居場所を知ってる奴がいる」

この部屋だな。

「あたしのロードって奴はどいつだ!？」

「ふえええええん!!」

あれ？

もしかしてヴィヴィオをあやしてたのか？

「もう、拓真君のバカ!　せつかくヴィヴィオが泣きやんだのに」

「いや、俺のせい!？　アギトだろ？」

なんか全員から白い目で見られてるし。

「……アギト、花火やってくれ」

「やっぱ今のってあたしのせいだよな……」

コクリと一度頷いて返事にする。

『茶々丸、この間買ったやつを準備しておいてくれ』

『了解しましたマスター』

「良し……ヴィヴィオ、こんにちは」

「？」

やばい……かなり可愛い。

『マスター準備ができました』

「お菓子とか玩具とか用意してあるけど行くか？」

「ヴィヴィオ、行っておいで」

「……（コクッ）」

『兄ちゃん、今日は付いてきてもらうつもりやったんやけど』

マジで？

俺としては六課設立の理由とかはどうでもいいんだよな。

『茶々丸、あとの事は任せても良いか？』

『はい』

『じゃあ、アギトをシグナムの所に案内し……いや、やっぱそれは俺がやる』

——影分身の術

「んじゃ、まあ行くか」

「いやーええもん見せてもらった」

「うう……」

「しかし……あの子はどうしようか。何なら教会に預けとくんでもええけど」

「平気。帰ったら私がもう少し話して何とかするよ」

「というか、俺が引き取ってやって良いぞ」

もともとそのつもりだったし。

「……あんな、毎回思うんやけど、兄ちゃんの出費はどこからまかなってるん？」

「別にもともと持ってた奴で大丈夫なんだけどな。最近は数年前に石油を掘り当てたからそれでまかなってる」

あれはかなり儲かるしな。

それに管理局からもういくらか金はもらってるからな。

「ってシグナムあそこにいるじゃねえかよ！」

まどの外を偶然にも覗き込んだらシグナムがいた。

「？ シグナムなら交代部隊の指揮を執ってるで」

「すまん、はやて、用事が出来た」

今ここでシグナムを連れて行かないとアギトがまた拗ねるしな。

「あっ！ ちょっと兄ちゃん……行ってもうた」

まったく……ちゃんと居場所を調べとけば良かったな。

まさかこんな所にいるなんて思わなかったし。

まあ、ここまでヘリでこれたから良しとするか。

「シグナム」

「兄上？ 何故こんな所に」

「ちょっと来い。部隊の指揮は俺がやつとくから」

「はい？　ちょっと……」

正確には俺じゃなくて俺の影分身がだけどな。
なんか影分身使いすぎだよな……。

「もう。兄上！　いい加減にどういふことなのか教えてください！」

「ん？　お前にユニゾンデバイスのロードになって欲しいんだよ」

「はい？　ですが私にはリインがいますが」

「でも扱えるのがお前ぐらいだから……烈火の剣精っていつて、
剣を主力に扱って、魔力光もお前とおんなじ奴だから。おいアギト、
連れて来たぞ」

「へえー、あんたがあたしのロードか」

「そんじゃまあ、あとは二人でよろしくやってくれ。俺はヴィヴィ
オの所に戻るから」

「ああ、あの子は今ゲームして遊んでるぜ」

ゲーム？

玩具なら買った記憶があるけど……ゲームなんて買ってたか？

「茶々丸、今戻った」

「おかえりなさいませ、マスター」

ヴィヴィオは……って何でpspらしきものを持ってるんだ？

「凄いでしょ！　ヴィヴィオじゃ足が届かないから携帯ゲームの形にしてみたの！」

だからってそこまで忠実に作らなくても。

「よし、ヴィヴィオ、対戦するか」

「うん！」

可愛い。

誰が何と言おうとこの可愛さは次元世界一だ。
というかいつの間に俺になついてたんだか……まあ、細かいことは気にしなくて良いか。

「うん？　ヴィヴィオ、なのはさんが帰って来たけど会いに行くか？」

「うん！！」

やっぱり可愛いなあ。
絶対にムラサキには渡さねえ！
うん。

「何か用か？」

「ふふーん♪ この間なんでも一つ言うこと聞くて言ったよね？」

そう言えばそんなこと言ったような気もするな。

「何して欲しいんだ？」

「えーっとねえ、今日一日一緒にいて欲しい！」

「別にそれぐらいならお安い御用だけだな」

そんなことならわざわざお願いするほどじゃないだろうに。
あ、でもそっか。

「ヴィヴィオは？」

「茶々丸さんとアリシアちゃんに預けて来たよ。だから今日はずっと一緒♪」

さいですか。

「俺としては腕をからめるのを止めて欲しいんだけど……その、色々あたってるし」

「何が？」

そんな顔真っ赤にして言うくらいならわざわざやるなよ。大方はやてあたりに言われてやってるんだろうけど。

「言った方が良いのか？」

「う……言わなくて良いよ」

それで結局離してくれないのか。
まあ、俺は心地良いから全然良いけど。

「それで？ どうか行きたい所とかあるのか？」

「えっと……その……拓真君の部屋」

部屋だとおおおお！

それはアレか？

そのままベッド的な展開なのか！？

「じゃ、行くか」

だがかし！

俺は平常心を崩さない。

それがここでは一番重要だからな、多分。

「ここが拓真君の部屋……」

「意外と片付いてるってか？」

「思ったより。だって海鳴りにいた時はかなり部品とかが散らばってたでしょ？」

「ここに来てからはそんなに物を作ったりはしないしな。そういうことは全部アリシアがやってるし」

何よりこの部屋はほとんど寝るときとゲームするためにしか存在してないようなものだしな。

「え、エッチな本とか隠してないの？」

「……なのは隠してて欲しかったのか？」

「えっと……その……やけど……はやてちゃんが年頃の男の子なら皆持つてるって言ってたから」

はやての奴……確実に修羅場を望んでんたな。
だが俺を甘く見すぎだな。

そんなものはこの部屋には置いてない！

「探して見ても良いぞ？」

「う、うん……」

って探すのかよ!?

そこは信じてるみたいな展開じゃないのか?

っていうか本当に念入りに探してるな……最初がベッドの下って。
しかも次は本棚ですか。

何でそんなベタな所から探すのか。

「……」

ってなんか見つけたのか?
動きが止まってるけど。

「なのは?」

「拓真君、これ何かな?」

アレ?

何でOHANASHIモードになってるんだ?

そんなものを隠した覚えは……ってギャルゲーか!

「ゲームだゲーム。別にやましいもんじゃない。背表紙とかにもR
18とか書かれて無いだろ?」

Kaon、AorにClaonadか。

確かその他にもメモ○フシリーズをそろえてあったと思うけど。

他にも色々とおいてあるはずだしな。

「やりたいなら貸すぞ?」

「……」

あれ？

もしかして地雷踏んだ？

っていうかギャルゲーもダメなの？

「バカー！！」

グッ……良い……砲撃……だ。

「ッ……っと。確かなのはの砲撃を喰らって……ってもう夜じゃねえかよ！」

ってことは十二時間以上も気を失ってたのか？
なのははどこに……っているじゃん。

「なのは？」

何でうさ耳付けてるの？

とかどこから持って来たんだ？

いや、そんなの持ってこれるのは茶々丸くらいか。

「そのうさ耳、茶々丸にもらったのか？」

「……は、はちみつくまさん」

何いいいいいい！！

その声でやるのか！

……良い、良い！！

中の人がおんなじだからかなりやばい！

しかもうさ耳付けて顔を真っ赤にするって……お持ち帰りだな。

「今日一日そのまま居てくれないか？」

「……は、はちみつくまさん」

「じゃあ外に出るか。皆にも見せてあげなきゃな」

「だ、ダメ！ そんなの恥ずかしいもん！」

「ええー！ 絶対可愛いから大丈夫だって！」

特に茶々丸とかは暴走すると思うぞ。

うん、確実に暴走するな。

「うう……拓真君がいけないんだよ？ なのはにこんなことさせるなんて」

いけないって何が？

全然話の脈絡が見えないんだけど。

「そ、それに！　なのはは……なのはが拓真君のか、彼女何だから
こういうゲームも禁止なの！」

言葉使いが子供のころに戻ってるぞ。

「じゃあなのはが代わりに暇つぶしに付き合ってくれるのか？」

「う……例えば？」

「そうだな……こうやって――」

「――キスしたりとか」

ふ、真っ赤だな。

だが俺のターンは終わらない！

「いちゃいちゃしたりとか、一緒に寝たりとか」

最後の方はなのはの耳たぶを甘噛みしながら言ってみる。

「い、良いよ。なのはは拓真君の彼女だもん」

その割には恥ずかしがってるみたいだけどな。

まあ、そういうなのはも可愛いけど。

「そんなこと言って初めからそのつもりだったんだろ？」

そうじゃなきゃ俺の部屋なんかに来たりしないだろうしな。
それを期待してのお願いだったのだろう。

「今日はヴィヴィオの所には返さないからな」

一夜明けて翌日。

結局あの後なのは自室には戻らず、そのまま泊った。

朝起きたら既にいなかったから、どうやら今日は何か用事があるのだろう。

俺もシートその他もろもろを洗濯に出しに言ったあとで朝食――いや、もはや昼食の時間だったが一―を取りに行った。

その途中でなんだか皆バタバタと忙しそうに動いていたが、何かあったのだろう。

まあ、俺には関係のない事だろうから、食堂でそのままアリシアに試作品として渡されたヴィヴィオ用のコントローラーを使って遊んでただけ。

というか、これもなかなかの出来だ。

簡単な操作であることはもちろん、空間ディスプレイに映像が映るからどこでも操作ができる。

これはかなりのアドバンテージだ。

つまりは移動しながらでも出来るってことだからな。

「八神二佐、あれはどういうことですか？」

なんだか聞きなれない声がしたのでそちらを振り返ると、はやてが大勢の管理局員を引き連れていた。

「……あの人は六課の人じゃないのですの」

「ではどう言った方なのですか？」

「……私の身内、です」

「これはこれは……。問題ですね。一般人を隊舎内に入れるなど。この件は査問に駆けさせていただきます」

あれ？

なんだか俺がいるせいではやてに迷惑がかかってる感じ？

はやてが唇かみしめてるし。

まあ、助け船は出してやるか。

「はやて、どうしたんだ？」

「これはどうも。私はオーリス・ゲイズ三佐であります。今日は六課の査察に来たのですが、あなたのような一般人がなぜ管理局の内部に入っているのですか？ 場合によっては逮捕もやむをえません」

あー、査察か。

そんでもってこいつがひげ親父の娘ね。

っていうか本当に将官クラスにしか俺の情報公開されて無いのかよ。

「で？ ゲイズ三佐は誰の許可をもらって俺を逮捕しようとしてるのかな？ 第一はやてはなんら違法な事はしてないからそもそも査

問の対象にもならないけど？」

いやー、こういうの面白いな。

俺こういうの好きかもしれない。

「何をふざけたことを……あなたがここにいる。それが全てでしようが。それにレジアス・ゲイズ中將から万が一の場合は権利の行使も認められています」

「へー、あのくそ爺からね」

「な、控えなさい！ あなたのような人が中將をそのように呼ぶなど！」

「これ済まない。そう言えばこちらの自己紹介がまだだったかな？」

「ええ、そうです。あなたの名前も知らないのでは査問の時に困りますので教えてもらいましょうか」

「それは失礼した。そこにいるはやて、それから隣にいる執務官のフェイトの兄のタクマ・マガラ特務隊隊長兼大將だ」

いやー、この顔。

面白すぎる。

「それで何だっけ？ 俺が一般人だから中將の許可を得て逮捕するんだっけ？ ゲイズ三佐？」

「あ、あなたのような人が大將な訳が……」

「まあ、将官クラスじゃないと俺の情報は入らないしね、ひげ親父に連絡でも取って確認してみたら？ 大将を逮捕しても良いですかって」

「クッ……」

「だんまりですか。じゃあ、俺は仕事に戻っても良いのかな？ 何しろ特務官何でね、仕事が山積み何だ。あ、それともゲイズ二佐が手伝ってくれるのかな？ 若しくはひげ親父か」

楽しすぎる。

「し、失礼しました」

やっぱ確認が取れないから謝るしかないよね。

「で？ こちらとしてはそこにいる八神二佐と執務官にも仕事を頼みたいんだけど、いつ終わるのかな？ その査察とやらは」

「す、すぐに終わらせます」

「そう、それは良かった。おかげでスムーズに仕事に移れそうだし、ゲイズ中将に問いたださなくて済みそうだ」

いやー本当に悪役が型にはまってるな。
でも何一つ嘘は言ってないしな。

俺がやってるゲームも新兵器のテストだし、はやてとフェイトにもあとで話があるだろうしな。

「では八神二佐、失礼します」

「……ほな、お送りします」

「兄ちゃん！　どういふことや！」

「だからさっき言った通りだつて」

「じゃ、じゃあ本当に兄ちゃんが噂の大将何か？」

「何が噂されてるのか知らないけどな。つていうかカリムとかから聞かなかったのか？」

「聞いとるわけないやろ！」

「でも本当に俺とかアリシア、ゼスト達がここに居るのを不思議に思わなかったのか？」

「い、いや何かあれば兄ちゃんが黙らせると思ってたから」

「……そんな認識だったのか俺」

「しょうが無いやろ！　兄ちゃん何も教えてくれへんし」

「まあ良いけど。でも査察があるなら言ってくれば良かったろ？
最初からなしに出来たのに」

「そんなこと出来るんか!？」

「いや、多分だけど」

「まあ、何にしても査察が無事に終わって良かったわ。それに兄ちゃんに言わなかったのは、なのはちゃんが今日は昼過ぎまでは起きないと思うって言ってたから」

それは俺の体力を見くびりすぎだ。

「そう言えば六課設立の理由を聞いた時に三提督が援護してるって言われたろ？」

「え、まさか……」

「そ、俺が爺どもに協力するように言っておいた」

まあ、何もしなくても影の協力者にはなったんだろうけど。

というか六課って無敵だな。

三提督に大将、さらには俺とカリムを合わせた聖王教会からも支援があるし。

しかもゼスト達が特別講師に来てるし。

「ありや、もう始まったのか」

空間シミュレーターに到着してみれば、そこでは既にスバルとギンガがウイングロードを展開して模擬戦を繰り広げていた。

「やっぱりギンガの方が一日の長があるな」

まあ、クイントさんに幼少時からみっちり鍛えられてたんだろう。にしてもストライクアーツって無駄な動きが多いよな。

多分火力重視で大振りになるんだろうけど……それならラカンみたいに体全体に魔力を纏ったり、腕に魔力を纏わせれば良いのにな。

まあ、魔導の方が重視されてるからしょうがないって言えばしょうがないけど。

「つと、終わったか」

やっぱりギンガの勝ちだったな。

まあ、ギンガも既に魔導師ランクはAAAくらいのはずだからしょうがないと言えましょうがないけど。

「じゃあ、皆集合！　せっかくだからギンガも入れたチーム戦、やってみよっか」

「フォワードチーム五人対前線隊長四人チーム！」

「ええ？」

「あのね、ギン姉、これ時々やるの」

「隊長たち、かなり本気で潰しに来ますので」

「まずは、地形や幻術を駆使して何とか逃げ回って」

「どんな手を使っても決まった攻撃を入れることができれば撃墜になります」

さて、アギトも来てることだしな。

シグナムの調整も兼ねてるんだろうけど……こっちも調整したいしな。

「ストップ。その模擬戦、俺が相手をする」

「え？ でも……拓真君じゃ訓練にならないでしょ？」

「いや、正確には俺じゃなくて俺たちが操作する機体がだけど……
『アリシア、二機とも使えるか？』」

『うん、整備も済んでるし、データも取り終わってるよ』

『じゃあアリシアと……ヴィヴィオで一機ずつ操作してくれ』

『分かった』

「ということで、お前ら五人の相手はこの間から現れてる二機が相手だ。操作してるのはアリシアとヴィヴィオだけだな、二人とも上手いから油断するなよ?」

「え? あの機体は捕獲したはずなのに……どうやって復元したんですか?」

「ん? 普通にアリシアがやったぞ?」

何でそんなにギンガは驚いてるんだ?

……ああ、この間のへりの時に映像見てなかったのか?

「まあ、とにかくお前らの相手はその二機だ。そのあとは前線隊長達が俺の相手だからな」

結局あの模擬戦はフォワードチームの勝ちだった。

流石に完全復元だと機体の性能が落ちるな。

それに比べてアリシアが造った機体はかなりの高性能機だからな。

まあ、調整は少しずつやって行けばいいか。

「じゃあ次は隊長達と俺な。シグナムはアギトとユニゾンしておけ

よ」

「ねえスバル。拓真さんってそんなに強いのか？」

「さあ？ 私たちは戦ってるのを見たことないけど……なのはさんたちの師匠だって言ってたから強いんじゃない？」

「ルールはさっきと一緒な、俺に一撃当てたら勝ち。剣しか使わないから頑張れよ。じゃあ、ティアナ、合図を頼む」

「はい。……レディー、ゴー!!」

アレ？

そう言えば四人ともリミッターがかかってるのか。じゃあ本当に手加減しなきゃな。

「ゲート・オープン。レヴァーティン」

取り出したるはシグナムが持つデバイスの元となった魔剣。本気で真名解放をすれば世界ごと滅ぶだろうから、それは出来ないけど。

……ってそれじゃあ使う意味がないか。やっぱあっちにするかな。

「吼えろ、蛇尾丸」

「な！ それはシグナムの奴の……」

正確には違うけどな。

でもこれだと原作で一護がやったみたいに三回目を狙えば良いから

な。
隙があるんだよな。

「クッ……流石にすさまじい剣技ですね！」

「そう言いながらしつかり隙を狙って三人で攻撃してきてるじゃねえかよ」

あれ？

三人って事はなのはが遠距離で狙ってるのか？
どこに……ってマズ！

「スターライト・ブレイカー！」

「……やったか!？」

「いやいや、そんなに簡単にやられる訳がないだろうが」

とは言ってもあのままだったらつらかったけどな。

「兄上、その剣は？」

「これ？ さっきの奴を一段階強くした」

正解しなけりゃあの砲撃防げなかったしな。

「さてさて、今度はこっちの番だからしつかり防御しろよ？
大砲」
狒骨

やば……少し威力が強かったな。

まあ、防御出来たみたいだし大丈夫か。

「獠牙絶咬」

刃をバラバラに展開して一斉に四人に向けて飛ばす。
……意外と早く片付いたな。

「終わりな」

「うー、またお兄ちゃんに負けた」

「というか兄貴に勝つのは無理だろ？」

「そうだな、兄上にはそもそも勝とうとすること無理があるな」

「何で拓真君の方が強いのに私が悪魔って呼ばれるんだろう……」

いや、それは“お話し”っていうルビがふられる砲撃をぶちかますからだろう。

俺よりもなのはの方がよっぽど悪魔らしいしな。

「何か言った？」

「いえ！ 何も言っておりません！」

そういうのが悪魔って呼ばれる由縁なんだって。

「あ、あの……兄さんはどのくらい強いんですか？」

エリオ、そういうのは本人に聞けよ。

「そうだな……兄上は次元世界全てで襲いかかっても勝てないな」

「いや、あの……冗談ですよね？」

「んな事あるか。お前らはシグナムが冗談言うたちに見えるのか？」

ヴィータもなかなかいいひどいことを言ってるな。
あれ？

でも今のは俺じゃなくてシグナムへの毒舌なのか。

「キャロ」

「はい、フェイトさん」

「キャロの里で言い伝えられてる伝説の竜、ルソーは知ってる？」

「はい。聞いたことぐらいなら」

「あれはお兄ちゃんが従えてるよ」

「ええ！？ 本当でしたんですか？」

それで伝説とか言われてたのか。

ル・ルシエの里で禁忌にされてた森に入った時にいたから捕まえたけど。

「お前らそんなに疑うなら俺の必殺技を見せてやろう」

別に見せた所で減るもんじゃないしな。

それに対策の立てようもないし。

「ホントですか！？　お願いします、兄さん！」

「私も見たいです！！」

やっぱりエリオとスバルは必殺技とかの単語に弱いな。

「では見せてやろう。“百式観音　一の手”」

発動までコンマ一秒。

人間では避けられないその攻撃は空間シミュレーターで作られた木々を破壊する。

フォワード達はかなり驚いてるな。

まあ、しょうがない。

かのKY野郎が一撃で死んだ攻撃だからな。

「ちなみに今のが百の手まである」

「す、すごい。流石兄さん！」

もはやエリオの中で兄さんは確定しつつあるな。

「ママ」

「ヴィヴィオー！」

「危ないよ、転ばないでね」

「うん！」

って“縮地”！

「っと、危ないな。大丈夫か？」

「うん、パパありがとう！」

「おう！ ……ってパパ！？」

いや、俺としては客かではないけどいつの間にそう呼ぶようになったんだ？

「チャチャお姉ちゃんがそうよべって。ダメ？」

「大丈夫だぞ！」

何で上目使いと首コクンのコンボはこんなに威力があるんだ？

第十三話 困ると大体こういう展開になる（後書き）

次回ぐらいでリリカルな世界が終わる予定。

第十四話　そしてStS編が終わる（前書き）

茶々丸の体がドラグーンシステムを搭載させていたから、最終決戦がこんなことになってしまいました。
正直自分でもびっくり。

第十四話　そしてStS編が終わる

「という訳で明日はいよいよ公開意見陳述会や」

という訳で俺もその陳述会とやらに出席しなくちゃいけないらしい。一応茶々丸は自動人形だから連れていけないし、というか襲撃された時に茶々丸が戦ってるのを見てごちゃごちゃ言われるのも面倒だし。

さらに言えば原作通りだったらヴィヴィオをとらえに来るはずだし……まあ、茶々丸とアリシアだけじゃなくてゼスト達もいるから大丈夫だけど。

「あれ、ヴィヴィオ。どうしたの？　ここは危ないよ」

「どうしてもなのはの見送りに行くっていうからな、連れて来た。多分夜勤が初めてだし、明日には俺も出かけるから不安何だろ」

「あ、そっか。なのはママ、明日には帰ってくるから」

「ゼツタイ？」

やばい……すこし不安そうなヴィヴィオ可愛い。

「絶対に絶対。良い子で待ってたらヴィヴィオの大好きなキャラメルミルク作ってあげるから——」

「——ママと約束ね」

そのままへりは飛び立つ。

そう言えばヴィヴィオって六歳ぐらいだよな……なのはが今十九のはずだから中学一年で親になったことになるのか？

……十四歳の母とか目じゃないな。

って俺もそうなのか。

ヤンママとかヤンパパとか呼ばれる事になるのかなあ。

「ヴィヴィオ、今日は一緒に寝るか」

「うん！」

「うーん……副官連れてきて無いのって俺ぐらいなんじゃないのか？」

「しょうが無いやろ？ 茶々丸さんは一歩間違えたら質量兵器やし、間違えなくてもロストログアにはなるんやから」

確かに。

使ってる魔力炉はジュエルシードから創った奴だしな。

「おやおや、久しぶりだねえ」

「婆さん、来てたのか？」

「ミゼット提督、お久しぶりです！」

「そう堅くならなくても良いよ」

「何で来たんだ？」

別に陳述会ごとときには来なくても良いのにな。

「何でってお主の兵器が指摘を受けるからじゃろうが。三人で来ておるんじゃないよ」

「まあ、なんでも良いけどさ。……はやて、ここまでで良いよ」

「分かった」

不味いな……どうなるか俺にもわからない以上は。

「婆さん、多分ここと六課が襲撃を受けるぞ？」

「ここは予想しておったが……六課というのはまた何故じゃ？」

「この間保護したヴィヴィオって言う女の子がな、聖王のクローン何だよ」

「……“ゆりかご”かえ？」

「その通り」

流石に生ける伝説なだけはある。

伊達に酔狂な名前で呼ばれて無いってことか。

「ではお主は六課にいた方が良いのじゃないかい？」

「うんにゃ。あっちには俺の副官もいるし、ゼストとかもいるから大丈夫。それよりも婆さんたちがこっちにいるなら俺はここにいた方が良いしな」

「それじゃあよろしく頼むよ」

「であるからアインヘリアルの運用は――」

つまらない。

本当につまらない。

もう既に開始から四時間近くになるし。

「――ということでマガラ大将には先の兵器の説明をお願いしたい」

あ……話し聞いてなかった。

まあ、適当にやっておけば良いか。

「あの兵器は魔力で動いてるからな、それとなんら違法なこともしてないけど何か問題があるのか？」

「あの兵器は地上本部の承認を受けてないだろうが！」

「いや、兵器じゃないし……じゃあ聞くけどあんたらはデバイスに独自に組み込んだ物を一々報告してるのか？」

「あれが兵器じゃないだど！？ 何をふざけたことを言っている！」

もう疲れた。

いい加減に帰りたいんだけど。

「だから兵器じゃなくて玩具みたいな物だって」

現にヴィヴィオがあれで遊んでるしな。

「というか、それよりもここが攻撃を受けてるけど良いのか？」

さっき“円”使ってみたらかなりのガジェットが侵入しようとしてるんだよね。

——ドォン——！！

しかも御丁寧に砲撃が塔に当たったから衝撃が響いてるし。もう帰っても大丈夫かな？

「なあ、爺さんたち、もう帰っても良いか？」

「外との連絡もとれんし、魔力も結合出来ん。外には出れんよ」

別に六課の方は行かなくても大丈夫だよ……やっぱりここで爺さんたちを守るのが良いのかなあ。

「いや、外に出るのには問題ないんだけど……まあ扉を壊せばただど」

っていかいつの間にかはやてとカリムがガジェットについて説明してるし。

扉ぐらいはあけといてやるか。

「そこどけ、扉あけるから」

「は、はい！」

「扉の向こうにいる奴もどいてろよ……“豪殺 居合拳”……開いたな」

まあ、あとは他の奴らに頑張ってもらうか。

……ってあれ？

しまったあ！

ギンガをとらえようとしてるし。

「はやて、急用ができた。ここを頼む。“光天大壮”」

まさかこんな一大事件の事を忘れていたとは……幸いまだ連れていかれてないから大丈夫っぽいけど……うわっ！
三人に増えたし。

「間に合った……か。ギンガ、無事か？」

「拓真……さん？」

「うち！ 最重要人物か！！」

え？

俺そんなのに指定されてるの？

まあ、どうでも良いけど。

「ギンガ、帰るぞ」

「なっ！！ いつの間に！？」

「お前らじゃ知覚できないよ、今の俺は光と同じ速さで動いてるからな。まあ、それでもやるっていうならどうぞ勝手に」

「クッ……全てがあなたの思い通りに動くとは思わないことです」

そう言えばチンクとはゼストの戦闘機人事件の時にあってるんだよな。

でも、そういうセリフをいっておきながら何で素直に帰るんだ？

六課の方か？

『茶々丸、そっちは？』

『現在アリシアさんとヴィヴィオさんがガジェット殲滅をしています。一部迎撃が間に合わずに隊舎が壊されましたが、私の能力はさらしていませんし、人的被害もありません』

『分かった』

まあ、最低ラインは守ったってことか。

というか、聖王はこっちにあるからな、ゆりかごは動かせないはずだけど……。

まあ、どうとでもなるか。

「ギンガ、立てるか？」

「は、はい……」

ふむ……。

「ちよつとごめんな」

ちゃんと見てみないと戦闘機人の事は分からないからな。
人間の事なら一発で……眼を使えば良いのか。

——神眼、発動

「神経ケーブルの破損はないな。他に機械関係の部品も大丈夫か。
機械との反応もクリア。怪我してるのは……皮膚とか人間の部分か」

「あ、あの……私とスバルが戦闘機人だって知ってたんですか？」

「ああ、クイントさんによろしく頼まれてるしな。それから俺にわからないことはない」

戦闘機人だって事をそんなに気にしてたのか？

「まあ、良いことを教えてやるよ。茶々丸は戦闘機人どころかロボ
ットそのままだ」

「え？ 茶々丸さんが……」

「まあ、特秘事項だけどな。だからそんなに気にするな。……つと、
スバルが来たな」

「ギン姉！！ ……ってアレ？ 拓真さん？」

「よっ、スバル。遅かったな」

機械部品関係じゃないなら普通に回復魔法で大丈夫だな。

「えーつと……とりあえず“回復”。うん、治ったな」

「あ、ありがとうございます！」

「じゃ、俺は帰るから」

とりあえず会議室に戻らないと後が大変そうだしな。
なのはもここに近づいてきてる事だし大丈夫だろう。

「フェイトさん！？」

「今度は何？」

次から次へと予想を上回りやがって。

「そ、それが新型兵器が現れた見たいで……」

「映像出せるか？」

「はい……これです」

映し出されたのは多数の人型兵器。

「ってザクとグフじゃねえかよ！」

何でこんな機械が出てくるんだよ！

アレか？

俺がそういうのを作ったから対抗して作ってるのか？

「俺が行く。ちょっとストレス発散してくるから後はよろしく」

陳述会からかなりイライラが溜まってるんだよな。
ストレス発散がしたかった所だから丁度良かった。

「フェイト、こちら辺にいる魔導師を全員退避させろ」

「え？ お兄ちゃんいつの間に」

「時間はない、一瞬で殲滅させるからな」

「え、あ！ ぜ、全員ここから退避してください！」

やっば一瞬で終わらせるのもつまらないからな……居合拳で一つずつ壊そう。

「ふははは！ 見ろ！ ガジェットがゴミのようだ！」

出来ればザクとグフは茶々丸に倒してもらいたかったんだけどな。それでスカリエッティの研究所で「バカな！ わずか二分で——」みたいなことを言っただけだな。しょうがないからその二機は百式観音で倒すか。

「百式観音 三十六の手」

「に、兄さん容赦ないですね」

「お兄ちゃん……」

「私何にもやってない……」

「よし、終わったな。フェイト、何か残ってるか？」

「えっと……シャーリー？」

『ぜ、全機撃墜です』

良し。

じゃあ帰って寝るか。

あとは良い感じにムラサキ一味が最高評議会とやらを殺してくれると助かるんだけど。

そうしたら三提督をトップに据えた新体制が立ちあげられるしな。

あーあ、こういう面倒くさいことはしたく無いんだよなあ。

帰ったらヴィヴィオで癒しを得よう。

うん、それが良い。

『マスター、六課はアースラに本部を移すそうです。我々はどうしますか？』

『うーん……じゃあ俺たちもエターナルとアークエンジェルに移ろうか』

その方が何かと楽そうだな。

『それからマスター、大変申し上げにくいのですが……』

『何だ？』

『聖王のゆりかごが発進しました』

はい？

いや、だってヴィヴィオは俺の隣で寝てるぞ？

『聖王は？』

『何者か知りませんがゆりかごを動かせる男がいたようです』

あー、それで「思い通りに動くとは思わないことです」ね。

聖王は二人いたのか……ってはい？

『ちょっと待て、男？』

『はい』

『いや、流出した聖王の遺伝子は女のだろ？』

『良く分かりませんが、確かに男が王座に座っています』

まあ、気にしたら負けか。

『それからゆりかごから多数のザク、グフが出撃しています』

『とりあえず俺もブリッジに行くよ。色々と通信を繋いでおいてくれ』

『了解しました。お待ちしています』

うーん……フリーダムは茶々丸だろ、アリシアは管制だから……呼んでおくか。

『二人とも今暇？』

『で、本局はあれをロストログアに認定した訳か』

『そうだ。出来れば君の部隊にも助力を願いたい』

『まあ、そんなときになったら考えるよ』

不確定要素が多すぎるからな。

フォワードは十分鍛えてあるから大丈夫だし。

『婆さん、最高評議会が消えた。計画を実行に移すぞ』

『！ 分かったよ。ゆりかごは任せても良いかい？』

『まあな。じゃあ、そういうことだから六課はゆりかご内部を頼む。外のガジェットとかは俺たちがやるから』

『了解や』

「じゃあこっちも出撃だ」

『ブリッジ遮蔽、対ガジェット戦闘用意。総員、第一戦闘配備、繰り返す、総員、第一戦闘配備。パイロットは搭乗機にて待機してください』

さて、開幕かな。

『茶々丸・マガラ、フリーダム、発進します』

『ずずか・月村、レジェンド、行きます！』

『アリサ・バニングス、ジャスティス、出るわよ！』

『ヴィヴィオ・高町、インパルス、行くよー！』

『シン・アスカ、デス『マスター、真面目に願います』……了解』

もう少しぐらい茶目つけがあっても良いと思うけどな。

『タクマ・マガラ、デステイニー、出撃する！』

豪華すぎるな。

しかも聖王自らゆりかごを落としに向かうとか……なんていう事態なのか。

これならザクとかグフは敵じゃないな。

『皆！ ゆりかごから新型機が出て来たよ』

はい？

どう見てもプロヴィデンスなんですけど……。
まあ良いか。

『あれは茶々丸が相手な。他の奴らは周りのガジェットを制圧』

『マスター敵機から通信が入っています。繋ぎますか？』

『ああ』

『また君か』

何いいいいいい！？
そう来るのか！？

『厄介な奴だよ、君は！』

『貴方は……！』

これってやっぱり応答しなきゃダメだよな。
というか、あいつって聖王まがいの奴じゃん。
転生者ですか？

『あつてはならない存在だというのに』

『何を……！』

いや、本当に、あんたの言うとおりだよ。
確かに俺はあつてはならない存在だ。

『知れば誰もが望むだろう、君のようになりたいと……君のようでありたいと！』

『そんな事……！』

確かに皆俺みたいになりたいだろうな。
なのはとヴィヴィオは俺のものだし、フェイトとアリシアからはお兄ちゃんって呼ばれてるし。
というか、あいつこのセリフかなり切実に言ってるな……。

『故に許されない、君という存在も……！』

『僕は……それでも僕は……力だけが僕の全てじゃない!』

多分。

『それが誰に分かる? 何が分かる? 分からぬさ! 誰にも!』

そうなの?

っていうかここまでは相手の思い通りに運んでるけど、どうするんだ?

『君の歌は好きだったがね。だが世界は歌のように優しくは無い!』

何いいい!

アリサがラクス役なのか!?

ま、まあ一番似合ってそうなフェイトがここにいないからな。しょうがないだろう。

『貴方は、貴方だけは!!』

別に誰も殺されて無いけど……強いて言えば六課の隊舎か?

『いくら叫ぼうが今更!』

それはお前自身の事か?

『これが運命^{さだめ}さ、知りながらも突き進んだ道だろう!!』

『何を!!』

いや、あんたのせいでかなり知らない道になったけどな。

『正義と信じ、分からぬと逃げ、知らず、聞かず！ その果ての終局だ！ 最早止める術など無い！！ そして滅ぶ……人は！ 滅ぶべくしてな！！』

『そんな事！！』

とうかあんたも實際人が滅ぶのとか興味無いだろうに。

『そんな、貴方の理屈！』

『それが人だよ、キラ君……』

『違うっ！！』

俺の名前は拓真だ！！

『人は……人はそんなものじゃない！！』

『ハッ！ 何が違う！？ 何故違う！？ 憎しみの目と心と、引き金を引く指しか持たぬ者たちの世界で！ 何を信じ、何故信じる！！』

『それしか知らない貴方が！！』

大体引き金は質量兵器だから禁止されてるし。

『知らぬさ！ 所詮、人は己の知ることしか知らぬ！ まだ苦しみたいか！？ いつかは……やがていつかはと！ そんな甘い毒に踊

らされ、一体どれほどの時を戦い続けて来た!!』

大体半年くらい？

っていうか場の繋ぎはどうするんだ？

『マスター、敵機がゆりかごから離れて行きます』

『俺が行く。他はゆりかごに侵入する六課メンバーを援護しろ』

さて、次はどうなるのか……。

『どの道、私の勝ちだな。ゆりかごが自爆すれば、ガジェットは発射される!! 最早止める術は無い!! 血は焼かれ……涙と悲鳴は新たな争いの狼煙となる!!』

『そんな……』

ここでアドリブを入れるなんて……。

『人が数多持つ予言の火だ!』

『そんな事……!!』

『それだけの業を、重ねて来たのは誰だ!! 君とてその“一つ”だろうが!!』

『それでも……』

俺はやってない!!

どっちかって言えばお前の方がやっただろう!!

『守りたい世界があるんだ！！！！！』

『うあああああ！！』

自機に砲撃を当てながら進むのって以外に難しいな。
というかこのまま壊して良いのかな？

まあ、大丈夫か、どうせ本人はゆりかごに乗ってるんだろうし。

『茶々丸、俺はゆりかご内部に入るからこの機体を持って帰っておいてくれ』

『了解しました』

「あれ？ 拓真君、どうしたの？」

「いや、聖王もどきの保護と、真実を確かめにな」

あそこだけアドリブ入れたってことはまさかゆりかごを自爆させてガジェットを発射させるかもしれないしな。

「玉座の間はどっちだ？」

「ここ！ エクセリオン・バスター！！」

入った先にいたのは……玉座に座っていた仮面をかぶった男と四番さん。

やはり言わなければならないのだろう。

「クルーゼ！！」

「いらっしやーい。お待ちしました。こんなところまで無駄足御苦労さま。さて、各地で貴方のお仲間は大変なことになってますよー♪」

いつみてもうざい眼鏡によって映しだされる数々の映像。

そのどれを見ても六課メンバーが圧勝しているようにしか見えない。

「どこが？」

「え？」

しかも四番さんはそれを予想して無かったみたいだし。

「大規模騒乱罪の現行犯で貴方を逮捕します！　すぐに騒乱の停止と武装の解除を」

そしてなのはがそれを感じにもせずにそのまま告げる。

「まあ、そんなことはどうでも良いけどな。便宜上クルーゼって呼ぶけど、あんたはどうする？」

「とりあえず保護してくれ。多分クアットロじゃ俺を操れないし、レリックも埋め込まれて無いから」

「じゃ、なのはは四番さんを捕まえてくれ」

「え、でも……」

「ああ、こいつはちょっとした事情があるから」

「……分かった。気をつけてね？」

「ということで、あんた転生者だよな？」

「ああ、まさか聖王に転生するとは思わなかったけどな。……あんたは良いよな」

「というか、俺の他にいるとは……あの少女の仕業か？」

「まあ一応クロノとかがうるさいから逮捕って形を取るけど、窮屈なのは我慢してくれ」

「まあしょうがないよな」

「というかあんたは何者なんだ？ 茶々丸もつれてるし、機体もほとんどそろえてるし」

「うーん……半分神様のチート人間？」

「というか何で俺以外に転生者がいるのか……まあ、あの少女の仕業何だろうけど。」

「あ、そう言えばゆりかごって自爆させるのか？」

「いや？ ヤキンとかジェネシスが無いからそう言ってみただけ」

やっぱりそうなのか……。

「じゃ、あとはKYとかに任せるか。『総員、大将マガラの名において命ずる。ゆりかごから待避せよ。高町隊長とヴィータ副隊長は任務成功次第撤退。以上』そう言えば聖王の力とか使えるのか？」

「まあ、聖王の鎧とかは不安定なら使えるけど」

それじゃあ、何にも足しにならないか。

『拓真君、こっちは戦闘機人を捕えたよ！』

『こっちも起動炉を破壊した』

『それじゃあ退去しろ』

「あんたが操作してるんだから、あんたがいなくなればゆりかごは……あれ？」

うっそー。

自動防衛モードに入っただけですけど。

「あんたが制御してたんじゃないの？」

「いや、俺もそう思ったんだけど……あの眼鏡女が何かしやがっ

たな」

まったく面倒な。

『なのは、ヴィータ、脱出できるか？』

『こっちは問題ねえ！』

『こっちは……ダメみたい。最深部だから飛行魔法が使えないと……』

『そんじゃあなのは迎えに行くからそこにいろ』

「さてと……こっちか。クルーゼ、ちょっと離れてて。“豪殺居合拳”」

「……お前なんでもありだな」

「“縮地”っと、なのは！」

「拓真君！！」

「帰るぞ」

「うん！」

『KY野郎、あとは任せたからな』

『君は……まあ良い。あとはこちらの仕事だ。アルカンシエル、バレル展開……発射』

『命中を確認……そんな！ ゆりかご未だ健在です！』

おいおい、健在って何の冗談だよ。
アルカンシエル数発分だろ？

『KY野郎、どうにかしやがれ』

『なっ！ こんなものを僕にどうしろと!!』

『やっぱりダメダメだな、お前。茶々丸、ゴッドフリートでいけるか？』

『確認中……成功確率35%です。ジェネシスの使用を提案します』

「っってお前！ ジェネシス作ってたのかよ！」

万が一の時のために作って置いたけど……あんまり使いたくないよな。

突っ込ませる口実を与えることになるし……まあ、仕方ないか。

『アリシア、あとは頼んだ』

『良いよー』

第十四話　そしてStS編が終わる（後書き）

まさか台詞がこんなにうまく当てはまるとは思っていませんでした。思いつきでやったらこうなりました。

次回、ネギまに戻るための話なので、かなり短くなると思います。

閑話？（前書き）

ネギまに戻るための話です
なので短めです

閑話？

結局あの後、ジェネシスによってゆりかごが破壊され、事件は一人の死傷者も出すことなく終息を迎えた。

いつの間にかレジアスのもに行っていたゼストがレジアスを改心させ、地上本部はレジアスのもとに一新される。

本局も三提督指導のもと、新たに共和制として立ち上がることになり、三権のうち行政のみを時空管理局から“時空軍”に名を改めて担当することになった。

そして立法機関を各管理世界から選ばれた代表者二名が集う、“評議会”が担当し、司法機関は、特務隊および旧執務官を中心とした“ジェネシス”が担当することになった。

当分の間は混乱を防ぐために最高評議会として一年の間、三提督が運営を担うことになった。

時空管理局——改め、時空軍では、階級がそのまま使用され、各々JS事件によって階級を上にあげる者もいた。

中でも起動六課に所属していた旧局員は、その功績を認められ、八神はやてが少将になったのを始めとして各々昇進した。

ジェネシスではリンディ・ハラOWN旧統括官が代表を務めることになり、そのもとでフェイトを始めとした執務官や、執務官志望のティアナ、ゼストなどの特務隊所属者が活躍の場を広げている。

また、最大の功績者である拓真・真柄大將は現役を退き、高町なのは旧一等空尉、ラウ・ル・クルーゼなどと一緒にミッドチルダにて翠屋二号店を開き、英雄の店として一世を風靡している。

「——か。まあこれで良かったのかな？」

なのはが教導隊を止めたことが一番の衝撃だった。

ほとんど全員から頭がおかしくなったのかと言われて病院を勧めら

れてたしな。

というか最近トップニュースが全部これだよな……おかげで翠屋が大繁盛してるから良いけど。

でも……繁盛しすぎ何だよな、正直。

しかも来る客来る客ほとんどがなのは目当てだし。

まあ、可愛いのは否定はしない。

そしてヴィヴィオがトコトコと歩きながら給仕しているのを見て和むのも良い。

仮名称がそのまま本名になったクルーゼ見たさに来る奴もまあ、許してやろう。

だけど……けど何で俺を見に来るやつとかがいるんだ！

しかも最近ではファンクラブが出来たとか言うのが専らの噂だし。

サインをせがまれることも、一緒に写真を撮れと言われることも、握手をねだられる事もある。

「すいませーん、一緒に写真撮ってもらえませんか？」

「ああ」

とまあ、こんな風に若い女の子が多い。

この間なんかは俺のファンクラブナンバー一桁の子とかが来ていた。けど……けど何で俺がなのはに冷たい視線を送られなきゃならないんだ！！

別に浮気とかしてるわけじゃないのに。

だいたい、良くいるオリ主と違って、ハーレムとかを築いてるわけじゃないんだからこれぐらいは大目に見てくれても良いだろうに。

この間なんか、こっちから女の子に声をかけただけでその日の夜にディバイン・バスターを撃ってきたし。

「拓真君？」

「すみません。仕事します」

無理、あの眼には絶対逆らえない。

原作でティアナに伝説のセリフ、「少し頭冷やそうか」を言った時よりも怖い。

正直、何で顔は笑ったままであの眼ができるのか分からない。

「クルーゼ、なのはが怖いんだけど」

「黙れリア充！ 俺にも少しは女運をわけろ！」

「お前だって人気あるじゃん。かなりの数の女の子に声かけられてるし」

「そうは言ってもなあ……ほとんどが怖いもの見たさだろ？」

「それでも話ができるだけましだってこの間なんか「二人とも？——」」

「——何で仕事サボってるのかな？」

「「すみません！！ サー！ 今すぐやらせていただきます！！」」

俺、いつか絶対に泣くと思う。

「ヴィヴィオは可愛いなあ」

「えへへー、パパー」

やっぱり純粹無垢だから可愛い。
っていうか本当に鼻血でそう。

「うう……」

ふははは、なのはよ、悔しがるが良い。

俺にあんなことをした罰だ！

「なのはママは何してるんだろうなあ？　ヴィヴィオ」

「うう……酷いよ、拓真君」

「むうー、パパ、なのはママをいじめちゃダメ！」

む、娘に怒られた……。
かなりショックがでかい。

「ヴィヴィオ？」

「パパ！　めっ！」

グフッ！

い、今のは威力がでかった。

「なのは、こっちおいで」

「うん！」

こ、こっちはこっちでまた相当な威力だな。

捨てられた犬みたいだったのが一瞬で機嫌なおしたからかなり差が激しい。

「えへへー、良い匂いがする♪」

「ヴィヴィオもするー」

やばい……そろそろ理性が崩壊しそうだ。
とうか幸せすぎる。
もう死んでも良いかもしれない。

『で、また戻ってきたのか。意外と長かったな』

正直この存在をほとんど忘れてた。

結局あの世界では、なのはが死ぬまで生きてたけど、特にその後す

ることもなかった。

『お主にとってはそうかも知れんが、我にとっては短くすらなかったがの』

『で、次の世界か』

『次、というか最初に戻るだけじゃがのう。それからあの世界ではお主の記憶が不正確じゃからな、お主の記憶があつた所までしか生きられん』

っていうと……ラカンが消えるあたりか？

別にそこまでも良いけどな。

今度は……エヴァあたりをゲットするか。

多分なのはも許してくれるだろう。

……うん、きつと。

『そーいや茶々丸はどうするんだ？』

『お主に付いて行かせる訳にはいかんからのう。なんせ世界に組み込んでおらんかったからの。まあ、行かせるとしても本来産まれるはずだった魂と交換させるくらいじゃの』

『まあ、それでも良いから送っておいてくれ』

『それではまた何年後かにの。ちなみに覚えておらんかもしれんが、お主は今から目覚めるとナギが造物主を倒した所じゃ』

あれ？

俺が死んだのって造物主に殺された所じゃなかったっけ？

ま、細かいことは気にしなくても良いか。

『じゃあの』

閑話？（後書き）

ということで、次回からネギまに戻ります。

感想にあった通り、なのはとヴィヴィオを戻してみようかと思っています

第二章 第一話 ネギまに帰還！（前書き）

とりあえず、刹那と木乃香が強くなりました

第二章 第一話 ネギまに帰還！

「……っと」

「おや、目を覚ましましたか。貴方も大概バグキャラですね」

「終わったか？」

「ええ、ナギが造物主を倒しました」

さて、ゲートは……開けるな。

中に入ってるのは……あっちで創った奴も入ってるのか。

「ってことは俺の賞金も取れるよな？」

「まあそうなるでしょうね」

「あ！　そういや治療すんの忘れてた」

ジャックと詠春は……あそこか。

詠春はエリクサーで良いな。

「詠春、これ飲んどけ」

「う……すまん」

ジャックは……どうやって腕を繋いどくかなあ。

腕とかつなげる奴って言えば……マチか。

幻影旅団の。

でもあれは念でやってるからなあ。

俺のも一応念ではあるけど、そこまで上手くつなげる自信もないしな。

まあ、止血だけにしておくか。

「って既にアルがやってたのか」

じゃあ必要ないな。

後はアルと、ナギか。

「二人ともこれ飲んどけよ」

「お！ 済まねえな」

「どうもありがとうございます」

この後は……オスティアが落ちるんだっけ？

後は式典か。

それには一応出ておくかな。

英雄とかになっとけば魔帆良に行った時に便利そうだし。

まあ、マギステル・マギにはなる気はないけど。

その後は特にイベントというイベントも……あつたな。

刹那と木乃香の仲を取り持っておいた方が後々便利だしな。

それはやっておこう。

それぐらいか？

エヴァがナギを好きになるのは仕方ないことだしな。

魔帆良に封じられるためには一度ナギを好きになるのかもしれない。

まあ、色々であった。

約束通り俺にかかった賞金は外れたし、その後でファンクラブと
かもできたらしい。

それでもって今現在はスクナと対面してるんだが……リリカルな世
界でも思ってたけど、こいつ弱すぎ。

今も誰がやるかでじゃんけんしてるし。

まあ、俺は一度戦ってるからじゃんけんには参加しなかったけど。
にしてもいつ刹那と木乃香が会おうんだか……今年二人が生まれる
から数年の内だっていうのは分かるんだけどなあ。

まあ、こっちで適当にぶらぶらすごしながら一年ごとに様子を見に
来れば分かるか。

それまでは……金でも稼ぐか。

そう言えばリリカルな世界で俺が掘り当てた石油の場所、誰も掘り
当ててないみたいだからな。

ここでも発掘しておくか。

ついでに会社を立てて、そこにあらかじめ投資しておいてから株で
儲ければ一石二鳥だな。

そうと決まればさっそく金集めだな。

別に金塊を創って売ったりしても良いけど、良い暇つぶしになるし
な。

金稼ぎでもして時間をつぶすか。

「拳闘大会で金稼ぎしようと思ったのに……」

そう言えば原作ではジャックが影の出資者とか言ってたような気がする。

どおりで賞金の高い拳闘大会が無いわけだ。

一番多い奴でも200万とか……ケチすぎる。

他にどうやって金集めを……まあ、しょうがないから金塊創るか。

「よう、詠春」

いつの間にか刹那と木乃香が知り合ってた。

本当にいつの間にかだった。

つい何もすることが無くてつまらないから遊んでたらしいの間に数年ぐらい経ってて、京都に来たら木乃香と刹那が遊んでいた。

まあ、仲良く遊んでるってことはイベントが起きる前だから大丈夫だろうけど。

「これは、お久しぶりです。拓真。今日はまた何をしに？」

「暇つぶしだ」

と言いつつも実際は二人に会いに来た訳だが。

「木乃香、挨拶なさい」

「はじめまして、このえこのかです！」

「初めまして。真柄拓真だ」

ペコリ、と一礼した後で木乃香は走り去って行った。
やっぱりあのくらいの子供は可愛い。
アルの気持ちが分かる。

「教えないのか？」

「あの子には普通の人生を送って欲しいですから」

「はつきり言うけど無理だぞ」

護衛のために魔帆良に送るとしても、あそこは蟠桃があるし、木乃香の魔力は東洋随一。
狙われないわけがないし、普通の学校では護衛が動きにくい。
魔帆良ならタカミチもいるし、いざという時には妖怪爺もいる。

「やはりそうですよね……」

分かっていながらそれを付き通そうとするのは結構俺的には好きだが、話のレベルが違う。

「大体、木乃香ちゃんを魔帆良に行かせる予定だろ？ あそこは姫巫女もいるし、何より……ここだけの話だが、ナギの子供が先生をするだろう」

「なっ！ それはどういふ……」

「あそこはメガロセンブリアの手がかかってるからな。マジステル・マギを目指させるには絶好の場所なんだよ。しかも多分、爺の事だから裏関係の人間は一つのクラスにまとめて、そこをナギの息子に担当させるだろう。さらに言えば中学の修学旅行は京都だしな」

そのぐらいの事は見抜けないとこの先困ると思うんだけどな……やっぱり詠春は長には向いてないな。

「では今の段階から教えるത്？」

「ああ、今なら刹那ちゃんという、うってつけの護衛もいるしな。まあ、問題はハーフであることを本人が気にするかだが」

「やはり気付いていたのですか……」

「当たり前だろ。それに二、三年くらいなら俺も残って教えてやらんこともない」

「それは……ありがたいのですが、お願いしても良いのですか？」

「暇なんだよ。それから西洋と東洋とどっちの魔法にするんだ？」

「それは……貴方にお任せします」

それはまた……まあ、なら勝手にさせてもらうか。

「アーティファクトぐらいは与えるぞ？」

「それも妥協しましょう。貴方の事ですから何か考えあつての事なのでしょう？」

「了解、じゃあ受け持った」

「ということで、木乃香ちゃんは練習すれば魔法ができる」

「えっと、せつちゃんもできんの？」

「刹那ちゃんは少しくらいだな。まあ、主に剣技——神鳴流を使うことになる。それから……」

やっぱり先に感違いはなくしておいた方が良いしな。

「うわー！　きれいなねや！　さわってもええ？」

「どうぞ」

別に魔法で創った羽だからな。

「だそうだけど？　刹那ちゃん」

「……あ、あんな？ このちゃん、うちも羽があるんよ」

「ほんま！？ みせて！！」

——ファサツ

いや、天使です。

可愛い子がやるとそれにしか見えません。

「うわー！ セっちゃん、天使さんみたいや！ それにこの羽気持ちええわ」

「そうなの？ じゃあ、俺も一つ……本当だ。かなりモフモフだな」
想像以上だ。

これほどまでに威力があったとは……恐るべし、刹那ちゃん！

「あ、ちなみに俺には羽は無いからな？」

「え？ じゃあそれは？」

「魔法で作ってみた。まあ、俺にしかできないと思うけど」

幻術魔法を駆使すれば何とか他人に見せることはできるかもしれないけど。

「まあ、そんなことはおいておいて、魔法の練習に入ろうか。刹那ちゃんは俺の影分身と模擬戦ね」

多分木乃香のアーティファクトは原作と同じだろう。

とすれば原作でエヴァがやったみたいに、木乃香には西洋魔術を教える方が良さだろう。

「さて、じゃあ講義の時間だ。まず魔法には基本的に紙を使ってやるものと、杖を使ってやるものの二種類がある――」

そこからは西洋魔術と東洋呪術の具体的な内容。

それぞれ出来ることを見せながら、二人に何を教えていくかを教える。

まあ、こんな小さい子にはそこまで理解できないだろうけど。

ともかく、目標は二年間で木乃香が無詠昌で魔法の射手を撃てるようになること。

「ということで、説明だけじゃつまらないだろうから、実際に練習。まずは手を出してね」

「これでええの？」

「今から木乃香ちゃんの中から魔力を少しずつ吸い取って行くから、体の中から何かが減って行くのが分かったら言ってね」

原作ではネギが火を灯す呪文を練習させてたけど、才能がある奴はこうしてやった方が良さ……と思う。

何度も呪文を唱えてただけじゃ魔力なんて感じられないんだから。

「わかったえ！ このひゅーって消えてくやつやろ！？」

いや、そんな期待に満ちた目をされても分からないって。

「今度はそれを自分で外に出せるかい？」

「うーん……こう？」

と言われても……って出来てるし！！

流石は東洋随一の魔力の持ち主。

魔法の扱い方に関しても天才なのか？

「じゃあ、今度はこの石にそのひゅーってなる奴を入れてみて。込める力で色が変化するから、紫になったら終わり」

……本当にすごいな。

この石は最初が赤で、魔力を込める具合によって紫に近づく石なのに、最初にして既に橙と黄色を通り越して緑になってる。

この分なら一年間でかなりの所まで行けるんじゃないか？

というか、俺が本気で教えたら確実に世界屈指の治療術師になれる。まあ、身を守ることが目的だから、最初は防御系の魔法を教えて、その後に簡単な攻撃呪文だけど。

「詠春、喜べ。お前の娘は天才だ」

「それは……喜んで良いのか微妙ですね」

確かに。

普通の道に進んで欲しいなら全く才能が無い方が助かるな。

「まあ、聞け。数分で魔力を自覚、それを外に出し、さらには今日でほとんど魔力の調節の仕方もマスターした」

「貴方のおかげでしょう。ありがとうございます」

いや、俺は教えることに関してはそんなに自信とか無いんだけどな。でもよくよく考えたら、管理局の白い悪魔とか、金色の夜叉の師匠だしな。

意外と教える才能はあるのか？

「ちなみに西洋魔術を教える予定だ。最初は防御系の魔法から入る」

「やはり貴方をお願いして良かったです」

「まあ、多分ナギとかジャックとかだったら最初っから攻撃魔法だろうしな。あいつらはバカだし」

「いえ、そうではなくて、ちゃんと木乃香の事を考えてくれてる事ですよ。貴方は身を守らせるために教えてくれている。それが親としては嬉しくて」

何ていうか……ここまで感謝されると修行を完成させてやりたくなるな。

まあ、予定では防御系をマスターしてもらうことになってるけど。時間があったら攻撃と補助、あとは治癒の魔法も教えてやるかな。それに平行してアーティファクトの事もしなきゃいけないのか。忙しいって良いなあ。

今まで暇だったから本当に退屈だったし。

「ひかった！ 紫になったで！！」

二日でクリアか。

本当に天才だな。

魔法学校とかに入ってたら間違いなくマギステル・マギへのレールを敷かれるな。

「じゃあ次はその力——魔力を魔法に変換させる練習。呪文はこう
プラクテ・ピギ・ナル “火よ灯れ”」

「プラクテ・ピギ・ナル “火よ灯れ” ……出来へん」

「いや、一回で出来たらこっちが困るからね。何回も練習して頑張ってみて」

「うん！」

初心者用の杖じゃ、あと後どうしようもないよな……杖でも作ってやるか。

流石に創ると……いや、良いか。

でもやっぱ魔帆良の樹で作るか？

そしたらかなり魔力伝導の高い、最高級の杖が作れると思うけど……いや、どうせならこの世界で最高の杖を作るか。

蟠桃の枝に、なんかの幻獣の一部でも入れるか。

やっぱ日本人だし、八岐大蛇からか？

そしたら草薙の剣の杖バージョンになるし……うん、そうしよう。

そうと決まれば明日あたりに取りに行くか。

でも流石にあの樹の枝を折るのは不味いな。

複製しとくぐらいにするか。

今後何かの役に立つかもしれないしな。

「出来たえ！ 今ぼつ、てなった！」

「じゃあもう一回やってみせてくれる？」

「うん。プラクテ・ピギ・ナル “火よ灯れ”！」

あらら、本当に出来てるし。

練習開始から十分経ってないんだけどな。

「じゃあ、次の練習。今度は片方の手で石を上に向けて、呪文はプラクテ・ピギ・ナル “風花 風障壁”。多分石が落ちてくる前に詠昌を言うのは大変だから、詠昌が終わる直前で石を投げてやってみてね。俺は少し出かけてみるから」

そーいや得意属性を調べてなかったけど……まあ、大丈夫か。どうせ光と風だろうし。

なんせアーティファクトに風の文字が入ってるしな。

防御系と補助系は凡庸性の高い風で大丈夫だろう。

「よう爺さん。ちょっと邪魔するぞ」

「ほっ！？　どうやって入ってきたのかね？　全く結界に反応がなかったんじゃないが」

「まあ、細かいことは気にするな。それより今日は蟠桃を見に来たんだ。それだけが用だからそれが済んだら帰る。じゃあな」

にしても相変わらず後頭部の長い爺さんだったな。

本当に木乃香と血がつながってるのか？

一回ぐらいいはDNA検査した方が良くないんじゃないのか？

「っと、これか」

近づいて手を合わせて解析する。

すると樹が俺を歓迎するかのように手にあてている部分をひからせてくれた。

「うーん……聞こえるんなら聞いてくれ。杖を作りたいから枝が欲しいんだ。もしよければ一本枝を落としてくれないか？」

なんとなくそうせずには居られなかった。

まあ、聞こえてれば僥倖。
そうじゃなくても複製すれば済む話だ。

——ポトツ

「ありがとうな」

まさか本当に声が聞こえるとは思わなかったけど……案外やってみるもんだな。

これで材料の一個目はゲットだな。

後は京都に戻ってから別荘を使って、そこで杖作りか。

やっぱ作るんなら最高の杖だよな。

蟠桃の枝に八岐大蛇の尾か。

考えてみると本当にすごい杖だな。

値段をつけられないんじゃないか？

それこそ国宝級というか、王族の倉庫で保管されるとか、ロストロギア認定を受けるとか。

まあ、なんにせよ今後のためにもこの枝は複製しておいた方が良いな。

「みてみて！」

帰ってきた俺を迎えてくれたのは、木乃香ちゃんの元気な声。

どうやら風障壁の魔法も成功したらしい。

ほとんど一日一個のペースで覚えるとか……何と言うチート。

これで最高級の杖を使うとか……本当にすごいことになるな。

やっぱ教えるのはこういう成長を見れるから楽しい。

まっさらな紙にどんどんと線が引かれて、色が付けたされてく。

木乃香ちゃんの場合はそれが確実に美へと至る絵だ。

完成されたそれをいつの日か見れば良いが、俺は時間制限がある

からそうもいかないだろう。

まあ、途中まで見ればそれで十分良いんだけど。

「じゃあ、今日はこれで終わりね。休むのも練習の内だから」

「えー！　うちもつとできるで？」

「じゃあ、刹那ちゃんと遊んでおいで。体力も必要だから」

「分かった！　せっちゃんと遊んでくる！！」

嘘ではない。

いくら魔法で身体が強化できると言っても、“強化”だ。

元となるからだが強くなければ強化しても意味がない。

その点からいっても、幼少時から魔法一辺倒になるんじゃない、体力も同時に伸ばした方が良い。

そうすることで将来的により選択肢の幅が広がる。

「にしても……刹那ちゃんの方も大概天才だな」

あの年で気を扱い始めるとか……原作で詠春が夕凧を渡した訳が分かる。

しかも烏族とのハーフだから羽があるし、その羽を使って上下左右自由自在の動きが出来る。

訓練すれば現役の詠春に優るとも劣らない腕前に成長出来るだろう。

「やっぱり楽しいな」

刹那にも何かあげても良いけど……夕凧はあれはあれで良い剣だからな。

長年神鳴流によって受け継がれているから、神鳴流との相性は抜群だ。

だから太刀じゃなくて別の物をあげた方が良さそう。

とはいっても何をあげたものか……やっぱ八岐大蛇の尾から作った小太刀とかか？

あっても困るものじゃないだろうし、万が一の時に使えるだろうし。

「うん、それに二人おそろいの方が良いだろうしな」

そうと決まればさっそく別荘にこもって作りに行くか。

第二章 第一話 ネギまに帰還！（後書き）

書いていて気がつきました。

チート主人公だと、話が長く続かない。

なので、リリカルよりも早いスピードでネギまは終わらせて、主人公を弱体化させてから別の世界に飛ばすと思います。

第二話 史上最高の弟子を目指して（前書き）

いつの間にか40万pvと、4万のユニークアクセスがありました。
お気に入り登録をしてくれている皆さん、応援ありがとうございます！

第二話 史上最高の弟子を目指して

「早かったな……」

本当に一年間で防御系と補助系の呪文は教え終わった。

ここから攻撃系に入ろうかと思ってたけど、その前にアーティファクトだろう。

「今日は何するん？」

「今日は仮契約っていうのをやってもらう。二人ともそれぞれ俺と契約して、その後で二人で契約してもらう」

とは言っても俺と契約するのには血で大丈夫だけど、二人で契約するのには困ったな。

まだ字がきれいに書けないからやっぱりキスで済ますしかないか。

「じゃあ、今からここに二人とも名前を書いて。それから少し血をここに垂らすから、指を出して」

血が必要だとは言っても、一滴程度だ。

そのために痛い思いをする必要はない。

神経の通っていない場所を少し針で刺してやれば、それだけで十分な血が取れる。

「はい？」

「そう。終わったら木乃香ちゃんが傷を塞いでおいてね」

二人とも名前を書き終わって、血も貰った。
これで仮契約ができる。

「パクティオー」

それぞれカードが出現する。

多分原作通りのカードだろう。

アーティファクトは変わらないはずだから。

「二人ともカードを手にとって、“アデアット”って唱えて」

「“来たれ”」

木乃香ちゃんは原作通り東風の檜扇と南風の末広。

刹那ちゃんもヒ首・十六串呂が出て来た。

「これから二人にはそのアイテムを使いこなせるようになってもらうよ」

それからそれぞれのアーティファクトの説明。

そしてそれぞれのアーティファクトを使いこなせるようになったら、木乃香ちゃんはいよいよ攻撃魔法、刹那ちゃんはもう一度今度は木乃香ちゃんと仮契約して、もうひとつのアーティファクトを使いこなせるようになってもらう。

今日で二人の血も採取出来たから、二人の固有武装（？）も出来上がる。

八岐大蛇の尾から取った血に、二人の血をそれぞれ混ぜたものを杖と小太刀に取り込ませて、精霊に祝福させれば完成だ。

正直、精霊が見えた時は驚きだった。

神眼を使えばいつでも見えたけど、蟠桃に会いに(?)行った時から精霊が自然と集まるのが常時見えるようになった。

まあ、そのおかげで二人の杖と小太刀を精霊に祝福してもらえるから良い事尽くしだけど。

まあ、欠点と言えば血を取りこんで、精霊に祝福してもらってから、二人以外には完全に扱えないことだけど。

製作者の俺でさえ、効力を十分に発揮できない。

ましてや見知らぬ他人が使ってはなおさらだろう。

まあ、二人じゃない人物が使うことなんてめったにないだろうけど。

「出来た！」

どうやら課題にしていた無詠昌での魔法の射手ができたらしい。

これで後少し攻撃魔法を覚えれば原作でのネギの魔法学校卒業時に追いつく訳だけど……正直魔法の射手だけで足りる。

攻撃魔法に修行を切り替えた時から固有武装の“草桃そうとうの杖”を使っているから、普通の魔法学校卒業生よりも威力が段違いだ。

ちなみに名前の由来は草薙の剣、蟠桃から一文字ずつとって命名してみた。

それでもって肝心の威力は、普通に放った魔法の射手の三倍ほどだ。刹那ちゃんの方も、木乃香ちゃんとの仮契約を経て、もうひとつのアーティファクトを手にし、その使い方もあらかた覚えたので、

固有武装の“草桃そうとうの小太刀”を使っている。

こちらは小太刀本体には蟠桃は使っていないが、鞘に使っているため、そう名付けた。

二人とも俺の予想以上に上手く修行をクリアしてくれたので、こちらとしてもなかなか楽しかった。

が、教えることももうないので、俺はこれから原作開始時期までどこかで修行するつもりだ。

二人に教えていたおかげで自分の修行がおろそかになり、体も少し訛っている。

原作が始まるまでには何とかしなければならぬ。

「ということで詠春、二人に教えるべきことは教えた」

「木乃香の方はどのくらいになりましたか？」

「あいつは天才だよ。防御と補助は一通りマスターした。それから攻撃は魔法の射手しか覚えさせてないけど、護身としては十分だろう」

「何から何までありますがとうございます。本当に君には頭が上がりませんね」

「そんなに気にするな。俺の好きでやってたことだ。じゃあな、多分次に会うのは何年後か分からないけど」

まあ、二人が修学旅行でここに来る時だと思うけど。

「次はどこに行かれるのですか？」

「まあ、ジャックの所だな。リハビリしてくる」

「……あまりいじめないでやってください」

「善処するよ」

そう言えばラカンの強さ表で言ったら俺って戦闘力どのくらいなんだろうな……アレか。

やっぱりここは「俺の戦闘力は53万だ」とか言ってみたいな。実際はそれ以上あるだろうし。

「よう、ジャック、久しぶりだな」

「お！ 拓真じゃねえか！ 丁度良い所に来たな、酒に付き合え！」

まあ、良いか。

原作開始まではかなり時間もあることだし。それにこいつと会うのも久しぶりだしな。

「お前ナギと仮契約してたな？ カードは？」

「あ？ これか？ 生きてるぞ、あいつなら」

やっぱそうか。

まあ、俺はラカンが消えるまでしか居られないからナギと会うことはないな。

「そうか、ナギは別にしても残っている紅き翼はお前に詠春、アルに俺だけだな……大戦のころから随分と減ったもんだ」

ゼクトも仲間って言えば仲間だったしな。

ガトウはつい最近に死んだ。

やはり知っている奴らが死んで行くのはあまり気分の良いものでもない。

「死んだ奴らに」

「ああ、死んだ奴らに」

少ししみったれてるな。

ジャックと飲んでるのに。

「そーいやお前はここ最近は何をしてるんだ？」

「俺か？ 金集めだ！」

酒の入った杯を持ちあげながらそれを目を細めてみるジャック。
どうやらこいつもただの戦闘馬鹿ではなかったらしい。

「その金でな、拳闘大会を開きたいんだ！ 俺みたいな奴隷剣士が少しでもマシになれるように」

「金、やろうか？」

別にそのくらいだったらどうってことはない。
つい最近も稼ぎまくってたからな。

「いや、これは俺の手で集めなきゃならねえからな」

熱いな。

だがそういうやつは好きだ。

自分の目標に向かって一直線に、挫折を思いもせずに進んでいく。

「まあ、金が欲しくなったら言えよ。そのくらいならやるから」

「ああ、ありがとうな！」

やっぱジャックで修行するのはなしにするかな。

こういう話を聞いてると邪魔するのもあれだと思っしな。

それなら……一人で修行するのもあれだしなあ。

アルはどうせ魔帆良の図書室に籠りつきりだし、他の奴らもいない。
となると一人で修行するしか無いのか。

まあ、この機会にエヴァの登校地獄の呪いを解除するのと、姿を本人が望む年齢まで引き上げられるような魔法でも開発するかな。

でも新しい魔法か……暇だから魔法理論にちゃんと基づいた魔法を一から作りあげるか。

それから闇の魔法の敵弾吸収の方法……は良いか。
別に使う機会もないことだしな。

「じゃあな、ジャック。頑張れよ！」

「おお！ お前もな！」

どこで修行するかな？

ふむ……久しぶりに紅き翼の掘立小屋が立ってた場所にでも行くか。
あそこなら人もあまり寄り付かないし。

「そうと決まればさっそく……いや、時間もあることだし歩いて行くか」

「戦闘か？」

かなりの人数の男たちが何かを囲んでいるのが見える。

良く目を凝らして見れば、そこにいたのは小さな女の子。

まだ木乃香ちゃんや刹那ちゃんと同じくらいだろう。

話を聞いてみれば、どうやら魔眼持ちだからということと迫害していたようだった。

「どきたまえ、大の男が寄ってたかって少女をいじめるなど……それ以上俺の気に障ることをするなら黙ってないぞ？」

「何だてめえは！」

「ここ最近は剣聖などと呼ばれるようになっていたものだよ」

「なっ!」とか、「あの英雄が!」などという声がちらほらと聞こえる。

こういう時に名声があるというのは便利なものだ。

「で? まだやるのか?」

少し魔力を開放させながら脅しをかける。

「す、すいませんでした!」

「全く……大丈夫か?」

負傷は……そこまで酷くないか。

別にエリクサーを使う必要もないな。

「ヒール」

適当にそう言ってみて、回復魔法を施す。

多分これで大丈夫なはずだ。

でも木乃香ちゃんに回復魔法を教えるのに、自分でもちゃんと練習した方が良くもしいないな。

「名前、言えるかい?」

「……マナ」

魔眼持ちって時点である程度は予測してたけど……原作キャラか。まあ、別段急いでやることもないしな。

「一緒に来るかい？」

「……（コクッ）」

あの後、マナちゃんから話を聞いていたが、どうやら本名はマナ・アルカナと言らしい。

左目の魔眼は実験によって施されたらしく、その状況は激しくエヴァに酷似している。

今の世の中だと、吸血鬼にしろ、魔眼持ちにしろ、排斥されるのが常だ。

まあ、俺がそばにいてやる分には問題ないはずだが。

とはいっても、マナちゃんは原作ではマギステル・マギと共にNG O団体に所属して紛争地域を歩きまわっていたはずだ。

俺が引き取るとしたらどうしたものか……。

魔眼が排斥されるのは目に見えている。

となると、やっぱり原作みたいに紛争地域を歩いて行った方が良いのだろう。

身を守る手段として仮契約もしておいた方が良いな。

多分、銃が出てくるはずだ。

原作ではそれについて記述されて無かったから分からないけど。

「仮契約って分かるかい？」

「（コクッ）……する」

話が早くて助かる。

一々説明をする必要もないならこちらとしても願ったりだ。

「じゃあ、ここに名前を書いてから血を一滴もらおうよ」

「……キスじゃないの？」

首をコクンと傾けるその姿は、かなり来るものがある。

「ファーストキスは好きな人のためにとっておくんだよ？」

そう言いつつ、契約の書を取りだして説明をする。

そう言えばリリカルな世界ではヴィヴィオの初キスは俺だったような気がする。

そんな俺がマナちゃんにこんなことを言うのもおかしいかな、と思いつつ、暫く名前を書き終わるのを待っている。

すると俺が針を取りだすまでもなく、指の先を噛みきって契約書に血を垂らした。

慌てて治癒呪文で傷を塞ぐ。

彼女としては何で俺が慌てているのか分からないのだろうが、俺としては心臓に悪いことは止めて欲しい。

契約の書に手を当てて、魔力を注ぎ込むことで仮契約を完遂させる。

「……“来たれ”」

俺が何かを言うまでもなく、マナちゃんがそう唱え、現れたのは二丁拳銃。

腰にはホルスターが装着されている。

「これは……属性弾？」

ホルスターについていた一つの部分に目を留め、そこを注視してみると六色の弾丸が入っていた。

どうやら各属性に合わせて色が付いているらしい。

それにしても、結構レアなアーティファクトだ。

普通は一つしか出てこないのに、マナちゃんも木乃香ちゃんと同じように二丁拳銃とホルスターで一セットのようだ。

色も銀と、希少な魔法具であることがカードを見ただけで分かる。

金、銀、虹色のカードは希少な魔法具として裏取引されるぐらいだ。

「……撃つ」

そう言いながらカチャツつと拳銃を構えて前方の岩に向かって撃つ。
どうやら一つ一つの弾丸に、俺と同レベルの魔法の射手ぐらいの威力があるみたいだ。

一撃で岩を粉碎していたし。

「それを扱えるようになろうな」

そうすれば身を守る手段が手に入る。

「……がんばる」

やっぱり可愛い。

その後、一応NGO団体の“四音階の組鈴”に所属させておいて、各地を歩き回った。

俺と居るからなのか、魔眼だからという理由で非難の目を浴びるところはかなり少なくなっている。

それに銃の扱いもこの五年間でかなりの腕前になった。

その後、嬉しそうに二丁拳銃を扱うマナちゃんが転んだ時に、二丁拳銃が重なったと思ったら一つのライフルに変化したので驚いた。思わず治療を忘れてしまったほどだ。

それにしてもレアすぎる。

アーティファクトをライフルに変化させた時は、それに伴ってホルスターについていた弾丸がライフル用に変化した。

それを見てからというものの、色々と変化させてみたら、かなりの種類の銃に変化した。

まあ、銃限定だけど。

それにしてもかなりレア度の高いアーティファクトだ。

ジャックの“千の顔を持つ英雄”にも勝るとも劣らないものだ。

あいつのは剣、マナちゃんのは銃だから、丁度対になるような感じだ。

ちなみに名前は“無常の銃”で、称号は“魔眼持ちの狙撃手”。

ほとんどそのままだ。

ちなみに、裏の世界では“小さな狩人”として名を馳せている。

大きくなったらどうするんだろうか。

今は大体小学三年生あたりだから大丈夫だと思うけど。

「でもそろそろ一般教養も受けさせた方が良いよなあ」

大体中学生ごろから魔帆良に放りこもうと思っていたけど、予定を早めた方が良いのかもしれない。

幼いころから戦場を巡っていたからなのか、一般常識が非常に乏しい。

本人はあまり気にしていないみたいだけど。

でも、原作と同じように刹那とは仲良くなれるだろう。

同じ人に非ざる者として。

それに銃の腕前も、もうほとんど裏の人間としては立派を通り越して凄いのレベルだ。

「ん？」

「終わった」

反応が遅いのは無くなったけど、いまだに片言であるのは否めない。やはり予定を早めて魔帆良に行かせた方が良さだろう。

「マナちゃん、旧世界に行こうか」

「どうして？」

「そろそろ学校に行かせようと思ってね」

「一緒の方が良い」

グッ……涙目に上目使いか……だが！

俺だって成長してるんだ！

「常識とか身につけて欲しいし、友達も作って欲しいからね」

「……分かった。もうちょっと大きくなってから誘惑する」

何が分かったんだあああああ！！

「……やっぱり教育を間違えたな」

「そんなことない」

第二話 史上最高の弟子を目指して（後書き）

木乃香、刹那、マナがだいぶ強くなりました。
この三人は弟子として活躍するかもしれません。

第三話 リリカルお邪魔します（前書き）

なのはとヴィヴィオが登場です。

そしてなんだか書いているうちにプチシリアスに……。

第三話 リリカルお邪魔します

結局あの後、マナちゃんを麻帆良に送った後で俺は漸く自分の修行に乗り出した。

リリカルな世界で完成させた“百式観音”も、最近はめっきり使っていないので、あの頃と同じぐらいの速度で発動できるようになるのが目標だ。

それとついでに、暇つぶしとして精霊たちで遊んでいる。

姿かたちをしっかりと持っているわけではなかった。

以前、ジャックが雷の最上位精霊と戦ったことがあると言っていたが、俺に見えるようになった彼らはそれよりも上の、つまりは最上位だとか、下位だとかに分かれる前の大本の精霊であることが分かった。

要するに、根源に属している精霊たちだ。

ぶっちゃけ、この世界を創った俺としてはそれが分かった時に今まで何で見えなかったのかが分からなかったが、時間をかけて行くうちに世界に創造主として認められたのだと分かった。

それを理解した途端に、音とか空間とか時間などの特殊な精霊も見えるようになった。

そのおかげか、簡単な時間旅行——つまりは原作で超とネギが使っていた戦闘方法が使えるようになった。

正直、無敵を通り越して異常だ——あれ？ このセリフってティアナのだったけ？

まあ、そんなことはどうでもいい。

要するに、今まで発動にコンマ一秒かかっていた攻撃が、それすら必要としないということだ。

まあ、戦闘で使うことは殆どないから、使うのはエヴァの呪いを解くときだけだろう。

……そんな事を思っていたら、事態はいつの間にか急転していた。

「パパー♪」

まさかのここでヴィヴィオ。

何で居るの？　と言う前に、ヴィヴィオの抱きつきによって俺の水月がかなりの被害を被り、同時に次に気が付いた時はなのはに唇を塞がれていた。

まさかの娘の前でディープな口づけを披露することになり、たつぷり堪能された――いや、俺自身も堪能した――後で、漸くなのはの口から舌ではなく、言葉が出て来た。

どうやら死んでから長い間あの全知全能の少女に魂を繋ぎとめられていたらしく、この世界に順応できるように魂を書き換えられてから送り出されたらしい。

……何してんだよ、と思ったのも束の間、次の瞬間には気にすることを止めた。

なぜならヴィヴィオが小さくなっている矛盾に漸く気が付いたからだ。

「ヴィヴィオ、何で会ったころの姿なんだ？」

「私にも良く分からない」

ま、良つか。

そんな事を気にしていたら禿げる。

いや、不老だから禿げることはないんだけど。

それよりも問題は裏関係をどうするかだ。

流石にデバイスを持たせるのは火星人に目をつけられることになる。あれは、この世界とはまた別の発展を遂げた技術だ。

方面が違うからして、この世界では異常技術になることは間違いない。

「とりあえずは仮契約だな。二人ともそこから動くなよ」

手早く魔法陣を完成させてから、二人にそれぞれキスをする。

なのはは問題ないが、ヴィヴィオの時には流石に躊躇った。

まあ、本人がリリカルの世界にいた時でも気にしてなかったから大丈夫なんだけど。

「マジですか……」

これぞご都合主義！ とでも言いたげな仮契約カードが現れる。

なのはの絵はブラスターモードのレイジングハート。

ヴィヴィオの絵柄はストライクアーツ用のデバイス、セイクリッドハートを起動させた聖王での姿が描かれていた。

「二人ともそのカードを持ったまま、“アデアット” って言ってみて」

そして二人の言葉が重なってから、それぞれのアーティファクトが

現れる。

二人ともそれぞれのインテリジェントデバイスに話しかけているが、どうやら応答しなかったみたいだ。

その代わりにアームドデバイスみたいに簡単な命令は実行できるみたいだけど。

もともとの補助機能が失われて、自分で魔法を発動しなきゃならなくなっただのが欠点だが、アーティファクトとしてはこれ以上ない代物だ。

ジャックや、マナちゃんのそれをも超えるだろう。

「解除するときは“アベアット”だから」

この二人が来たおかげで、かなり予定とずれてきている。

……ネギが魔法世界にいる時に俺も新しくパーティーを作るか？

メンバーは俺、なのは、ヴィヴィオ、エヴァ、茶々丸、弟子三人か？……それって紅き翼よりも凄いな。

でも、ジャックがいなくなるはずの時間帯までだからそんなに時間はないな。

魔法世界に行ってから、あつたとして数カ月のはずだ。

「二人とも時間制限の事は聞いているのか？」

「うん。それを教えてもらったうえで来たんだもん。……少しでも一緒にいたかったから」

なのはさん、そういう表情はマジ止めて欲しいです。

娘の前とはいえ、襲いますよ？

「それに私の知らない所で他の女の子とイチヤイチャしてたんだもん」

「……エ？ まさかこの世界の事教えてもらった？」

コクン、と首が下に曲げられる。

怒っては……いるみたいだが、どうやらいきなりOHANASHIにはならないようだ。

俺としてはそういう修羅場的なことは麻帆良に行ってエヴァと会ってからだと思っていたが、予想外になのはが黙認してくれてるみたいなので九死に……いや、万死に一生を得た気分だ。

「それはハーレムオツケーってことですか？」

「……本当はして欲しくないけど、しょうがないもんね」

「なのは、愛してる!!」

もう本当に。

「じゃあヴィヴィオもパパの愛人になる！」

いやいやいや、その姿でそういうことを言うな。

思わず可愛くて抱きしめようとしたけど、よくよく考えてみればヴィヴィオだって一度は寿命を終えてるんだから本気だった。

「私に、ヴィヴィオ、エヴァンジェリンさんに、木乃香ちゃん、刹那ちゃん、マナちゃん。六人かあ……」

「ちょっと待て、エヴァはともかく、何でその三人が入ってるんだよ!？」

「だってマナちゃんは確実にタクマ君の事を狙ってるし、あの二人だって将来はそうなるよ？」

「いや、マナちゃんは確かにそうかもしれないけど、あの二人だって中三だぞ？　どこにそんな根拠が「女の勘」……そうですか」

あの二人も成長すれば十分美少女であることは間違いないんだが……詠春あたりに何て言われることか。

アルに至っては「やはり貴方はバグキャラの器には収まりきりませんでしたか」とか言ってるのが頭に浮かぶし。

「六人ってことは一人四時間かぁ……」

「何その計算！？　それだと俺が確実に過労死するからね！？」

なんかなのはの正確変わったか？

前みたいに他の女の子にうつつを抜かしただけで砲撃とかにはならなくなっただからこっちとしては助かる限りだけど。

「ここが麻帆良学園かぁ。なんだか凄く賑やかな所だね」

なのはが街を眺めながらそんな事を言う。

なのはとヴィヴィオが現れてから数年、漸く原作開始時期になり、俺たちは麻帆良に来た。

認識障害だとかをかけているから、俺だと気付く人間はいない。

多分、タカミチとすれ違ってもばれないだろう。

流石にこちらから話しかけたりしたら気付かれるけど。

「円」……エヴァはこっちか」

前に来たとはいえ、エヴァの家の位置までは確かめていなかった。だから円で探索してみたが、改めて俺がチートだと思ひ知らされる。まさか学園都市である麻帆良全体が覆えるとは思わなかった。

ついでに図書館島で、アルとドラゴンの魔力反応を感知。

精緻な結界が施されていたから、多分この方法じゃなければ誰も気付けないだろう。

「よ、エヴァに茶々丸」

「貴様ー！　今までどこをほつつき歩いていたー！　私が、私がどれだけ探したと……」

あるえ？

何かエヴァが泣いてるんだけど。

しかもなのはにヴィヴィオ、果ては茶々丸まで俺にお前がいけないみたいな目をしてるし。

「ごめんな、エヴァ」

とは言っても、俺はオリ主。

ニコポ、ナデポに引き続いてダキポも会得している猛者だ。

これしきの事でうろたえたりはしない。

茶々丸も早々になのはとヴィヴィオを中に連れて行っただし。

「それで？ こいつらは誰だ？」

漸く泣きやんだエヴァがまず言ったのはそのこと。

俺は時間をかけながら、そしてエヴァに殴られたり罵倒されたしながら話していき、漸く納得してくれたのか、俺の膝の上にちょこんと座ってお茶を飲み始めた。

「そう言えばエヴァの呪いを解くから、妖怪の所に行きたいんだけど」

「何！？ 解けるのか！」

「まあ、たかがナギが力任せでやった呪いぐらい俺に解けない訳がないでしょ？」

それにナギがエヴァに呪いをかけたのは俺を探しに来たエヴァが何時までたってもあきらめなかったから、らしいし。

それを聞いて俺はかなり感動した。

まあ、とりあえずは修羅場みたいなことにはならなかったから安心してるけど。

「あ、後で茶々丸は仮契約な」

原作でもネギに出来たくらいだから、俺に出来ないどおりはないだろう。

別にダメそうだったら契約の精霊に頼めば良い話だし。

「じゃ、妖怪退治に行こうか」

「やっぱり一度解剖して調べてみた方が良いんじゃないか？」

「いえマスター、本当に妖怪でしたら研究者の方々が危険に陥る恐れも」

「このおじいさん後頭部に何入ってるんだろうねー」

「ダメだよヴィヴィオ、危ない人に近づいたら」

「……あの、皆酷くない？ わし、結構傷つくんじゃないけど」

「まあ、そういうことでエヴァの呪いを解くから、あと後の事後処理はよろしく」

「スルー！？ 今若者の間ではやりのスルーというやつ！？ とうかエヴァの呪いを解くじゃと！？」

だからそうだって言ってるのに。

本当に耳が遠くなったんじゃないのか？

いや、耳たぶも長いから妖怪じゃなくて仙人か？

それなら崑崙山から元始天尊とかが来るはずだけど……いや、もしかしてこの爺がそれか？

「ジジイ、もしかして元始天尊だったのか？」

「何！？ こいつが仙人だと言うのか！？ いや、確かに人間にしては不思議な骨の形をしている。……もしかしたら」

「……検索終了。伝えられる容姿との適合率、89パーセントを超えています」

「こらヴィヴィオ、指をさしちゃダメだよ」

「……ねえ、わし、人間なんだけど」

「お前がそれを証明したいならそれなりのものがあるだろう。大体、お前と木乃香の血がつながっているだろ？ それを信じる人間が何人いると思ってるんだ？」

「いや、タクマ、ここには結界魔法が掛けられている。多分、人間の神秘ということで片が付くから信じる人間も少しはいるだろう」

「ですがマスター、麻帆良七不思議のひとつとして近衛家の謎があります。それを考えると大多数の人間が信じていることになるかと」

「ヴィヴィオ、耳を掴んじゃダメだって言ってるでしょ」

「なのはママも触ってみる？ 意外とプニプニだよ？」

「なあ、茶々丸、何の話をしに来たんだっけ？」

「マスターの解呪についてです、拓真様」

そう言えば茶々丸は俺の事をそう呼ぶようになった。

流石に二人ともマスターって呼ばれる訳にはいけないから、そういう対策を取ったんだけど。

「そうだったな。そういうことで解呪するから」

「いや、そんな簡単に言われても困るんじゃないけど」

「安心しろ、ナギの息子がいるまではここにいてやる。それからそのバカ坊主の修行もつけてやる。あとは……警備だな。マナの倍の額でやってやるよ。もちろんこの二人も。それからなのは女子寮の寮長もやってもらう。だから、ヴィヴィオを坊主のクラスに編入させろ。この二人の実力は俺のお墨付きだ。試験の必要はない。それから、今日の夜にでも顔合わせは執り行う。裏関係の人間を集めておけ。……ああ、そうだ。俺はその時にタカミチとやってやるよ。久しぶりにあいつの実力も確かめたいしな。今日中にこれら全部の準備を終えておけよ。異論は認めない。もし全部出来てなかつ

たらくここが消えると思った方がよい。ついでにメガロセンブリアの元老院とかも。じゃあ、俺たちは行くからよろしく」

かなり強引にことを運んでから全員で部屋を出た。

その後少ししてから学園長室でタカミチを呼ぶ声や、しずな先生を呼ぶ魂からの叫び声が聞こえたが、気にしないでおう。

「おい、どこに向かつてるんだ？ この先には図書館島しかないぞ？」

「そこに向かつてるんだよ。ちよつと挨拶をしにね」

近づくことで、さらにここに施されている結界がかなりのものであると分かる。

エヴァが十数年も通ってて気付かない訳だ。

「出たか」

「な、何でこんな所に竜種がいるんだ！？」

門を守る犬が番犬だから……。

「番竜？」

「ふざけたことを言っていないでどうにかしろ！」

「なのは」

「“来たれ” デイバイン——バスター！」

竜を倒すまでにかかった時間……目視からおよそ十秒。

流石にふざけた数値だな。

ほとんどタカミチクラスの成績だ。

「……お前の従者はふざけているな」

俺も非常にそう思う。

まあ、元の世界では世界を救った英雄のひとり——いや、女だから雄じゃなくて英雄？——なんだから、当たり前と言えは当たり前だが。

「従者として一番ありえないのは俺だけどね」

エヴァの従者としては、釣り合うレベルの人間はいないから、丁度良いと言えば丁度いいともいえるが。

それに俺のアーティファクトも反則どころかそれだけでナギにも勝てるようなものだし。

仙人の活躍を描いた漫画で、頭に輪っかがアル平和主義者の十二仙の一人に数えられる人が持っている宝貝とおなじで、使用者から半径10メートルの元素と重力を操る。

まあ、元ネタらしきものとは違って、スーパーコンピューターのよ

うな機能はないけど。

「つと、ここか。……お久、アル」

「なるほど、貴方でしたか。それにキティと見知らぬ人も二人。ようこそいらっしやいました」

「その名で呼ぶな！！　って何でお前がここにいる！」

「友との約束でして……それよりも良くここが分かりましたね」

「エヴァを探したついでに見つけた」

うん。

嘘は言っていない。

「最高の結界をその一言で済ませるとは……やはりバグキャラの筆頭だけがありますね。それでまたここへはどういった要件で？」

「いや、単に会いに來ただけ。ああ、そうだ紹介するよ。俺の従者の高町なのはと高町ヴィヴィオだ」

「これはどうも。私はクウネル・サンダースというものです。ああ、そうだこれから私の事はそう呼んでくださいね」

「食っちゃねの生活を送ってるからクウネルか？」

「ええ、それしか楽しみがないもので。良ければ茶などどうですか？　良いものをそろえてありますので」

「頂くよ。夜まで暇だからな」

その夜、世界樹広場に到着すると、学園中の裏関係の人間が集まっているかのような大人数だった。

そのほとんどが英雄である“剣聖”——もっとも、剣を使うのは手加減のためだが——を一目見ようと、そしてその力を見ようと集まった者たちだ。

正義に燃えるバカ共が大半を占める中、弟子三人や、タカミチ、学園の魔法先生としては希少種のふくよかな何とか先生。彼とは友達になっておきたい所だ。

多分、というか絶対においしい店を知っているだろう。

「木乃香、刹那、マナ、久しぶりだな」

三人とも原作と同じくらいに成長——いや、刹那が若干背が高いような気がするが——したその姿でいきなり飛びついて来た。

木乃香と刹那はそれほどでもないが、マナは成長が女の子特有の部分に成長してるから、当たるものが当たっている。

人のいない所なら良いけど、こういう大勢がいるところでは慎んでほしいというのがささやかな願いだが……やはり育て方を間違えた

のだろう。

してやったりとでも言いたげな目で俺に笑いかけてるし。

「ついでにタカミチも久しぶり」

「僕はついですか……というか来るなら連絡ぐらい入れてくださいよ」

「タカミチ……すこし老けたな」

「スルーですか!？」

やはりタカミチいじりも楽しい。

というか、小さいころを知っている分、本当に老けていると思う。

まあ、ガトウに似てきたが。

それについて、で何が不満なんだろうか。

エヴァ、茶々丸、弟子三人、なのはにヴィヴィオの六人が最優先事項で、その次に紅き翼がランクインしてるのに。

というか、いい加減周りのざわめきがうるさい。

やっぱりアル―クウネルみたいに式典をサボれば良かっただろうか。

というか、絶対に持ち場を離れている奴とかもいる。

裏の人間のほとんどが集まってるから、表でも鋭い人間とかは気付いてるみたいだし。

……忍者とか。

大体ここから1kmちよっとか？

まあ、その程度なら俺以外には気付かれないだろうし、ここにいるメンバーでも、茶々丸とマナ以外には見えないだろう。

「さて、皆知っての通り、今日から“剣聖”が警備に参加する事と

なった。そして……エヴァンジェリンの呪いも解除する事となった」

その一言でざわめきが走る。

「そんな……」とか、「学園長、危険です!!」とか言っているのが読唇術で分かる。

耳を塞いでいるので、正確に何と言っているのかまでは読唇術を持つてしか分からないが。

ガン何とかが叫んでいるのは間違いない。

耳を塞いだのに声が聞こえたから。

「おい」

俺の一言で場が静まり返る。

正直うるさかったし、ストレスもたまってきたから丁度良かった。

「その黒いの、何が危険なのか説明してみろ」

「闇の福音は悪の魔法使いです！ 再び解き放てば人が死にます」

やはりオリ主がアンチマギステル・マギになるのは必然なのだろう。聞いていて、いや、みているだけで反吐が出る。

「では昔話をしてやろう……ある所に一人の少女がいた。お城暮らして、不自由なことも特になく、ごく普通の裕福な女の子として人生を歩んでいた。所が十歳の誕生日に魔法使いという恐ろしい悪魔によって吸血鬼に変えられた。少女はその後、吸血鬼だというだけで命を狙われた。いきなり吸血鬼にされ、襲いかかってくるのは自分の命を狙う者たち。彼女はしょうがなく、自分の命を守るために力を手に入れた。それまで無縁だった力を。得てして彼女は襲撃者たちを撃退する事に成功した。自分に敵を十分に撃退するだけの力

がなかったから、その際に敵の命を刈りもした。そして少女はそんな日々を繰り返しながら一人の男と出会う。そしてその二人は襲いかかってくる者たちだけを倒していった。繰り返される日々、そのうちに二人は悪の魔法使いと祖の従者として恐れられるようになった。そして男は暫くしてからあるパーティーに参加する」

そしてそこからは俺の話が始まる。

ここにいるバカ共に分からせるために、口をはさませないために、エヴァがばらしたくなかった過去をばらしてしまったが……後でお叱りは受けるでしょう。

「目的は自身と少女にかかった賞金首の解除。英雄になればそれが叶うと分かっていたから、敵である者を、今までと変わらないように、倒せば英雄になれると分かっていたから。そしてその慣れ果ての姿は、“剣聖”はいつの間にか“マギステル・マギ”などという偶像に昇華された」

言葉を失う、というのが正しいのだろうか、風の音だけが広場を包んでいた。

そしてそれに倣うかのように、なのはがエヴァを抱きかかえていた。ヴィヴィオもエヴァの手をしっかりと握っている。

「いつの間にか、剣聖本人にも気が付かない間に、世間での評価は闇の福音の従者から、マギステル・マギに変化していた。そして剣聖が闇の福音の従者であったことは、悪の魔法使いの筆頭であったことは忘れ去られて行った」

「……」

「これで昔話は終わりだ。……さて、ここで問題だ。この中で“正

義”でなかったのはどいつだ？ 吸血鬼にされた少女？ その従者？ 教えてくれ、“正義の魔法使い”の諸君。誰なんだ？」

沈黙。

それだけが場の支配者が与えたものだった。

先ほどまで広場にあった興奮は冷め、いわゆる負の感情が満ちていた。

「ジジイ、どうやらエヴァの解呪に反対のものはいないようだな」

「そうじゃの……それにしても、ちとこの者たちには荷が重い話じゃったな」

「喜ベジジイ、あんたの孫はこの中でも、まともな、そして世界に誇ることのできる“立派な魔法使い”だ。この俺が保障してやる」

「君の弟子何じゃから当然じゃろう……ふむ、君の力を見せてもらうどころの空気ではないの。今日はこれで解散にするか。タカミチ君だけ残って他のものは解散じゃ。木乃香も刹那君も、龍宮君もじゃ」

その言葉に、少しずつ正義の魔法使いたちが帰り、自分の持ち場に移動していく。

残されたのは、世界でもまともな、現実を分かっているメンバー。

「……人の過去を勝手にばらしおって」

「ごめんな。我慢できなかったから」

「ふん……。帰ったら血を吸わせろ」

不機嫌なお嬢様はそっぽを向きながら俺の服の裾を掴む。

その姿はまるで子供そのもので、とても闇の福音と呼ばれるようなものではない。

「ジジイ、ボーヤの事はどうする？ 俺に任せたら確実にこちら側になるが」

「君に任せるよ。どうにもここにいる魔法使いは正義の観念にとらわれすぎているようじゃからの。それにその方がナギも喜ぶじやろう」

それは間違いないな。

ここの魔法先生に任せれば、確実にアル好みの歪んだ育ち方をするが、ナギやアリカは不満だろう。

「それにしてもボーヤも悲運なものだ。片や英雄の息子、片や災厄の息子だからな。まあ、アリカは災厄何かじゃないし、世間には認知されて無いだろうが」

本当にかわいそうな奴だ。

親がアリカだというだけで命を狙われ、拳句マギステル・マギなどという偶像を目指すように線路が敷かれている。

せめてその線路から外し、環境に負けないだけの力は与えてやろう。

「タカミチ、お前は現実を見てろよ」

そして願わくば紅き翼の意志を継ぐ者としてネギの事を見守ってやって欲しいものだ。

「はい……タクマさん、さっきの話は本当の事ですか？」

「ああ、そうだ。いずれは元老院を潰しに行こうと考えている」

「それは、ちと困るんじゃないが……」

「まあ、これ以上俺の気に障る事をしなければ大丈夫だ」

「貴方は一人で世界を相手に出来ますからね……」

「というか、完全体のエヴァと茶々丸、なのは、ヴィヴィオに弟子三人だったら紅き翼にも勝てるはずだ。」

「ヴィヴィオの聖王の鎧はマジックキャンセルになってたし。あれはよくよく考えてみるとかなりのチートだ。」

「まあ、何はともあれ、明日から教導頼むぞ。なのは」

第三話 リリカルお邪魔します（後書き）

そしてネギの強化フラグがたちました。

ネギ君は原作と違って、だいぶ強くなってから甘い考えも捨てる…
…かもしれません。

第四話 修学旅行（前書き）

とりあえずネギまの終了までの構想はたちました。

後は文章を書いていくだけ。

でも、終わり方が酷かったり、話が短くなったりするかも知れませんが。

第四話 修学旅行

「では修行を始める前に言っておこう。マジステル・マギを目指すなら今すぐに麻帆良を出てN G Oにでも入れ」

まず始めに幻想を壊す。

魔法世界に行く時に刹那と木乃香がどうするかは知らないが、万が一俺と行動を共にするのなら、ネギパーティー、つまりは白き翼にとって大ダメージとなる。

治癒術師と前線主力がいなくなるなど、本来のあるべき形を知るだけあって、ありえないと断言できる。

だからこそ、自分の意志を強く持つために、まずはふざけた考えを排除しておく。

「それからサウザンドマスター、ナギを目指すなら止めた方が良い」

「と、父さんを知ってるんですか!？」

「ああ、だがそんなことはどうでも良い。京都に行くまでにこの魔法先生よりも強くなってもらってからそのつもりでいろ」

教導は全てエヴァとなのは任せだ。

世界最強の魔法使いと教導のプロが組めば、甘ちゃんのネギでも幾分かマシになるだろう。

俺が教えるのは木乃香、刹那、マナだけだ。

と言ってもマナはひたすら実戦あるのみだし、刹那に教えるのも青山宗家に伝えられる技だけだ。

教える、という点では木乃香に回復魔法を教え込むだけだ。

幸い、エヴァの別荘にあった魔法書と、俺が魔法世界各地から集め

て来たもの、アルに頼んで図書館島から探してもらったものもある。教本としては現存する回復魔法のほとんどを知ることができるだろう。

木乃香にはこれを全て扱えるようになってもらい、さらにその上で独自の魔法を開発してもらう。

目指すのは“世界屈指の”どころでなく、“世界一の治療術師”、刹那には“剣聖”を、マナにも“世界一の銃使い”を目指してもらう。

まあ、修行をするのは俺の影分身だが。

「やあ、待ったかな？」

「いや、呼び出したのはこちらネ。来てくれたことに感謝するネ」

「それで、何の用かな？ 火星人殿」

その言葉で超の肩が震える。

どうやら俺という存在を確かめに来たものの、自分の正体がバレルとは思っていなかったらしい。

「……あなた、何者力？」

「何だ、俺の事は歴史になかったのか？」

てっきりあるものだと思ってたけど……どうやら平行世界の住人のようだ。

「紅き翼には貴方の名前はなかつたヨ。私の事を知てる言うことは貴方も未来から来たカ？」

「俺は未来でも過去でもない。人外存在であることは間違いないがな。……ああ、それと俺をどうにかするのは止めた方が良く。俺も時間を操れる」

「……こちらの手札もお見通しカ。これは困たネ」

「まあ、お前の計画には手出ししないから安心しろ。その代わりに俺の弟子はどうするか知らんがな。……っと、お客様みたいだぞ。早く帰った方が良くんじゃないか？」

どうやら危険人物の超と俺が会ってたから来たらしい。

まあ、こっちに何か手出ししてきたらやり返すだけだけど。

「守てくれないのカ？」

「知らん。俺が守るのはエヴァ達だけだ」

別に正義とか立派とかどうでも良いし。

「分かつたヨ。ではこれで失礼するネ」

まさか魔法先生とかの後始末って俺がする訳？
めんど……。

「クッ……一歩遅かったか。……何をしていたか教えてもらえますか？」

何だっけ。この人の名前。

確かガン……どうでも良いか。

「ガングロ、俺はここの生徒とお茶をしていただけだ。何か文句があるのか？」

「ガング……超は何度もこちらの指示を無視して首を突っ込んできました。しかも悪の魔法使いである闇の福音にも手を貸してるんですよ!？」

「……“百式観音 一の手”」

最大出力ではないが、ジャックの最大出力ぐらいの威力はあっただろう。

「言わなかったか？ エヴァの事を悪く言えば俺が黙っていないとおい、その影使い。こいつを処分しておけ……っと、タカミチが来たか」

「……一足遅かったみたいです」

「一足どころではない。というかここにいる奴らはバカなんじゃないのか？ エヴァを侮辱した挙句、この人数をそろえれば俺に勝てると思ってるみたいだぞ？」

「見逃してくれませんか？」

「まあ、お前に免じて許してやるよ。俺もエヴァと同じく誇り高き悪だからな」

全員で来れば何とかと、思っているあたり、バカ共しかいない。

ここにきてなかったのはタカミチと、妖怪、それにぽっちゃり先生だけだ。

ぽっちゃり先生はともかく、タカミチを連れてきてないとか阿呆すぎる。

俺は汚れ一つ付けずに紅き翼に勝ったのに。

まあ、それを知ってるのはあの時いたメンバーだけだけど。

「タカミチ、こいつらにしっかり教え込んでおけ、俺がいかにか強い」

タカミチは苦笑しているが、これから先に俺たちに突っかかってくるようなら、麻帆良の警備員の数が著しく減って行くだろう。

それは流石に、マナや、一応警備員のエヴァに悪い。

仕事が増えるかもしれないから。

それに、防衛ラインを突破されればクウネルにも迷惑がかかるだろう。

もらうものをもらっておいて、迷惑をかけるのは俺の主義に反する。

「改めて考えてみると、凄いメンバーだな」

原作通り、京都へ修学旅行に行くことになり、班もヴィヴィオが入った以外は変わっていない。

後は、なのはが副担任として、俺がなぜか広域指導員として着いて行くことになったことか。

何故に広域指導員が付いて行くのかはここでは考えないことにしておこう。

「刹那にエヴァ、茶々丸、ヴィヴィオ、ザジカ」

戦闘力ならこの班が一番だろう。

俺もなぜか一人休みのこの班に組み込まれたし。

というか、相坂は自爆霊だったからそこから解放して連れて来ただ。

そのおかげで俺が取り付かれることになったが、気にしないでおく。そして京都に向かうのに、木乃香の護衛を頼まれたが、正直今の木乃香なら、フェイトか、月詠が出てこない限りは大丈夫だ。

「というかこのカエルうざいな。ネギ、何とかしろ。それでもやつの息子にして最強の魔法使いの弟子か？」

というか、本当に講師陣とかは最強だな。

「は、はい！　ラス・テル・マ・スキル・マギステル　“戦いの歌”」

ほう……なかなかの足運びに魔力運用だ。

これならガングロひとりぐらいになら勝てるだろう。

クーフェイに中国拳法を習わせたのが効果を発揮してるみたいだな。闇の魔法を将来的には教える気だろうから、今のうちから戦闘スタイルを確立させておくのは良いことだ。

「なかなかの仕上がりじゃないか。エヴァ、なのは」

「フツ、当然だ。この私が教えているのだぞ？　そうでなくては困る」

そう言えば俺が何年かけて開発した、吸血鬼でも体を成長させる魔法は、使わなかった。

俺がエヴァは小さい方が良かったし、それをエヴァに言ったら了承してくれた。

その代わりに、俺が座っている時は、俺の膝の上に我が物顔で座ってるけど。

まあ、可愛いから良しとしよう。

「それにあの子スジが良いからね。教える方としても教えがいがあるよ」

多分、なのはに砲撃を当てられているのだろう。

最近、ネギはなのはの言うことには瞬間的に反応するようになったし。

「まあ良い、今のうちに対策会議をしておこうか」

これから京都に行くにあたって、動くであろう関西呪術協会の妨害———というか、眼鏡女の事をどうするか。

「この程度の妨害ならわざわざ貴様が出る事もないだろう。放っておけ」

そういう訳にはいかないんだよねえ。

なんせ敵にあのアーウェルンクスがいるんだから。

あいつが本気になったら、もしかするとエヴァでも危ないかもしれない。

俺がやる分には全く問題ないけど。

「ネギに任せてみるか……それでダメだったらその時だな」

一応俺の弟子がアーウェルンクス相手にどこまでやれるのか知りた
いし。

……でも、木乃香が誘拐されなかったらあの鬼神が出てこないのか？
それは困るな。

あれはでかいから良いストレス発散になるんだけど。

そう言えばエヴァとの戦闘イベントがなくなったのに、しっかり明日菜とは仮契約してるんだよねあ。

やっぱり主人公補正がかかってるのか？

だとしたら、いずれは俺にも勝てるはずだけど……でもリリカルな世界でも俺が最強のままだったしな。

関係ないか。

「エヴァ、なのは。音羽の滝でもらってきた酒、飲むか？」

妨害、と言うほど妨害になっていなかったもので、先回りして設置してあった酒をもらってきたが、すぐに酔い潰れることができるように、かなり良い酒だった。

「未成年に飲酒を勧めるか……悪だな」

クククと笑いながら、エヴァは俺の膝の上で酒を煽っている。

未成年って……外見だけだろうに。

吸血鬼としての能力も取り戻してるから、酒ぐらいでは酔い潰れたりしないだろう。

なのはも……やばい。

なのはって酒癖が悪かったような気が……。

「ラクマくん！ 何れエラちゃんばかり構うんれすか！ なのはももう少し甘えたいれす！！」

「何だ何だ？ 修羅場じゃないか」

エヴァは煽るように俺の首に手を回して、頭を近づけて来た。分かっててやってるのだからタチが悪い。

まあ、何人にも手てを出してる俺も悪いと言えば悪いが。

「エヴァ、一時間」

「チッ、しょうがないな。だがそれが終わったら酒盛りに付き合ってもらおうからな」

ハーレムを成功させるのに、一番重要なことは、いかに女の子同士が仲良くなるか、そしていかに均等に接するかだ。
その分、俺の睡眠時間は少なくなるけど。

「……キス」

「はいはい。お姫様」

「お、来たぞ」

「ふん、西の者か。……おい、本当にこいつなのか？」

「まあ、こいつはネギにすら敵わない……というか肝心の木乃香にすら勝てないけど」

うん。

木乃香を強くしすぎた。

今更にして思うけど、麻帆良の魔法先生だったら、タカミチと学園長以外には勝てるだろう。

ってことは、木乃香って麻帆良では十本指に入るのか？

俺……は除いたとして、エヴァ、なのは、ヴィヴィオ、マナ、刹那、タカミチ、学園長、クウネルか。

それ以外には……茶々丸が同等くらいか。

本当に十位以内に入ったな。

「本命は……多分今日は出てこないな」

ネギが詠春に会う日のはずだから。

というか、ネギも簡単に小太郎に勝てるだろう。

刹那は月詠に問題なく勝てる。

……本当に敵はアーウェルンクスだけだな。

「ま、どうでも良いか。いざとなったら詠春が関西を動かすだろうしな」

先に式神を送っておくか。

どうせ詠春に会いに行くのは事件が終わってからだし。

第四話 修学旅行（後書き）

一話で終わらせるつもりでしたが、対スクナは次回に持ち越します。一話の分量が少なくなっていますが、気にしないで下さい。

作者が自分の文章力のなさを憐れんで、早く次に行こうとしてるためです。

ちなみに次の世界はナルトになりそうです。

それも、今までのようなチートではなく、修行して最強になってもらいます。

……まあ、主としては恋愛をメインにする予定ですが。

第五話 なんとなく詠春が弱く思えてくる（前書き）

誤字などの訂正はネギまが終わったら取りかかろうとおもっています。

第五話　なんとなく詠春が弱く思えてくる

「で、攫われたんだ」

ネギの報告を聞きながら、着々と準備を進めて行く。

それまでにあった仮契約イベントとか、その他もろもろのイベントは原作通りに進んだので割愛しておく。

あ、でも仮契約イベント――つまりはエロオコジョと朝倉が結託したイベント――では、マナ、木乃香、刹那が参加していて、かなりマジでやっていたのが原作と違うところか？

まあ、普通に俺の方からデープな奴で意識を失わせてやったけど。というか、本当になのはの言ったとおりになった。

まさか木乃香と刹那が俺を狙う為にこのイベントに参加するとは思ってもなかった。

カードはもともと持つてるから何も賞品がなかったし。

しかも刹那に至っては「木乃香お嬢様から離れるわけにはいきませんから」とか言いながら枕を手にして、真っ赤になってたし。

まあ、三人とも可愛かったし、御馳走様でしたと言っておう。

「じゃ、ちゃんと取り返しに行つて来いよ。なのはとヴィヴィオ、マナもそっちに向かつてるから、俺が着くまでには何とかしておけよ」

にしても、刹那でもアーウェルックスには勝てなかったか。連れ去られないくらいなら出来ると思つてたけど。

「お話があるでござるよ」

「丁度よかった。方向はなのはが教えてくれるから一緒に行つて来

い」

ここまでは原作通り。

綾瀬が抜け出して、忍者に援軍を要求する。

そして援軍として向かうのは、大量の助っ人。

……今気がついたけど、木乃香って魔力の操作をやってるから原作よりも魔力を引き出しやすくなってるのか？

そうしたら鬼神が完全に復活するな。

「ま、どうでも良いか。エヴァ、茶々丸、行くぞ」

まずは詠春の石化を解きに行った方が良さだろう。

時間は腐るほどあるんだし、原作と違って刹那も石化しちゃったらしいし。

やっぱり斬魔剣・終の太刀を覚えさせてから来させるべきだったか？
流石に弑の太刀だけじゃアーウェルックスには勝てないだろう。
全盛期の詠春でも危ういくらいだ。

「つと、ここか」

石化すると、魔力の残りが分かりにくいから探すのに“円”を使うので、面倒だ。

まあ、魔力も気もなくなることはないから問題ないけど。

「プラクテ・ピギ・ナル “石化解除”」

なんとなく、詠昌を言ってみる。

理由はない。

ただ単にそういう気分だったただけだ。

「ッ……ここは……タクマ!?　そうでした!　木乃香が!!」

「タクマ様、このちゃんが!!」

二人とも凄い慌てぶりだ。

エヴァとか耳を塞いでるし。

そう言えばネギは学園長には連絡を入れなかったのか?

俺の所に連絡が来なかったし。

それに他の魔法先生はどうしたんだ?

まあ、ほとんど糞みたいなやつらだから期待するだけ無駄か。

「まあ、二人とも落ち着け。向こうにはマナとなのは、ヴィヴィオが向かってるから」

「ですが……あの白い髪の少年は別格です。いくら貴方の教え子でも勝てるかどうか……」

まあ、勝てないだろうな。

あ、でもヴィヴィオは魔法完全無効能力だから、何とかすれば良いところまで行けるかもしれないか。

「お前気付かなかったのか?　あれはアーウェルクスだぞ?」

というか、石化させられたんなら、姿を確認したんだから分かるはずだろうに。

「あいつですか!?!　クッ……どうりで本山の結界が抜かれる訳です」

「というか刹那、そわそわしてるなら行って来い。多分鬼神が召喚

されてるけど、放っておいていい。気をつけるのは白髪だけ。あとは木乃香を取り戻してこい」

「はい！」

早っ！

街中で翼を出して飛ぶのかよ……あいつ俺が認識阻害をかけておかなかったら明日は新聞の一面を飾る所だぞ？

「あ、詠春はどうする？ 俺たちと一緒に観戦するか？」

「はい？」

聞こえなかったのか？

全く……大戦のあとから少しも訓練してなかったのか。本当に訛ってるな。

「だから、観戦するか？ って言ってるんだよ。満月じゃないから月見酒にならないけど」

「貴方は……いや、貴方は大戦のころからそうでしたね」

「見ろよ詠春、スクナが完全に復活してるぜ」

「ナギみたいと言わないでください！」

分かったんだ。

俺がナギのまねしてみたの。

でも暇なんだよな。

「お、刹那が木乃香を取り返したか」

他の奴らも善戦してるみたいだな。

マナは言わずもがな、月詠を圧倒してるし、楓とクーフエイも良い線行ってる。

アーウェルンクスの方は……やっぱネギとなのはとヴィヴィオ、明日菜の参人がかりでもダメか。

二人のマジックキャンセルをかなり上手く使ってるみたいだけど。

「エヴァ、じゃんけんほい！」

俺がグーで、エヴァがチョキ。

ということで、俺がやることになった。

「悪いね。俺の勝ち」

「というか、あの白髪は私でも勝てるか分からんぞ？」

「あれはしょうがないよ。昔、ナギと引き分けた奴だから。あ、そう言えば詠春はじゃんけんしなかったけど良かったのか？」

「私を貴方達と同じ価値観で計らないでください……というか楽しそうですね、タクマ」

「まあな。新しく開発した技を遠慮なく使えるからさ」

これで俺が剣聖と呼ばれる日々も終わりだ。

これからは……“ 仏 ”？

「ま、良いや。行ってくる」

「なのは、もう良いよ。あとは俺がやるから」

「うん。……この子強いよ。私とヴィヴィオが本気でやったのに勝てなかったもん」

「ま、しょうがないな。お前ら二人ともインテリジェントって訳じゃないんだから」

「パパー、ここ怪我しちゃった」

怪我？

ヴィヴィオに怪我を負わせただと？

「おい、アーウェルンクス、俺の娘に怪我を負わせるとか、覚悟はできてるんだろうな」

「まさか君が付いていたとは……それで近衛木乃香も杖を持っていたのか」

「御たくは良い。死んでおけ。“百式観音 十の手”」

最大出力でぶち込む。

この後でネギの戦うべき相手がなくなるとかは、最早どうでも良い。

とりあえずヴィヴィオに傷を負わせたんだから、死あるのみだ。

「皆であいつの相手をしておいてくれ。俺はこっちの鬼神を潰すから」

全員でなら簡単に勝てるだろう。

いつの間にかマナも来てたし、木乃香も治癒が使える。

俺の技を喰らった直後だから、いくら人間じゃないと言ってもすぐには本調子で動けない。

「来たれ 絶対領域”」

カードを使って、久々にアーティファクトを取りだす。

最大出力の魔法や感卦法でも簡単にできるが、今後の為にもこいつは木乃香の札に加えておきたい。

「重力百倍」

良く分からない叫び声をあげながら、スクナが沈んでいく。

流石に神の名を冠しているだけあって、少し膝を折っただけで、反撃する素振りを見せている。

……やっぱり普通に殺そうか？

どうせ札としては最強の“八岐大蛇”をあげれば済むことだし。

あ、こいつを二分割して、前鬼、後鬼として式神にすればいいか。

どうせリョウメンスクナノカミだから、カタメンスクナノカミとかにすれば良い訳だし。

「よし、決まった。“分割”」

リョウメンスクナノカミを面が丁度両方に行くように真ん中で半分個にする。

……本当に俺のアーティファクトは反則だ。

この質量の相手に対しても、範囲内に入っていれば何でもできる。

「つて、死にそう(?) じゃん」

死ぬというか、還る訳だが。

その前に回復させてから、式神としてお札に封じ込めておく必要がある。

あとついでに、サイズを小さくしておこう。

このままだと大きすぎて何の役にも立たない。

「捕獲完了……意外と簡単に出来たな」

あっちの方は……かなり善戦してるみたいだ。

誰も傷を負っていないし、アーウェルンクスに逃げる隙を与えていない。

「ネギ、これが本当の戦闘だ。分かったか？」

「は、はい」

俺に返事をしながらも、目はしっかりとアーウェルックスに注がれている。

良い兆候だ。

この分なら魔法世界に行く前に闇の魔法を習得できるだろう。

「じゃあ、交代な。今度はネギ一人でやってみろ。怪我なら木乃香が直してくれるから心配するな」

「はい！ 行ってきます！」

おうおう。

勇ましいことだ。

ナギとは似ても似つかない奴だが……やはり突然変異なのだろう。ナギとアリカの遺伝子が混ざるとこうなるのか……遺伝子の神秘だな、本当に。

「で、誰か怪我とかした？」

誰も答えないから、大丈夫だろう。

「……つと、エヴァと詠春も来たのか」

「何でネギ君に一人でやらせてるんですか!？」

「何でって、あいつが今は弱ってるからだよ。それよりもどうだ？」

そろそろいけそうか？」

「ボーヤか？ 良い感じには仕上がってきてるな。まあ、器だけは出来上がったというところだ」

「なら修学旅行から帰ったら、闇の魔法の習得訓練を始めよう。手傷を負っているとはいえ、アーウェルクス相手にここまで出来るならすぐに出来上がるだろう」

結界解除つと。

「……なんのつもりだい？ “ 剣聖 ”」

「ん？ ああ、お前ごときはいつでもやれるから逃がしてやるってことだよ。次に会った時はナギの息子が相手だから」

「……後悔しないことだね」

消えたか……それにしても何で水を使って転移魔法をしてるんだ？ あいつは石とか得意だから地面を使って転移すれば良いのに。

「じゃ、帰ろうか。あ、そうだ。木乃香、これお前にプレゼント。さっきの鬼神を半分にして前鬼、後鬼にしておいたから」

もともと木乃香の魔力で呼びだした奴だし、いうことには従うだろう。

鬼神を式神として従える東洋術師は、今までの歴史ではいなかったはずだ。

「……貴方に不可能なこととかあるんですか？」

「多分ある」

「多分……ですか」

あるはずだ。

きつと。

「あ、それからこっちは八岐大蛇を呼びだすためのものだから」

「……漸く理解しました。大戦のころから貴方を見ていて理解していたつもりでしたが、私は……いえ、紅き翼の面々は貴方の事を誤解していたようです。貴方はバグキャラなどではなく、バグ製造機だったんですね」

なんだか最近、詠春の口調がクウネルに似て来た気がする。

まあ、そんなことはどうでもいいが、“バグ製造機”？

それだとバグキャラよりも弱いような気がするんだけどな。

第五話 なんとなく詠春が弱く思えてくる（後書き）

自分で書いていてつまらなくなってきたので、後4話くらいで次の世界に行かせるつもりです。

次の世界の話を考え始めていますが、やはり恋愛ものになりそうです。

というか、この作品が処女作なので、色々なことをやりたいもので……。

第六話 麻帆良祭始まる（前書き）

かなり展開が早いです。

ヘルマン？ 何それ、おいしいの？ って感じですよ。

第六話 麻帆良祭始まる

「ヘルマンか……そんな奴もいたな」

最早済んでしまった話だ。

特に危険な状況に陥ることもなく……いや、なぜか何人かの魔法先生や魔法生徒が勝手にヘルマンに向かって行って自滅したけど。

彼にはネギの最初の闇の魔法の訓練相手として頑張ってもらった。

まあ、刹那とか木乃香も捕まるというへまをすることもなく、ネギも闇の魔法で“術式兵装 獄炎煉我”の習得まであと一步と言ったところだった。

かなり仕上がりとしては良い感じだろう。

「で、その話とか言うのは俺も聞きに行かなきゃダメなのか？」

「うん。だって妖怪のおじいちゃんがパパの事も連れてきてくれて言ってたもん」

まあ、ヴィヴィオに免じて行くだけ行ってやるとしよう。

どうせ話なんか、世界樹の事についてなんだから、聞かなくても良いんだけど。

まあ、帰りにヴィヴィオと何か軽いものを食べよう。

「待ったぞ」

「あ、あの——この方たちは……」

「うむ。ネギ君にはまだ紹介していなかったの。ここに集まってるのは学園都市の各地に散らばる——」

「ジジイ、そんな事をネギは聞いているんじゃない。何で一同に介しているのかを聞いてるんだ。大体、そんな魔力垂れ流しの奴らに気付けない訳がないだろうが」

「へ？　そ、そうじゃったの？」

「す、すみません学園長。なのはさんに言われてからそういうことも分かるように修行していたので」

「……。おっほん。では気を取り直してここに来てもらった説明をしようとするかの。『世界樹伝説』を知っとるかの？」

そこから始まる説明。

正直聞いてるだけで眠たい。

というか、何で監視されてる事に気が付かないんだか。

監視に気付いてるのは……ヴィヴィオに、刹那か。

でも二人とも相坂には気付いてないみたいだな。

（相坂、そこにいると危険だからもうちょっとこっちに来い）

そう言えば俺に取り付くのを止めて、朝倉と行動を共にしてるんだったけか、などとくだらないことを思い返しつつ、念話でこっちに来させる。

隣に超の機械が飛んでたから、原作と違ってもしかしたらということも考えられる。

「誰かに見られています」

「何？」

誰だっけ、この女の子。

確かぼっちゃり先生みたいに食べ物を持動キ―にしてた記憶があるんだよな。

そういう点では面白い奴として俺の中では高評価だ。

まあ、脱げ女の言うことを信じ切っている点ではダメダメだけど。

――パチンツッ!!

「魔法の力は感じなかった……機械だな」

「生徒か……やるな――人払いの魔法を抜いてくるとは」

「ウチの生徒達はあなどれないですからねー」

と、グラサンと、ぼっちゃり先生と、名前の分からない眼鏡先生が言う。

そしてそれを不思議にみているネギ。

本当に良い感じに仕上がってきているみたいだ。

“悪の魔法使い”として。

「あのー……みなさん気付いていたから放っておいたんじゃないんですか？」

「フオッ!?　　そ、そうじゃよ」

いや、ジジイ、苦し紛れにもほどがあるだろう。

「良かったー。僕、壊して良いのか分からなかったの」

流石、器だけは“正義の魔法使い”にならない存在として出来上がっているだけはある。

天然でここにいる魔法先生と魔法生徒の心をズタボロにするとは。

「学園長、追います」

「深追いは——」「おいジジイ、気付いてたから放っておいたんだよね？　ネギにそういったよね？　なら追いかける必要はないだろ？」
——ふ、ふむ。そうじゃな。高嶺君、追いかけても良い」

面白い。

っていうか笑いをこらえるのが大変だ。

「ではシフトについてじゃが」

「ジジイ、俺とエヴァはやらないからな。他のメンバーにはお前がちゃんと頼んでおけよ。ヴィヴィオはどうする？」

「うーん……パパと一緒にいる！」

「だそうだ。じゃあな」

いやー、ヴィヴィオは大きくなってても可愛いわ。
本当に。

「あ、ヴィヴィオ、相坂を朝倉に届けておいてくれ」

「え！？　さよちゃん居たの！？　全然気が付かなかったよ」

流石は超地味幽霊。

もしかしたら鍛えたらかなりの者になるんじゃないか？

気付かれないように背後から忍び寄って一撃で敵を葬る、みたいな。
うーん……でも殺気で気付かれるかもしれないか。

この案は却下だな。

「じゃ、俺は行くところがあるから」

例えば火星人の所とか。

「ということで、やあ、火星人」

「助けてくれるのか？」

「いいや？ 面白そうだから来てみただけ。それから約束通り俺は
手を出さないけど、ネギが強くなってるから気をつけろよ」

「分かったネ。感謝するヨ」

俺としては武道会を開いてくれるからそれくらいなら感謝されなく
ても良いんだけどな。

それに今のネギには全く敵わないだろうし。

時は流れ、まほら武道会の予選日、原作と違ってエヴァは参加しないことになり、その代わりに俺と、ヴィヴィオ、茶々丸が出ることになった。

「予選はヴィヴィオと一緒にか」

なのはは砲撃主体だからこの試合に出ても勝てないし、エヴァは俺が出るなら意味ないと判断して参加しなかった。

果たしてこれがトーナメントにどういう影響を与えるのか……まあ、修正力っぽい奴と、主人公補正で決まってるんだろうけど。

「おー、あっちはクーフエイとマナか。それでこっちはネギとクウネルだな」

原作メンバーは着々と駒を進めているようだ。

エヴァの所に茶々丸が入った感じだから、多分原作でのエヴァの位置に茶々丸が落ち着くだろう。

「ヴィヴィオ、どうする？　俺が手っ取り早く終わらせても良いけど」

「ううん。久しぶりに体を動かしたいから私がやるよ。パパは寝ていいよ」

そう言いながら、ヴィヴィオが真ん中に走って行く。

聖王の鎧はこちらでは発動できないから、純粹な格闘技術で戦っているみたいだが、その代わりに修行して身に付けた感卦法もある。

最強クラスのメンバー出なければ汚れすら付けられないだろう。

『おーっと！ A組、高町ヴィヴィオ選手が奮闘しています。最近では早くもファンクラブが成立していて、告白する男も後を絶たないとの噂も「何いいいいい！？」 朝倉、後でそのバカどもをリストアップしておけ、抹殺しに行く」……えー、思わぬ声が入りましたが、今のが同じA組の真柄選手。高町なのは先生の夫にして、高町ヴィヴィオ選手の父親でもあります。情報ではデスメガネこと、高畑先生の師匠の師匠との事です』

確かに、ガトウにはいくらか教えてやったこともあった気がする。そうしたらタカミチも俺の孫弟子になるのか……今更ながらに感慨深いな。

『その真柄選手、試合に興味がないのか、高町選手にやらせておいて自分は参戦していません。なんという父親なのか！ これが教育なのか！？』

どうでも良い。

いや、なのはなら教育だって言うかもしれないな。

「へえーこういうトーナメントになるのか」

予想通りというか何と言うか、エヴァの所には茶々丸が収まり、そのブロックの上に、クウネルとヴィヴィオが収まった。

これでクウネルが目指していた、ナギの遺言を叶えるということは無くなった訳だ。

そして、もともとクウネルが入っていた所に脱げ女と田中とか言うターミネーターもどき。

俺は忍者の相手になった。

「タクマ……貴方トーナメントを操作しましたね？」

「嫌だなあクウネル君。俺はいかさまが出来ないように公正なトーナメントにただけだって」

嘘は全く付いていない。

原作でクウネルが決勝でネギとあたることができたのは、クウネルがトーナメントを操作したからだ。

それを妨害したから、元あるべき形に収まったただけだ。

「それに約束は果たせるだろ？ 正直俺が出てるんだから、お前もネギも勝てない訳だから、二回戦で戦えるのは僥倖だろ」

「それは確かにそうかもしれませんが……あなたにはナギの願いを叶えるという思考は無いのですか？」

「全く」

というか、どうして姿を現さないのか知らないけど、ネギの前に出てこないやつが悪い。

それに、俺が出なかったとしても、刹那か茶々丸に当たる訳だから、

勝てるわけがない。

「それから、あんまり油断しない方がいいぞ？　ヴィヴィオは強い」
魔法は効かないし、格闘戦にも通じてる。

いくらクウネルが最強クラスだとは言っても、仮の姿では勝てない。

「……私が怪我をさせたからと言って乱入してこないで下さいね？」

「問題ない。あいつは魔法完全無効化能力持ちだから、お前が触れた瞬間にゲームオーバーだ」

「……本当にトーナメントの操作してませんよね？」

「さあ？　俺は悪の魔法使いだからな」

というか、本当にどうするんだろう。

存在自体が魔法みたいなもんだから、触れた瞬間にかき消えたりして。

あ、でも原作では明日菜に触れてたから大丈夫なのか？

「ヴィヴィオ、一回線の相手が多分能力を発動させるだけで倒せるけど、どうする？」

「ええー！？　そんなのヤダー！」

「じゃ、能力無しだな。格闘戦と、身体強化だけで頑張れ」

「うん！　パパ、私なのはママに練習相手になってもらいに行くから。じゃあね！」

「ということだ。これで良いか？」

「助かります」

助かりますって……別に勝ちが決まった訳じゃないんだから。

それに俺もそれなりに大変なんだよなあ。

一回戦は忍者が相手だし、二回戦は……どうなるか分からないけど、上がってくるならマナだし。

そう言えばマナは超に協力してるんだよなあ。

タカミチもやられるかもしれないし……本当にこの学園祭、どうなる事やら。

「いこ？」

茶々丸についてきたが、正直今日が試合の日だとは思っていなかった。

普通にエヴァと魔帆良祭を楽しんでたし。

というか、影分身を使えば、六人と順番に回らなくても良いってこ

とに気が付いてからは、影分身を使うことにしている。

「お、忍者さん。今日はお手柔らかにな」

「ニンニン♪ と言われても拙者の方が手加減して欲しいでござるよ。それから拙者は忍者ではないでござる」

どこの世界に甲賀中忍で忍者じゃないやつがいるんだか……。

「それからタカミチ、油断するなよ。負けたら罰ゲームだからな」

「えっ!? ちなみに罰ゲームってどういうことを」

「お前が想像してる奴の三倍の酷さだ」

まあ、タカミチがどんな想像をしているのかは分からないが、罰ゲームを決めるのは多分エヴァとヴィヴィオだ。

「ちなみにネギは闇の魔法に手をつけてるからな。本気で行かないとあつという間にやられるぞ」

「……あのー、やっぱり罰ゲームなしには」

「しない」

「お待たせしました!! 予選では分身してみせた長瀬 楓選手!
この試合ではどんな事を見せてくれるのか!? 対するのは全く
実力が未知数の真柄選手。デスメガネ高畑の師匠の師匠であるとい
う情報もありますが、果たしていかほどの実力者なのか!? それ
では第三試合……Fight!!」

そう言えば俺がタカミチの師匠の師匠って情報はどこから仕入れた
んだ?

全く本当に朝倉の情報網は……。

「忍!」

分身四体か……。

密度としては良いのかもしれないけど、数を増やただけじゃ俺に
は勝てないんだけどな。

そう言えばさっき気が付いたけど、どうせクウネルが空飛んだり、
タカミチが水面に立ったりするんだから、俺が何をやっても変わら
ないよな。

「長瀬、最初の五分は居合い拳で戦ってやる。その次は神鳴流。最
後の一分まで持ちこたえることができれば、俺のオリジナル技だ。
せいぜい頑張ってみろ」

——感卦法

片手ずつ、魔力と気を持っていき、合成して感卦を身に纏い、ポケ

ットに拳を納める。

「豪殺 居合い拳」

『おーっと！ 空から何か大砲のように降ってきましたが……長瀬選手、果たして無事なのか！？』

「大丈夫だろ？ 今の奴はタカミチのそのの半分の威力しかなかったはずだしな。それに避けただろ？」

「ニンニン♪ 今のは危なかったでござる。分身に投げてもらわなかったら喰らっていたでござるよ。今度はこちらから……忍！ “四つ身分身 朧十字” ！！」

やっぱり素材としては良いもの持つてるな……クーフエイと、刹那、マナと同レベルの使い手になれる。

多分、体術だけなら修行を積みば十年以内にジャックのレベルにまで昇華出来るだろう。

「完全に決まったのに全くダメージなしでござるか」

「何だ、ネギとかヴィヴィオから俺について聞かなかったのか？」

「正直信じられないような内容ばかりでござったよ。……しかし、全て本当のようでござるな」

「何を吹き込まれたのかは知らんが、大概の事は真実だと思うぞ？」

「では貴方がこの世界の最強でござるか？」

「最強っていうのは、やりあえる相手がいて、初めて“最も強い”と認識されるようになるんだよ。俺の場合は“敵がい無い”という意味での無敵。それから詠春にはバグ製造機って呼ばれたな」

あれはかつこ悪いから嫌なんだけど。

どっちかっていうとバグキャラの方がかつこいいし、強そうだし。それに名前としては“剣聖”が一番のお気に入りだけど、あれは剣による手加減でそう言われてるだけだから、俺を現す二つ名としては適当じゃないし。

「ニンニン♪ 無敵、でござるか。今の拙者との距離がどれくらいなのか、計らせてもらおうでござるよ」

「来い。ここからは神鳴流で相手をしてやろう。ゲート・オープン」

取り出したるは神木・蟠桃で作った木刀。

気を通せば刀が相手でも折れたり、斬れたりすることはない。

「神鳴流奥義・雷光剣」

『おーっと！ 真柄選手！ 何やらいつの間にか手にしていた木刀で雷？ のようなものを発生させたー！ これも気なのか！？』

「こちらでござる」

そう言って雷光剣を放った後の俺の背後で気を練る長瀬。当たらなかったことは称賛に値するが、それでも。

「残念。それは本体じゃない」

「む！ ……分身も使えたでござるか」

「それだけじゃない。見せてやろう。“影分身の術”」

『出たーっ！ 各所で話題の分身の術！ ……って少し多すぎない？』

「ニンニン♪ 一体何人いるでござるか？」

「大体千人ぐらいだな。まあ、安心しろ。いくら俺でもこの全員で相手をするということはない。狭いからな」

影分身は全て消していく。

「ではお見せしよう。神鳴流奥義 “斬魔剣 弐の太刀”」

やったのは良いものの、忍者は結界や障壁を使わないから意味がないということに終わってから気が付いた。

まあ、あれぐらいの速度だったら避けられるだろう。

「ふうー。危なかったでござる。今のが“剣聖”とも呼ばれた英雄の？」

「いや、違う。俺が“剣聖”って呼ばれたのは手加減のために剣を使ったらいつの間にかそう呼ばれただけだ。それにお前が言うてるのは終の太刀だろう。ここでは危険すぎるから使わないがな」

「これで手加減でござるか……世界は広いでござるな」

「せいぜい精進することだ。……時間が無くなってきたな。俺が無

敵と自負する理由を見せてやるよ。全力でガードしろ。じやなきや死ぬぞ?」

——百式観音 一の手

『……え? 仏像?』

「おい朝倉。早く勝利宣言をしろ。長瀬を医務室に運ぶ」

『あ、はい。長瀬選手気絶! 真柄選手、勝利——!!』

第六話 麻帆良祭始まる（後書き）

せっかくヴィヴィオとなのはを登場させたのに、ほとんど出番がない。

というか、主人公以外ほとんど空気になりつつある。

まあ、次の世界から本腰入れて書き始めますのでご容赦ください。

第七話 武道会（前書き）

だんだん書くのがつまらなくなってきた今日この頃。
早く終わらせたい。

第七話 武道会

『第五試合、始め!!』

どうしても良いが、マナは手加減をして、クーフエイが勝った。

まあ、そのクーフエイも負傷がでかすぎて次の試合に出られなくなったので、原作のマナみたいに俺が自動的に準決勝に進出する事になった。

多分、依頼主からそう言われて手加減したのだろう。

そして今の試合、ヴィヴィオとクウネルの試合も激しさを増している。

流石に魔法合戦という訳ではないが、ヴィヴィオの格闘術は聖王家に流れる血と、この世界でも鍛えて来たものだ。

格闘術だけならクーフエイのそれを二歩置き去りにするだろう。

「ヴィヴィオ、大丈夫かな？」

「何だ、なのは。そんなに心配か？」

「心配だよ。あの人凄く強そうだもん」

確かに。

この試合で重力魔法とか、アーティファクトを使うなら——いや、使わない方が強いかもしれないが——クウネルが勝てるだろう。

「あいつはこの世界での俺の友でな、実力なら確実に最強クラスに入る」

クウネル相手にヴィヴィオがどこまで持っていけるかも知りたい。

あいつ相手に本気を出させることができるなら、かなりのものだろう。

「タカミチ、どうだ？ ヴィヴィオには勝てそうか？」

「難しいですね。彼女は無効化が使えるんですけどよね？ それだと僕には純粋な体術しか残ってませんから」

「それだけじゃなくて、感卦法も使えるぞ」

「……あの、すいません。一つ聞きたいんですが、感卦法って本当に究極技法なんですか？」

「そう呼ばれている事と、それに見合う難易度、効率であることは確かだな。まあ、気にするなヴィヴィオが凄いだけだ」

もともとタカミチにとっては涙目ものだろうけど。

「使うか、ヴィヴィオ」

「感卦法！」

「これは……その年で感卦法まで扱うのですか。流石にタクマの娘にして、教え子である事だけありますね。私も少し本気にならなければいけないようだ」

——フォン！

「重力魔法か……結構マジな試合になってきたな。今までで一番面白んじゃないか？」

「というか僕は会場が壊れるような気がするんですけど……」

それもそうだな。

クウネルの重力魔法に、ヴィヴィオの感卦法を使った格闘術何て会場に当たったらこっぴどみじんにはじけ飛ぶ。

「仕方ない。……プラクテ・ピギ・ナル “対物・対魔 魔法障壁 展開”」

会場全体を両方の魔法障壁で覆って行く。

これで会場に被害が及ぶことはないだろう。

「毎回思うんですが、何で貴方は始動キーを作らないんですか？」

「だってめんどくさいだろ？ でも、始動キーを唱えた方が何かかっこいいし。……なあ、タカミチ。あいつアーティファクトで俺を再現してないか？」

「あれ……不味くないですか？」

確かにそう思う。

俺を再現してるんなら威力が半端ないはずだ……って終の太刀!?

「ヴィヴィオ!？」

「なのは、中に入るな。ヴィヴィオが失格になるだろ？」

「でも……」

いや、確かに俺も心配だけど、無効化を使えば……そう言えば使わないだったか。

「キュー……」

伸びてら。

まあ、俺が相手だったらしょうがないか。

『クウネル選手、勝利!!』

「おい、クウネル。俺を使うのは反則だろ」

「いやー、貴方でも使わないとあのお嬢さんに負けてしまいそうだったもので。それにナギやラカンでも、無効化を使われたらあのお嬢さんには勝てないかもしれませんし」

それほどか……かなり成長してたんだな。

やはり子は親の想像以上に成長するか。

「じゃ、次はタカミチだな。負けたら罰ゲームだからな」

「……努力します」

「そう言えばキティとあなたの奥方が指導したんでしたか？　どんな感じなんですか？」

「とりあえず“闇の魔法”の最初の段階に到達した所だな。別荘を使っていないから合格点はあげられるな」

「ほう……将来は“闇の福音”にでもするつもりですか？」

「その方が面白いだろ？ 大戦の英雄、“千の呪文の男”にして“立派な魔法使い”、ナギの息子が“闇の福音”。元老院のバカ共には良い刺激だ」

それに今のところ、正義だとか言う毒にもかかっていない。このまま行けば、エヴァや俺好みに成長してくれるだろう。

「そう言えば貴方についての“半生の書”が何も書かれていなかったんですが、心あたりはありませんか？」

「ア……多分俺が規格外だからだ。気にするな」

「フフフ。やはり貴方は詠春の言ったとおり、バグ製造機ですね」

「それ、どういう意味なんだ？」

「貴方がバグであると同時に、貴方の弟子は確実にバグに成長するということではないのですか？ 私も詠春に詳しくは言われなかったので……っと、始まりますね」

いきなり闇の魔法を発動させたりはしないのか。

それに……タカミチも感卦法を使わないか。

あれほど本気でやれと言ったのに……これは罰ゲーム確定か？

「素晴らしいですね。一体どんな修行をさせたんですか？」

「そこら辺はなのはに聞いてくれ。あいつが担当だし、教導のプロだから」

やはりなのはとエヴァの組み合わせは思っていた通りの功を奏したみたいだ。

……そう言えば呪文詠唱が禁止だから、闇の魔法、使えないじゃん。

「これは……ミスったか？」

「何がですか？」

「いや、詠唱禁止だから、闇の魔法が使えないな、と思って」

「それは確かにそうですねえ。でも、大丈夫なんじゃないですか？意外にやれてるみたいですし」

中国拳法と、魔力の上乗せか。

確かにタカミチに感卦法を使わせてはいるけど……。

「遅延呪文か。そろそろ終わりか？」

原作通りの展開か。

ネギがダウンを取られることはなかったけど、タカミチが予想外に遊びすぎたな。

「タカミチは罰ゲームだな」

「ええ、何か考えておきましょう」

ヴィヴィオとエヴァに任せるつもりだったけど、こいつに任せたらものすごく非道というか酷い罰ゲームになりそうだ。

結局、第七試合では刹那の勝ち、第八試合では茶々丸の勝ちとなり、準々決勝の第一試合では辛くも脱げ女が勝ちあがった。

どうやら、というか実際にみたから分かるのだが、小太郎の体術は誰にも師事していないせいか、全くのダメダメだった。

気の練りも甘いということもあり、そのせいで脱げ女に負けたのだろう。

俺としては主人公のライバル補正で勝ち上がってくるものだと思っていたが。

そして次に始まるのは、ネギとナギの親子対決というか、ネギとクウネルの勝負だ。

この試合にはあらかじめ闇の魔法で術式を装填してから行くように指示したので、いくらかまともな勝負にはなるだろう。

「どう思う、エヴァ？」

「ふん。いくらボーヤが私たちの教えを受けたからと言って数カ月ではナギのバカには勝てん。十分持てば良いところだろう」

だよなあ。

でも、ナギが本気でやったら十分も持たないと思うけど。

「っと出て来たか」

原作通りに鳩の羽つきで登場したし。

これが主人公補正なのか？

主人公はかつこよく登場しなければならぬっていう。

……でも、これの主人公はネギだから関係ないか。

「まほら武道会か。アルの奴もマメだな……ってタクマじゃねえか！　よう！！」

「バカ言っていないで自分の息子の相手をしろ。言っておくが俺の弟子とエヴァが師匠だ。思ってるよりも強いぞ？」

「へえー。じゃあ、これは“闇の魔法”か？」

「行きます。父さん！！」

いやー、自分で名乗りもあげずに襲いかかるか。

闇の福音の後継者としては減点だが、時間があんまりないしな。しょうがないと言えましょうがないけど。

「中々、だな」

やはり驚かされる。

これならジャックの戦闘力表で言えば2200はあるんじゃないか？　まあ、俺の戦闘力は53万だが。

「ふん、まだまだだ。ボーヤにはまだやるべき事が山積みだからな」

「厳しいな。あいつはまだ十だろ？」

「私が十の時には人も殺した」

そう言えばそうだったかな。

「ほら、おいでエヴァ」

ちょっと空気が重くなっていたので、エヴァを膝の上に乗せて抱きしめる。

やはり、抱き心地は最高だ。

真っ赤になって俺の腕を掴んでるあたりとか、そろそろ萌え死ぬかもしれない。

そんなバカなことを思っている間に、どうやら終わったらしい。

ナギの本気っぽいのも見れたし——詠昌は無しだったが——ネギとしては満足のいく結果だったろう。

「次は刹那と茶々丸か……茶々丸には悪いが刹那の勝ちだな」

いかな茶々丸と言えど、デバイスもドラグーンシステムも、演算能力もなしでは刹那の身体能力に太刀打ちできない。

その三つがそろえば話は変わってくるかもしれないが。

まあ、忒の太刀を習得した今では、刹那に勝てる奴もそうそういないだろう。

「我が従者としては情けない話だがな」

「しょうがないって。刹那に剣を教えたのは俺なんだから」

そう言えば刹那とクウネルはどっちが強いんだろう。

まあ、奴の事だから決勝の相手が俺だって分かってる時点で刹那に勝ちを譲るだろうが。

「そう言えば今更に思ったけど、最早奥義じゃないよな」

刹那が神鳴流奥義！ と叫んでいるのを観戦しながらエヴァに話しかける。

これほどまでに大勢の人間の前で奥義を使っていたら、最早奥の手ですらないだろう。

ただの技だ。

……まあ、ジャックみたいにみてるだけで真似ができるって奴はいないと思うけど。

「っと、終わったか。やっぱり早かったな」

茶々丸もあの体で良くあそこまで持ちこたえたと言えるだろう。

早かったとは口では言ったが、本来ならもっと早くに終わっていたはずだ。

このイベントが終わったら、ハカセと共同で茶々丸の装備を見直そう。

新ボディになる際に、ドラグーンシステム他、その他もろもろを見直さなければならない。

『それでは準決勝 第十三試合、開始!!』

「脱げ女、悪いがお遊びに付き合っている暇はない」

「脱げ……! 英雄とも言われた貴方のお相手ができるなど光栄です。ですがマギステル・マギとしては――」

「どうでも良い。行くぞ? “百式観音 一手 改”」

一応、気絶させて服を脱がせるのは俺の正義に反するので、場外に飛ばしておく。

『出ました! 謎の仏像! 果たして高音選手は無事なのか!?!』

そんな訳がないだろうが。

大体、既に麻帆良にいるかどうかも怪しい。

百式観音の力で思いっきり投げ飛ばしたからな。

「朝倉、場外カウント」

『へ? あの……あ! 1, 2, 3……10。真柄選手の勝利です!』

「お早いですね。遊ぶ気はゼロですか」

「だってあいつバカだろ? 服も着ないで影だけを体に纏わせるとか。俺が一撃入れただけで脱げるぞ?」

「それについては否定しませんが……そう言えばこの生徒が何やら行動を起こしているようですが」

「俺は中立だ。それから俺に付随してるメンバーも……まあ、マナが金で雇われてたけど。そういうお前は何かしないのか？」

「私そういうお仕事は苦手なんです。なので若い方に任せます」

「まあ、どうでも良いが。それより次はお前と刹那だろ？ お前のアーティファクトで詠春を出してくれ。それと刹那をやらせてみたいから」

「それはなかなか……面白そうですね。剣聖の弟子とサムライマスターですか」

これで詠春に勝てる、若しくは同等なら終の太刀の習得に向けて修行を始められる。

そうでなければもう一度気の練り直しからだ。

まあ、負けるということはないと思うけど。

「ですが詠春の再現となると、数分しか持ちませんよ？」

「その数分で大丈夫だ。頼む」

「フッフ。貴方が頼む、ですか。面白い事もあるものです」

「ま、たまには俺もそういうことを言うんだよ」

「了解しました。私も戦友たつての頼みとあつては断れませんからね。お引き受けしましょう」

『さあ、準決勝のもう一試合目が始まります。果たして決勝に進むのはどちらの選手なのか！？ それでは……初め！！』

始まったか……果たして全盛期の詠春相手にどれだけやれるのか。いつもは俺と模擬戦してるからな、刹那の実力が今一つ分かりにくい。

だがそれもこの試合で分かるだろう。

……ってそう言えば刃物が禁止だから、詠春を再現したらその時点で失格じゃん。
まあ、良いか。

「雷ッ光剣！」

なんか詠春の言い方がおかしかったように聞こえたが、気にしない方向で行こう。

「お、長！？」

あれ？

おれ刹那に言ってなかったか？
ま、良いか。

今の刹那なら対処できるだろ。

「クッ……斬魔剣 弐の太刀!!」

うーん……気の練りがまだ少し甘いな。

もうちょっと気を練る訓練をしてから、参の太刀と、終の太刀の修行に入るか。

いや、気を練る訓練は決勝戦でやるか。その方が時間の短縮にもなるし。

第七話 武道会（後書き）

多分、後二話でネギまが終わる

第八話 魔法世界へ

『それでは、まほら武道会決勝戦——始め!!』

「さて、刹那。本気で来いよ？ 俺も今回は殺気はマジで出すから」

萎縮しないようになれば、その次は殺気を抑えて、殺気で攻撃を読ませないようにする。

そうやって初めて対等の勝負が出来る。

「よろしくお願いします!!」

最早決勝戦どころではなく、ただの稽古になってる。

まあ、超としては神鳴流による派手な技が見ればそれでいいのだろう。

初めに殺気を全開にして、同時に覇氣まがいの気合っぽいものをぶつける。

……流石に委縮したりはしないようだ。

これまでの修行の成果が出ているようで安心だ。

「斬岩剣」

とりあえずは小手調べ。

奥義とは名ばかりの技で、刹那に斬りかかる。

これで気の練りが甘ければ刹那の木刀は折れるはずだが……どうやら杞憂だったようだ。

やはり俺の弟子は皆優秀だ。

「良いね。少しテンポをあげよう」

先に展開、のちに琴奏。

ここからは一つ段階をあげて、領域の取り合い。

制空圏を意識して、そこに入ったものだけを叩き落としていく。

待ちの体勢はあまり好きではないが、実力を的確に知る為にはこちらが防御をした方が良い。

癖であったり、気の練りが甘い部分であったりをじっくりと見る事が出来る。

「次、行こうか。 “ 斬魔剣 式の太刀 ”」

刹那はこれに対して回避ではなく、同じ斬撃を当てることを選択してきた。

正確に俺の斬撃を迎撃し、それを上回って攻撃に転じてくる。

やはり、強い。

自分が鍛えていると成長に気付かない事が多いと言うが、俺の弟子は誰もかれもがそれを越えた成長速度を見せてくれる。

教えがいがあるものだ。

あと少して教えるべき事もなくなるが。

「じゃ、最後。 “ 斬魔剣 終の太刀 ”」

この技は迎撃する事も出来ないので、回避するしかない。

が、回避にしても困難を極める。

故に、剣技の極致。

それを刹那は一身に浴びて気絶する。

勝者の名乗り宣言を受けるでもなく、俺は刹那を抱きかかえて医務室へと足を運ぶ。

途中で影分身を二体、一体は授賞式に、もう一体は木乃香の所に送った。

近くに居れば仮契約カードを使って呼びだせるが、それも分らないので、そしてそれほど急ぎでないでその手を取った。

二人には魔帆良祭が終わったらしちんと意志を聞いておこう。

俺に付いてくるのか、それともネギと一緒に行くのか。

後は……俺が後数カ月でいなくなる事も話した方が良いだろう。

エヴァと茶々丸には話してあるが、弟子三人にはまだだ。

どんな反応をされるか眼に見えているしな。

それから、もしも刹那と木乃香が俺に付いてくる事を選択した時の為に、他のネギパーティーメンバーの強化をしておこう。

特に小太郎やクーフエイ、忍者など。

時間もあまりないから、今度の修行からはエヴァの別荘を使って行くか。

どうせその三人は気の使い手だから、刹那の修行と並行してやれば良いだろう。

それに、実戦は修行の何倍もの糧を得ることができるとは言っても、修行でしか手に入らないものもある。

何事も基本が大事なのだ。

……何で俺はこんなことを言ってるんだろうな。

「はてさて、始まったか」

原作通り、ネギの作戦とやらが始まり、一般人を巻き込んでゲームが始まった。

今回、マナは超側。

別に理由は無いらしいが、刹那や木乃香と戦ってみたかったらしい。まあ、もちろん金も貰っているが。

そしてそのゲームに、ヴィヴィオも参加した。

……ヒーローユニットとして。

なんでも、一回戦でクウネルに負けたから、腹いせにやるらしい。

そしてエヴァとなのは、俺は観戦組。

間違っても酒盛りには出来ない。

なのはが悪酔いするから。

戦力としてはネギ側が優勢だろうか。

まあ、時間跳躍の出来る弾を原作よりも銃の扱いに長けたマナが扱うという点ではなんとも言えないが。

どちらにしても、ネギ対超は確実にネギが勝つ。

この勝負、カギになるのはどうやってマナを切り抜けるか、だろうか。

「ありやりや、タカミチがやられちゃったよ。流石は俺の弟子」

狙撃の直後に銃弾をもう一発、発射させてタカミチがアウトになった。

「これは超の勝ちなんじゃないか？」

クククと嬉しそうに笑うエヴァ。

ちなみにチャチャゼロは俺の頭の上に乗っている。

「ま、分らんさ。まだ刹那もヴィヴィオも残ってるしな。それにマナがあっちに付いた目的はその二人と戦う為っぽいから」

「ヴィヴィオ、大丈夫かな？」

「だからなのは心配しすぎだって。ほら、こっちおいで」

「う、うん／＼／」

可愛いです。

うん、御馳走さまです。

年は結構取ったけど、それでもまだまだ若さを感じさせてくれます。流石は海鳴り七不思議筆頭の桃子さんの血を引くだけはある。

「ん？ ネギのカシオペアが壊れたか」

原作にはなかった展開だな。

これでネギと超の均衡が崩れた訳だが……。

「さて、この状況をどうやって乗り越える？」

原作ではタカミチが超相手に善戦していたから、今のネギならカシオペアが無くても良い勝負が出来るだろう。

「ほう……ぼーや、魔力を放出しているな」

その揺らぎで出現位置を特定するのか？

なかなか良いアイデアだが……それでは瞬間移動をする相手には勝てないぞ？

「お、超のカシオペアを壊したか」

驚きだ、でも、体術は見直す必要がありそうだな。

中国拳法は本来、地に立っている事を前提とした武術。

だから地面を掴まないと、威力は半減どころか三分の一、四分の一になる。

舞空術との併用は考え直した方が良いだろう。

この先、使えなくなる。

「お、ネギの奴やる気だな」

いつの間に完成させてたんだか……まだ“千の雷”は習得してないから、敵弾吸収はもうちょっとあとになると思ってたけど。

「敵弾吸収じゃない？ これは……反転術式か」

どうやら杞憂だったらしい。

そう言えば原作のネギは魔法陣を地面に書いてたような気がする。

やはり、順序で言ったら“千の雷”が先なのだろう。

まあ、戦闘技術を確立させることがエヴァとなのはの教え方みたいだから、習得は大分先になるかもしれないけど。

「ボーヤの勝ちか……まあ、疑いもしなかったがな。マナの方はどうだ？」

そう言いながら内心はらはらで見たくせに。

全くエヴァも素直じゃない。

「マナは……っと。まだやってるし」

っていうか、凄いな。

刹那とヴィヴィオの二人を相手にここまで長く持つてるのか。

「って時間跳躍弾じゃなくてアーティファクト使ってるし!!」

最早以来の事とか考えてないのか？

いや、マナは仕事人だしそんなことは無いか。

ネギが超の所に辿り着いた時点で依頼が失敗だと悟ったか？
多分そうだな。

っていうかあの三人の戦いが一番激しいな。

「なのは、止めてきてくれる？」

「うん。怪我したら危ないもんね。“来たれ”。全力全開！
スターライト——ブレイカー!!」

え？

ここから砲撃するの？

ってちゃんと三人に当たってるし。

というか、ヴィヴィオが無効化しようとして出来なかったとか、どうしてなんだ？

ま、まあ多分気にしたら負けてことなんだろう。

やはりこの世界でもなのはOHANASHIが最強だったってことか。

「さて、じゃあ俺の話に入ろうか」

夏休み初日、弟子三人を呼びつけて、俺の事に関して話を始めた。
今ここに――エヴァの家にいるのは、俺、エヴァ、茶々丸、チャチャゼロ、なのは、ヴィヴィオに弟子三人。
修行も一応三人とも完成したから、今このタイミングで話すのがベストだと判断した。

「まず最初に、俺は後数カ月しかこの世界にいられない」

とりあえず、問題となる所に素直に入る。

単刀直入。

まどろっこしい事をするのは時間の無駄だ。
三人ともそれぞれの反応で驚いているが、一々時間を省いている暇はない。

「正確には二、三か月くらいだ。それで、三人には選択をして貰う。
この後おれと共に魔法世界に行くか、それともネギと一緒に魔法世界に行ってみるか」

「私はもちろん付いて行くよ」

「立ち直りが早いな、マナ」

いくらマナにしてももう少し時間がかかると思ってたけど。

「それでもなければ貴方の従者はやってられないからね」

「それもそうだな。……で、刹那と木乃香はどうする？」

刹那は木乃香が決めたことに従うだろう。

それが護衛としての務めだ。

それならば木乃香は果たしてどちらの選択をするのか。

ルームメイトとして一緒に暮らしても来たネギか、それとも俺か。俺としてはどっちが良いんだろうな。

自分でも良く分からないけど、多分俺と一緒に来てほしいと思っているな。

それはネギに付いて言ったら犯罪者となる可能性があるからなのか、それとも俺が真にそう願っているのか。

「……どうやってもいられへんの？」

「ムリだ」

「うちは……うちも一緒に行く!!」

「ネギと明日菜の事は良いのか？」

「あの二人も、ううん。他の皆の事も心配やけど、うちはタクマさんの方が大事やから!!」

意外、だな。

てっきり最近の行動からネギに付いていくものだと思ってたけど。

「刹那は……聞くまでも無いよな」

「もちろんです。このちゃんとタクマさんが同じ所に行くのなら私も付いていきます」

俺としては自分の道は自分で決めてもらいたいが……まあ、それも自分で決めることか。

「俺が消えたらネギの所に行っても良いからな？」

「消えるとか言わんといて！　うちが、うちが何とかするから！！」

それはムリなんだけどな……まったく良い弟子を持ったものだ。

「それからなのはとヴィヴィオも同じタイミングで消えるから、覚悟だけはしておけよ」

それにしても俺も随分と酷い奴だな。

ハーレムとか言っておいて、惚れさせた女を一人にしておいて行くのか。

最悪だな。

特にエヴァと茶々丸は死なないから、それを永久に体験する訳だし。

「ごめんな」

「う、うわああああ！！」

木乃香は涙腺もろいな。

それに刹那も。

「何だよ、マナもか。そんな顔されると俺も泣きたくなるだろ？」

いつの間になくなったんだか、ここにいるのは俺と木乃香、刹那、マナの四人だけ。

三人にそれぞれしがみつかれて、俺の服は涙でぐしょぐしょに濡れる。

「私だって……泣くことぐらい、あるさ」

「はは、そんなに強がるなって。俺も今日だけは泣くからさ」

「……すまん」

「刹那も、な？」

「は……はい」

俺も随分と涙もろかったんだなあ。

分かれを自覚した途端にこれだもんな。

まあ、悪い事じゃないんだろうけど。

「さて、じゃあネギ達よりも一足先に出発だな」

一応、ウェールズのゲートを使うことにした。

「木乃香、しっかりと眼に焼き付けておけよ。お前が救うべき人た

ちだ」

その理由はネギの故郷の人たちを見ておくため。

木乃香が治癒術師を目指す為にも、覚悟をこれまで以上にしっかりと確立させるために、実際に眼で見ておいた方が良い。

「うん……ごめんな。うちが頑張って治すから」

木乃香がそこにいた石化している小さな男の子に話しかけていた。

それはまるで絵本のような光景だ。

それを暫く見ていて、漸く違和感に気付く。

木乃香の周りに光と風の精霊が漂っていた。

マナの方を見てみると、魔眼が反応してはいなかった。

ということはつまり、木乃香が根源に属している精霊に祝福を受けたということだ。

いずれは俺の手によって祝福を受けるようにはしておこうと思っていたが、やはり治癒術師としての才能にあふれている。

この分なら、後数カ月もすればこの石化を治せるようになるだろう。

「さて、じゃあ魔法世界に行く前にもう一度だけ。俺となのは、ヴィヴィオはあと数カ月で居なくなるから覚悟は決めておく事。それから、その後どうするかは各人に任せるから、自分で決めて、自分で行動する事。それだけは心の隅においてくれ」

勢いのある返事を聞きながら、ゲートの準備が整うのを待つ。
何年ぶりかの魔法世界。

そこに至る為の扉が開く為の準備が完了する。

「行こうか！」

第八話 魔法世界へ（後書き）

次回で終わります。

最後は中途半端な終わり方になりますが、次の世界に期待してください。

第九話 中途半端な終わり方（前書き）

題名の通りです。

今回はつなぎにしか考えていません。

ということで、次回を期待……した方がいいと思います。
まあ、あんまり期待されても困るけど。

第九話 中途半端な終わり方

「ここが……魔法世界」

木乃香が感極まったような声を出しているが、果たしてそれに見合うほどの世界であるのかは分からない。

元をただせば所詮は人工物。

いくら綺麗に、均整に造られているとはいえ、地球に存在する自然な自然と、ここにある不自然な自然とは大きな差がある。

言ってしまうはこの世界がツクラレタものである事に変わりはないが。

しかも今気が付いたが、魔法世界と麻帆良学園が繋がってやがる。

だからアルはあんな所にいたのだろうか。

まあ、今となってはどうでもいいことだが。

「綺麗な所ですね」

刹那のように感動できる感情すら、最早この身には宿っていないのではないかと思わされる。

“不老不死”、強大な“力”、いずれもヒトが高みへと、神へと近付くために手に入れようとしたものだ。

だが、須らくそれらを手にした者は“ヒト”の枠組みを外れ、所謂“人外”や“化け物”と呼ばれ、“ヒト”によって排斥される運命にある。

未だかつて、例外だった者はいない。

なんとも皮肉なものだ。

ヒトは普通とは違うことに憧れ、畏れ、その過程で進化する。

だが、その途中で幾度も進化しすぎた事、物を“普通とは違う”からと言って迫害する。

このままでは自らを滅ぼすことは自明の理だ。

一体ヒトは何を目指し、何に向かって進んでいるのだろうか。

「今度は何を考えてえるの？」

そんな俺の心情にいち早く気が付いたのか、なのはに声をかけられた事に気が付いたのは、思考を一旦止めてからだだった。

このメンバーの中でも最愛の、そして未だ“ヒト”でもある、なのはに思わず何でもないと言えながら抱き締めて、杯の中をなのはの匂いで満たした。

思えば、ここにいるメンバーは随分と“ヒト”から外れた者が多い。吸血鬼であるエヴァ、人形であるチャチャゼロと茶々丸、鳥族とのハーフである刹那、魔眼持ちのマナ、見方によっては人間からケタ外れた魔力を持つ木乃香、なのは、それにプラスして魔法完全無効化能力者のヴィヴィオ。

そして人外筆頭の俺。かろうじてヒトであるのは木乃香、なのは、ヴィヴィオの三人だけだろう。

「行くぞ」

英雄であるが故に、出口でキャーキャー叫ばれながらそこを後にしようとするのを動かす。

武器の所持が許可されていないメガロセンブリアでは、俺の貯蔵に頼って武器をしまっている。

ここに来た目的はなのは達と旅を楽しむ事が第一であることに間違いないが、同時に弟子三忍の実力を上げ、エヴァの悪名を無くすためでもある。

消え去る俺が彼女たちに出来ることはそれくらいだ。

その為に、俺の名声は利用させてもらう。

向かうのは最大であるが故に手の回らない場所が多く、その為に各

地で紛争の絶えないヘラス帝国。

その紛争を一時しのぎばかりで平定して回りながら、名声と実力の二つを得る。

世界は利用させてもらおう。

俺にはそれが出来るのだから。

紛争を解決すると一口に言っても、多種多様な方法がある。

どちらか一方に属する方法、どちらでもない第三勢力となる方法、根気強く話し合う方法、両方の或いは複数の願いを叶える方法。

色々な方法がある中で、どれを選択するにしても力が必要になる。一時の平和のために武力を振るう、九の為に一を捨てる、大多数の幸福を取る、いずれも矛盾した真理だが、真理であるが故に人間に覆すことはできない。

「マナ、どうだ？」

「……終わったみたいだね、帰還しよう」

色々ある中で、そして時間はあまり残されていない中で、俺たちは最初に言葉で、それは無理だった場合に武力を用いることにした。

不殺を常とし、それでいて解決に導く。

甘い考えだが、俺たちにはそれを貫き通すだけの力がある。そしてそれを遵守してきた。

二か月、短い期間だが、解決した紛争は二桁になる。

今ではエヴァを吸血鬼だからと言って畏れる者は少ない。

そんな考えで居るのは頭の固い、古い者だけだ。

何色にも染まりきっていない子供であればあるほど、エヴァの優しさに気が付く。

今ではヒーロー視されている俺たちの中でも、一番子供に人気があるのはエヴァだ。

「おねーちゃん、あそぼー！」

「だから私は悪い魔法使いだから近づくなと言っているだろうが」

「？ えっとねー、おねーちゃんはわるいことしたの？」

沢山の子供に囲まれている中で、子供たちが俺たちの膝の上に乗ったったり、肩にぶら下がったり、周りに座ったりしている。

その中で、ツインテールをヒョコヒョコさせた女の子がエヴァに話しかけ、エヴァがそれに答えると、今度は俺の膝の上に座っていた子が話しかけていた。

「……ああ、沢山悪い事をした」

「？ でもおねーちゃんはわたしとアーちゃんのケガ、なおしてくれたよ？」

「大きくなれば分かるさ。私が悪い魔法使いだって」

「んー……よくわかんない！」

エヴァの眼の前のツインテールの女の子は考えることを放棄したみたいだ。

いずれは大きくなるに従って、魔法使いを目指すならばナギの武勇伝を教えてもらうことになる。

その際に、引きあいとして悪の魔法使いの筆頭であるエヴァの事を封印した事を習うだろう。

いかな人物、いや、化け物であったか。

そしてそこには従者である俺の名前は無いのだろう。

英雄がそんな事をする訳が無いというだけの決めつけで。

「……何をしている」

エヴァが眼の前の女の子にそう聞くと、その子はその行動を続けたまま、笑顔で答えた。

「いいこいいこしてるのー！ おねーちゃん、かなしそうだったから」

言葉が後の方になるにつれて、不機嫌そうにしていたエヴァの顔が歪んでいった。

その双眼から、ボロボロと涙がこぼれ落ち、服に水玉模様を作る。

「クソッ……だからガキは嫌いなんだ……」

両手で涙を拭いながらエヴァがぼそりと呟く。

聞こえていたのは俺達だけだろう。

子供たちには聞こえないような、それほど小さな声だった。

エヴァの眼の前の子はどうすればいいのか分からないのか、オロオ

口としている。

ひとしきり泣いた後で、エヴァはすっと立ち上がって女の子の手を握る。

「ほら、遊びに行くぞ」

一点の陰りもない、綺麗な笑顔でそういうエヴァに、女の子とその他数名が元氣よく返事をしながら付いていく。

そんな光景に、思わず俺も涙しそうになる。

俺たちはそれを見送りながら、一時の安息を楽しんでいた。

「ケケケ、御主人モ随分ト変ワリヤガッタナ」

「こんな生活も良いものだろ？」

「マア、悪クハネーナ。昔ヨリ少シツマラネーケド」

ケケケ、と笑うチャチャゼロ、

こいつもかなり丸くなってきた。

自分ではそれを認めないだろうが、不殺を貫き通していることだつて、以前のチャチャゼロに比べたら随分な変化だ。

「チャチャゼロ！ 勝負だー！」

「ケケケ、良イ度胸ジャネーカ。斬リ刻ンデヤルヨ」

今度は少年が、チャチャゼロに挑みに来た。

手には木の枝を持っている。

そのまま二人で少し離れた所まで行き、稽古のように打ち合う。

ツマラナイ、と口では言いながらも、チャチャゼロは十分に楽しん

でいるようだ。

「ドーシタ小僧、ギブアップか？」

「まだまだー！」

「ケケケ、ヤルジャネエカ」

本当に楽しそうだ。

時々悲鳴が聞こえてくるけど。

「そう言えばネギが拳闘大会に出るんだって？」

「ええ、オスティア終戦記念祭に連なった大会だそうです」

刹那が俺の突発的な質問に瞬間的に答えてくれる。

その大会が終われば、数日で俺も消え去る。

今はジャックに師事しているのだろうか。

全員が賞金首になっているし、大会に出たということは間違いなく数人が奴隷になっているのだろう。

「誰か出場してみるか？ 特別枠で出させてやるけど」

「チーム戦があっただろう。それに参加したらどうだい？」

「そやけどあれは八人制限やんか。うちらは九人おるで？」

チーム戦なんてあったのか……八人って事は紅き翼の人数と同じだな。

ジャックも意外に思い入れがあったのか？

というか、チャチャゼロを人数にカウントするのは限りなく疑問
だけど。

「それなら俺が出なければ丁度八人だろ」

「ええー！ パパ出ないの？」

「まあ、選ばれるチームは一チームだけだから元々出られないかも
しれないがね」

「どういう事？ マナ」

「抽選で一チームが選ばれ、そのチームがジャック・ラカンと戦う
のさ。まあ、今までに勝てた所は無いけどね」

「なら丁度良いじゃないか。お前らが記念すべき一号目だ」

「タクマ君は？」

「俺だとジャック相手なら試合にならないから」

ジャック相手だと、遊ぶ事が出来ないから、一瞬で終わってしまう。

「それに最後くらいお前らの良いところを見せてくれて。魔法世
界にこの大会で名を残す事。これは三人への卒業試験だ」

「よお、ジャック」

オスティアの拳闘大会に来てみれば、そこにいたのはジャックとテオドラと、どこかで見たことがあるような二人。ジャックとテオドラに会うのも何年振りだろうか。会うのもこれで最後だと思うと、こみあげてくるものがある。

「タクマじゃねえか。どうしたんだ？」

ジャックがいち早く反応して俺に問いかけてくる間、テオドラがこちらに飛びついて来たので、反射的に肩車の体勢に持っていく。

「ちょっと頼みがあってな。この大会でのチーム戦に俺のチームを出させて欲しい。……もちろん俺は出ないけど」

「それは良いけどよ……強いのか？」

「何じゃ、知らんのか？ タクマがリーダーをしておる“反正義”と言えは有名じゃぞ？」

テオドラは知っているだろう。

ヘラスを中心に活動してきたんだから。

それに他の二人……今、名前を思い出したが、セラスと、もう一人の名前が分からない方も知っているだろう。

「俺を除いた紅き翼と良い勝負が出来るな」

良い勝負どころか、75%以上の確率で勝てるけど。

最強の魔法使いのエヴァに、砲撃魔法を使用する白い悪魔のなのは、現役のころの詠春と同等か或いはそれ以上の刹那、チャチャゼロ、的確かつ圧倒的な弾幕数を誇るマナと茶々丸、魔法完全無効化能力者のヴィヴィオ、三分以内ならどんな怪我でも治し、且つ障壁役の木乃香。

考えうる限りの最小人数による、最高且つ最強のチームだ。

ともすればヴィヴィオがいるので、俺でも苦戦を強いられるかもしれない。

「最強クラスか。おもしれエ、やってやるよ!!」

「済まんな。それからネギの方はどうだ？」

「あー、あいつな。同じ年のころのナギよか強いんじゃないか？」

それからあいつの相棒の犬も強ええな。若いころの俺を見てるみたいだ」

ジャックにここまで言わせるか……二人とも大分成長したみたいだな。

「そういや俺はさっきこの大会にエントリーしてきたんだが、お前もやるか？」

「そうだな、お前とペアで出しておいてくれ。その方が色々と盛り上がるだろう」

ネギ達にも卒業試験っぽいのをやらせてみるか。

どこまで成長してるのか……ますます楽しみだ。
見せてくれよ、主人公！

ネギとの勝負は割愛させてもらおうとしよう。

服に汚れが付いたとだけは言っておく。

ジャックと我らがチームの勝負は見るも無残なものだった。

ヴィヴィオがジャックの全力の気弾を無効化して、そこから始まる
砲撃の嵐。

本乃香が試合が終わった後にジャックを回復させてやらなければ死
んでいたかもしれない。

それはともかく、再び神の前に戻ってきている。

次の世界に行く前に、俺は能力を殆ど封印してもらった。

人間としての感覚を忘れていたからだ。
次は忍者の世界。

それでも、魂の格の問題から、いくら抑えきれなかった力が溢れだす。

そして、幼女の話しによれば、世界をいじくる事に失敗したらしく、丁度その際にいくつかの魂が忍者の世界に入ってしまったとのこと。つまりは俺以外に俺の世界から転生者がいるということだ。

『済まんの、我が魂を一度送ったおかげで戻って繰る際に格が上がったようじゃ』

言っていることを簡単に整理してみれば、なのはの魂の格が上がって、次の世界に遅れるということだ。

ただし、記憶とかそういうものは全く違うものになり、それだけではなく俺の世界からあふれ出した魂が混在しているらしい。

魂の段階として惹かれあうことはあるだろうとのことだ。

『しかし……我の予想外の事が起こるとは……』

全くの別人であるだろうが、次の世界でも俺はなのはの魂を持った人物に会うのだろう。

そう思うと、何だか不思議な感じだ。

全くの別人という訳ではない別人の事を好きになるかもしれない。というか、魂の問題で好きになるだろうことは分かっている。

まあ、それも俺の宿命なのだろう。

全てを受け入れるとしよう。

第九話 中途半端な終わり方（後書き）

ということで次回からNARUTOに入りたいと思います。

形式がガラッと変わったり、主人公の性格も変わったりしているかも知れませんがあまり深く考えずに、それぞれの世界で違う主人公だとも思っておいてください。

それから、もうひとつの方の小説も昨日更新しました。

良かったら見てやってください。

第三章 第一話 色々と説明（前書き）

この世界では主人公は最強レベルまで修行して強くなります。

……チートであることには変わりありませんが。

それから、原作の設定を若干弄るかもしれませんが。

ここは違う、というところはなるべく書く予定ですので、不思議に思ったら感想に書いてください。

第三章 第一話 色々と説明

まずは確認から。

名前は真柄タクマでいつも通り変更はない。

特に平凡な一般家庭——ただし忍での——に生まれ、丁度三歳の時に九尾事件が起き、その際に両親が何を血迷ったのか身を挺して日向ヒアシをかばった為に死亡。

その後、両親を失ったがために日向家に保護される。

名前はそのままに、時々日向の柔拳を教えてもらったりしているが、剛拳を使うことが多い。

能力のほとんどは封印し、自分の努力で強くなってみようと日々修行の毎日。

そして今回の世界には俺の他に確認している転生者が三人。

我が愛しの日向アサヒに、うちはヤヨイ、風間セツナの三人だ。

一応知識としては三人とも原作で忍連合軍が作られた所までを有している。

アサヒとは俺が日向家に引き取られた際に出会った。

多分、彼女が例の魂を持った者だろう。

出会った瞬間にどことなく惹かれたのを今でも覚えている。

彼女はヒナタの双子の姉で、ヒナタがさらわれるイベントの際にセツナと協力して阻止した為に、ネジとの仲も悪くない。

日向家では本来、忍になるためにアカデミーに通う必要はないが、本人の強い希望によって通うことになった。

くの一トップの成績で、ネジと合わせて“日向の寵児”と呼ばれるほどの腕前。

ヒナタをどうにか医療忍者にしようとしている。

ヤヨイはサスケの双子の妹。

既に写輪眼を開眼済みで今は模様が二つ浮き出ている。

アサヒと同じくくの一トップの成績。

一族のためなどと言ってイタチに復讐しようとするサスケを何よりも嫌う。

何でサスケもヤヨイの事を嫌っているのかは分からないが。

そして担当上忍のセツナを好いている。別にうちのは復興とかはどうでもいいと思っている。

まあ、そういう所がサスケに嫌われる原因なのかもしれないが。

出来ればうちを残そうかな、程度に考えている。

セツナは俺たちの担当上忍で、一応ヤヨイとは男女の仲。

俺たち三人よりも先にこの世界に入ったので、修行をしていた際に蝦蟇の里に入り込んで、そこで仙人になる為の修行を終えた。

一応戦争孤児という設定で、自来也の弟子ということで木の葉の里に迎えられた。

わずか十六歳にして担当上忍になることになった。

得意忍術は水遁で、螺旋丸の性質変化にも成功しているが、仙人状態でのみ使用が可能となる。

本人曰くチャクラの消費量が半端ではないらしい。

ということ、俺のアドバンテージとしては、ナルトレベルのチャクラと、今まで培ってきた武術だけだ。

まあ、それだけでもかなりの力だとは思うけど。

目下、写輪眼にどうやって対抗しようか悩み中だ。

アカデミーの授業では影分身を使わずと寝させていたおかげで男子のドベということになり、画策通りにアサヒ、ヤヨイの二人と班を組めることになった。

まあ、日向当主であるヒアシ様の圧力も少しあったみたいだが……。

そして、二つの血継限界——とりわけうちの生き残り——を抱える班ということで、その保護の為に強い忍が回されることになり、担当上忍も仙術を使えるセツナが担当することになって、四人とも影分身で任務をすませつつ、ひたすら修行に励んでいる。

まあ、セツナは修行じゃなくて面白忍術を考案してるみたいだが、俺たち三人の目標は木の葉の三忍の再来と言われることだ

。この班は、木の葉が誇る二つの血継限界を有しているから最強であることは間違いないのだが、そのために中忍試験では確実に大蛇丸に狙われる。

だから三人だけで撃退できるように日々修行中だ。

いくらヤヨイに写輪眼があるとはいえ、いかんせんチャクラが少ない。

俺が九尾なしのナルトと同じくらいで、アサヒがカカシ程度、セツナは自来也と同じくらいで、ヤヨイだけが呪印なしのサスケと同じか、それよりも少ないくらいしかない。

とは言っても、一番少ないヤヨイでさえ、下忍レベルで言えばかなり多い。

だから、実戦を経験するという意味合いもあって、まず最初の目標としては再不斬を三人だけで倒せるようになることだ。

「やっぱ柔拳じゃアサヒには敵わないな」

いくらヒアシ様に少し教えを受けたとはいえ、俺は少し練習したくらいだ。

ほとんど毎日練習してるアサヒには柔拳だけじゃ勝てない。

話している今も、点穴を突かれる瞬間にどうにかチャクラを放出してダメージを軽減している。

チャクラが多いからこそできる芸当だ。

「そんな簡単に勝てたら困るもん。それに白眼持っていないんだから」

「俺も白眼欲しかったなあ。……そうすれば覗きとか「八卦——」
冗談です!!」「——六十四掌!!」「アガッ!!」

……最近俺の彼女が凶暴です。

模擬戦だからって言っても、もう少し俺の体をいたわってくれてもいいと思います。

愛してくれてるのは嬉しいんですけど、冗談——少しは本音も入ってたけど——に対して奥義を使わないで欲しいです。

いつもは、普通の時は、可愛いんだよ？

真っ白で雪みたいなのがポツって紅く染まる所とか、本当に抱きしめたくなるし。

特に昨日とかは（中略）って感じだったし、一昨日なんかは（中略）だったし。

それなのに今は凍るような眼で睨んでくるし。

「それで？ 何が欲しいのかももう一回言ってくれる？」

「アサヒ」

「ッ！ ……あ、ありがと／＼／」

ほら、不意打ちすると途端に可愛らしくなるし。

もうお持ち帰りどころじゃない。

今ここで頂いて良いですか？ って言いたいぐらいだ。
というか、体さえ動けば本当にここで頂きたい。

まあ、全身の点穴を突かれて体が動かないから無理だけど。

「？」

「ひ、膝枕……してあげる」

本当に可愛いです。

甘い匂いと、太ももの柔らかさがやばいです。

そして下から見上げるアサヒも新鮮で可愛いです。
本当に可愛いです。

大事なことなので二回続けて言いました。

だって忍者の世界ってほとんどが男なんだよ！？

その中で可愛い女の子って言ったらかなり希少な訳で、こんな風に
尽くしてくれて、強くて、可愛い女の子何て、アサヒ以外にはヤヨ
イぐらいしか思い浮かびません。

まあ、強い分喧嘩とかになると確実に負けてボコボコにされるんだ
けど。

もちろん、俺は本気で殴ったりする訳ではない。

それでも、アサヒ相手に後れを取ることは無い。

無いが……ボコボコにされる。

だってこっちが有利に進めると、涙目になるんだよ！？

涙目になったアサヒ何か、誰が殴れるんだよ！

ヒアシ様も親子喧嘩した時に、動けなくなってからヒナタに介抱さ
れてる時に俺に向かって「私もあれには勝てん。日向は木の葉にて
最強。そしてアサヒは日向にて最強だ。覚えておけ」って言った
し。

まあ、そんな事より……。

「アサヒ、気持ちいいよ。ありがとう」

「う、うん／＼／」

可愛い。

この年にしては珍しく若干の胸があるし、その控えめな――本当に申し訳ないほどしかない――双丘の向こうには薄桃に染まった頬と、瑞々しくてふつくらとした紅い唇がある。

俺が動ければ一も二もなくむしゃぶりついたであろうその唇は、俺の事を挑発的に見下ろしている。

それとは対称的に、大きな目は優しく俺に笑いかけてくれる。

吸い込まれそう、というよりも、魂ごと引き抜かれそうな目だ。

白眼だから、という訳ではないのをここで強調しておく。

「おい、二人とも桃色な世界に入っとらんで修行しいや」

セツナか、何で空気を読まないのか。

大体お前も向こうでヤヨイと一緒に居れば良いのに。

「第一に、俺は点穴を突かれて動けない。第二に、分かってるなら邪魔するな。最後に、お前らと違ってこっちはヒアシ様の目があるからこういう時にしかイチャイチャできない」

この二人、というかヤヨイはサスケが嫌だから、という理由だけで、セツナの家で寝泊まりしている。

そのお泊りの翌日にはヤヨイの歩き方がおかしかったし、セツナもかなり疲れていたから、問いただしたら、やらかしていたらしい。

俺だって……俺だってアサヒとそういうことしたい。

だけどヒアシ様が「アサヒの婿はお前に決めている。だが私に勝てるまではダメだ!!」って言うから、屋敷住まいのアサヒとはそういうことができない。

そして俺も九尾事件で家がつぶれているから日向に住んでいる訳だから、外に拠点もない。

まあ、今までの任務でもらった金は全て貯金してあるし、勝利条件も一撃入れるだけだから、そろそろクリアできるはずだ。そのため秘策も完成しつつある。

「そうは言ったって……来週から波の国の任務やで？」

「いや、いかな再不斬と言えど守りに徹したヒアシ様に一撃入れるのと難易度は変わらないんじゃないか？」

「それは確かにそうかもな。それに再不斬の時はお前ら三人でやるんやし」

大体、ヒアシ様と眉なしじゃ、普通にやってもヒアシ様の方が強いはずだ。

眉なしはただの鬼人だけど、ヒアシ様は白眼に加えて宗家の奥義もある。

それに日向の真骨頂は守りだ。

その当主に一撃入りたいのに、眉なしごときで躰いている場合じゃない。

眉なしと互角の戦いを繰り広げたカカシが、大蛇丸にはてんで敵わないんだから。

「さて……と、そろそろ体も動きそうだし、最終調整に入るか」

「あ……」

そ、そんな顔するなって。思わずもうちょっとだけって良いそうになるじゃないか。

「今度もう一回頼むな？」

「うん♪」

今までアサヒの可愛さについては何度も言ってきたが、もう一言言っておこう。

マジ、パない。

第三章 第一話 色々と説明（後書き）

一応、最強はアサヒとヤヨイの予定です。

主人公はその次くらい。

それから今回の話で分かったと思いますが、序盤はひたすら甘い話を突き進みます。

読者の皆様は自分の感性和合わないと思ったところで引き返してください。

第二話 目的があるから頑張れる（前書き）

これから先、一話一話が短くなるかもしれません。
それから、とんでも設定があつたりするかも知れませんが、そういうものだと思ってください。

第二話 目的があるから頑張れる

「ハナビ、一昨日からアサヒが不機嫌なんだけど、何でだ？」

少し温泉街まで出かけて、お湯の上で寝転がるという、全身のチャクラからチャクラを放出する修行を終わらせて帰ってきたら、アサヒは無茶苦茶機嫌が悪かった。

それこそ、今までの中でも最大級だ。

「……兄様はもう少し女心を理解するべきだと思います」

そんな呆れたような目で見ないでほしいです。どちらかと言うと、ハナビの方がヒナタよりもアサヒに似ているから、俺としてはダメージがでかい。

というか、女心を勉強できたりするならしてみたい。多分、全世界の男はそう言うだろう。

「ハナビ、頼むこのままじゃ俺の身が持たない」

本当に。

二日もアサヒに触れていないからアサヒ分がかなり不足している。後二日もあったら、確実に死ねる。

「ハア……アサヒ姉様が可哀そうですからヒントだけ教えます。一昨日の行動を思い返してください」

一昨日？ 朝起きてからアサヒに挨拶して、アサヒと朝ご飯を食べて、その後で温泉街に行って修行をしてきて、帰ってきたらアサヒ

が不機嫌だったな。

「ま、まさか！」

「漸く分りましたか」

「俺が一人で行ったから不機嫌なのか！　そうと分かれば謝りに行ってくる！　ありがとう、ハナビ」

「……ハナビ、今度は百二十八掌をだったんだけど」

「当たり前です！　人の話は最後まで聞いてください。兄様が温泉街で修行してた時か、帰ってくる時に誰かと会いませんでしたか？　それが原因だと思います。時間的には修行の時だと思えますけど……姉様の機嫌が悪くなったのは私と修行してた時ですから」

何だ、ヒントとか言っておいてハナビにも分かってないのか……つてそれは不味いな。

このままだとずっとアサヒが不機嫌だってことに……急いで思い返そう。

冷静に考え直してみよう。

何かアサヒの機嫌を損ねるような事をしなかったか……。

一緒に行かなかったことではない。

温泉で覗きとかもやっていない。

というか、覗きなんてしてたのが見つかったら間違いなく殺されるだろう。

修行から帰ってくる時は……行商の馬車に乗せてもらったな。

これか？

「帰ってくる時に行商の馬車に乗せてもらったんだけど、それだと思うか？」

「何故ですか？」

「その行商に女の子がいたんだよ。暇だったから話したりしたんだけど」

でもそれだけであんなに不機嫌になるとは思えない。

いつもなら他の女の子と話をした後とかには、スキンシップすれば機嫌が良くなってる。

「アサヒ姉様がそれだけであんなに怒るとは思えません。他に何かなかったんですか？」

「無いと思うけど」

「もう姉様に聞いてみたらどうですか？ 案外教えてくれるかもしれませんし」

ってハナビもヒントとか言っておいて、分かってないじゃん。

「そうだな。聞いてくるよ。ありがとうな、ハナビ」

まあ、教えてくれればそれに対応した策と言うか、謝ることもできる。

それにしても何に怒っているのか……全然思いつかないんだけどなあ。っと、ここにいたのか。

「アサヒ、何に怒ってるのか教えてくれないか？」

「……」

反応はしてくれている。

俺の言葉に足を止めたから。

でも答えてはくれないらしい。

土下座……をしてもダメだろう。

何に怒っているのかが分かれば、それを出来るのだが。

「アサヒ？」

無言でこちらを向いて近づいてくるアサヒに声をかける。

それも無視され、ついに俺とアサヒの距離が数10cmになる。

「アサヒ？」

「……口を閉じて、目を瞑って、後ろ向いて」

言われたとおりに目をつむり、後ろを向く。

一応、アサヒの気配が後ろにあるのは分かる。

一分、二分と時間が経過し、それでも目を瞑ったまま、黙っておく。

さらに三分、四分と時間が経過し、どのくらい経ったのか考えるのを止めたところで、アサヒが後ろから抱きついたのが分かった。

丁度、俺の体を腕ごとアサヒが抱き込む形。

密接に接着したアサヒの体から、トクントクンと一定のリズムを刻む心音が聞こえてくる。

「動いちゃダメ」

俺が声を出そうとした所で念押しのように言葉がかかり、アサヒの力が幾分か強まり、動きを制される。

耳に届いたのが不思議なくらい、今にも消えそうな儚い声だった。それを聞いて漸く、俺が勝手にいなくなったことへの不安と、そこからの反動形成された気持で怒っていたのだと気付いた。

本来ならばありえない“転生”を経験し、自分が異端であると分かっていたのだろう。

殺伐とした世界で、殺しもある世界で、生きて行くことへの不安。
ファンタジーリアル
空想が現実であることへの畏怖。

そんなものをとくに忘れてしまった俺は、気が付けなかった。アサヒの異常なまでの俺への依存に。

それに漸く気が付いてから、アサヒに対して済まないと思うと同時に、これ以上なく愛おしくなった。だからアサヒの腕をふりほどく。

「あ——」

そしてそのまま反転してアサヒの頭を優しく掴み、こちらに寄せる。そのまま唇を強引に奪い、舌をねじ込む。

息継ぎをさせる暇を与えないように。

アサヒの呼吸すら俺のものにするように深く、深く口づけする。

「……………んむ……………ぷはっ」

どれくらいしていたのか分からないが、アサヒを漸く解放してから抱き寄せて、離さないように強く抱きしめる。

アサヒの表情がここからだとはえないが、互いの心音が一つの音楽を奏でるように鳴動しているのを感じる。

暫くそのまま居てから、ゆっくりと腕を話し、アサヒと目を合わせる。

「ごめんな」

その言葉に込めたのは謝罪と誓い。

「……バカっ」

顔を真っ赤に上気させて、涙目になったアサヒに力無く言われてから、もう一度唇を合わせる。

今度は優しい、唇を触れ合わせるだけのキス。唇どうしが離れてから、俺が声を出すよりも早く、いまだに湿っぽいアサヒの口から言葉が出て来た。

「もう……台無し」

何が、と聞こうとした所で、アサヒの意味するところに気付く。

それはムードを台無しにしたという意味だった。

アサヒの顔が信じられないほど紅く、そしてそっぽを向いたことから分かった。

「しょうがないだろ？ アサヒが可愛すぎるのがいけないんだよ」

アサヒが意味していたのは、大きくなっていた俺の下半身。

でも、本当にしようがない。

生理現象だし、あんなキスをした後で、艶めいていたアサヒが垣間見えていたんだから。

「タクマのえっち」

そう言いながらまた抱き合い、だからこそアサヒの言葉には恥ずかしさだけで、恐怖も嫌悪も含まれていなかった事が分かった。そして同時に、忍であるが故の身体能力の高さなのか、鼻——臭覚に違和感を覚え、顔がにやつくのを止められなかった。

「そう言いながら濡らしてるアサヒもおんなじ位、エロいな」

「ッ!!」

バツと音を立てながらアサヒが後ろを向く。

多分その顔は羞恥で真っ赤に染まっているだろう。

……というか、耳まで赤くなっているのが後ろからも分かる。

そんなアサヒが愛おしくて、俺のが当たるのもお構いなしに後ろからきつく抱きしめる。

「……当たってる」

「濡れてる」

恥じらいながら必死に言葉を紡ぐアサヒに瞬時に言い返す。
恥ずかしいのか、顔を俯かせるアサヒ。

「アサヒ……もう我慢できないんだけど」

「えっち、変態、スケベ」

「酷いな……アサヒだって興奮してるくせに」

「……父上に勝ってからでしょ」

「じゃあ、今すぐ勝ってくる」

そうでもしないと本当に宗家の屋敷の廊下で押し倒しかねない。

大体、何でこの世界にスカートとかがあるのだろうか。

下着類は……良く分かんが、多分そこまで現代に近くは無いだろう。

そもそも、女っ気の少ないこの時代にスカートをなくアサヒが悪い。シミ一つない、雪のようなもち肌の太股が嫌でも——嫌ではなく、大歓迎だが——目につく。

そこから、というか身体全体からオンナノコ特有の甘い匂いと、雌の匂いがして、どうにも頭がクラクラする。

というか、そっち方向でしかものを考えていないあたり、俺も獣に近い。

とにかく、一刻も早くヒアシ様を見つけ出して、課題をクリアした方が建設的だ。

……自分で言っていて何が建設的なのか分からないが。

「ほう……昨日までとは目が違うな。何かお前の気持ちを入れ替えさせたか」

ここで間違っても本当の事を言っではいけない。

アサヒとヤルための我慢が出来なくなりそうです、などとは。そんな事をすれば、俺という存在が木の葉の里から消滅する事になる。

相手は五大国最強の木の葉の里でも、最強クラス。

カカシと同等か、或いはそれ以上。

一瞬でも気を抜いたら終わりだ。

「雷遁・電光石火」

「その年でそこまで性質変化を使いこなすか……末恐ろしいな。しかも体中に雷遁を纏っているのか」

と言いながらも、ヒアシ様は一向に驚いた様子も慌てる素振も見せない。

それに、今の俺はイタチが暗部の部隊長になった年と同じだ。

そこまで驚くべき事でもない。

そして、白眼を持つ者にはチャクラがどうなっているのかを見ることが出来るから、俺の術も事細かに分かっているのだろう。

この術は電気負荷による肉体活性と、自分の表面に静電気を纏わせ、周囲に微弱な静電界を作り出す事で相手の動作を感知する術だ。

某暗殺一家の天才が念能力で作ったものを真似してみて、そこにさらに物理化学の法則を取り入れた。

自分が発生させる電荷を、人間なら必ず微弱に纏っている静電気の電荷と、俺の意志一つで印を結ぶことによってプラスマイナスに変換させる。

そうすることで、クーロン力、つまりは静電気力によって斥力と引力が生まれる。

本来の電気であれば、そこまで力はないが、チャクラで作りだした電気であるが故なのか、この力はかなり強大になった。

それこそ、人一人を動かせるぐらいに。

写輪眼ならともかく、白眼では速度についてこれなければ問題ない。……まあ、ヒアシ様はその速度についてくる事が出来るからこそ強い訳だが。

自分に電気負荷をかけて、人間の限界を超えた速度で攻撃する。とはいっても、今のこの体では上忍程度の速度しか出せない。

もう少し元の身体の鍛錬を重ねればそれ以上の速度が確実に出せるようになるが。

しかも、俺の速度を簡単にいなすように柔拳を使われる。

自分では、重しをはずしたリーぐらいのスピードは出しているつもりだが、ここまで簡単にあしらわれると凹む。

「ククク。これで下忍か。一体どうなっているのやら。だが日向の白眼には通用せん。カウンター思考のその術もこちらが動かなければ意味はない」

それは仕方がない。この術は螺旋丸や千鳥を確実にカウンターで当てる為の術だ。

写輪眼の無い俺には、カカシやサスケ以上の肉体活性が必要だったから開発したのだ。

ただでさえ、螺旋丸も千鳥も攻撃範囲が狭い。だから確実に相手にあてる事が必要なのだ。

「ヒアシ様、次の術は確実に当たるので防御してください」

その為に螺旋丸を開発した四代目は、相手に確実に当てる為の手段を有していた。

そして、俺が確実に当てる為の準備も終わった。

「劣化・飛雷神の術」

「何！？　グッ“回天”」

「“螺旋丸”」

轟音を立てて俺の螺旋丸とヒアシ様の回天がぶつかる。

みていたハナビが「兄様！」と、「父上！」と叫んでいる。

どうでもいいが、ハナビが先に俺を心配したことに少しだけ勝った感じがした。

かなりの土煙がたち、それが少しずつ風に流されて行く。

ヒアシ様を中心として地面が丸く抉れ、その中心に立っているヒアシ様は服が汚れ、一部分が破けていた。

「その術……どこで覚えた」

「四代目が時空間忍術を使っていたのはアカデミーの教科書にも載っていますから、調べました」

だが、それを思い至ったとしても、下忍風情には手に入る情報も少なく、分かったのはどういう理論で術を行っていたのか。

印の結び方や、どういうマーキングをしたのかは分からなかった。

「それからマーキングはカカシさんに聞きました。印は口寄せの術を参考に。あとはオリジナルです」

渋っていたが、イチャパラの新刊を渡したら、代わりに四代目にもらったというクナイを見せてくれた。

どうしてイチャパラを持っていたのかということとは追及してはいけない。

とりあえず、アサヒにばれないように命がけだったことと、読んでみたら意外に面白かった事をここに記しておこう。

アサヒにばれないように、というのは、イチャパラが所謂R18っぽい小説だからだ。

まあ、かなり大変な思いをして見る事の出来た、四代目のマークを調べなおし、研究を重ねた結果、あれは四代目ならではのものだと分かった。

クナイに書き込めるだけのマーキングで飛ぶには、印の量を多くしなければならなく、今結べる印の速度では術を見切られる。

だから、マーキングをより綿密にして、印の量を減らした。

マーキングは雷遁で体術を使っていた時に地面に書いた。

俺の雷遁・電光石火の特性が分かれば分かるだけ、相手はその場を動かなくなる。

だからこそ、マーキングをすることができ、そこに一瞬で飛ぶ事が出来る。

螺旋丸の発動までも少し時間はかかるが、飛雷神を組み合わせれば当てられる。

「白眼の死角からの攻撃……私やヒザシでなければ死んでいたな。下忍が日向当主を越えるか。やはりアサヒはお前に任せるのが良いようだ」

「じゃ、合格で良いですか？」

「フッ。私の回天を破っておいてそれ以上か？　そこまでは私も求めん……後は好きに……しろ」

「父上！」

ヒアシ様倒れ込む。

どうやら気を失ったらしい。

ハナビとヒナタが駆け寄り、ヒナタが白眼でヒアシ様の身体を調べて行く。

医療忍術を施さない所を見ると、どうやらただ単に当たりどころが悪くて気を失ったみたいだ。多分、軽い脳震盪を起こしたのだろう。

「さてアサヒ、お許しが出たから閨に行こうか」

アサヒの方に近づいてから、耳打ちする。その為に頑張ったんだ。御褒美が欲しい。

「アサヒ……？」

何でか反応が返ってこない。

というか、ワナワナ震えてる。

チャクラも練られて……チャクラ？

「バカー！！」

「グボハッ！」

「ひ、昼間っから、そんな事しないもん！！」

八卦空掌……出来たんだ。

「やっぱりアサヒ姉様が一番強い……流石です！」

ハナビ、関しないで助けて欲しいです。

かなり良い感じに入ったから、っていうか……そろそろ……意識……
…飛ぶ。

第二話 目的があるから頑張れる（後書き）

自分の書きたいように上手く表現できない。
文才が欲しい今日この頃。

第三話 霧隠れの眉なし（前書き）

戦闘描写が難しいです。
だれか僕に文才を分けてください。

第三話 霧隠れの眉なし

「セツナ……何でこいつがいるの？」

超怖い。

いや、三文字だけだけど、それ以外に何も当てはまらないくらいにヤヨイが怖い。

「や、ヤヨイ！ 違うんや！ これには深い訳が！！」

なんだか字面だけみると、浮気現場を取り押さえられた男みたいだが、実際には違う。

カカシ率いる主人公組が付いてくることになったただけだ。なんでも三代目の命令で、二班合同で任務にあたるらしい。まあ、これで原作通りに橋の名前も決まるし、名前は忘れたが、小さい男の子の事もナルトが何とかしてくれるだろう。正直、俺たちだけだったら誰が相手をするかで揉めるだろうから。

「何でうちの落ちこぼれ何かと……」

「何だと！？」

「サスケ君は落ちこぼれ何かじゃない！ 大体、それを言うなら貴方達の所のタクマの方がそうでしょ」

「（ブチッ！）何か言いましたか？ そのピンク」

（セツナ、担当上忍でしょ！？ あの二人を止めてよ！）

（ム、ムリや！ ヤヨイはともかくアサヒは……タクマ、頼んだ！）

（あんたらそれでも上忍か！？ 下忍二人くらいどうにかしてみろよ！！！）

（アレを！？ あんなの三代目でも、先生でもムリだって！！）

（タクマ、頼むから！！）

（俺もムリだって！！）

「あのさ、あのさ！ 何でも良いから早く行くってばよ！」

ナルトが無邪気にそんな事を言ったおかげなのか、場の空気が収縮していく。護衛対象のタズナとかいうおっさんは既に気絶しかかっているし。こんな時だからこそ思うが、良くもナルトはここまで空気を読めないものだ。原作ではヒナタの気持ちに気付いていなかったが、ここまで来ると一種の才能なんじゃないだろうか。まあ、今はその才能とも呼べるほどの鈍感さのおかげで助かっているが。

「アサヒ、言わせておけば良いだろ？」

なるだけ、アサヒの矛がこちらに向かないように注意しながらアサヒに声をかけてみる。不用意に声をかけると、途端に機嫌が悪くなるから注意が必要だということはこの十年近い日々で理解している。だから、機嫌が悪いアサヒに声をかける時はキスしながらか、後ろから抱きしめながらだ。

例のあの人が唯一恐れたとか言う、どこかの魔法学校の校長が言っていたみたいに、愛の力は偉大だ。それを誰よりも理解しているのは他ならない俺だろう。ということで、今回は他の目もあるから後ろからギュッと抱きしめてやった。

「……タクマがそう言うなら」

「うん。ありがとう」

可愛いです。

本当に。

「ヤヨイも抑えて。な？」

「……うん」

もう一度言おう。

愛の力は偉大だ。

波乱の幕開けとなったこの任務、どうやら最初のポイント地点である水たまりには、俺たち十一班と、上忍二人が気付いた。もちろん第七班の三人は気が付くことなく——というか、サスケはやヨイに、サクラはアサヒに目を向けてるから気付くはずもなく——俺達も普通にアイコンタクトでスルーした。

「二匹同時」

水たまりから出て来た二人の忍がカカシとセツナを同時に殺したかのように見える。っていうか、変わり身をするぐらいならわざわざ赤い液体を血の代わりにしてまき散らさないでほしい。

「三匹目」

そして次にナルトが目標にされる。この時点でサスケが漸く反応し、反撃に移る。正直、俺たち三人のうちの誰かに来たら、反撃に困るからあっちで良かった。その後に出て来たカカシが右の奴を、セツナが左の奴を捕える。

「ナルト、すぐに助けてやらなくて悪かったな。怪我さしちまった」

「よオ……ケガはねーかよ。ビビリ君ども」

あれ？

今のもしかして俺も含まれてた？　ってことはアサヒが……。

「（ブチッ）今ここでうちの生き残りを一人減らしてあげましようか？」

やっぱり。俺、この任務で再不斬に会う前に死ぬかも。

「タクマ、現実に戻ってきてアサヒを何とかしや！」

「なあ、セツナ。俺、この任務が終わったら旅に出るんだ」

「何気に抜け忍っぽい発言すんなや！　っていうか本当に何とかし
い！！！」

「……ハア。アサヒ？」

「……分かった」

「ん、良い子だ」

何だか、最近この班での俺の役割はアサヒの暴走を止めるだけなの
かもしれないと思い始めて来た。出来ればそうでないことを祈るば
かりだ。ただでさえ、里での俺の評価はアサヒとヤヨイのお荷物何
だから。まあ、アサヒが居れば後は何でも良いけど。それにしても
アサヒ可愛いなあ。

「そこかアー！！！」

とりあえず、アサヒを愛でるのはここまでかな。変わり身用の雪ウ
サギが出て来たみたいだし。

「アサヒ」

「うん」

とりあえず、アサヒが白眼をして、索敵。まずは再不斬がどこにいるか。そして他に敵がいらないか。

「二時！」

アサヒの声に反応して、カカシがしゃがみながら、伏せろと声を出す。その声に反応して七班がタズナごと伏せる。その頭上を大刀が通過していき、その上に再不斬が立つ。

「へー、こりゃこりゃ、霧隠れの抜け忍、桃地再不斬君じゃないですか。……邪魔だ、我がつてろお前ら。こいつはさっきの奴らとはケタが違う。セツナ、手伝ってくれ」

「いえ、カカシ先輩はそっちをお願いします。どうやらもう一人出て来たみたいなので」

さて……もう一人出て来たのか。あっちはセツナに任せていいのか？

「何で抜け忍が二人出てくるかなあ」

「ほう……“木の葉の水仙人”に知られていたとは。光栄だ」

え？

セツナってそんなに有名だったのか？

——クイツ

セツナからサインが飛ばされ、俺たち三人はそれに頷いて、依頼人の護衛に回る。万が一、の事態も考えておいた方が良さだろう。ま

あ、セツナがやられることは無いだろうが。

「セツナ、カカシさんが捕まったけど、どうする？」

「こっちはもう少し時間がかかりそうやから頼んだわ!!」

大声を出してから、その返答に遠方からセツナの声が聞こえた。どうやら自分の戦闘に巻き込まないように敵を引き離して行ったようだ。

「お前ら、タズナさんを連れて逃げろ！ 下忍じゃ勝ち目がない！」

「ま、七班はここでタズナさんの護衛をしててくれ。あの水分身は俺たちが何とかするから」

もともとそれが目的でこの任務を担当したんだ。

「ククク……随分と勇ましいじゃないか」

「白眼！」

「写輪眼！」

あれ？

この流れって俺も何かしなきゃダメか？

「ええと……螺旋丸！」

とりあえず二人が瞳術持ちだから、俺も語呂が良いように螺旋丸にしてみたけど……アサヒとヤヨイの眼が怖い。いや、白眼と写輪眼だからじゃない。

「すみません。真面目にやります」

「タクマ？ 次に変なことやったら点穴だからね？」

「い、イエッサー！」

怖いこわいコワイ。

白眼状態で睨まれると本当に怖い。とりあえず早く終わらせた方が
良いだろう。その方が俺の精神にも優しい。とりあえずは……手札
はそんなに見せたくないからな。この先の中忍試験のために、写輪
眼状態のカカシに術を見せるのは得策じゃない。万が一にもサスケ
に対策を取られたら面倒だ。

「とりあえず……近接は俺とヤヨイな。決めはアサヒで。行こうか」
チャクラを足もとで爆発させて、瞬間的にスピードを出す。同時に
クナイを投げつつ、ヤヨイとタイミングを合わせる。

「ハッ！」

水分身とは言っても、本来の十分の一程度しか力はない。当然、術はそんなに多様できないから、必然的に体術オンリーで戦うことになる。それこそこちらの狙い目。体術だけなら俺とアサヒで抑える事が出来るし、万が一術を使われてもヤヨイが写輪眼で対処できる。

「チッ！ うぜえ餓鬼どもだ！！！」

とは言っても、流石に大刀に当たるのは不味い。あれに当たれば確実に一撃で持って行かれる。

「アサヒ！」

「柔拳法——八卦空掌！」

隙が出来た所にすかさずアサヒが柔拳を叩き込む。ものの五分もかからずに一体目の水分身を撃破。

「さて、次の水分身は？」

「ちっ！ 糞どもが！ 水分身なんか使うかよ！」

ならばこちらとしては都合が良い。再不斬は印が結べない状態だし、片手をカカシに費やしてるから片手で大刀を扱うしかない。明らかに選択ミスだ。こちらが体術の方が対処に楽だということは水分身の戦いを見てれば分かるはずなのに。

「じゃ、もらい！ 雷遁・地走り」

湖面に電流を流して、再不斬の身体を硬直させる。流石にそれ以上の電流を流すと、捕まっているカカシが動けなくなるので、足止め程度だ。だが、その一瞬でヤヨイには十分な時間。

「火遁・豪火球の術」

身体が硬直していて水を跳ね上げられず、さらには印も結べないので、カカシを封じている左腕を開放しなければ確実に当たる。

「糞ッ!!」

再不斬はどうやら逃げることを選択したらしい。それならばこれで俺たちの出番は終わりだ。後はカカシが何とかしてくれるだろうし。

「こりやどうも参ったね。まさか既に写輪眼を使っていたとは」

「どうでも良いですけどカカシ先生、後はお任せしますからね?」

「そりゃ勿論。下忍の君らに助けられて俺がやらない訳にはいかないでしょ」

「セツナ、遅いね」

「ヤヨイ、心配なら行くか？」

「ううん、ここにいる」

全く……彼女さんを心配させるとか、セツナの奴も何をやっているんだか。ま、様子を見るだけみてみるか。

「影分身の術」

影分身を一体作って、セツナの方に向かわせる。こっちの勝負がまだついてないから……いや、もう終わったか。丁度俺が影分身を向かわせたのと同時に、白が出てきて再不斬の首筋に千本を打ちつけた。そのままカシが再不斬の生死を確認し、戻ってきた所で影分身が消えたのか、経験値が蓄積されて情報が頭の中に入ってくる。

「終わってるし……」

どうやら、再不斬が生きている事の責任を取りたくないらしい。白が引き揚げてから戻ろうとしてるみたいだ。

「ヤヨイ、あっちは既に終わってる。セツナは……服がぬれてるだけだな」

第三話 霧隠れの眉なし（後書き）

なんだか三人がすごく強く見えますが、これから中忍試験までにもっと強くなります。

何回も言いますが、最終的に一番強くなるのはヤヨイとアサヒです。

第四話 任務終了（前書き）

どうしてもアサヒが自分の思っている通りに可愛らしく書けない。
だれかアドバイスをください。

第四話 任務終了

どうやら、原作通りにカカシ班は木登りの修行をするみたいだ。というか、基礎の基礎であるチャクラコントロールの修行をさせてないとか、カカシは担当上忍としては失格だろう。他の下忍の班でもそれくらいはやっているはずだ。多分、ガイの班とかなら水面歩行もやっているだろう。それはともかく、その間の護衛は俺たちが受け持つことになった。それにしても……タズナの娘のツナミさんも、一児の母で29歳にしてはなかなか――。

「タクマ？」

「すみません」

何でこんなに鋭いんだろうか。白眼の能力ってまさか点穴とかだけじゃなくて心も見透かせるんじゃないか！？

「違うからね」

やっぱ心を読まれてるような気がしてならない。

「タクマの考えてることは全部分かるの」

さいですか。俺としてはそれは惚気なのかどうかが気になるけど。まあ、護衛任務って言っても暇だから、修行でもして見るか？ どうせセツナとヤヨイもイチヤイチヤしてるだけなんだし。

「まずは印の速度だな」

イタチ位に印を結ぶ速度が上がれば、飛雷神の術も実戦に投入する事が出来る。それに俺の戦闘スタイルは体術を基本として、そこに忍術を織り交ぜて行く形だ。その過程で印を結ぶ事もあるし、何より電光石火を発動させるためにも印が必要だ。結ぶスピードが上がることにこしたことはない。

「子・寅・巳……」

確実に出来るようにしていきながら、少しずつ速度をあげて行く。初めは一つずつ、そして速度を上げるたびに一つ増やしていく。同時に、橋の側面で七班がやっているようにチャクラの吸着訓練をする。これによって手にチャクラを集中させないようにしながら、足の裏だけにチャクラを作り、印を結ぶ練習と同時に行う。分割思考の訓練と、チャクラを的確な場所に持つていけるようにする訓練。雷遁・電光石火は各所にチャクラを集中させることで、身体全体にチャクラをいきわたらせるよりも効果的なスピードを産む。そして、螺旋丸などと同時に使う時には別の場所でチャクラコントロールをする必要がある。チャクラコントロール自体は、螺旋丸を使えるようになるために鍛えたが、チャクラの同時コントロールはまだだ。出来ればこれから再不斬との再戦までには終わらせておきたい。中忍試験が始まるまでにやらなければならぬことは、まだ色々ある。とりあえずは基本的なことからだけど。

「タクマ……」

「ん？ どうした？」

声をかけられたので振り返ってみれば、何やら不機嫌な様子のアサヒ。手をもじもじさせている姿がなんとも可愛らしい。まあ、アサヒの可愛さは今に始まった事じゃないけど。

「えっと……その……」

「構ってほしいの？」

アサヒが求めているのがそういうことだと分かり、ついつい意地悪をしたくなる。

「……うん」

可愛い。

最近ずっとそれしか言っていないような気もするけど、とにかく可愛い。周りに人がいなければ、今ここでアサヒを頂いていた。間違いない。

「ほら、こっちおいで」

それだけでパアツと顔を輝かせるアサヒ。何て言うか、こういうところは小動物みたいだ。感情に応じてコロコロと表情が変化していくから、見ていて楽しいし、癒される。

「アサヒも一緒に修行するか？」

アサヒの頭を撫でながら、聞いてみる。橋の横側に立っているから、はたから見ればなんともお間抜けだろう。

「うん！」

とは言っても、アサヒが修行することなんて、日向の術を極めて行

くだけだ。白眼という強みがあるから、下手に他の事をするよりも日向の柔拳を極めて行った方が効率も良いし、確実に強くなれる。今は大体ネジよりも少し強いくらいだから、中忍試験までにはそれ以上になってもらわないと困る。なんせ相手は伝説の三忍だ。そしてその中でも特に目に悪い術を使うとして、そして木の葉で唯一、男、女、オカマで構成された班の中でもオカマとして有名な大蛇丸。忍界には木の葉の汚点としてその名が知れ渡っている。準備をしすぎるということはない。

「じゃ、アサヒは俺の影分身と……いや、本体と体術の修行な」

チャクラコントロールの修行は影分身でもできるけど、体術の修行は自分でやらないと経験値が蓄積されない。それに俺も体術を伸ばすのは必要なことだ。せっかくセツナに頼んでガイ特製の重りを貰って来たんだから、使わなければ意味がない。今は大体原作でリーがつけていた重りと同じくらいだ。その状態で日常生活を送っているから、かなりきつい。リーは良くこれで戦闘が出来ると思う。やはり、天才なのだろう。

「じゃ、行くよ。アサヒ」

ゆっくりと、一つ一つの動作を確かめながら、俺は柔拳と剛拳を混ぜ合わせて、アサヒに攻撃を加えて行く。この修行はゆっくりだから意味がある。剛拳にしる柔拳にしる、最短距離を拳と足が移動しなければならぬ。それを自分自身で確かめ、相手に指摘してもらうにはゆっくりとした組み手が一番適している。時間にして数時間、タズナが橋作りを中断させるまで俺とアサヒは組み手を続けた。

「へえー。あいつとまともにやり合えるなんて成長してるじゃない」

ヤヨイが少しばかり小馬鹿にしたように呟く。その眼には既に写輪眼が展開されており、模様も三つ付いている。この一週間の修行で三つまで持っていくことが出来たらしく、本人曰く、同じ術を使うのにも、チャクラの消費が少なくて済むようになったとの事だ。多分、体自体が写輪眼になれたのだろう。

白の相手は、原作通りにサスケとナルト、そしてサクラ。原作とは違い、サスケとナルトが中で、そして鏡の外側でサクラが隙を窺うという構図。最初は俺たちがやろうとしたが、サスケが己のプライドを誇示しようとするかのように七班でやると言いだし、ナルトもそれに便乗。だから、俺たちは依頼人の護衛を受け持った。再不斬の相手をカカシがしていて、セツナはどちらにでもすぐに介入できるように遊撃体勢を取っている。ヤヨイは写輪眼でカカシと再不斬の戦い方を見て、術の印を覚え、そして写輪眼での戦い方を研究している。

「どうだ、ヤヨイ？」

「やっぱりレベルが高いけど、千鳥は私には出来ないかな。チャクラが足りないし」

やはり、ヤヨイの最優先課題はチャクラを多くすることだろう。いくら写輪眼で術をコピーできたとしても、それを放てるだけのチャクラが無ければ、どうしようもない。

「つと、白の方は終わったみたいだな」

ナルトの中に入っている九尾のチャクラが少し漏れ出し、それによって白を殴る事が出来たようだ。サスケも無事に写輪眼を開眼し、どうやらここまでは原作と同じ展開をたどっている。この後も、俺たちは手出しをしない。白が再不斬の前に立って、カカシの雷切をその身で防ぎ、命を落とす。俺にとっては人が命を落とす所など、数えることすらできないくらいの経験をしてきているが、アサヒはそうはいかない。今までにそう言った経験をしてきて来なかった分、吐きそうになっている。ヤヨイはうちの抹殺事件の時に経験しているから、少しは耐性が付いているのだろう。

「アサヒ、ちゃんと見なきゃダメだからな」

俺の言葉に、こくんと一度首を倒してから、目をまっすぐ前に向ける。再不斬が負傷した体でガトーに襲いかかり、その身がだんだんとズタボロになって行く。最後にガトーの首が飛び、そこで小さな悲鳴が上がった。アサヒのものではない。アサヒはきつく唇をかみしめて、目をそらさないようにしている。

「もう良いだろ。セツナ、頼む」

「……ああ。“口寄せの術”」

カカシに頼まれてセツナの術によって蝦蟇が口寄せされ、ガトーが雇ったであろう男たちが蹂躪されて行く。それを見届けることなく、

再不斬と白の墓を作る準備をし、遺体の処理に取り掛かる。任務もひと段落付いたことだ。次は中忍試験。相手は伝説の三忍。

……そう言えば、イタチと鬼鮫は伝説の三忍には敵わないとか言っていたけど、それならどうして大蛇丸の事はそこまで恐れなかったんだろうか。不思議だ。もしかしたらイタチなりの考えがあつてそう言ったのかもしれないし、自来也が三忍と呼ばれた後に強くなったのかもしれないが。

第四話 任務終了（後書き）

今回もかなり短くなってしまいました。

何話かはさんでから中忍試験に入る予定です。

第五話 Cランク任務? (前書き)

感想の返答に今回のあとがきでキャラ説明を何とか書きましたが、やめます。

読者の皆様はつたない文章で想像してみてください。

いつの間にか自分の好きそうなキャラに……なってるというなあ。

第五話 Cランク任務？

中忍試験に出る為には、形式では8任務以上をこなすことが必要ということで、俺たちはノルマをこなすために最後の任務となるであろう、荷物運びの任務に取り掛かった。ランクはC。ただの荷物運びならDに位置づけられるのだろうが、この任務は火の国の国境付近まで荷を届けるということで、一つランクが上がった。届けるべき場所は、滝隠れの里の近くだ。その間も、修行がてら、俺はガイの特製重りを付けながら移動、アサヒは常時白眼を展開しながらセツナが方々に飛ばすボールの数字を当てるという訓練、ヤヨイはチャクラコントロールの仕上がりとして螺旋丸の発動を頑張っている。

「今日はここら辺で休憩にしようか」

「ん？ やけに早くないか？」

セツナが決めたのならそれには従うつもりだが、それにしてもやけに早い。まだ日も暮れていないし、どこかこの近くに街があるという訳でもない。

「ああ。わいの新術を……！ アサヒ、四時の方向……！」

その一瞬で俺たちは警戒をマックスまで引き上げて、アサヒ、ヤヨイがそれぞれの眼を発動させる。

「そんな！ 何でこいつらが……！」

それだけでは分からない、とアサヒに言おうとした所で、アサヒが息をのんだ理由が分かった。木の陰から出て来たのは、イタチと鬼

鮫。

「おやおや……こんな所でうちはの生き残りに会えるとは思いませんでしたねえ」

「ヤヨイか……俺と同じ眼はまだ持っていないようだな」

かなり不味い状況だ。いくらセツナでも、この二人を同時に相手には出来ない。そして写輪眼に対抗できるのは写輪眼を持っているヤヨイだけ。かといって、ヤヨイ一人でイタチの相手が出来るはずもない。そしてイタチの幻術に対抗できるのはセツナだけ。

「全員、少しだけ時間を稼ぎ頼むわ」

セツナが指を噛み切って血を流していた。どうやら最初からマジで行くようだ。

「ほう……下忍三人だけで我々の相手をさせるのですか。“水仙人”もなかなか酷いお人のようだ」

「鬼鮫、任せる」

「良いのですか？ 私がやったら貴方の妹さんもどうなるかわかりませんよ？」

「……そうなたらそれまでの奴だったというだけだ」

本心でそう思っているのか、それとも俺たちが鬼鮫にやられないと思ったのか、はたまた鬼鮫が手加減すると思ったのか。いや、どれも違うし、どれも当たっているのだろう。

イタチはセツナに注意を向けている。

「その鮫さん。あんまりこいつらを舐めへん方がええよ」

“水仙人”のお墨付きですか。ますます楽しみだ」

出し惜しみしている暇は無いな。アサヒもヤヨイも眼を発動させているし、油断なく構えている。

「雷遁・電光石火」

体に電気負荷をかけて速度をあげる術。既に重りは外してあるが、今までの疲労がかなり効いている。鬼鮫相手に何分持つのか……。

「火遁・豪火球の術」

ヤヨイの術がスタート合図。それが放たれると同時に俺とアサヒが近接戦闘をしようとする。俺が鮫肌を抱えている方の、向かって左側から。忍刀に雷遁を流しながら鮫肌をアサヒの方にやらせないようにする。

「八卦・破山撃」

八卦空掌を強化したものをアサヒが鬼鮫に向けて飛ばす。しかし、俺がその前に吹き飛ばされ、大刀。鮫肌によって吸収される。

「惜しかったですねえ。私の鮫肌は斬るのではなく削り、そしてチヤクラを食う」

別にこちらもあるで決まるとは思っていない。今の戦闘で重要な

は、時間稼ぎと、鬼鯨がどれくらい強いのかを冷静に見極める事。パワータイプなら速度に優る俺が、スピードタイプなら写輪眼と白眼を有するヤヨイとアサヒが対応する。だが、流石に暁のメンバーの一人。両方ともかなりのレベルだ。まあ、どちらかと言えばパワータイプであることは間違いないだろうが。

「火遁・鳳仙火の術」

「残念ですが、私は水遁使いですよ。水遁・水陣壁」

ヤヨイの術が水の壁に阻まれる。一つ一つの炎の中に手裏剣を潜ませていたが、それも意味が無くなった。だが、俺たちも各個の技で撃破できるなど考えていない。もともとチーム戦を重視して修行を重ねてきている。

「柔歩双獅拳」

獅子の形に具現化したチャクラの塊が背後から鬼鯨に襲いかかる。

「遅い！」

それも鮫肌に食われるが、そこが狙い目。俺の速度を持って、術を叩き込む。

「螺旋丸！」

雷遁で強化された速度で鬼鯨に迫り、当たったと思った瞬間に、俺は投げ飛ばされていた。

「助かりましたよ、イタチさん。この子たち中々やるようですから

ねえ」

「鬼鮫、遊びすぎだ。セツナさんの準備が終わった」

「その通りや。悪いけど、最初から全開や。シマ様！」

「分かったけんの！ 仙法・風遁砂埃」

セツナの両型に乗った蝦蟇の片方が発生させた術で、イタチと鬼鮫を二分する。

「ヤヨイ、こっちや！」

その声に従ってヤヨイがセツナの方に行く。この砂埃の中、視界が開けているのは瞳術持ちのヤヨイ、アサヒ、イタチのみ。そしてイタチにはセツナとヤヨイが対処しなければならないから、必然的に残った鬼鮫を俺とアサヒが相手にすることになる。出し惜しみはしてられない。そんな事をしていたら、命にかかわる。

「口寄せの術」

契約しておいた鷲鷹一族を呼び出し、肩にとまらせる。蝦蟇一族のようにあそこまででかいサイズの鷲鷹類は居ないが、それでも俺が乗って空を飛べるぐらいのサイズの奴は居る。だが、ここで必要なのはそういう大きさではない。

「両生の術！」

仙法の両生の術を参考にして組み上げた新術だ。自然エネルギーを使っている訳ではないから、仙法のそれよりも難易度は格段に下が

る。だが、術としての効率は限りなく高いと言える。

「翼ですか……奇妙な術を使うものだ」

今の俺は背中に羽が生えている状態。これで、360°。どこからでも攻撃に転じる事が出来る。鮫肌を相手に無手で挑む訳にもいかないので、刀も同時に口寄せして装備している。鬼鮫相手では柔拳法を主とするアサヒにそれほど出来ることはない。全て鮫肌に食われるか、若しくは体術で挑んだとしても、マイト・ガイくらいの精度が必要になる。今のアサヒに、というか俺にもそんな技術は無い。

「遊んであげましようかねえ。水遁・水鮫弾の術」

鬼鮫から鮫を模した水の塊が放たれるが、空を飛んでいる俺には当たらない。そして、地に立っているアサヒにも、術が効力を持つことはない。

「八卦掌回天！」

あれは木の葉が誇る、日向の絶対防御。単発の術ぐらいではびくともしない。

「奇妙な少年に、日向の寵児……流石木の葉だ。下忍でも練度が高い」

「それはどうも。だけど、俺たちが特別なだけだよ」

「ほう……自分が特別であると自ら言うのですか。ますます面白い。私も久々に楽しめそうだ」

そう言いながら、鬼鯨が膨大なチャクラを練りあげているのが、白眼を持たない俺でもわかる。あれは当たったら不味い。多分、回天でも防ぎきれないレベルだ。

「水遁・爆水衝波！」

鬼鯨の口から大量の水が吐き出される直前に、俺はアサヒを掴むことに成功して上空へ逃げる。鬼鯨は自分で出した水の上に乗りながらこちらに向かってきたが、俺たちはそれ以上の高さまで駆け上がる。そして反対側に降りたところで、水で満たされた地面の為、飛雷神の術が使えない事を悔やんだ。

「水分身の術」

やられた。三体の水分身を出され、それに対抗するにはこちらも影分身をするしかない。

だが、影分身を使ってしまえばその分だけチャクラが持って行かれる。

「しょうがない……口寄せの術」

もう一体、今度は大型の鷲を口寄せして、その上にアサヒを乗せる。そして俺は水の上に立って、チャクラを練り上げる。

「雷遁・地走り」

鬼鯨の水分身と、本体はこの術を一度で見破り、自ら足を離して上へと跳んだ。本体はもちろんだが、流石に水分身とは言っても、この程度では上に逃げられる。だが、そこには先ほど口寄せした鷲が飛んでいる。そしてその上にはアサヒが乗っている。瞬間的にその

事に気が付いたのか、鬼鯨の水分身は三体とも上を見上げる。だが、もう遅い。三体ともアサヒが塔適したクナイによって元の水へに戻る。

「やりますねえ。私の水分身が一分も持たないとは。流石に――！」

失敗したか。先ほどの驚に俺の影分身も乗せておいて、アサヒがクナイを投擲すると同時に鬼鯨の後方に飛び降り、螺旋丸を当てようとしたが、直前で気付かれた。

「ふーっ。危ない危ない」

といながらも、全然慌てる素振りを見せないものだから、こちらとしては困る。残っている切り札は俺の劣化・飛雷神の術のみ。だけど、地面にマーキングするこの術は水上では使えない。

「アサヒ、何か良い手ある？」

「無い。っていうか、鬼鯨相手に二人だけでやられて無いただけ凄と思うけど」

「だよな。せめてこの水が無ければ何とかなるんだけど……」

「相談は済みましたか？ 私も流石に“水仙人”が相手ではイタチさんの方が心配なので終わらせてもらいますよ。水遁・五食鯨！」

俺が飛べることを分かっているのにその術を使うってことは……上空で鯨肌による斬撃か！ ならばムリに上に飛んで避けるよりも、ここで鯨を迎え撃った方が良い。あの鯨は空中には出てこれないはずだから。

「影分身の術！」

五人の影分身を作って、五匹の鯨にそれぞれ対処させる。そして本体である俺とアサヒは鬼鯨を相手にする。

「アサヒ、連続！」

「八卦空掌！」

俺がクナイをタイミングをずらしながら投擲すると同時に、アサヒが空掌を放つ。上空に居る鬼鯨には避ける手立てはない。全て叩き落とさなければ当たる。

「もういっちょ！ 風遁・烈風掌」

クナイに追い風を与えて、鬼鯨が予想していたであろうタイミングをずらす。これでアサヒの柔拳を喰らうか、クナイを喰らうかの二つに一つ。

「グッ！！」

どうやら、アサヒの技を喰らうことを選択したらしい。確かに、今の技では点穴を付く事が出来ないから、下手に腕に当たって印が結ばなくなるよりもそっちを受けた方が良い。

「やりますねえ。私も遊んでいる訳にはいかないようだ。そろそろ本気で——」

鬼鯨が何かに反応したので、アサヒに目配せして白眼で様子を見て

もらう。

「そんな！ 黒炎！？」

「イタチさんの“天照”ですか……流石に水仙人、簡単には行かなかったようだ。……と、イタチさん。あちらは終わったんですか？」

気付けなかった。何時イタチがこちらにやってきたのか。瞬時に警戒を厳にするが、もしもセツナがやられたんだったら、俺たちに勝ち目はない。

「鬼鮫、引くぞ。二度も万華鏡を使わされた。流石にチャクラの残りが少ない」

イタチがそう言い終わったところで、セツナとヤヨイが俺とアサヒの横に来た。ヤヨイはいくらか服が焦げている。セツナもところどころ血を流していて、かなりの苦戦を強いられたようだ。

「イタチさんがそう言うなら引きましょうか。……奇妙な少年、名は？」

「真柄タクマ」

「タクマ君ですか。覚えておきますよ。ではまた今度」

そう言いながらイタチと鬼鮫が春神の術で消えて行く。途端に、どっと疲れが押し寄せて俺もアサヒも水の上に座り込む。まあ、水と言っても鬼鮫が術を解いてからいくらか時間が立っていたので、濡れた地面と言う方が正しいのかもしれないが。

「セツナ、そっちはどうだった？」

「フカサク様とシマ様に協力してもろうたからな。何とか撃退できたんやけど……そっちはどうやった？」

「完全に遊ばれてたから傷は負わなかった。それにアサヒが一発当たててやったしな」

「セツナちゃん、まさかこれ任務じゃなかったじゃろうな」

「勘弁してください。流石にわいと、下忍三人じゃあの二人には勝てませんって。あいつらとおうたのは偶然ですよ」

「ふむ……坊主、また何かあったら呼ぶんじゃぞ？　わしらはこれで帰るからの」

そう言いながら二人、いや、二匹とも帰って行く。俺の方も両生の術を解いて、二匹とも還す。

「クソッ、三代目の馬鹿野郎、何が少し遠いからCランク任務、だよ。思いつきりSランク任務じゃねえか」

まさかイタチと鬼鯨と戦うことになるとは……というか、もう二度とやりたくない。

なんか名前覚えられたっぽいし。

「セツナ、少し遠くても良いからちゃんとした宿で休もう。体力的にも精神的にもほとんど限界だから」

「そうやな、ほんなら行くか」

第五話 Cランク任務? (後書き)

どうでもいいですが、今日メタギアの最新作を買いました。
面白すぎて、この小説の更新をつい忘れてしまいそうになりました。
対戦車戦…T-72Uがムズい……。

第六話 ヤヨイ最強化（前書き）

いつもより早めの更新で、そして短いです。
手抜きとか言わないでください。

第六話 ヤヨイ最強化

「おいおい……マジかよ」

漸くこんな辺鄙な場所であの二人と会った理由が分かった。眼の前にいるのは、背中に巨大な角を持った、カブトムシのような巨大な生物。西洋鎧に酷似した外骨格で、緑色の羽をもち、一本のしっぽがある。そして、そのうえで飛んでいる。

「何でCランク任務でS級犯罪者と戦った後に尾獣とやらなきやいけないんだよ」

どう考えても割りに合わない。帰ったら、一年遊んで暮らせるだけの報酬を三代目からもらおうとしよう。というか、あの二人は七尾を狙ってここに來ていたのだろうか。多分、尾獣の封印を解いて、時期が来るまで誰かに尾獣を封印させて、人柱力にさせる予定だったのだろう。封印を解いた後があるし。イタチが二度の万華鏡で引き下がったのは、この封印を解くのにチャクラを必要としたからだろう。

「セツナ、どうする？」

「いや、わいにどうするって聞かれても困るわ」

だよなあ、などとほとんど現実逃避しながら七尾を見上げる。俺たちがここまで落ちて居られるのは、封印が不完全に解かれていたから、尾獣が完全に復活している訳ではないためだ。確か原作ではこいつも人柱力として誰かに封印されるんだよなあ、などと思っただが、生憎この近辺に人は済んでいない。つまりはここを通りかか

った誰かが気付いてから、人柱力となるべき奴に封印を施したのだろう。

「私……出来るかも」

そんなヤヨイの言葉に、俺たちは救われたように一斉にヤヨイを崇めるようにして見る。

その眼には写輪眼があって……。

「って、何で万華鏡!？」

「イタチとやった時に使われたから、コピー出来ないかな、と思ってやってみたら意外と簡単に出来ちゃった」

いや、そんなテヘツみたいに言われても困るけど。っていうか万華鏡って普通の写輪眼でコピー出来たのか？ まあ、原作ではカカシも使えていたしな。そこまで不思議ではないけど……そうか、転生で最も親しい人との別れを経験したからか、若しくはうちの父親か母親、またはほかのうちの誰かがヤヨイにとって最も親しい者だったんだろう。きっとそうに違いない。

「まあ、万華鏡であることは突っ込まないとしても、人柱力になったらこの後もっと面倒なことになるぞ？」

間違いなく。今までは大蛇丸だけが相手だったけど、人柱力ともなれば、暁にも狙われることになる。

「ま、しょうがないよ。今ここで七尾を放っておいたらどうなるかわからないし、それに皆が守ってくれるんでしょ？」

なんとも綺麗な笑顔で笑いかけるヤヨイ。不覚にも一瞬見とれてしまった。まあ、ほんの一瞬だったからアサヒには気付かれなかったみたいだけど。

「じゃ、セツナは一応仙人モードになれる準備ね。流石に失敗した時の事も考えておいた方が良いでしょう」

俺も雷遁・電光石火を発動させておく。九尾ほどではないだろうが、仮にも尾獣。本当の奥の手を出す事も頭の隅に置いておく。

「……ふう。行くよ?」

ヤヨイの問いかけに皆が順番に頷いて行く。瞳にはヘキサグラム——つまりは六芒星型の万華鏡写輪眼。ヤヨイが七尾と眼を合わせる、二人——一人と一匹の動きが止まる。それからしばらく時間が経過し、七尾の体がぴくぴくと動いたかと思ったら、ヤヨイの体に溶け込むようにして消えて行った。

「ッ!」

それが成功なのか、それとも失敗なのか分からない俺たちは一斉に身構える。七尾の体全てがヤヨイに溶け込み終わり、ヤヨイの瞳が万華鏡写輪眼から普通の眼に戻った。

「ヤヨイ?」

既に、一人で仙人モードになっていたセツナが多少の不安を隠しきれずに問いかける。

「……うん。大丈夫みたい」

その言葉で、緊張の糸がプツリと切れて、地面にへたり込む。

「支配したのか？」

「ううん。共存って言えば良いのかな？　お願いしたら力を貸してくれることになった」

「それなんてチート」

思わず口から言葉を出してしまったが、それだけの事を成し遂げたのだ。多分、ヤヨイの言うことだからOHANASHIではなく、ちゃんと話したのだろう。そこまで知能が高いようには見えなかったが……。

「七尾って言葉喋れたの？」

「ううん。色々と話したら首(?)の部分さいかちを縦に振ったり横に振ったりしてくれたから。それから名前はさいかち皂莢さいかちって言うんだって」

だからどうやってコミュニケーションを取っているのだろうか。言葉が話せないのに。

……まあ、細かいことは気にしたらいけないだろう。それにヤヨイのチャクラが増えたのは喜ぶべきことだ。

「って、そうだった。万華鏡を開眼出来たのは確かに良かったかもしれないけど、使ってたら失明するんだろ？」

そうなってからでは遅い。

「あれ？ 言ってなかったけ？ 私、子供のころに眼が見えなかったから、既に移植済み何だよ？」

「いやいや、聞いてないからね？ って言うか何そのチートっぷり。永遠の万華鏡写輪眼に人柱力？ 無敵じゃん」

でも、よく考えてみれば、イタチが万華鏡をもう一つ用意しなかった理由が分かる。サスケとヤヨイの二人が居るのに、自分の眼だけでは足りない。ヤヨイがもとも眼を移植していたからこそ、何も残したりしなかったのだろう。

「じゃあ、ヤヨイちゃんの眼はうちの人のものだったの？」

そう言えばアサヒの言うとおりだ。うちのは眼じゃないと、万華鏡はおろか、写輪眼も開眼しない。

「うん。原作でイタチが万華鏡を得る為に殺したうちはシスイがいたでしょ？ イタチが出て行く直前に移植手術をされたの」

だからサスケはあんなにヤヨイの事を嫌ってるのか……まあ、ヤヨイもサスケを嫌ってるけど。それにしてもうちはシスイの眼か……確かに理屈で言えば、彼も最も親しい者との別れを経験している事になるのかもしれない。そう考えたら、万華鏡が簡単に開眼出来ても不思議ではない。そしてこれでダンゾウがシスイの眼を得ることは無くなった訳か。意外なところで原作崩壊してるな。

第六話 ヤヨイ最強化（後書き）

ヤヨイが強くなりました。

アサヒはもう少し後になる予定です。

明日からゴールデンウィークですが、皆さんどうやって過ごすのでしょうか。

作者はひたすらメタギアの予定です。

そういえばこれがNARUTOが終わったらオリジナル小説を書くか、リリカルを真面目に書くかで悩んでいます。

良ければ感想にどちらがいいか、あるいはこういうのをやってほしいなど書き込んでください！

第七話 中忍試験開始（前書き）

大蛇丸が弱くなっている……というかヤヨイが強い。

第七話 中忍試験開始

結局あの後、木の葉の里に戻ってから三代目に諸々の事を報告して、ヤヨイが人柱力となったことは俺たちと、上忍以上の極秘事項とする事になった。そして写輪眼且つ人柱力でもあるヤヨイの護衛としてセツナが任命され、今後ヤヨイが中忍、上忍となって行くことになっても俺たちのチームが崩されることは無くなった。それは俺とアサヒが手加減されていたとはいえ、手傷を負わずに鬼鮫を撃退したことから、ヤヨイとアサヒの護衛として俺たちが四人で居る事が一番良いと判断された。もちろん、反対意見も多少はあったみたいだが、セツナが仙術を会得している事、そしてそのおかげでかなりの実力者である事が認知されている為に許可された。ついでに、今回の任務の件に関しては口外する事を禁止され、Sランク任務にも相当する難易度だった為、俺たちは四人とも相当額の金をもらうことが出来た。

「さてさて、中忍試験だな」

修行もほとんど完成した。この一週間は仙人モードのセツナを相手に三人で組み手をしていたから、対策もばっちりだ。というか、ヤヨイのレベルアップがまともじゃない。七尾と完全に共存してるから、もともと効かなかった幻術は全く問題ないし、今ではチャクラも俺の数倍ある。さらには尾獣特有の忍術として、油女一族みたいに虫を従えてるし、血継限界みたいな糸も使えるようになった。この糸はかなりの強度で、一度この糸で捕縛されたら、仙人状態のセツナでも脱出が不可能だった。

「というかこのくだらない茶番、どうする?」

目の前にあるのは幻術が施された階段の入り口。リーが何度も蹴り飛ばされ、そしてテンテンも吹き飛ばされる。二人とも攻撃を受ける際に、チャクラで身体を覆っているの、ダメージはそこまで無いだろう。

「何か面白くしようよ」

「て言ってもなあ……アサヒは何か具体案があるの？」

俺も面白くすること自体は賛成だけど、具体的に何をするかが問題だ。

「あ！ そうだ。ヤヨイちゃんが幻術返しをかけちゃうとか？」

「それは……面白そうだな」

確かこの二人は中忍の試験官だったはずだ。ここで要注意人物になる事も吝かではないから、余興としては面白そうだ。

「二人とも……もう終わっちゃったよ？」

ヤヨイが呆れたように言うので、目をやると、結界が既に解かれていて、ついでにリーとサスケが戦っていた。

「じゃ、行くか」

戦っているサスケとリーに目もくれずにその横を通り過ぎて行く。横を通る時にリーの速度を計ってみたが、多分同じ重りを付けている今でも、俺の方が早い。一昨日セツナとやった時には、雷遁を使った速度にセツナが付いてこれなかったから、俺の速度は完成さ

れたと言って良いだろう。ついでに印を結ぶスピードもほとんどカカシと同じくらいの速さに成長した。階段を上がってから曲がる直前にガイが現れたので、俺だけ立ち止まって――俺が止まったら二人も観戦したが――その速度を見たが、なんとも拍子抜けだった。戦闘だから本気ではやっていないのだろうが、瞳術を有していない俺でもはつきり見ることでできるスピードだった。

「アサヒ、どう？」

歩きながらアサヒに話しかける。聞いたのはガイのスピードについて。

「追いつけないかな。リーは問題ないと思うけど……でも、重りを外されたら分からない」

それはそうだろう。アサヒは俺とヤヨイとは違って、日向において才能があるだけだ。ヤヨイばりのチートも無いし、俺みたいに戦闘経験が半端なく豊富という訳ではない。あるのは白眼と日向の体術だけ。だからこそ、その中で研磨し続けて、個人ではネジと同じくらいの実力だ。

「ヤヨイは……聞くまでもないか」

「そうね。でも私もアサちゃんと同じで眼で追えるけど、ついていけないわ」

まあ、眼で終えればヤヨイの場合は何とかなるだろう。それに、大概の敵は幻術で何とかなる。

「ん……ふあーあ。良く寝た」

こつんとアサヒに小突かれたので、大きく欠伸をしながら意識を覚醒させる。別に第一の試験は紙には何も書かなくても通過できるし、最後の第十問目で残る事を選択すればそれで合格だ。だから第十問目が始まる時にアサヒに起こしてもらおうように頼んでおいた。まあ、欠伸なんかしたから試験官と、受験生の殺気が痛かったけど。

「……受験番号7番、お前は試験問題を聞いていたのか？」

森乃イビキとか言うおっさんが俺に嫌な眼を向けてくる。席順で偶然（笑）にも隣になったアサヒが若干の殺気を発しているから、手遅れになる前に対策を取らなければならない。

「受けるか受けないか、だろ？ そんなの受けるに決まってる。大体、特別上忍のおっさんに木の葉ならまだしも、他の里の受験資格の永久剥奪なんてできないし」

というか、本当にそんな事が出来るんなら、忍はかなりの数が減る。ただでさえ難関な試験なのに、ここで受験資格を剥奪とかしたら他の里に木の葉を責める口実を与えることになる。

「ほう、良いのか？ そんな事を言つて。ここでは俺がルールだぞ？」

このおっさんは阿呆なんじゃ無いだろうか。大体、今まで寝てた俺がここで帰るとかありえないだろうに。

「じゃ、勝手にすれば？」

「ふん。他に棄権する者は？ ……良いだろう。では、ここに残った全員に“第一の試験”合格を申し渡す！！」

イビキから第一の試験についての説明がなされている間に、俺はアサヒに話しかける。

「何人残った？」

「……114人」

確か原作では78人だったはずだから、かなり多いな。

「何でそんなに……って俺が原因か」

「全く……十問目で棄権したの誰もいなかったんだよ？」

それは……イビキに申し訳ない事をしたな。というか、この試験の本質はともかく、特別上忍に受験資格の剥奪が出来る訳無いって誰も思わないのか？ それはそれで問題があると思うけど……ああ、そうか、気付いてる奴はライバルが減るからって口出ししないのか。

「っと！ 危な！！」

いきなり窓ガラスが割れたから、慌てて術を発動しそうになったが、アサヒが止めてくれた。カブトの居るここで、術を見せつけるのは良くない。それに、飛び散ったガラスの破片はアサヒが全て処理してくれた。

「アサヒ、ありがとう」

「うん」

というか、二次試験の試験官さんは本当に空気が読めない。せっかくイビキの旦那が良い感じに受験生を委縮させてるのに、これでは全くの台無しだ。

「じゃ、第二の試験の説明を始めるわ。早い話ここでは――」

説明がなされている間に、大蛇丸に注意を払っておく。ついこの間気付いたが、大蛇丸はヤヨイよりもサスケを狙うはずだ。……言いたくは無いが、男だから。まあ、だからと言っても、ヤヨイを保険

代わりに狙ってくるという事も考えに入れておいた方が良い。変態は何をやってくれるのか、常人には分からない事が世の常だ。

「同意書三枚と巻物を交換するから、その後ゲート入口を決めて一斉スタートよ！」

その後、三人で垂れ幕の中に入って同意書を提出し、“天の書”を受け取る。ゲートは14。

大蛇丸が15で、サスケ達が12だったから、先に俺たちの方に来るだろう。もしかすれば、大蛇丸が持つ“地の書”を奪えるかもしれない。まあ、地の方をどのチームが持っているのかは、アサヒの白眼で既に確認してあるけど。目指すは砂の三人衆よりも早くに塔に辿り着く事。その為にはいかに早く大蛇丸から巻物を奪い取るかだ。

「皆、担当の者についてそれぞれのゲートへ移動！ これより30分後に一斉スタートする！！」

ゲートの前で、あらかじめ刀を口寄せしておく。ヤヨイはチャクラの感覚を、アサヒは柔拳の練習をしながら開始を待つ。

「時間だ」

付き添いの中忍が宣告し、三人で中に入る。すぐさまアサヒが白眼を発動させて、大蛇丸の居る方向を視る。

「やっぱり先にこっちに来たみたい。どこで迎え撃つ？」

「ここは森だ。ならヤヨイの十八番。この森に居る虫は全て俺たちの味方。より緑が深いところだろ。作戦通りに」

先にトラップを仕掛けながら、準備を整える。入口から少し離れて、塔よりの、それでいて虫がもともと多い場所で待ち構える。アサヒは白眼で策敵、ヤヨイは既に写輪眼を発動させている。

「来た！　そこ！！」

アサヒが手裏剣を投げつける。それを避け、大蛇丸が現れる。

「良い反応ね。さあ、始めようじゃない。巻物の奪い合いを――」

そこで大蛇丸が巻物を飲み込もうとしたので、ヤヨイが幻術で金縛りの瞳術をかける。

「これは……！　まさかこの私が二度も同じ手を喰らうなんてね。やはり欲しいわ、その眼！」

どうやら成功したようだ。そしてヤヨイの命令で虫が大蛇丸の手にしていた“地の書”を奪い取って俺の所に持ってくる。

「タクマ、術が解ける！！」

流石に三忍。そう長くは持たないか。

「アサヒ！」

「八卦――百二十八掌！！」

全身の点穴をアサヒが突いて、チャクラを練れないようにする。

「これは日向の……やられたわね」

「それだけじゃない。螺旋丸！」

あらかじめセットしてあったマーキングを使って飛雷神の術で飛ぶ。そして背後からの螺旋丸。当たった感触はあった。だが、仕留めるには至らなかったようだ。

「逃げられた……」

大蛇丸の首が地面にめり込んでいる。どうやら口から自分を吐き出して逃げたみたいだ。まあ、こちらとしてはノルマがあまりにも簡単に達成できたから拍子抜けだけど。他にもトラップとか準備は沢山してあったが……やはり写輪眼は強い。

「まあ、良いか。“口寄せの術”」

呼び出したのは俺が契約している一族の中で最も大きい鷲。人語を理解することはできるが、話すことは理解できない。まあ、人語を話せる口寄せ動物が希少なだけだけど。その背中に三人で乗って、塔を目指す。こいつの背中には四人でも乗る事が出来るので、最近では重宝している。

「これで敵と会わずにクリアだな」

一応、アサヒが策敵しながら飛んでいるが、この高さまで上がってこれるのは我愛羅くらいだ。

「後は急いで塔に行って、巻物を開いてから報告か」

それが一番面倒くさいような気がするが。

第七話 中忍試験開始（後書き）

前回のあとがきで血迷ったことを書いていました。
気にしないでください。

感想とともに募集するのは、次のリリカルな二次創作でどういうものにするかです。

- ? ..だれをヒロインに
- ? ..どの程度の強さで
- ? ..主人公以外にも転生者を入れるか
- ? ..管理局入局かアンチ管理局か
- ? ..その他

で感想とともに募集しているので良ければ返事を下さい。

第八話 三次予選（前書き）

メタギア買ったのにドラクエも買ってしまった……

第八話 三次予選

あの後、巻物から出て来たのはイルカ先生だった。まあ、塔のてっぺんで巻物を開いたから、途中で巻物を開いたのだと誤解されたけど。というか、飛んできたのだから、巻物を塔の中の所定の場所が開かなきゃいけないなんて知らない。それくらいは大目に見て欲しいものだ。まあ、色々とあって、俺たちは過去最高記録を塗り替えて、37分という前代未聞の時間で二次試験をクリアした。

色々というのは、音の馬鹿どもが飛行中に襲いかかってきたから、帰りうちにした事だ。まあ、木に登って敵を探すという発想は悪くは無かったが、口寄せ動物を使って飛んでいる奴がいるという発想までは無かったようだ。だからいきなりクナイを投げつけられた後は、アサヒが八卦空掌をクリーンヒットさせ、そのままドス何とかは落ちて行った。上手くやれば生き残れたはずだろう。まあ、その後ドス何とか君がどうなったのかは分からないが、おかげで音の三人衆が二次予選を通過する事無く、原作と人数は変わることなく予選に入る事が出来た。大蛇丸はあの後、サスケの所に呪印を施したようで、今はこっちに殺気を送っているが。

「『第二の試験』通過おめでとう！」

まあ、セツナや三代目もいるここではヤヨイを襲ったりはしないだろうが、警戒しておくにこしたことは無い。

「それではこれから火影様より『第三の試験』の説明がある！ 各自心して聞くように！！」

気のせいかな、大蛇丸だけじゃなくて、二次試験通過者や、その他担

当上忍の視線もこちらに向いている。……やはりクリアするのが早すぎたのだろうか。37分とか、本当では考えられないような時間だ。まあ、三代目とか、カカシ、セツナは出来て当然だって顔してるけど。

「それでは……始めてください！」

一回戦が開始される。原作通り、サスケと赤胴ヨロイの対戦だ。まあ、はつきり言っつたらならない。体術だけの試合って言うのは、下忍だとしても、リーくらいレベルが無いと、見ていて退屈なものだ。というかあの月光仮面、今にも死にそうなんだが、本当に大丈夫なんだろうか。もともと体調が悪いのか、それとも暗部の彼女さんに毎日こつてり絞られているのか？ まあ、後者だとしたら幸せ者だな。

……っと馬鹿な事考えてたらいつの間にか終わってたし。

「えー、では早速次の試合を始めますね」

そう言いながら視線が電光掲示板に集中する。下の段に書かれている名前はアブラメ・シノ。そして、上の段に書かれている名前はウチハ・ヤヨイ。

「うっわ。可哀そうだな」

思わず言葉が口をついて出る。よりにもよって蟲使いのシノが、七尾の人柱力であるヤヨイを相手にするとか……攻撃できるのか？

「えー、ではこれから第二回戦を始めます」

さて、大蛇丸がみている中でヤヨイはどう戦うのか。

「……俺はこの試合棄権する」

あらら……やっぱいそういう風になるのか？

「なっ！　おい、シノ！？」

「……俺では勝てない。何故なら虫たちが戦うのを拒んでいるからだ」

対油女一族だったら無敵だな、ヤヨイは。まあ、同じ里の奴と戦うことなんて試験でしかないと思うけど。紅は悔しそうだな……まあ、上忍だからヤヨイの事も知ってるんだろう。くじ引きのなせる技だからどうしようもないけど。

その後、第三試合、第四試合、第五試合と原作通りに結末を迎えて行き、続く第六試合。

本当だったらここに入る音忍の代わりに、アサヒが投入された。

「女かよ……ったくめんどくせー」

「アサヒ、油断するなよ？」

なんせIQ200以上の天才だ。いくら忍術がだめで、体術もそれほどではなく、チャクラも少ないと言っても、頭のキレは半端じゃない。

「分かってる。……行ってくるね」

笑顔でアサヒを送り出す。まともにやれば、手傷一つ負わずに勝てるだろうが。

「開始っ!!」

二人とも動こうとしない。シカマルの影は、一度出してしまったあとが狙い目だ。そして、影で捕えるにしても、アサヒがワンアクション入れた後の方が狙いやすいのはシカマルも分かっている。だからこそ、先に動いた方が負けだと思っている。が、屋外で無い以上、圧倒的にアサヒが有利だ。影の面積が増える訳でもないし、物理的に影を作りだそうとしたらその瞬間にアサヒが決定打を放つ。

「煙玉!？」

予想していなかったのだろう。シカマルが声をあげる。いや、もしかしたらそれが演技であり、作戦なのかもしれないが。まあ、どちらにしても上手い手だ。アサヒは白眼があるから、チャクラによってシカマルがどこにいるのかを判断できる。

「八卦空掌」

アサヒの攻撃によって煙が晴れ、シカマルはそれを間一髪で避けると同時にクナイを放つ。アサヒはそれを持っていたクナイで全て弾き、クナイを持っていない方の手で手裏剣を放つ。自分ではなく、シカマルを壁際に追い詰めるように放つ手裏剣は、アサヒの予想通りに事を運んでいるのか、シカマルに壁を背負わせた。

「影真似の術、成功」

良く見れば、最初に放ったクナイの他に、空中に衣服で影を作って

あつた。

多分、煙玉の時に上にあげたのだろう。風もない屋内でそんな事をするとは……器用な奴だ。

「流石シカマル。信じてたよ。君が私を捕まえてくれることは」

だが、残念ながらアサヒはシカマルが自分の事を捕まえるものだと思っ
て行動している。自分の頭脳を信じたシカマルと、シカマルの頭脳を信じて、その行動を認めたうえで自分の事も信じているアサヒ。どちらが強いのかは明白だ。

「なっ！ 影分身！？」

アサヒが影分身を使えるということは予想外だったのだろう。今までに、そういう手札を見せたことは無い。恐らくは、ヒナタがどう
いう動きを見せていたかで予測を立てていたんだろうが、それがそも
その間違いだ。ヒナタに柔拳を教えているのはアサヒ。それも日向の柔拳
だけでなく、ヒナタは医療忍者を目指している。そもそのベースがアサヒ
とは違う。

「まだやる？」

首筋にクナイを突き付けたアサヒが問う。シカマルの頭の中では何
百通りもの事が考えられているのだろうが、アサヒの速度を見てあ
きらめたのか、それともチャクラが無いのか、参ったを宣言。

「勝者、日向アサヒ！」

戻ってきたアサヒの頭を撫でながら、和む。そう言えばこの中忍試
験が始まってから、俺もアサヒもヤヨイも汚れてすらいない。我愛

羅と違ってオートガードも無いが、随分な出来栄えだろう。

「二人とも……もう少し時と場所を考えてイチャイチャしなさいよ」

「ヤヨイだって何時もセツナとくつついてるじゃねえか」

「なっ！ あ、あれはセツナがくつついてくるからで！」

「やっぱりくつついてるだろ？」

「う、うるさい！」

あらあら、顔を真っ赤にさせちゃって。ヤヨイもこういうところは可愛いよな。

「イテッ」

腕被抓られたので、見てみると、アサヒが頬を膨らませていじけていた。

「アサヒが一番だぞ」

それだけで機嫌を直してくれる。二次試験が終わるまでの四日間、塔の外に出る事が許されなかったから、癒しはアサヒだけとは言え、ほとんど修行三昧に、ヤヨイの護衛だった。暗部が常時張り付いていて、休息も何もあったものじゃなかったから、息苦しかったものだ。

「タクマの番だよ」

アサヒにそう言われて、漸くいくらか時間が経っていた事に気がつ

いた。いつの間にか三試合が終わっていて、最後に残った俺とチョウジが第十回戦のようだ。ヒナタが健在な所を見ると、ヒザシさんが生きているだけあって、そして何よりアサヒとネジが仲が良いので、ネジも宗家・分家の枠にとらわれていないようだ。

「チョウジー！ 女に惚気てる奴なんかやつちまえー！」

「って言うかドベ2なんか十秒で倒しちゃいなさい！！」

確かに俺は実力を隠し通す為にナルトと二人してドベ2って呼ばれてたけど……。

「八卦——」

「アサヒ」

そういう事言っているとアサヒがキレるから止めて欲しい。これだけで結構体力を使うんだから。というか、あの大蛇丸戦以外は、これだけしか体力を使っていないような気がする。

「……分かった」

悔しそう(?)にうなだれるアサヒ。まあ、この試合で俺の実力が分かればそんなことは二度と言えなくなると思うけど。

「それでは……開始！！」

さて、どうやって勝つか……螺旋丸で普通に攻撃するか？ でもそれだと下手したら死ぬ可能性があるし……威力が少なくてなおかつ派手な技……そんないらぬ技を持ってる訳が無いな。

「忍法・倍化の術！ 肉弾戦車！！」

大体、そんな技があったとしても、すぐさま使える術になるように改良してる。って言うか肉弾戦車って使えない術だな。天井に張りついたら全くこっちに攻撃できないし。

「セツナ、大丈夫だと思う？」

セツナなら、何と言わなくても俺の言いたい事を理解してくれるはずだ。

「……微妙やな。体術だけは？」

「それだと派手じゃ無い」

これから先の事を考えても、派手な術で周りの奴らに認めさせた方が良い。

「それやったら、二段階目までで止めておけば？」

確かにそれなら死ぬ事もないか。それに……あれを併用させれば少しは派手に見えるかもしれない。何より、上忍は分かるだろう。

「その案もらった」

なら後は俺が動きまわるだけか。

「雷遁・電光石火」

電気負荷をかけながら、地面にそれと分らないようにマーキングしていく。下忍レベルでは俺が何をしているのかは分からないだろう。この中で気付けるのは……一度見ていたヒナタと、三代目、カシくらいか？

「あれは!!」

カカシが大声をあげて写輪眼を出す、もう遅い。それにカカシにコピーされないように、雷遁の印は隠してやったから、サスケに使われることもないだろう。準備は整った。

「もう遅い。劣化・飛雷神の術。喰らえ、螺旋丸！」

二段階目までで螺旋丸の形成を止めて、チョウジにあてる。回転しながら吹き飛んで行くチョウジ。目が回ると言うことは無いだろうが、いくら螺旋丸の二段階目までだとは言え、威力もある。喰らえば下忍レベルでは一撃だ。

「うわああ!!」

今更ながらに思ったが、飛雷神の術は使わなくても良かったんじゃないだろうか。まあ、大蛇丸も居なくなっていることだし、今ではバージョンアップした飛雷神の術が使えるからリスクは無いけど。

「勝者、真柄タクマ!!」

第八話 三次予選（後書き）

感想に色々のご要望がありました。

皆さん色々ヒロインをご希望なので、今のところは一人ずつ頑張
っていかうかと思っています。

まあ、作者のやる気が続けばですが……。

第九話 修行（前書き）

100万pvと10万アクセスを達成しました！
ご愛読ありがとうございます！！

第九話 修行

「ハア……」

溜息もつきたくなる。何で本戦の一回戦の相手がアサヒ何だか……。いや、音忍の抜けた所に収まって行ってたから、そうなることは分かった。だけど、くじ引きの十番から言えば違ってくる可能性もあったはずだ。それなのに、俺の期待をあざ笑うかのようにトーナメントは無情に決まって行き、名前が入れられていった。そして、それを現実として見てしまうと、受け入れる事が出来ない。

「棄権しようかな……」

アサヒの事を攻撃するとか、死んでも出来る訳がない。ましてや、俺は幻術タイプじゃなくて、体術がメインだ。アサヒの事を殴ったりとか、ありえない。本当なら本戦までの間に、修行をしておくんだろうけど、一向に修行に身が入りそうにない。

「なあ、アサヒ。俺本戦は——」

「勝負、だからね」

「ああ、お互いに頑張ろうな」

ムリ。アサヒのこんな笑顔を前にして、出ないと言えない。本当にどうしよう……。いつそ今から一カ月で幻術を練習するか？ でも白眼持ってるからなあ。相当のレベルの幻術、それこそ紅先生ぐらの幻術じゃないと、通用しない。なるべく傷つけずに、なおかつチャクラの消費を抑えて、それでいてアサヒの機嫌を損ねないよう

に戦う。……どう考えてもムリです。

「セツナ、俺はどうすればいいんだ？」

「愛の試練や。乗り越え」

そんな真顔で良いこと言っただけみたいな顔をされても困る。俺としては棄権も本気で考えてるのに。

「とりあえずこれから一か月、俺はヤヨイの修行を見るから」

セツナがヤヨイに付くのは仕方がないことだ。ヤヨイの護衛の事もある。アサヒは……ヒアシ様と日向の家で修行をするだろう。ということは俺は一人で修行をするのか。まあ、一か月もあるし、その間に任務は入らないから色々な修行は出来る。出来るが、やっぱり気持ちがいっつも入らない。

「タクマ、俺の修行に付き合え！」

俺の襟を持って引きずるネジ。俺としてはネジと修行をしていると、アサヒに本気でやっていると誤解をされそうだから、勘弁したいところだが……まあ、ネジ相手に、傷つけないように勝利する方法でも考えるか。アサヒには悪いが、日向の対策はほとんど完璧にしてある。なんせ、日向当主に一撃入れる為に術を開発したのだ。

「とりあえずは性質変化か？」

ネジとの修行と並行して行える事と言ったら、その位だろう。今は雷と風を少し扱える。

これに、出来れば水が欲しいところだ。というか、火と土の性質変

化は少し練習してみても、簡単なものしか扱えないだろう。初期の段階でチャクラを性質変化させるのがかなり難しかったから。それに、セツナから、一通りの水遁の基本は教えてもらっている。風遁の修行は、原作でナルトがやっていた方法を使ったので、滝を割れるようになった今では、それなりに使える。術も、いくつかは使えるようになってきている。一人で練習はしていたから、三人のうちの誰にも知られてはいない。となると、やはり水遁を使えるようになるのが一番良いだろう。今後の事を考えても。

「多重影分身の術」

千人ほどに影分身して、半分を水遁の性質変化の修行に、もう半分の形態変化の修行にあてる。本体はひたすらネジとの体術訓練。超回復の理論に基づいて、修行は倒れるまでやる。その方がスタミナも付くし、チャクラも増える。流石にチャクラが多いとは言っても、尾獣を完全に従えた人柱力よりは少ない。大型の術を何度も撃つには、もう少しチャクラが必要だ。それに、螺旋丸に性質変化を加えた術は、今のチャクラでは三発しか撃てない。原作でもナルトが仙人モードで二発しか撃てなかった事を考えると当たり前なのかもしれないが、俺のは完成されて無い術だし、チャクラコントロールはナルトよりも上だと自負している。最低でも五発は撃てるようになりたい。

「まさかだったな……」

修行をされていて、休憩に適當なことをしていたら、性質変化の組み合わせに成功してしまった。水遁と雷遁、風遁と雷遁、水遁と風遁そして三ついつぺんの四通りをいずれも成功させてしまった。もちろん、血継限界ではないので、右手と左手に違う性質変化を持たせて、それを合成、とかではない。影分身をした状態で、同時に使うことで可能となった術だ。だから、正確には性質変化の組み合わせとは言えないかもしれないが、例えば風遁と雷遁で、“雷の暴風”に良く似たものが出来てしまった。嵐遁という血継限界があるらしい。水遁と雷遁を合成させた術のようだ。だから俺も、これを“天遁”と名付けた。もちろん、“天”の字は、天候から取った。水、風、雷のいずれも天候に、つまりは空でおきる現象だから、空遁というのも考えたんだけど、“天遁”の方が名前的にかっこいいので、そちらにした。水遁、風遁、雷遁の三つを一度に発動させる術は、俺のチャクラを全て持っていくので、あまり多用は出来ない。それでも、強力な術であることは確かだから、かなり使える。

「でもこれじゃあ本来の目的と外れるんだよなあ」

本戦まで後三日。ネジは一週間前から一人で修行をすると行って、どこかに行った。俺としては、この天遁が出来た時に、ネジがなくて本当に良かったと思っている。血継限界ではないはずだが、もう一度俺にそういうことが起きる可能性が無いのかを調べなおさなければならぬ。輪廻眼のように、突然変異で出来るものかもしれない。まあ、土と火の性質変化は扱えなかったから、五つ全ての性質変化を扱えるということはないと思うが。

「いずれにしろ、その可能性も捨てないでおくか」

もしかしたら、修行次第では影分身を使わずに扱えるかもしれない。そうだったら、血継限界か、突然変異で決まりだが。まあ、本戦までは後三日だ。隠遁術で火影の屋敷に忍びこんで、俺の家についての極秘文書がないかどうかを調べておこう。もしも俺に關しての資料が見つければ、その方向で今後の修行のために役立つかもしれない。

「つて言うか、最初の血継限界の人たちはみんな突然変異だよなあ」

遺伝によって継承されるなら、始まりの人は突然変異だったはずだ。恐らくは、たまたま氷遁が出来たとか、木遁が出来たとかなのだろう。六道仙人が全ての始祖だと言ったような気もしないでもないが、いくらなんでも現存する全ての血継限界の術を扱えた訳ではないだろう。ということは、現在においても、突然変異によって二つの性質変化を一つにする人間が現れても不思議ではないはずだ。

第九話 修行（後書き）

アンケートの方ですが、徐々に集まってきました。

これ以降もまだまだ募集していますので、気が向いたら感想に書いてください！

第十話 本選開始（前書き）

ようやくアサヒが強くなりました。
でもどうしてこんな展開になっているのか書き終わってから自分でもわからない。

第十話 本選開始

本戦の一回戦目、主人公補正が発動したのか、ネジがナルトを追いつめた所でナルトが妖狐の衣のチャクラで体を覆い、ネジがそれに圧倒されて殴り飛ばされて気絶し、ナルトの勝利。

二回戦目のサスケ対我愛羅はサスケが遅刻して後回しに。ここでサスケが来ることで俺がアサヒとやらなくても済む事を期待していたんだが、見当外れだったようだ。

三回戦目のヤヨイ対カンクロウはカンクロウが棄権してヤヨイの不戦勝。この時点で、うちはの末裔の試合を二度も見れなかったことで、観客のいら立ちが強まる。だが、日向次期当主の試合で、日向の寵児が二人とも本戦に出場するという事もあり、日向宗家と、分家の主だったものが観戦に来ていたため、視線でこれを黙らせた。改めて、日向の名前は凄いのだと悟った。だが、同時にこれだけの観衆の前で俺がアサヒに負けるような事があれば、当然婚約その他もろもろが無かった事にされることは目に見えている。ハナビとかはアサヒではなく、俺に心配の視線を送ってきていたし、ヒアシ様の白い目がそれを如実に物語っていた。まあ、白眼持ちだから日向一族は皆白い目だが。

「始め!!」

審判の号で始まった試合だが、何を狙っているのかアサヒが構える素振りすら見せない。

いや、殺気や闘気といった類のものも感じられない。今一つ気持ちが入れられないこの試合で、アサヒが理解できない行動を取っている——実際には何もしていないが——が為に、俺にもどうするべき

なのか分からない。

「……重り」

アサヒの小さな口から出て来た単語で、漸くアサヒの言いたい事を理解する。本気で勝負しろと、アサヒはそう言っているのだ。それが分かると同時に、アサヒから怒気のようなものを感じ取る。

「外させてみなよ」

良くあるセリフを言いながら、俺もこの先アサヒに教える予定だった構えを試してみる。日向の関係の者がこれだけいる中で、無様な試合は出来ない。そして同時にアサヒを傷つけない。二律背反の気持ちのせめぎ合い、そして俺の中で決着を迎えてその言葉を生んだ。重りを付けている状態なら、良い勝負が出来る。中忍になりた訳ではないし、後にある戦闘の為に、いたずらにチャクラを消費したくない。が、サスケがいつ来るのか分からない以上、少しは試合を延ばす必要がある。そして、重りがあればむやみやたらにアサヒを傷つける事もない。

そう考えて、チャクラを足に集中させてから爆発させ、直進。白眼相手にはチャクラの流れは読まれている。小細工という小細工も、チャクラを使用すれば全て見抜かれる。だから、スピード勝負で挑む。アサヒの足を刈りに、重心を落としてから右足を出した所で、アサヒの手がこちらに伸びている事に気が付き、チャクラを放出。そこに柔拳が決まり、俺は後退する。とっさにチャクラを放出したから。柔拳によるダメージは全くない。だが、問題は今のスピードにアサヒが完全についてきて——いや、余裕すら持って対処したことだ。驕りでもなく、過大評価でもなく、今のスピードは重りを外したリーくらいあった。

「次は、無いからね」

やろうと思えば今ので全身の点穴を突けていたよ、と暗に物語っていた。漸く、アサヒの力量を理解し、足に付けていた重りを外し、端に投げつける。ものすごい音をたてて、重りが地面にめり込む。あれは、リーが予選で突けていた重りの1・5倍の重さがある。だから、修行を重ねた今では俺の体術速度はガイにも匹敵する。

「良かった。外してくれなかったら別れようと思ってたから」

ニツコリと笑いながらアサヒの口から紡がれた言葉に戦慄する。だが、その一方で思考を働かせる。一か月前のアサヒなら、リーの重りを外した際のスピードでも付いて行くのは難しかったはずだ。それを、さっきは直線移動だったとは言え、白眼を出さずに見切った。この一カ月の伸びを考慮に入れても、白眼は出てくるはずだった。なのに、アサヒは俺が動いてから白眼を発動させなかった。それはつまり、地力の動体視力だけであのスピードを見切ったということだ。そんな力を、一体どうやってこんな短期間で身に付けたのだろうか。

「どうして、って顔だね。教えてあげる。タクマに勝つ為に、この一ヶ月間、ガイ先生に相手をしてもらったの」

途端に、ガイの濃ゆい顔で、「青春だー！」と叫びながらアサヒと組み手をやっている姿が浮かび上がった。それに若干顔をしかめながらも、アサヒが付いて来れた理由に納得がいく。

「そんなに俺に勝ちたかったの？」

でも、アサヒがそこまで――ガイに相手を頼むという暴挙にまで打って出たということは、どうしても俺に勝ちたかったということだろう。俺の戦闘スタイルに一番似ているのは、この里ではガイだ。俺とガイの速度を同じくらいだと見立てて、修行をしたのだろう。

「ヤヨイちゃんも、セツナも、タクマも、皆私より強いから。だから、この試合でタクマに勝って私をタクマに認めさせる！」

何か、勘違いをしているような気がする。別に、俺達の中で、アサヒが弱い訳じゃない。

術の特性上、ぱっとしないだけだ。逆に、幻術に耐性の低い俺などの方が、瞳術持ちのアサヒよりも役に立たない事の方が多い。

「皆アサヒの事は認めてるぞ？ 十分強いんだから、自信持てよ」

「それじゃダメなの。守られてばかりじゃ嫌だから。私も強くなつてタクマを守るから」

言われた事を数瞬遅れて理解してから、試合中だというのに顔が赤くなる。どうやら、勘違いしていたのは俺の方だったようだ。アサヒを守るなどと自分で決めつけていて、アサヒには俺が頼っていないように見えたのだろう。

「だから、本気で戦って」

自分の手札をここで見せるのは得策ではない。それにこの後の音と砂との戦闘の為に、チャクラも必要だ。それを頭の中で理解していたはずなのに、アサヒと目を合わせたら、そんな事がどうでも良くなった。幻術にかけられた訳ではない。ただ、今ここでアサヒに答えなければ、アサヒが俺から離れて行くように感じた。もしかした

ら、俺が本気を出すことで、アサヒに勝つことで、アサヒはまたさっきのような考えを持つかもしれない。だけど、ここでアサヒの気持ちに目をそむけてたら男じゃない。だから、俺もアサヒの全力に今の俺に出来る全力で応える。

「雷遁・電光石火」

チャクラを練り上げて、雷遁に変換。肉体に電気負荷をかけ、周囲に微弱な静電界を作りだし、何時でも動けるようにしておく。

「ありがと……“白眼”」

アサヒの目を見て、覚悟を決める。一度深く息を吸い込み、肉体と脳に酸素を十分にいきわたらせる。

「アサヒ、一瞬で終わるから、出来れば持たせてみて」

あらかじめ予告はしておく。重りを外した俺は、ガイとほぼ同じ速度。だが、雷遁の術を使っている今では、ほとんど四代目の飛雷神の術に近い速度になっている。四代目の術と違って印を結ぶ必要もなければ、俺の術は相手の動きにそのまま反応するから、神経伝達速度も人間の域を既に超えている。体に電流を流し、人外の数倍で動く。

「ッー!!」

アサヒはかろうじて俺のスピードに反応できたと思っているだろうが、アサヒが反転して柔拳を入れようとしているのは、そこで俺が作りだした雷遁影分身。攻撃を加えれば、感電する。そして本体の俺は、飛雷神の術で元いた場所に戻っている。

「あっ！」

点穴を突いてから白眼によって気が付いたのか、電撃で硬直した直後に手を引こうとする。だが、もう既に遅い。アサヒが反転した瞬間に、俺も構えていた。

「雷遁・雷声」

特殊な呼吸法で横隔膜を振動させ、拳を繰り出す。太極拳の極意に、雷遁のチャクラを纏わせて攻撃したオリジナルの体術。中国拳法は練習済みだった。本来ならば、アサヒにこれから教えようとしていた体術。雷遁のチャクラで強化してあるから、ただの突きである“千鳥”の数倍の威力。喰らえば、立ち上がることは無い。

——ドンッ！！

俺の突きでアサヒが吹き飛び、会場の横の壁に激突する。

「何!？」

アサヒが立ちあがった。だけどそんなことはあり得ない。俺の持っている技の中でもかなりの威力を誇る。アサヒの体を思っ、インパクトの瞬間に少し力を抜いたとは言え、螺旋丸よりも威力があるのだ。いかにアサヒといえど、回天もしていなかったのに、立ちあがれるわけがない。

「あれは……不味い!!」

とっさに、常備していた煙玉をばらまく。そして、電光石火は先ほ

どの雷声で切れてしまったので、飛雷神の術でアサヒの背後に飛んで、首筋を強打する。やがて煙が晴れ、アサヒが横たわっている姿が露わになる。それを見て近づいた試験官が、アサヒが気を失っている事を確認した。

「勝者 真柄タクマ!!」

最後の手刀はとっさに全力決めた。だけど数十分もすれば自然に目を覚ますだろう。

「連れて行きます」

アサヒを抱きかかえて、瞬身の術で観戦していたヒナタの所に運ぶ。

「ヒナタ、一応見ておいてくれ。俺はもう一試合あるから――アサヒ?」

そこから立ち去ろうとして、服を掴まれたので見てみたら、早くもアサヒが目を覚ましていた。

「……負けちゃったんだ」

どう声をかけるべきなのか、それが分からなくて俺は唇を噛んで頷く。

「……分かってただけだね、タクマに勝てないのは」

ぼろぼろと涙をこぼしながら悔しそうに言うアサヒをきつく抱きしめる。

「行って……らっしゃ、い」

再び氣を失ったのか、アサヒが今度こそ静かな寢息を立てて眠る。ヒナタに一度確認を取ってから、アサヒが何事もない事を喜び、そして氣を引き締めてから会場に戻ろうとした所で、ヒアシ様に声をかけられた。

「アサヒに勝ったのだ、優勝しろ」

「この試合で相手になりえるのはヤヨイだけです」

フツ、と笑うヒアシ様と拳を合わせてから、瞬身の術で会場に戻る。

何事もなかったかのように周りには見せているが、内心では俺はかなり動揺している。

アサヒを医療班に任せずに、ヒナタに預けたのには理由がある。俺がアサヒに雷声を打ち込んだ後、立ちあがったアサヒは氣を失っていて、白眼ではなくなっていた。その眼は幾重にも輪が重なっており、所謂“輪廻眼”になっていた。“輪廻眼”は突然変異であるし、全ての瞳術の祖でもあり、だからこそ、白眼を有していたアサヒが“輪廻眼”を発現させることになってもおかしくは無い。現に、輪廻転生でこの世界に存在している訳だし。それを考えると、この世界では特異なことかもしれないが、俺の観念から言えば別段おかしい事ではない。だが、木の葉の里だけではなく、各国大名や、大蛇丸が見ている中で早々にその事がばれるのは問題だ。幸いにも、すぐに煙玉を使ったから俺にしかみられていないだろうが、万が一誰かに知られていたら大変だ。三代目に報告するにしても、もう少し現状を把握してからの方が良い。

しかし、今から戦闘が始まるという時に、不確定要素を抱える事に

なるとは思わなかった。

これが悪い方向に向かなければ良いが。

「連続だが大丈夫か？」

試験官に聞かれるが、俺は暫く声を掛けられていた事に気が付かず、肩を叩かれてからそれに気が付く。どうやら、自分で思っている以上に気が動転しているらしい。

「大丈夫です。それに、そんな心配をしてくれるならさっきの試合を最初にして貰いたかったです」

というか、俺とアサヒの試合が最初でなかったあたり、このトーナメントはかなりおかしいと思う。まあ、三代目に言わせてみれば、それもまた運とのことだったが。もう少し考えてくれても良いんじゃないだろうか。

先ほどの試合では、飛雷神の術も使った。劣化を取ったのは、四代目と同じ分量のマーケティングで飛べるようになったためだ。まあ、印を結ぶ必要があるから、あまり多用は出来ないが。それに、四代目が“黄色い閃光”と呼ばれた由縁は、何も飛雷神の術だけではない。神経の伝達速度も凄かったから、印を結ぶスピードが常人に見る事が出来ず、あたかも瞬間移動をしているように見えるのだ。まあ、その事も考えて、電光石火で弱点を補っているから、俺は四代目に近い戦い方をしているだろう。さっきの試合を見ていた、四代目を知っている人たちは目を丸くしていたし

第十話 本選開始（後書き）

アサヒが輪廻眼を持つことになってしまいました。そういうものなのだと納得しておいてください。

これから先も原作の設定を多々無視することがあります。

アンケートはまだまだ締め切っていませんので、どんどん感想までお願いします！

それからNARUTOの世界をどうやって終わらせるかを考え中です。

このままだとマダラを普通に倒して終わりになるので、他にトンデモ設定を入れて続けるか、それとも早く次の小説リリカルを書くか、どちらがいいか意見を下さい！！

第十一話 VS テマリ（前書き）

活動報告にも書きましたが、ゴールデンウィークの間に二十話まで書き溜めることができました。

NARUTOの世界が終わりそうになってきたら一気に投稿するかもしれません。

第十一話 VS テマリ

次の試合はテマリだ。中遠距離において攻守に優れるカマイタチの術を使い、だがしかしカマイタチの術の凡庸性により、他の術の使用がおろそかになっており武器である扇子を奪ってしまえば何もできない。そこに付け入る隙というか、それさえやってしまえば短時間かつチャクラの消費を抑えて勝利する事が出来る。

「開始！」

審判の合図でテマリが扇子を構え、それを振りかぶる。

「カマイタチの術」

面の攻撃に対し、対処の方法は術によって防御をする事、何かを盾にする事、回避する事の三つの選択肢がある。その中で、俺は単発攻撃であるのを良い事に回避を選ぶ。扇を奪えば短時間で終わらせる事が出来るとは言ったが、予想外に俺とアサヒの試合が早く終わってしまったので、サスケとカカシが何時到着するか分からない。三代目も、流石にこの後にサスケが来なかったら失格にするだろう。それを考慮に入れると、短時間で終わらせる訳にはいかない。だが、かといってチャクラを無闇に消費する訳にもいかない。

「避けたか、流石だね。けどあたしの術は風遁、あんたは雷遁だ。性質変化では私に勝てないよ」

勘違いをしている。別に俺は雷遁だけしか使えないのではない。風遁も水遁も使える。流石に土遁と火遁は殆ど使えなかったので、その三つがメインだが。さらに言えば、影分身によってその三つの性

質変化を組み合わせる事が出来る。性質変化だけで、俺がテマリに不利に働くという事は無い。不利なことがあるとすれば、今この状態でチャクラの消費が最大でも術一回分ということだろうか。雷遁・電光石火は意外にチャクラをくう。俺の最大チャクラの十分の一ほどが、あの術一回の発動によって持って行かれる。それに加え、先ほどは飛雷神の術も使ったのだ。

俺にわずかに時空間忍術の適性があったから使う事が出来たが、四代目のように何度も使える技ではない。四代目はあの術を日に何度も行使できたが、俺は一日に十回を成功させる事が出来れば良い方だ。チャクラを莫大に喰うし、失敗すればどこへ飛ぶか分からない。いわば、自分が冷静かつ好調子の時にしか使用できず、それ以外の時に使用することは、博打なのだ。

繰り出される風遁の術――カマイタチをチャクラを使わない体術だけで避けて行く。観客からブーイングが聞こえるが、それを気にすることなく、それでいて且つ、耳から入ってくる情報を漏らさないように集中する。もう、何度目になるだろうか。時たまクナイや手裏剣を投げながら、回避を続ける。丁度、俺が足場を横壁に取ったところで、観客の中から一際大きな歓声が聞こえた。

「サスケ君、カカシ先生！」

「いやー、どうも遅れてすみません……もしかして失格になりましたか？」

――遅いんだよ！

そんな呑気な声を聞きながら、心の中で悪態付く。これで漸く動く事が出来る。一度観客席の方に視線を向けてから、セツナを見つ

る。うちはの試合がもうすぐで見られるからなのか、観客からの野次が凄い事になっているが、それを気にせずアイコンタクトで確認を取る。その首が縦に動いたのを見届けてから、術の発動。

「雷遁・電光石火」

チャクラの消費を抑える為に、周囲の静電界は作りださず、肉体活性だけにとどめる。

ポーチの中から、この時の為に持ってきておいた小瓶を取り出す。俺が漸くやる気になったことが伝わったのか、テマリが警戒を強める。先ほどの試合を見ていたから、俺の早さは頭の中では分かっているはずだ。

「疾ッ！」

短く息を吐いてから、足もとにチャクラを集中させ、一気に爆発。その推進力を持って接近し、風遁の術が発動される前に大量の手裏剣を投擲。

「カマイタチの術」

一度振り切ってしまうば、次の術を発動させる為に、元あった場所に戻さなければならぬ。その為の手裏剣。あれを布石にして、右手に持っていた小瓶をテマリめがけて投げつける。

「チィッ！ 起爆札か！」

予測通り、テマリは扇子を盾にして小瓶を防御する。小瓶に張られていた起爆札が爆発し、土煙を巻き起こす。

「残念だったね、それぐらいの事じゃあたしは武器を落とさないよ」

それは既に予測していた事だ。小瓶を投げつければ、避ける前に、小瓶を割らないように扇子で防御してくれるだろうと思っていた。そして、起爆札が貼られていれば即座に扇子を開いて爆風から身を守るだろうことも。出来れば今ので扇子を落としてくれたらもうけものだが、真の狙いは別にある。

「扇子」

俺がその一言を発してから、テマリがいぶかしむように自分の武器を見る。そして、焦ったように扇子を放り投げる。

「毒か！」

「ご名答。これで武器は無くなった。さらに、手にも毒が付着した。降参すればもなく解毒剤をプレゼント」

扇子自体には、毒に対して何らかの対策を施しているだろうが、扇子を握る手は別だ。持ち手に毒を付着させてしまえば、扇子を持つ事が出来ず、何か処置を施す前に放り投げる。後は、糸で扇子をこちら側に回収してしまえば対策を取られる事もない。

「……参った。ギブアップだ」

その言葉によって、俺の勝ちとなる。そう言えばサスケが現れた時点で、俺がギブアップ宣言をしても良かったが、まあ後の祭りだろう。そのまま、観客席に戻ろうとした所でテマリに声をかけられて足を止める。

「おい！ 解毒剤をよこせ！」

「ああ、あれね。毒って言うのは嘘。ただ単に触るとぬるぬるするだけだから」

小瓶の中に入れてあったのは、木の葉の里でとれるアロエっぽい植物から取り出した液体。当然ぬるぬるしているが、本当は傷薬に使われるものだ。砂には出回っていないだろうし、手練であればあるほど、皮膚に異常を感じて即座に毒だと判断してくれる。塩酸や硫酸など、主に毒として使われることの多い強酸は皮膚に触れると、溶けてぬるぬるを感じるから、ひっきりやすい。俺は毒物に関しての知識なんてアカデミーレベルでしか身に付いていないし、この植物が毒物でないと知ったのもたまたまだ。

それだけを言い残してから観戦場所に戻る。試合を長引かせた為か、アサヒが目を覚ましていた。セツナとヤヨイは三代目のすぐ傍に陣取っていて、大蛇丸が動いた瞬間に何時でも介入できるようにしている。サスケが千鳥を使って砂に穴を空けたら、俺とアサヒも行動する予定だったが、今のアサヒの体の調子では動けないだろう。自分ですべておいて何だが。

「アサヒ、動ける？」

「ムリ」

思ったとおりの返事。少し落ち込んでいるように声で判断できるが、三代目を死なせない為にも木の葉崩しは何か何でも防がなければならない。万が一、ダンゾウが火影に就任してしまったら、ヤヨイとアサヒがどうなるか分からない。あのくそジジイは大蛇丸とも繋がっていたし、あいつのせいで長門は必要以上に木の葉に敵意を抱い

てしまった。これからの為にも、ダンゾウが火影になる隙は与えない。それが俺達四人で決めたことだ。

「行つて。私は役に立たないから」

そんなことない、と大声をあげそうになったが、それをアサヒに制される。確かに今の体では砂の上忍や中忍、音の忍には太刀打ちできないだろう。それにアサヒの目が俺に有無を言わせなかった。

「アサヒ、白眼は使うな」

一応、アサヒに耳打ちしておく。万が一にも輪廻眼が発動してしまったら困る。七尾を捕まえ、万華鏡写輪眼であるヤヨイに加え、アサヒが輪廻眼を持つ事が知れたら、暁がいらぬ関心を持つことになる。アサヒの輪廻眼が、長門の代用としてマダラに狙われることにもなりかねない。

「……うん」

不満そうだが、理由を話している時間は無い。もう既に、サスケは印を組み始めている。

大蛇丸が動き出すのも時間の問題だ。

俺は未だ不満そうなアサヒを残したまま、セツナのもとに向かう。一応、ヤヨイに幻術対策はして貰っているから、写輪眼レベルの幻術でない限りは幻術返しも出来る。

「セツナ、これが終わったら話がある」

「何や？」

他のものに聞こえるかもしれない中で、詳しい事を言う訳にはいかない。ただでさえ、ヤヨイが大蛇丸に近い事もあって、どこに耳が潜んでいるかが分からない。セツナにそれと分かるような伝え方で、大蛇丸にそれと分からないような言い方を模索し、見つける。

「長門の目についてだ」

大蛇丸は、長門Ⅱペインである事を知らないはず。だから、この言い方なら分かることは無いだろう。セツナもヤヨイも、少しばかり時間をかけてから俺の言いたい事を理解したらしく、目を開かせて驚く。そして完全に理解してくれたのか、ヤヨイが小さく呟く。

「アサちゃん？」

それに頷いて返事とする。セツナも今のやりとりで理解したのか、バツとアサヒの方を振り返る。そしてゆっくりと視線をこちらに戻し、小さな声で話を続ける。

「アサヒには？」

「言っていない……それから――」

白眼を使わないように言った、と口に出しそうになった所で、とっさに嚥む。これ以上の情報がもしも大蛇丸に伝わっていたら、知れてしまうかもしれない。

そう考えていた所で、ヤヨイの目が写輪眼になったことに気が付き、とっさに幻術返しをする。足にチャクラを溜めて、何時でも動けるようにしておく。

——ボフッ!!

三代目のいる所から煙が上がり、俺たち三人は三代目がどこに連れて行かれるかを注視する。

「あっち!!」

ヤヨイが指差した方向に、まず俺が全速力で直進する。それを砂の忍が妨害に入ってくるが、織り込み済みだ。

「水遁・水龍弾の術!」

背後から、セツナが放った水の塊が放出されて俺の横を通り過ぎて、件の忍に当たる。

「やれ……」

風影に扮した大蛇丸が音の四人衆に命じるのが視界に入る。

「はっ!」

結界が作動し、三代目と大蛇丸が隔離される。

第十一話 VS テマリ（後書き）

タクマがもう一度リリカルな世界に戻る小説をこれと並行して書き始めました。

感じとしては、転生なのはだけがヒロイン、転生ヴィヴィオも登場、できればアンチ管理局に、そして他の転生者も出す予定です。

そしてこれが終わったら感想の方に書いた、ヒロイン一人ずつの小説にも挑戦……してみるかもしれません。

第十二話 VS 大蛇丸

「死に際を予期してましたか……ククク、またアナタと戦えるなんてね」

火影の笠を取り、戦闘装束を着こんだ三代目に大蛇丸が呼びかける。

「オイ、そろそろ始まんぜよ」

「内側にも結界張っとけよ」

「オウ！」

内側にも結界が張られ、完全に二人が隔離される。外にいる暗部も入る事が出来ずに困惑する。

「フン……そう簡単には出れそうもないのオ……」

「心にも無い……アナタにとっては足手まといに入って来られる方がやりにくいでしょう！」

三代目が不敵な笑みを浮かべる中、漸く俺が話しに入る。

「そうなんですか？ 三代目。それは申し訳ない事をしましたね」

何とか間に合った。結界が作られる直前に入る事が出来たのは幸いだった。この一カ月、体術に重点を置いていなかったら間に合わなかっただろう。

「アナタは……あの時の！」

「よお、蛇さん。久しぶりだな」

セツナとヤヨイは間に合わなかったようだ。そうならば俺一人でやるしかない。

「そう……そこまでして私の邪魔をするのね」

「お前は確か……真柄タクマじゃったな。下がっておれ、ここからはワシがやる」

俺の名前を覚えていたのか……まあ、ヤヨイと同じ班だから忘れる事も無いだろうけど。それにさっきの本戦にも出てたし。

「すいませんがそれは出来ない相談ですね。いくら三代目が火影だといっても、とうに引退された身。お一人で大蛇丸相手はつらいでしょう」

本音を言えばかなり不味い状況であることは否めないが、あのイタチも暗部の部隊長になったのは俺と同年くらいだったはずだ。それにこの一カ月で大分成長した事も自分で分かっている。このレベルの忍術合戦でも、遅れを取ることは無いだろう。

「フン……援護せんぞ？」

「好きに。私も三代目をかばいきれませんので」

「言うのオ。せいぜいついてくる事じゃな……行くぞ！」

三代目がホルスターから手裏剣を抜いて投擲し、印を組み始める。同時に――いや、若干大蛇丸の方が印を結び始めるのが早かっただろうか、大蛇丸も印を結んでいる。三代目の手裏剣影分身の術が大蛇丸の口寄せによってガードされる。初めにどのくらいの速度なのか様子見したが、雷遁なしでも付いていけそうだ。これは吉兆だろう。

そう思った所で、違和感に気付く。口寄せされた死人が三人。初代火影、二代目、そして四代目。俺がいた影響でそうなったのか、これでこちらの優位は崩された。

「これは不味いのオ……」

そういう三代目の横顔を伺う。どうやら本気でそう思っているらしい。額からは汗が流れていて、表情が強張っている。

「久しぶりだな、サルよ……」

「お久しぶりです。初代様、二代目様……ミナト」

「三代目……という事は僕は口寄せされたのか……」

今までの火影による会話。その中で、時が流れたかのような錯覚を覚える。

今ここに、火影が全員そろった。

――まだか！

そう思いながら結界の方に目をやる。四代目も出て来たとなっては、明らかにこちらの方が不利だ。初代と二代目だけなら、三代目が死

ぬ事もなく終わらせる事が出来ただろう。四代目まで出てきてしま
っては、俺が四代目の相手をするしかない。

「おしゃべりはそこまですて貫いましょうか」

大蛇丸が三体の故人に手を突っ込み、三人が殺戮人形へと変貌を遂
げる。

「四代目は私がやります」

「ならん！ ミナトは――」

「老いたその体では四代目の飛雷神に付いていけないでしょう。俺
ならその点三代目よりもマシです。それに……」

漸く、結界が解ける。暗部が音の四人衆と戦闘に入り、三代目に対
する包囲が解かれた。

そして、三代目の横にセツナが降り立つ。

「わいが二代目とはやりますから、三代目は初代様と大蛇丸の事を
よろしゅう」

ヤヨイは……俺の隣に一瞬遅れてから降り立つ。

「私が援護しますので」

戦力的には最早こちらの方が優位だろう。問題になるとしたら、俺
が四代目を抑えられるかどうかだろう。

「うちは……ヤヨイ。本当なら貴方が欲しかったけど、サスケ君で

我慢してあげるわ」

「それは貴方では私に勝てないからですか？ 伝説の三忍さん？」

「その減らず口、閉じてあげましょうか」

「残念やけど、あんたの策は失敗や。もうじきここにあの四人を始末して暗部が来る。いくらあんたでも三代目とワイら相手に勝てへんやろ。暗部が到着したらこっちの勝ちや」

正直そこまで暗部には期待していないが。まあ、今回の目的は大蛇丸を始末する事ではなく、三代目を死なせない事だ。それがクリアできれば、この先ダンゾウが火影になる事もない。

「随分な自身ね。試してみるかしら？」

「フン。御託は良い。火遁・火龍炎弾！」

三代目の術で開幕となる。その術がそれぞれを分断し、セツナが二代目を、俺が四代目を相手にする。ヤヨイが三代目を援護。どうやら、三代目はこちらの作戦通りに事を運んでくれるらしい。

——雷遁・電光石火

四代目の瞬身と、飛雷神の術に対抗するために、俺も持てるだけのスピードを持って立ち向かう。相手は“木の葉の閃光”、そして飛雷神の術と、螺旋丸を開発した天才忍者。ナルトの父親でもあることから、当然チャクラも規格外の化け物だろう。

「ッ！」

視界から四代目が消えたと思った瞬間に、俺はとっさに視覚ではなく、静電界によって動きを察知するように脳を切り替える。

——化勁！

視覚の死角から放たれた螺旋丸を、腕を回転させてベクトルをコントロールし、攻撃の軌道を逸らす。螺旋丸が俺の横を通り過ぎた所で、反射行動から随意行動に切り替えて、腹にけりを放つ。だがそれは容易くガードされ、俺と四代目がいた位置が逆になる。

——早い……

分かっていたことだが、実際に目になると予想以上だという事がありと分かる。完成された飛雷神の術などと自分では思っていたが、とんでもない。先ほどの試合で俺が使った術は、四代目のそれにまだ追いついていなかった。何時印を結んだのかが、俺でも分かなかった。自動反射の特性を術に組み込んでいなかったら、今頃はこの世にいなかっただろう。

「流石に“閃光”……このままじゃつらいか」

本当なら飛雷神の術は使いたくなかったが、どうやらそうも言っていられないらしい。

このままでは速度負けしたままで終わる。触れられなければ、速度を極め、体術に重きを置いている俺は全くの役立たずとなる。そして、俺が追いつけないのだとしたら、四代目を止める術は殆どなくなると言っても良い。今木の葉にいる上忍の中で、最も早いのはガイだろう。だが、今の俺は速度だけで言えばガイよりも早い。眼で追えるだろうとは言え、アサヒやヤヨイの手を煩わせる訳にはいか

ない。

「飛雷神の術！」

クナイを数本投擲しながら、印を結んで飛ぶ。その直後に雷遁による肉体活性。

「ハアッ!!」

四代目の背後に飛んで、雷遁を纏わせた拳を背中にあてる。

——トンッ

軽い音を立ててから、四代目に当てられた事を感じる。その背中が若干抉れ、だがしかし、穢土転生によって口寄せされたその体はすぐに再生する。やはり、封印術を施すか、再生できないほどにダメージを与えるかしか、方法は無いみたいだ。

「グアッ!?!」

突如として襲った痛みで顔をしかめ、声が漏れる。雷遁の自動反射が無かったら、心臓をやられていたかもしれない。クナイが俺の左肩を貫通している。その風穴から血がポタポタと流れ落ち、服を汚し、そのまま屋根の上に垂れて行く。

——影分身……か

どうやら飛雷神の術を使って背中に攻撃を当てられたと思ったら、影分身だったようだ。印を結んだ事に気が付かなかった。飛んでいた時に完成させたのか、それとも俺が見ている中で気付かれないよ

うにやってのけたのか。どちらにしても、長くは持ちそうにない。

「フッ!!」

痛む傷を極力気にしないようにしながら、背後の四代目にひじ打ちをして吹き飛ばす。

隙が出来た所で、刺さっているクナイを引き抜く。飛雷神の術に使われるクナイだから、通常のものよりも大きい。その分、俺の風穴も大きくなっている。こんなことなら、ヒナタから掌仙術を習っておくべきだっただろうか。

「持ってあと数分って所か……」

流石に人柱力のように瞬間的に傷がふさがる訳ではないから、この傷は大きなダメージだ。それに、今の俺の攻撃で一層血を流してしまった。もしかしたら、数分も持たずに血の流しすぎで意識を失うかもしれない。早く勝負を決めた方が良いだろう。

「雷遁・疾風迅雷」

痛む体を見捨てながら、電光石火よりもチャクラを多く使う新術を発動させる。静電界ではなく、チャクラが眼に見えるほどに俺の体から電撃がほとばしる。体全体で千鳥をやっているかのような姿のこの術は、出来れば使いたくはなかった。八門遁甲のように、限界突破をさらに限界突破させるこの術は、あまり長くは持たないうえに体かなりの負担を強いる。その分、強力な術でもあることは確かだ。この術なら、肉体活性だけで飛雷神の術を上回る。

「雷遁・雷崩拳」

一瞬で懷に潜り込んで、形意拳の奥義にして基本の中段突きを打ち込む。極めれば絶紹へと昇華するこの技を、拳一点に雷遁のチャクラを集中させて放つ。雷声は速さの究極だったのに対して、崩拳は威力の究極。雷遁のチャクラを一点に集中させたその威力は、実に雷声の二倍。それを、四代目に打ち込む。

一瞬で吹き飛び、四代目が飛んでいった後の放物線上では、電撃がバチバチと音を立てている。それを耳にしてから、成功した事を悟る。この術なら、一撃で屠る事が出来ただろう。電撃を同時に流し込んだから、再生もしないはずだ。

「三代目の援護に……クソッ」

血を流しすぎた。意識がもうろうとしている。それに先ほどの術で、筋組織も崩壊しかかっている。チャクラも殆ど残っていない。あれはいわば、全身で千鳥をしているようなものだ。

「すまん……」

セツナとヤヨイがいるであろう方向に呟いてから、俺は崩れ落ちた。

「くっ……ここは？」

意識が覚醒して、視界に入った情報から、いま自分が置かれている状況を推察しようと体を持ち上げる。

「あっ、動かないでください。まだ治療が終わっていませんから」

俺に話しかけていたのは、ヒナタ。白眼を使いながら、俺に医療忍術を施しているようだ。自分が未だ先ほどの屋根の上にいる事に、そして生きている事に、四代目に勝ったのだという事を理解する。同時に、三代目の援護に行かなければならない事を思い出す。

「クッ！！」

だが、体を持ち上げたところで激痛が走り、思わず口から声が漏れる。予想以上に体を痛めてしまったらしい。風穴は既にふさがって血も止まっているが、筋組織が思った以上に崩壊しているようだ。

「ヒナタ、三代目は？」

「まだ戦っておられます」

「セツナとヤヨイは？」

「三代目と一緒にです」

どうやら、まだ死んではないようだ。ヒナタの声から判断するに、セツナもヤヨイもケガは負っていないのだろう。失敗したのは俺だけということか。

「ヒナタ、もう少し詳しく今の状況を教えてくれ」

「今は火影様と、セツナ先生、ヤヨイちゃんが額当てをしていない人を相手に戦っています。三人とも大きなケガもしていません。それから、暗部が奇妙な格好の人たちと交戦中です」

「ということは、呪印状態になっているのだろう。そして、大蛇丸一人が相手なら、あの三人で問題は無いだろう。暗部もじきに片付け終えてから、三代目に加勢出来るだろう。なら、俺は一刻も早くに体を回復させてから暗部の援護に向かうべきだろう。あの四人は、体の異常さを知っている者でなければつらいものがある。多分、思っている以上に暗部が時間をかけているものも、その特異性によるものだろう。」

「ヒナタ、あとどれくらいで俺は動けるようになる？」

「……タクマ兄さんはこのまま事が済むまでここにいて下さい。とりあえず今日は動けません」

「そうか……」

ヒナタがそう言うなら、今すぐに動けるということにはならないのだろう。それに落ち着いて考えてみれば、チャクラも殆ど残っていない。

「そう言えばヒナタはどうしてこんな所にいるんだ？」

「アサヒ姉さんに言われたんです。兄さんが死にそうだから治療して、って。……姉さん、泣いていましたよ？」

アサヒが……白眼で戦闘の様子でも見てたのかな。白眼は使うなって言っておいたのに。

でもヒナタが特に輪廻眼の事について言っただけで、輪廻眼にはならなかったのだろう。

「はあ……」

何で溜息が出たのか、自分でも良く理解できていない。アサヒの眼が輪廻眼にならなかったことへの安堵なのか、それともアサヒが俺の言う事を無視して白眼を使ったことへの呆れなのか、それともまた別の事への溜息だったのか。何にしても、この分なら俺がいなくても何とかなるだろう。幸いにして、ヒナタの医療忍術のおかげで大事には至っていないみたいだし。

「ヒナタ、後は任せても良いか？」

「はい。とりあえずお休みになってください」

ヒナタに微笑まれてから、俺の頭がヒナタの膝の上に乗つけられる。こうして膝枕をして貰うのもいつ以来だろうか。小さい頃は良くしていたような気もするが、最近ではめったにしない。

そのまま心地よい眠気が襲ってきたので、それに身を任せる。起きたところにはこの事態が終わっている事を願いながら。

第十二話 VS大蛇丸（後書き）

とりあえず主人公の現在の強さは四代目と同等です。

……十分チートだ。

アンケート、この小説が終わるまで募集しているのでどんどん書いてください。

感想もお待ちしております！

第十三話 八つ当たり（前書き）

設定が色々アレですが、気にしないで下さい。

第十三話 八つ当たり

「何とかなかったか」

セツナにあの後の事を聞き終えてから、自然に言葉が口を突いて出た。大蛇丸は三代目が討ち取り、音の四人衆も暗部が無事に討ち取った。

これで、サスケが里抜けをする心配も無くなった。残っている事と言えば、暁がナルトとヤヨイを狙ってくるかどうか。まあ、暁が本格的に行動し始めるまで、二年半ほどの期間があるはずだ。それまでにナルトには強くなってもらえば良い。それに、三代目は今回の事件で自分が老いた事を再確認し、五代目火影として綱手を里に呼び戻すことを決定した。火影の候補としてセツナも上がっていたが、セツナにはヤヨイの援護という任務があるからそんな事をやっている場合ではないという事で、三代目が大名に勧めたのが綱手だった。

「それで、話しというのは何じゃ？」

今は俺と、セツナ、ヤヨイ、アサヒの四人が火影の執務室にいる。常駐している暗部にも出て行ってもらい、話を聞く事が出来る者はいない。

「アサヒ」

セツナがアサヒに目を遣り、アサヒがそれに頷いてから白眼を発動して周囲を見渡してから、誰にも盗み聞きされていない事を確認し、さらにチャクラを練り込む。そうして白眼によって浮き出る血管が

消え、白かった眼の中に幾重もの輪状が現れる。

「その眼、まさか！」

三代目が椅子から立ち上がって驚愕する。次第に落ち着きを取り戻したのか、大きく息を吐いてから再び席に付いた。

「お分かりやと思いますが、純粋なそれと少し違います。アサヒのそれは白眼から変化したものですから」

「まさか生きている内にその眼を見ることになるのはのオ。しかし……」

そう、木の葉に輪廻眼がいるとなったら、余計な話が生まれる。ただでさえ、木の葉には白眼と写輪眼があったのだ。今は写輪眼もその数を減らしているが、そこに三大瞳術全てがそろったとなれば、他の国にいらぬ警戒を与えることになる。突然変異によって開眼するとされる中で、白眼と写輪眼がそろっている木の葉が輪廻眼も有することは必然のような気はするが。

「せやから相談に参りました。対応を間違えたら第四次忍界対戦なんて事にもなりかねませんから」

だから、長門達三人を自来也は連れて帰ってこなかった。万が一にも、木の葉が輪廻眼を開眼させる方法を見つけたなどという、嘘八百が諸国に伝わってからでは遅い。それに、白眼と写輪眼、輪廻眼を抱える小隊ともなれば、他国に確実に狙われることになる。

「そうじゃのオ。まあそういうことはワシがなんとかしておこう。それにしても白眼と輪廻眼の両方を使えるのか……それに万華鏡写

輪眼に尾獣か。そして単独で四代目に勝つとは……これで下忍というのが信じられんの」

そう、俺たちは三人とも中忍になる事が出来なかった。というか、今回の試験では誰も中忍になれなかった。可能性として一番高かったのは俺だが、最初にアサヒに攻撃を入れられたという、油断をしていたということから認められず、アサヒは初撃で決めなかったから、ヤヨイはそもそも戦っていないということで、三人とも下忍のままだ。

「というか、これはどういう状態なんじゃ？」

三代目が聞いているのは多分、俺とアサヒの事だろう。

「ア……気にせんといて下さい。多分、少ししたらいつもどおりに戻ってますから」

俺は今回ばかりは――いや、アサヒと喧嘩をするなんて初めてだが、長続きすると思う。というか、俺が謝る気がない以上、アサヒが謝って来なければこの状態は続く。

……アサヒに触れられないのはかなりのダメージだが、それもしょうがない。分からず屋のアサヒには一度きちんと自分の立場を分かった方が良い。何にしても、俺が謝る気は無い。アサヒにもその気がないなら、平行状態を続けてどちらかの気持ち折れるまで喧嘩を続けるだけだ。

「話が終わったんなら俺は出て行くから」

なるべくアサヒの方を見ないようにしながら、執務室を後にする。

どうにもイライラする。アサヒと話せていない事が原因だろうし、喧嘩をしている事がその主となっていることは間違いないが、当分はこれにも慣れなければならぬだろう。

「こういう時は甘いものでも食べに行くか」

イライラしているだけでは頭も回らない。……何のために頭を回らせるのかも分からないあたり、自分でも相当参っているのだろう。先日の大蛇丸が口寄せした四代目との戦闘から、少ししか経っていないが、三次予選から本戦までの一カ月の間にもアサヒとろくに話していない。そして一週間前に喧嘩してから、一言も言葉を交わしていない。本来の俺ならあり得ないことだ。今まで、何をするにしてもアサヒがそばにいた。

もしかしたら、甘いものではなく、どこか店に行く事によって人の触れ合いが欲しいのかもしれないが。

「確か……この先だっけな。あ、あつた、アレか……？」

確かに、目の前には団子屋がある。そして、店にはカカシが寄りかかっている、サスケもいる。何だか見たことのある光景だと思いつつ、必死に記憶をたどる。そして、気が付いたのはイタチと鬼鯨が里に訪れる場面。

——何で覚えてなかったんだ！

誰もそんな事を覚えていなかった。いや、もしかしたら三代目が生きているから、原作とは違うということまで気を抜いていたのかもしれない。それに、この後は綱手が五代目に就任してからサスケの里

抜けイベントだけだと思っていた。それほどにイタチと鬼鮫の里への訪問が小さなイベントだったのだろう。

そんな事を考え終わってから視線を前に戻すと、既にカカシが居なくなっていた。確か、戦闘場所は水のある場所――河だったと思うだし、その場所に急ぐ。

――ドシュ！

丁度付いた時に、カカシと鬼鮫の水鮫弾の術が衝突した。

「何でお前まで出てくんだっの」

「いやーさっきはお二人にお願いしちゃったけど……ま、気になるじゃない。やっぱ」

「はたけカカシ……」

どのタイミングで乱入すべきなのか、考える。とは言っても、イライラしているからいつも通りに物を考える事が出来ない。どうせ二人とも抜け忍だから、ここでこの二人に八つ当たりしたところで誰

にも文句は言われないだろう。うん、手っ取り早く乱入しよう。

「――茶屋で怪しい奴らがいたんで誰かと思ったら……まさかうち
はイタチと「霧隠れの干柿鬼鯨」……」

「これはこれは……あの時の奇妙な少年じゃないですか。お久しぶ
りですねえ」

上忍三人はどうして俺が出て来たのか、という目と、どうして俺が
鬼鯨と知り合いなのかという目を向けてきている。

「ちょっと八つ当たりさせてもらいますよ。鬼鯨さんなら誰にも文
句を言わないし」

「私相手に八つ当たりですか……ククッ、削りがいのあるように育
ちましたか？」

「知るか。自分で確かめてみる」

――雷遁・電光石火

術を発動させて鬼鯨を見据える。鬼鯨は俺に対して鮫肌を構えてい
る。どうやら、大刀を構えるくらいには成長したと思ってくれてい
るらしい。

「下がりなさい！ 下忍の敵う相手じゃないわ！」

「紅先生。貴方こそ下がった方が良いですよ。貴方の幻術はうち
には効かないって分かったでしょう？ それにアスマ先生も負傷し
ている。そして写輪眼に対抗できるのは写輪眼だけ。イタチさんは

カカシ先生にお任せしますから」

「あの時の奇妙な術は使わないんですか？ タクマ君」

「鳥が魚を捕えるのに一々翼を使う必要は無いんですよ。鯨さん？」

「ククク、成長したのが減らず口だけでない事を願いますよ」

とりあえず、本気の鬼鯨とやっても負けることは無いだろう。この間は四代目にかろうじて勝てたんだし。それに鬼鯨もあまり派手にはやりたくないはずだ。というか、派手な行動はイタチが諫めるだろう。

「螺旋丸」

「水遁・水陣壁」

速度はかなり早いはずだが、横から狙った螺旋丸は水の壁に阻まれてそこを挟っただけで終わった。そしてその直後に俺に向かって鯨肌が俺を削ろうと近づいてくるのを、目で追いながら余裕を持って避ける。あの四代目との戦闘のおかげで、目が大分早さに慣れた。やはり、実戦は何にも増して自分を高めてくれる。十の修行より、一の実戦だ。

「水分身！？」

先ほどの水遁で鬼鯨の視界が奪われた瞬間に印を完成させておいた。流石に、本体の十分の一の実力しか兼ね備えていない水分身では、速攻で消されてしまったが、目を引くことはできた。

「もらった。雷遁・雷声——何!？」

前回のよう、イタチが俺と鬼鯨の間に入る。あらかじめ予想していたのか、それとも写輪眼故なのか、俺の速度に反応して影分身を間に入れて来た。

「助かりましたよ。イタチさん。危うくやられる所でした」

視線をずらして横に向けてみると、カカシが水中に沈もうとしていた。アスマと紅が目を閉じている所を見ると、どうやら万華鏡を使われたらしい。

「鬼鯨、引くぞ。上忍が二人も来た」

見れば、セツナとヤヨイ、ガイが三人そろって登場していた。

「それは残念ですねえ。少年、また今度会いましょう」

イタチと鬼鯨が瞬身で姿を消す。カカシが倒れたせいか、誰も追いかけようとしなかった。イタチに途中で入られた分、八つ当たりが成功しなかったのも、俺のいら立ちはますます募るばかりだ。まあ、あれが鬼鯨に当たるとは思えないが。何と言っても暁だ。俺の年を考へても油断していたのだろうし、何より攻撃系の忍術を使っているいなかった。手加減されていたのだろう。

……何だかそう考えていたらますますイライラするばかりだが。そして今更ながらに気が付いたけど、四代目とやった時の傷が開いてきた。完治していなかったらしい。

第十三話 八つ当たり（後書き）

感想をみる限り、皆さん早くリリカルに移ってほしいみたいなので、これからの反響を見据えつつ、早めに終わらせるかどうかを考えたと思っています。

自分、もうひとつ筆休め用の小説を書いているんですが、そっちを更新してほしいという人がいたら感想に書いてください。なるべく対応したいと思います。

あ、後どなたかとらハについて教えてもらえるとありがたいです。少し調べてみたのですが、分かりにくかったので。

次のリリカルの小説にとらハの設定を取り込んでみようと考えているのですが、いかがでしょうか。

それについても賛否を感想に書き込んでいただけるとありがたいです。

第十四話 喧嘩（前書き）

書いていたら変なことになってしまいました……終わってからまあ、これはこれでいいかと自分とを納得させました。

第十四話 喧嘩

「兄様、いい加減にアサヒ姉様と仲直りして下さい」

イタチ、鬼鮫が里に侵入した日から数日が経った日、朝食を食べ終わってから日向宗家に与えられた一室に籠っていた所で、ハナビにそう言われた。この三日間、ろくに食事がのどを通らないせいとか、体調がすこぶる悪い。色々と氣力が足りないような氣がするし、ハナビと話している今でも自分がしつかりと氣を保っているとは正直言えない。原因であるアサヒとの喧嘩は終わりの見えない荒野を進んでいるみたいだ。それでも、俺の意地がそれを仕方ないと言って許す。

「兄さんも姉さんもつまらない意地の張り合いなんて止めて下さい」そこで初めてヒナタもいた事に氣が付く、どちらかと言えば双子であるヒナタよりも、ハナビが似ているアサヒの姿が、二人を見ているだけで浮かんでくる。だから、よりアサヒに似ているハナビの方ではなく、ヒナタの方を向いて話を続けようとする。

「少なくとも俺にとってはつまらない事なんかじゃない。俺が妥協することはあり得ない」

二人の背後の障子に、人の影が映るたびに反応してしまう。宗家故の人の多さだが、その影がアサヒに近ければ近いほど俺の中で良いしれない氣持ちがこみ上げてくる。話声が聞こえるたび、それがアサヒのものでないことに落胆し、安堵する。正と負の、プラスとマイナスの氣持ちがせめぎ合い、やがて複雑な何かを形成していく。それぞれが反発して出来上がったのか、それともそれぞれが一つと

なって、その何かが形成されているのかは分からない。とにかく、分かるのは俺の中にその何かがあるという事。

風流を大切にしているからか、時折コトンと竹が石に当たる音が響く。不思議とそのむなしい音が俺の心情を表現しているようで、妙に落ち着く。それが当然だともいう様にその音が繰り返し、俺の心に響く。

「……そこまで言うなら仕方ありません。兄様、先に謝っておきます」

何を、と聞こうとした所でハナビが立ち上がり、俺の点穴を突き始めた。体調の悪さのせい、反応する事も出来ずに、なすがままに全身を攻撃される。最後にヒナタが何かを言っていたような気がしながら、俺は意識を失った。

フツと意識を取り戻す感覚を思い出したのは、目が覚めて暫くたってからだ。天井を見上げていて、ここが先ほどまで俺がいた部屋ではない事に気が付く。同時に、ここがどこなのか見まわそうと

した所で、体が縛られている事を確認する。元々、点穴を突かれているおかげでチャクラが上手く練られないし、体の調子も悪いから縄抜けをする事が出来ない。幾度か試してみても、存外難しいもので、あきらめてそのままの状態で見渡した所で、ヒナタ、ハナビ、そしてアサヒが少し離れた所にいる事に気付く。ハナビに声をかけてこちらに呼び寄せて、どういふことなのかを問うた。

「強硬手段を取らせてもらうことにしました。ここで仲直りするまで二人で居てもらいます」

良く見れば、アサヒも縛られていた。そしてそのままヒナタとハナビが一つしかない出口に向かい、出ようとする直前に見事な投擲術で俺とアサヒの縄をクナイで斬ってから出ていった。ガチャンという大きな音が響いて、カギをかけられた事を知らせる。どうやら洞窟のようで、出るにはあの扉から出て行かなければならない。だが、アサヒも妥協する気が無いのか、一向に黙りこくったままだ。俺と違い、身動き一つ取らない。時がとまったかのような、それでいて何か変な感覚に捕えられたかのような錯覚を覚える。

そのまま時間が経過し、何十分、いや、もしかしたらもう一時間を超したかもしれない間、黙っておいてから漸く俺の我慢が限界を超える。

「アサヒ、いい加減にしてくれ」

語気が荒くなっているのが自分でもわかる。一度言葉にしまったから、どうにも止まりそうにない。今までつもりにつもっていた苛立ちをアサヒにぶつけるようにして言う。

「何が？」

それに応えるようにアサヒも眉を吊り上げながら立ちあがって俺に問いかけるように言う。本当に分かっていないのか、それともただ単にしらを切っているだけなのか。どちらにしてもそれを判断するほどの冷静さは俺には残されておらず、互いが互いの怒りをぶつけ、助長し合う様に俺とアサヒは言い合う。

「とぼけるなよ、本戦の後に使うなって言ったのに白眼を使つたら」

「そんなの私の勝手でしょ。タクマに指図される事じゃない」

「それが勝手なんだよ。もし輪廻眼が発動したらどうする気だったんだ!？」

「そんなの言わなかったタクマが悪い。それにタクマだって一人で四代目と戦ったりして、そっちの方が勝手でしょ!？」

「あの時はああするしかなかったんだよ! そんな事も分からないのか!？」

互いに額がぶつかり合いそうなほど近い距離で、敵のように相手を睨みつける。

もうどちらにも理性が残っていない。

——カラン

石がひとりでに地面に落ちて、それが合図だったかのように、アサヒは俺の頬を、俺はアサヒの頬をそれぞれ殴る。どちらもチャクラを練れないし、体調も万全とは真逆。それでも、どちらとも忍だ。絶不調の状態でも、一般人よりは遥かに身体能力が高い。そしてそ

の忍の中でも天才の部類。その二人が互いに互いを殴り、その衝撃で吹き飛ぶ。互いに正反対の方向に吹き飛んで、丁度元いた場所に戻る。そしてその傍には先ほどハナビが投げたクナイが残っている。

一も二もなくそれを掴み、俺とアサヒはお互いの動きをけん制しよう。とクナイを振るう。

――カキンッ！ キンッ！ ガンッ！！

三度目にして、クナイが互いの力に耐えられなくなったのか、両方とも折れる。最早使い物にならなくなったそれを投げ捨て、また殴り合い、蹴り合う。段々と青あざが増えてきて、引っ掻かれ、引っ掻き、投げ、投げられ、噛まれ、噛み、そんな事を繰り返しながらも互いに罵声を浴びせ続ける。もはや喧嘩など飛び越えて獣のように、ただただ相手よりも上であることを証明するように、相手を屈服させる為に傷つけあう。

――ゴン！！

互いに相手の肩を掴み、頭突きをかませる。鈍器で殴打されたかのような衝撃が頭に響き、二人とも倒れる。それでも相手に勝ろうと体を引きずりながらマウントポジションを取ろうと転がる。

アサヒが俺の左肩に噛みついた所で激痛が走り、動きを止めてしまう。その一瞬でアサヒが上になり、ひたすら俺を殴りつける。それに対抗するように、俺も下からわずかな抵抗を試みる。

「心配ッ、したのにッ、死んじゃうかもッ、しれないって！！」

泣きながら殴られ、一言一言が俺に突きささる。それが俺に理性を

取り戻させると同時に動きをとまらせる。

「どうしてっ！ どうしてっ！！」

涙を流しながら、憤怒の形相で俺を殴る事を止めないアサヒ。漸く理解したアサヒの思い出、自分が間違っていたのだと思い知らされ、ただ贖罪のようにアサヒに殴られるままに身を任せる。

口の中が切れ、血の味がする。鼻骨ももう折れている。後頭部付近には血だまりが出来ている。

「うわあああああああ！！！！」

——アサヒ、ごめん

大きく振りかぶって下ろされた拳で、俺は意識を失った。

「う……」

今度の天井は白い壁だった。

匂いによつてここが病院である事に気が付く。右を見ようとして、首が曲がらなかった。どこか一部分を動かそうとするたびに、体の節々が悲鳴を上げる。声にならない叫びをあげた後で、丁度何人かが入ってきた事に気が付いた。足音からして五人以上。

「おや、意識が戻ったのかい」

聞いた事のない声だと思い、視線をずらしてみると綱手だった。ハナビ、ヒナタ、ヒアシ様、セツナ、ヤヨイ、そしてアサヒもいる。

「あの……兄様、すみません」

ハナビとヒナタが頭を下けているが、何に対してなのかが分からない。アサヒがここにいるってことは多分、俺の事を許してくれたんだろうから、二人のおかげで仲直りできるはずなんだが。

「教えたるわ。タクマ、お前死ぬ寸前やったんやで？」

「そこにいる日向の娘に感謝する事だね。この子の的確な応急処置が無かったら私の手術も間に合わずに失敗していただろう」

手術？ そんなものを何時……あの後か。

「鼻、額、後頭部の一部、右腕、左肩、両手、腰、両腿、肋骨が八本、それぞれの骨折に、出血多量、気管に血だまり、筋組織の断裂、内臓破裂……どうしてあんたは生きているんだい？」

それでこんなに体中が痛いし動かないのか。まあ、俺が生きている理由なんて一つだろう。

「ひとえに愛のおかげです」

「その愛とやらがいらぬ誤解を生んでこうなつたと聞いてるよ?」

「……その通りです」

確かに、愛ゆえにこのような事態になったともいえる。理解した氣でいたが、アサヒの事を分かっていなかったからこういうことになった。

「まあ私には関係ないことだけどね。ちなみにあんたは全治三カ月だからせいぜい療養することだね」

そう言いながら綱手が出て行き、それを見送ってからヒアシ様と少し話をした後で、セツナとヤヨイがハナビ達を引き連れて出て行く。どうやら空気を呼んで俺とアサヒの二人つきりにしてくれたらしい。

「アサヒ、ごめんな。氣付いてやれなくて」

「ううん。私も言う事聞かなかったし、それに思いつき殴ってごめんね」

「そこはおあいこだな。俺もアサヒを傷つけたし。……傷、残らなかったか?」

「傷が残ってもタクマがお嫁に貰ってくれるんでしょ?」

いたずらっぽく笑うアサヒの顔がまぶしい。久しぶりに笑顔を見る事が出来て、それに満たされていることを感じている自分がある事が分かる。最早、アサヒが俺の生活の一部として欠かせない者にな

っている。そして、それはこれから変わらないだろうと断言できる。

「喉、乾いたでしょ？ 水飲ませてあげる」

「ああ、ありがとう」

若干、上半身が上がっているこの状態でも、手を動かす事が出来ないから、水を飲んだり何かを食べたりと言った事が出来ない。不便なものだが、アサヒが世話をしてくれるなら良いかもしれない。

そして差し出されたのは、水を入れた容器ではなく、水を含んだアサヒの口。動く事の出来ない俺はそれを拒む事も出来ず——もちろん拒むはずもなく——素直に口移しで水を飲む。

アサヒの唾液が混ざった水は甘美な果物の蜜のようだった。麻葉のような、媚薬のような効能を持っているであろうアサヒの唾液が、俺をどうにかしてしまいそうになる。体が動かないのが恨めしい。

唇と唇が離れたことで視界に入ったアサヒの頬は少し熱を帯びて赤くなっている、だが何か吹っ切れたのか、恥ずかしがっているとよりよりは妖美で、妖艶な笑みだ。何時もならキスだけで真っ赤になっているはずなのに、今は何かを決意したような、それでいて俺を誘惑しようと、魅了しようと、そして挑発しようとしているようなものが感じられる。

「アサヒ、どうしたんだ？」

俺がそう聞くと、少し不満げな顔になって口をとがらせる。そんなアサヒも酷く魅力的で、俺を惑わせる。

「本戦の日にヒナタに膝枕して貰って嬉しそうにしてた」

「あれは……体が動かなかったし、男なら誰だって嬉しくなる。仕方ないだろう？」

それに俺がしてくれと頼んだ訳ではない。ヒナタが俺の体を気遣って、余計な負担がかからないようにと、やってくれたのだろう。それに、小さい頃には何度かして貰った。最近ではハナビもしてくれる。アサヒがやっているから、というのが大きな理由だろうが。

「良い訳なんて聞きたくないもん。タクマは私のものなの。たとえばヒナタでも、ハナビでも他の女の子には渡さない。だからタクマは私だけを見てて」

ヒナタはナルトが好きなのはずだ。だから、俺にそういう気があるということとは考えられない。ハナビが兄として慕ってくれているのだろう。他の女の子といっても、アサヒに向けるような感情は持たない。確かにヒナタの膝枕が気持ち良かったであろうことは認めるし、嬉しそうにしていたであろうことも否定はしない。

「嫉妬か？ 大丈夫だよ。俺はアサヒだけだから」

「信用できないもん。タクマにも、タクマが私のものだって分からせてあげる」

そう言って、再び唇が近づいてくる。今度は口移しで水を飲ませるとかではない。渴きを潤すという点で言えば、アサヒの唾液だけでそうする事になる。だが、唾液だけでなく舌も味わいたいと思う俺をよそに、そして体を動かさせないのを良い事に、アサヒは唇どうし

だけでのキスしか許してくれない。俺が舌を伸ばしてもアサヒの唇を舐めるだけで、その中に進入できない。アサヒは俺の事を巧みにかわしつつ、自分のやりたいように俺を弄ぼうとする。それによって俺はこれ以上ない感覚を覚え、そのもどかしさが俺を支配し、どうしようも無くなる。

「……はむ……んむ……どう？ 分かった？」

してやったりとでも言いたげな、得意げな表情で俺を見下してくるアサヒ。その笑みがとても扇情的で、視界に入っている濡れた唇が俺の視線を引き付けて離さない。

「……あんまり分からなかったな」

アサヒがもっと欲しくて、そんな事を言う。

その答えに満足したように、アサヒはより扇情的な笑みを浮かべる。

「なら分かるまでやってあげる」

そして再び始まる天国と地獄が混ざった時間。それを楽しみながら、そしてそれにもどかしい思いを抱きながら時間が経過していった。

第十四話 喧嘩（後書き）

皆さんにリリカルに早めに行くか否かを聞いていますが、なんだかNARUTOを続けてほしい人もいるみたいです。

なので、もう少し続けてみてから次に行きたいと思っています。

……終わり方が変になると思うので、そこまで期待しないでください。

リリカルには、早ければ今月中には入れると思います。

今のところは、転生なのは及びヒロイン、アンチ（？）、他に転生者を複数人、ということまで設定を考えています。

主人公以外の転生者をどういう風に持ってくるかをアンケートにして募集したいと思います。

名前、能力、性格、設定など、思いつきでもいいので感想に書いてみてください！

後、とらハの設定ですが、いまいちつかみ切れなかったので少しだけの導入になりそうです。

期待していた皆さんはごめんなさい！！

長い後書きでしたが、読んでいただきありがとうございました。

第十五話 入院生活（前書き）

もうなんだか色々と壊れてきてる……

第十五話 入院生活

入院生活というのは存外つまらないものだ。もう少し体を自由に動かせれば少しは楽しくなるかもしれないが、全治三カ月という重傷を負った俺には体一つ動かす事もままならず、できる事と言えば何かを考えることだ。チャクラを練るのは問題ないが、印を組むのはムリという事で、簡単な忍術の修行もできない。日々、新たな忍術を開発しようと頑張ってはいるが、印も結べないこの体では試す事が出来ないでどうしようもない。本を読むとか、娯楽に關しての事についても大体が少しは体を動かして行うものなので、今の俺にはつらいものがある。専ら楽しみな事と言えばアサヒがやってきて介護してくれることだ。

しかし、アサヒも木の葉の忍。いくらなんでも俺に付きっきりで介護することはできない。セツナ、ヤヨイとの三人で任務に出ている。下忍と言えどその実力は高く、今では本来は下忍に任せるべきではないBランクやAランクの任務も扱っている。綱手が五代目に就任してから、三代目がそうするように取り計らってくれた為だ。

その三代目は目下、アサヒの輪廻眼の事で対策に追われている。各国に不自然な点が無いように輪廻眼が突然発言したと報告し、穴を見つけて攻め込まれないようにしている。ただでさえ、白眼を持つアサヒは里の重要機密だ。それを狙ってくる輩もいるというのに、そこに輪廻眼が追加されたとなれば当然その秘密を探ろうとアサヒの誘拐、若しくは日向宗家の誘拐に踏み切ろうとする。その為、今では日向宗家に常時二人の暗部が警護の任に付いている。アサヒの方は任務でもヤヨイとセツナが一緒にいるので安心だ。

だが、胸をなでおろすにはまだ早いらしい。ヒナタの誘拐を阻止し

たことで雷の国、雲隠れの里とは仲が悪くなっており、何時戦争に発展するかが分からない状態だ。それを阻止するには、ヒナタの誘拐を目論んでいた忍頭を捕えておけば良かったのだが、セツナも流石に捕える事が難しく、最後の手段として殺しもやむを得なかった。そのおかげで雲隠れの里が木の葉に対してさまざまな要求をしてきた訳だが、セツナの提案によって木の葉はそれを拒否。結果、何時戦争が起こってもおかしくない状態にまで、木の葉と雲は関係を崩してしまった。だが、そのおかげでヒザさんが雲に渡されることは無く、ネジが宗家を恨んだりすることは無い。それどころか、父を身代りにして渡さなかったということで、良好と言っても良いくらいだ。多くはアサヒとセツナの努力によるものだが。

そう言えば、ナルトは自来也と修行に出かけたらしい。暁に狙われるということ、護衛ついでに自来也がナルトの修行を見ることになり、そこは変わらなかった。同じ人柱力のヤヨイはセツナが護衛に付いているから問題はないということで新たに護衛が付けられる事もなかった。サスケは大蛇丸が死んだ事で里抜けをする心配も無くなり、木の葉の里にて修行に励み、カカシにマンツーマンの修行をして貰っている。呪印については綱手が手術を施して完全に消す事が出来た。流石は医療忍術のスペシャリストという所だろう。

そしてナルトが自来也に、サスケがカカシにということ、サクラも綱手に頼んで修行を突けてもらうことになった。同時に、先日的一件で力を認められたヒナタも医療忍術を綱手に習うことになった。白眼を使っただけの治療は思った以上に効果があるらしく、今ではサクラと並んで綱手の再来だと言われている。ちなみに、本戦とその後、四代目との死闘で俺は四代目の技を継ぎ、その速度も四代目の後継者として相応しいとして“木の葉の黒い稲妻”という名がつけられた。黒というのは俺が黒髪で黒い服を着ているから、稲妻というのは雷遁によって移動するかららしい。また、アサヒとヤヨイが最

近活躍していることもあって、三人そろって三忍の再来だと言われることになった。そこについては目標を達成する事が出来て良かったと言えるだろう。

「で、何でここにいますか？」

色々と回想を終わらせた所で、俺が使っている病院での一室に来ていた三代目に声をかける。こんな爺さんに世話をして貰った所で全く嬉しくないし、暇だからと言って遊びに来ないでほしいものだ。孫の相手をしたり、アカデミーに言ったりとやることは沢山あるだろうに。

「少し聞きたい事があってのオ。うちはサスケの事なんじゃが、お主らがプライドを滅多打ちにしたから執拗に力を求めるんじゃが……」

再不斬の時に既にプライドのへったくれも無いと思っていたが。本戦の時と、ナルトが口寄せしたガブン太を見て焦っているのだろうか。イタチに復讐を果たせないと。それならばイタチの真実を話せば……いや、どちらにしてもイタチの意をくんで殺害を果たしてから木の葉の上層部を潰すだろう。それならばサスケの事をコントロールしてこちらから暁に潜りこませるべきだろうか。そうすれば万が一にもマダラに遅れを取ることは無い。

いくらマダラが得体のしれない存在だと言っても、内部から崩壊させてしまえばこちらのものだ。暁の一員で、サスケを自分の味方に引き込めたと思えば油断するだろう。それに力を求めるサスケのもとにマダラが現れたら付いて行くかもしれない。そうなる前には打った方が良い。

「三代目、理由は分かっているはずです」

「復讐……か」

「サスケにイタチの真実を話して下さい」

「！ お主、それをどこで！？」

「ヤヨイが何も分からないと思っていましたか？」

「そうか……あの娘がのオ……暫く考えてからにするかの。この問題はそなたらしか知っておらんじやろうな？」

瞬間、三代目から質問と共に殺気が叩きつけられる。嘘は言わせないように、との事なのだろうが、嘘ではないから焦る必要もない。まあ、今のこの体に火影の殺気はつらいものがあったが。

俺の返答に納得したのか、三代目が渋い顔をしながら出て行く。その胸中ではイタチが二重スパイをしていた事、抹殺は任務であった事を話すか悩んでいるのだろう。三代目が話す事を決めれば、マダラの生存を明かしても良いかもしれない。土影に加えて、三代目もマダラにあった事があるはずだ。なんせ初代火影と知り合いなのだから。ということは対策がとれる。尾獣が持つて行かれる数が少なければ少ないほど、月の眼計画は崩壊に近くなる。

そんな事を考えながら時折窓から入ってくる風や音を楽しむ。楽しむと言ってもただ目を閉じておくだけだ。それしかやる事が無いのだから仕方がない。

「待った？」

アサヒが入ってきた事に気が付いて目を開く。視界に入る光が若干赤みを帯びていることから、夕方となって日暮れに近い時間である事が分かる。この時間が一番の楽しみだし、これが無ければ日間で発狂するかもしれない。それほどまでに退屈な生活だ。もしもアサヒがいなかったらと思うとゾツとする。

「今日は果物を持ってきたの。切るから少し待っててね」

そう言いながらバスケットらしきものからリンゴを取りだして、手慣れた手つきでシャリシャリと皮を剥いていく。一続きになった皮がやがて地面に付き、そのままそこで円を描いていく。お話の中に出てきそうな光景が目の前に広がり、思いがけず目を奪われる。シャリシャリと一定の音を刻みながら段々とリンゴが丸裸にされていく。

空から入る光がアサヒに当たり、その肌を輝かせることで妙に神秘性がある。風で髪が靡くたびに、アサヒの匂いを感じる気がする。もう少ししたらピアノのお供聞こえてくるかもしれない。

――ファサツ

思っていたよりも短い時間で皮が全て剥かれ、地面に落ちる。夕焼けよりも赤かった皮は全て下に落ち、今度はアサヒの手によってリンゴが小さく切られていく。半分にされ、四分の一、さらにそれを八分の一にしてから、皿の上に並べられたリンゴ。それをアサヒがつまみあげて俺の口に近づけてくる。

「あーん」

口を開いた所に入れられたリングを噛んでいくうちに、甘酸っぱい味が口の中に広がる。よく噛んでから飲み込み、次を要求し、また食べる。皮をむいてしまったリングは早くに食べてしまわないと色が悪くなる。だが、一人で食べるには多いので、アサヒも自分でつまんでいる。

ふっくりとした唇が開いてリングを中に入れるたび、妙な感動と興奮を覚える。アサヒの行動一つ一つに感情が揺り動き、それを見つめてしまう。それに気が付いたのか、アサヒがこちらに微笑むと心臓が早鐘を打つ。今までに何度もあった事なのに、あの喧嘩の仲直り以来、アサヒに心を奪われているように感じる。そして、自分が中毒になっているかのようにすら感じる。

「……ん」

最後の一つを口にくわえて、アサヒが自身の顔を俺に近づける。俺が口を開けたところへ上手くもう片方のリングの橋が入り、徐々に唇が近づいてくる。やがてリングの汁で湿った唇どうしが触れ合い、口の中のリングが食道を流れて行った後で、俺の口の中にリングの汁とも、唾液とも分からぬ液体が入ってくる。それを飲みほしてから、甘ったるい感覚で頭の中がボーっとしそうになる。なのに、今の液体を俺が求めていることが頭で理解出来る。

——欲しい……

そう思ってアサヒを見た所で、俺の意図が伝わったのか、もう一度唇を近づけてくれる。口の中にアサヒの舌が入り、訳も分からずにそこから先ほどの液体を絞りだそうと強く吸う。

「！んーんーんー！！　ぷはっ……はぁ、はぁ」

艶っぽい声が耳に届き、脳の奥がマヒしたような、それでいて喜んでいような感覚が俺を支配しようと押し寄せてくる。トロンとしたアサヒの目が静かにしていたオスの部分を目覚めさせる。情欲が俺を支配し、俺の体の中で暴れる。目の前の女を俺のものに、全てを支配し、屈服させてやろうと暴れる。

「フーッ！ フーッ！」

体が動かないのに獣が暴れようとするから短く息が漏れる。俺が俺で無くなっていく。

「……葉が多すぎたのかな」

最後にそんな言葉を耳にしてから俺は意識を失った。

第十五話 入院生活（後書き）

まだまだ転生者の案を募集していますので、
どんどん書き込んでく
ださい！

第十六話 主人公強化（前書き）

トンデモ設定があります。そういうものだご理解してください。

第十六話 主人公強化

俺が薬を盛られてから数日が経ったある日、漸く意識を覚醒させた俺は、綱手——五代目から深刻な宣告を受けた。

「もう後一カ月だね」

何が、と聞かれれば俺の入院期間だ。薬を盛られた事によって俺が動こうとし、その反動で筋組織が逝ってしまい、結果全治までの時間が延びてしまった。かなり順調に回復していたにも関わらず——綱手だ感心するほどの回復速度を見せていたのに——俺はベッドの上での退屈な生活を余儀なくされた。俺の強靱な肉体のおかげか、それともチャクラの多さのおかげなのかは分からないが、とにかく綱手もびっくりの回復具合であった。それなのに俺の退屈な時間を伸ばしてくれたアサヒとは、俺が一方的に遠ざけて喧嘩中だ。流星石に薬を盛られるとは思わなかった。

俺が死にかけた喧嘩の事もあったから、アサヒの異常とも呼べる俺への愛はこれ以上無いくらいに分かっている。だから、アサヒが薬を盛ったのも、俺がアサヒだけを見るようにとしたかったのだろう。実際、薬は所謂毒薬などではなく、媚薬と呼ばれるものの含有率が多かった。興奮を促進させる物質も入っていたみたいだが、拷問時に性別が逆の相手へと使う媚薬を主に使用していた。通常よりも少量で使っていたにも関わらず、俺の体が負傷中という事もあって、薬が効きすぎたらしい。だから、意識を失ったとの事だ。

俺はアサヒとは普通の恋愛を——何が普通なのかは分からないが———したいと思っている。別にたまに喧嘩をすることや、ちょっとしたことで揉めることは構わない。むしろ、そう言った事が無けれ

ば続かないだろう。実際に、今までもちょっとした喧嘩はあった。だが、相手に薬を盛るのはやりすぎだ。俺はそこまで束縛されたくないし、アサヒを束縛したくもない。もちろん、支配欲と言ったものも確かに俺の中に存在する。だけど、そこまでの手段に出ることは無い。

だから、アサヒにはこういうことをさせないために、今は暫く距離を置いている。置いていると言ってもアサヒは勝手に入ってくるので、部屋の前には暗部が張り付いてアサヒの進入を止めている。これは五代目、三代目、ヒアシ様の配慮だ。深く感謝しておこう。

とは言っても、流石に俺もアサヒと一週間も触れ合わなければアサヒ分が不足する。あの喧嘩の時には良く持ったものだと思うが。だが、あれがあつたからこそ、今ではアサヒが無くてはならない存在になっている。

「あー！　くそっ！」

「ひゃっ！？　に、兄様、びっくりさせないでください」

ハナビに少し怒られた。アサヒが来られないから、今はハナビが代わりに看病をしてくれている。ハナビも日向宗家で修行があつたのだが、暴走状態となつたアサヒをかううじて止める事の出来るヒアシ様とヒザさんがアサヒの為に暇では無い為、こうして看病に来てくれている。そのお礼ということで、チャクラコントロールや柔拳法の基本などをこの一室で教えてはいるが、実際にやってみせたり、俺の体を使って指導が出来ないので目で見て口で言うだけのなんとも効率の悪い指導になっている。

「なあ、もうそろそろアサヒも反省したんじゃないか？」

「私にはその判断が下せません。それは父上が決める事ですから」

「ハナビの目で見てどうなんだ？」

「……反省はしていると思います。姉様は毎日泣き腫らしていますから。でも、その後に動い言う状態になるかが分かりません。正直、兄様にあつたら暴走するという事もあり得ると思います」

「だよなー、などと、頭の中では呑気なことを思いつつ考える。今のアサヒにあった瞬間に飛びかかれたりしたら、俺の入院期間がまた延びる。それは勘弁してもらいたところだ。それにヒアシ様の試験もクリアしているから、アサヒとも色々なことが、所謂R18なことが出来る。そういう楽しみがあるから今のこの状態も我慢している。正直、俺だってそろそろ我慢の限界だ。」

「どれくらいでリハビリに入れるんだっけ？」

「後二週間ほどと聞いています」

アサヒの薬で入院期間が延びたとはいえ、あの薬で脳から体を動かそうとする信号が送られた為か、前以上の回復速度を見せていることも確かだ。それに、早く回復するための薬など、効果で買うには高すぎる薬草も、ヤヨイが虫たちに頼んで持ってきてくれている。かなりの好条件で治療が進んでいるが、俺としてはアサヒとのが第一だ。

「ヒアシ様に頼んでアサヒを連れてきて貰えないか？」

「正直に言えば私もそうした方が良くと思います。このままでは姉

様が何時自殺を図ろうとしてもおかしくはありませんから」

ハナビに頼んで、ヒアシ様にアサヒを連れてきてもらう様に伝達してもらおう。俺も限界だし、アサヒも限界だろう。それに、アサヒがもしも暴走したら物理的な意味で本当に止め切れるのはヤヨイだけだ。多分、輪廻眼のおかげで里の壊滅というオプシヨン付きだろうが。

そう言えば、三代目はサスケにイタチが二重スパイをしていたことを話すらしい。なので、ヤヨイがうちは一族が壊滅した日に、もう一人の万華鏡写輪眼を見た事、そしてそれがうちはマダラであったことを三代目と五代目に伝えた。流石に三代目も五代目も最初は冗談だと思ったらしいが、ヤヨイとセツナの話聞いて本気にしてくれたらしく、封印の書などを持ち出したりして、マダラ対策に乗り出してくれている。マダラに勝った事があるのは初代火影だけが、その遺伝子を継いでいるテンゾウ―ヤマトは木遁忍術を使えることは使えるが、初代のように完璧に扱える訳ではないので勝てない。ということと同じ写輪眼を持つヤヨイとサスケが対処する訳だが、いかんせん情報が少なすぎてどういう人物なのかがいまいち把握できない。三代目も、会った事しかないらしく、実際に戦ったり忍術を使う所を見たことは無いらしい。ということで実際に戦った事があるのは三代目土影だけだが、まさかマダラが生きているから情報をよこせという訳にもいかない。なので、自来也からの情報もあって、暁が本格的に活動を始めてからマダラの生存を公にして対策を練るというのが方針だ。

そしてこの件については三代目、五代目と俺達しか知りえない。相談役などは三代目が生きているから口をはさませないようにしているし、アサヒの輪廻眼やヤヨイが人柱力であることなどについても色々と言ってきたが、三代目が食い止めている。

そしてもう一つ、重大なことは俺がこんな状態だから次に行われる中忍試験に参加できないということだ。三人一組での参加が原則である中忍試験は三人そろわなければ受けられない。もちろん、個人で参加する試験もあるが、残念なことに砂で行われる次の試験も三人一組での受験ということで俺たちは受けられない。これからまた一年間下忍だと思うとどうにもやりきれないものがあるが、逆に言えば下忍だとしても高ランクの任務を受けさせてくれるので、無駄に責任が多くなる中忍、上忍にならなくても良いということだ。それに原作ではペインを倒した時のナルトも下忍だったはず。困るということではない。

「あ、アサヒ、頼むから」

ヒアシ様からの許可が下りて漸く会える事になったが、予想通りいや、予想以上の反応をアサヒは見せてくれた。いきなり俺に飛びつき、またがって俺に激しいキスを浴びせてくれている。一緒に来ていたヒアシ様やハナビは桃色というか、アサヒの行動を見て出て行った。というか、そろそろ本当に離れてくれないと俺の体が悲鳴をあげている。

「ヤダよお……」

そう言うのが一番困る。どうにも甘やかしてしまいそうになるが、ここで許してしまったりしたら今までの俺の我慢が無意味になる。それだけは何としても阻止しなければならない。

「アサヒ、俺はアサヒが嫉妬してくれたりするのは嬉しい。だけど、薬を使ったりするのは駄目だ。分かるだろ？」

「……うん」

「それでな、そういうときは薬じゃなくて俺に言葉とか行動で示してほしいんだ。そしたら俺もアサヒの事をみて、アサヒの事を考えるから」

「……うん。分かった」

「じゃあ、とりあえず今はどいてくれないか？　このままだと入院期間が延びるから」

アサヒは素直に退いてくれる。それでも俺の手を握っているあたりが何とも愛らしい。少し力を入れすぎているような気もするが、別段痛かったりする訳ではないから大丈夫だろう。

「ふむ、漸く終わったか」

そう言いながらヒアシ様が入ってくる。一緒に来ていたハナビは顔を真っ赤にさせているから、白眼で見ていたか、音が漏れていたかしたのだろう。

「ご迷惑をおかけしました」

「何、それは構わん。もとよりアサヒは私の娘。そして日向を継ぐものだ。どちらかと言えばこちらの失態だからな」

そう言えば、いまさらながらに思ったが、俺がアサヒの結婚相手で良いのだろうか。日向宗家を継ぐともなれば、アサヒは分家の者と結ばれるべきだったのではないだろうか。主に候補としてはネジあたりだろうか。まあ、俺としては今の決定事項になんら不服なことがある訳ではないから問題は無いが。

「それよりもだ、私が来たのはお前とアサヒの婚儀についてだ」

「……少し早すぎませんか？」

「私もそう思っていたのだがな。アサヒが日向の中でも類まれな才を持っている事、そして輪廻眼を発現してしまったことから日向の中でも一族の中で結婚させるべきだという意見も出てきているのである。早めたのだ」

確かに、輪廻眼ともなれば宗家の者や、分家の者と結婚させて、日向一族の権威を確固たるものにしたいのだろう。アサヒの恐ろしさを目の当たりにした事がない者たちは、まさかそんな事をすればアサヒが木の葉の里を抜けるなどと考えていないみたいだが。だが、アサヒと俺はあらかじめヒアシ様にそういうことになれば抜け忍になると言っている。そうなれば困るのは日向一族だろうからヒアシ様も努力をしてくれているのだろう。

「アサヒが輪廻眼を持つ事もなければこんな意見も出てはこなかった

たのだがな……」

「どう言うことですか？」

少なくとも一般の忍である俺と婚約を結んでいることに関しては何らかの反対意見があると思っていた。俺たちに味方してくれる者はヒアシ様とヒザシさんの二人だけだろうとも思っていたが。

「……良い機会だから教えておいてやろう。お前の一族は血継限界持ちなのだ。だから、当初は反対意見もなかった」

血継限界？　俺がか？　そんな兆候はどこにもなかったし、火影の執務室に忍びこんだときにも俺に関しての資料は見つからなかった。いや……“天遁”の事か？　あれは本戦までに一人だけで発動させる事が出来なかったから血継限界ではないと思っていたが。

「どんな血継限界なんですか？」

アサヒもハナビも驚いているみたいだから、どうやら俺だけが知らなかったということではないのだろう。

「私も詳しくは知らないのだ。何せお前の一族の血継限界は受け継いだ者がいないのではないかとも、或いは血継限界ではなく特殊体質ではないかとも言われていたからな。今までにも成功させた者はいない。かろうじて似ているのが“嵐遁”と呼ばれる血継限界だ」

嵐遁か。確か水遁と雷遁を組み合わせた性質変化だったはずだ。俺が試していたのは雷遁、水遁、風遁をそれぞれ組み合わせてみるからだから近いと言えば近いかもしれない。だが、その血継限界は雷の国の者が使っていたはずだ。どうして木の葉にそんな血継限界

が現れることになるのだろうか。

「お前の一族は……一族と今まで言ってきたが正確ではないな。お前の祖先は千手一族だ。その中の一人の子供が一代限りで血継限界を持っていたのだ。一代限りの血継限界というのもおかしな話だな」

千手一族？　だとすれば俺が水遁を使える事も不思議ではないが……だが、それならば土遁が仕えてもいいはずだ。初代は水遁と土遁を組み合わせて木遁忍術を使っていたはずだ。

いや、でも綱手が初代の孫だし、初代しか木遁忍術を使えなかったからそういう現象が起きても不思議ではないのかもしれない。それに、漸く日向一族が俺で納得していた理由が分かった。千手一族の血が入るともなれば、木の葉の中での地位はこれ以上ない者へと成長するだろう。だが、一体どういう血継限界だったのだろうか。一代限りということは、二代目と結婚していた者が雷の国に連なるものだったのかもしれない。だとすれば俺が雷遁の性質変化を持っていることも不思議ではない。それに、ナルトの九尾みたいに隠されていたのだろうか。今までそんなことは知らなかったし、そう言った視線を感じる事もなかった。もしかしたら何らかの理由によって秘匿とされているのかもしれない。

「どう言う血継限界だったのですか？」

「“天遁”と呼ばれてな、雷遁、水遁、風遁を組み合わせたものだ。三つの性質変化を組み合わせた者は後にも先にもその者だけだったから今では消えかかった伝説になっているがな」

……。まさか、だったな。ある程度は予測していたが、名前まで

一緒とは。御先祖様は俺とネーミングセンスが似ているのだろうか。そう言えば御先祖様っていても、どのくらい上の代何だろうか。両親はそこまでチャクラが多く無かったから、血継限界を扱えなかったはずだし……もしかしたら両親どちらかの祖先をたどって行った所で一般人の血が入っているのかもしれない。そして並はずれた器の俺は突然変異なのだろう。魂の格の問題がある訳だし、そういう事があったとしても不思議ではない。

「それって一人で組み合わせていたんですか？ あー、つまりは影分身を使ったりしないで」

「当たり前だろう。血継限界なのだから」

今後の方針が決まった。決まったがどうやって三つもの性質変化を組み合わせていたのだろうか。右手と左手だけでは三つを組み合わせることはできない。他に何か方法を使わなければならないはずだ。

「それについての巻物とかって残ってたりしますか？」

「お前の家は無くなってしまったからな……あるとすれば火影様が知っているだろう」

「三代目に頼んで貰えますかね」

「大丈夫だろう。元々血継限界は血を引く者しか扱えんからな」

確かに。巻物を他里が奪った所で何の役にも立たない。強いて言えば対策が立てられると言った程度だろうか。まあ、初代の木遁と同じく最早伝説と化している血継限界だ。今更それについての情報

を求める里もないだろうが。そして、そうとわかれば天遁を實際に
使えるようになっておいた方が良さだろう。血継限界と呼ばれるほ
どであれば協力であることは間違いない。影分身を使って組み合わ
せていても、かなりの威力を誇っているのだ。それが一人で出来る
ようになれば選択肢が増えることになり、イコール俺が強くなる。
これからの修行が楽しみだ。

第十六話 主人公強化（後書き）

今日、ようやく最終段階を書き始めました。

上手くいけば今週中にNARUTOを書き終わって、来週中にすべて更新し終わるはずです。

というか、皆様に散々言われてきたのに終わり方が酷いことになりそうです……というかなりかけています。

最後の方になるとどうにもやる気が減っていくんですよねー。

まあ、前回のようにはしないようになるべく心がけていますが、酷いことになっても作者の非才な身故ですので、ご了承ください。

後、転生者の案を書いてくれた皆様、ありがとうございました！

まだまだ募集中です。

レアスキルだけとかでもいいので、何かやってほしいことがある人は感想まで書いてください！

長い後書きですが、最後にもう一つ。

お気に入り登録が700件を超えていました！ ご愛読ありがとうございます！
ございますー！！

これからよろしくお願いできたらいいなと思っています。

第十七話 血継限界(?) (前書き)

またまたトンデモ設定です。これから先、原作の進み具合でずれが
確実に出てきますが、気にしないでください。

第十七話 血継限界(?)

三代目が極秘に所持していた巻物を渡されて、解読する事数週間。何故極秘に所持していたか、というのは解読していつて分かった事だ。この巻物は火影に手渡しで受け渡されるらしく、古くは千手一族から受け渡され続けている巻物だそう。三代目はかなり考え抜いた挙句、俺に巻物を見せてくれることになった。ただし、巻物を開くときは病室には暗部が五人配置され、部屋の中には三代目が一緒にいた。

伝説の“天遁”を使っていた忍は千手一族とは言っても、初代や二代目よりもだいたいぶ前の時代の忍だったようだ。それこそ、六道仙人と初代の間くらいの時代の人だろう。それならば伝説となっていた事も、忍の殆どが知らなかった事も納得がいく。というか、巻物を調べ、そして三代目から色々なことを聞いて知ったことだが、その“天遁”を使っていた忍が千手一族の発端であつたらしい。しかも、俺と同じように雷遁、水遁、風遁を扱い、それをもとにして氷遁、嵐遁、そして風と雷の性質変化を組み合わせた“天遁”。俺は三つをいっぺんにして“天遁”と呼んでいたが、そうではなかったらしい。千手の創設者は氷遁、嵐遁、天遁を扱う血継限界として“三遁”と呼ばれる血継限界だった。

そして驚いたことに“天遁”の代表的な術として“飛雷神の術”がある。どうやら四代目は俺と同じ血継限界だったらしい。というか、これで行くカカシが飛雷神の術をコピーしていない訳が分かった。血継限界の術は写輪眼ではコピーできないからだろう。

そして飛雷神の術が血継限界の術であつたということは、俺が巻物を独自に調べている内に分かったことだったが、それならばナル

トも飛雷神の術が出来るはずだ。飛雷神の術は体に相当の負担がかかるが、それは血継限界にしか使えないという事と、千手の血を引いて、六道仙人から受け継がれた肉体をもってして初めて可能になるからであった。

千手の火の意志と、六道仙人が息子である弟の方に与えた肉体エネルギーを持っていくナルトと輪廻眼に連なる写輪眼を有しているサスケ。この二人が戦うのは必然だったのかもしれない。だが、サスケは最早こちらの手の内だ。初代とマダラのような決戦はしないだろう。

「血継限界ね……」

三代目がしぶった拳句に俺に巻物を見せてくれた訳が分かった。俺が中忍試験の時に飛雷神の術を使ったから、血継限界を発現していると踏み切って見せることにしたのだろう。結果から言えば、俺は飛雷神の術を使える訳だから三代目の判断は正しかったということになる。

そして、何か運命的なものも感じる。六道仙人の息子の兄の方は仙人の眼、つまりは輪廻眼を受け継いだ訳で、弟の方は仙人の肉体、つまりは強靱な肉体を受け継いだ訳だ。ということは俺とアサヒの喧嘩もそういう運命的なものだったのかもしれない。千手の血を引く者と、輪廻眼を受け継いだ者としての。……まあ、冗談だが。

「三代目、ありがとうございました」

もうこの巻物の内容は覚えた。実際にどういう術があったのかも分かった。俺がネタで開発した“雷の暴風”も“天遁・暴風の術”として記載されていた。ちなみに、雷、水、風の三つをいっぺんに

扱う“三遁”は、体に雷遁を、両手に水遁と風遁を使ってそれを組み合わせることで発動させるらしい。これには具体的な形態変化によって術が違うとかではなく、“三遁の術”という一つの術しかなかった。だが、チャクラを莫大に食う代わりに、とてつもない術である事だけは確かだ。巻物には“天遁・暴風の術”の三倍の威力に攻撃範囲と書かれていた。俺の今のチャクラ量で撃ててもせいぜい五発。最終決戦用や、決め技として、ここぞという時にしか使えないという点では、いまいちな術だ。

「ではこれは綱手の奴に渡しておくからのオ。見たかったら綱手に言うのじゃぞ」

そう言いながら三代目は暗部を引き連れて帰っていく。これからやることは決まった。暁が本格的に活動を始めるまでの二年の間で、三遁の血継限界をマスターしなければならぬ。

最近ではアサヒが輪廻眼、ヤヨイが万華鏡写輪眼に七尾、セツナが仙人モードを使用できるから俺だけがそう言った特別なことがないと焦っていたが、どうやらこれで心配する必要もなくなったみたいだ。まあ、使えなければ意味がないが。

「そうか、そんな事が……」

氷遁の基本を練習している時にセツナとヤヨイ、アサヒが現れて、伝えられたのは今木の葉が置かれている現状。俺の病室が今は俺、アサヒ、セツナ、ヤヨイの会議の場所となっている。それは俺が動けない事に起因するが、もしかしたら聞かれるかもしれない危険を孕んでいるので、アサヒは常時白眼を発動させることで警戒している。改めて白眼と輪廻眼の切り替えが出来るアサヒはせいとも思っただが、今は置いておこう。

「それでこれからどうしようか、ってことなんだけど」

木の葉は今、三代目の尽力も空しく戦争になるかも知れないという緊張状態に上層部ともども追い込まれている。それはヤヨイ、アサヒがそれぞれ稀有で強力な眼を備えていることが理由である。七尾については抑えてくれたということで各隠れ里からそこまで言われなかったらしい。もともと、雷の国でも人柱力は二人いるからだ。

「正直俺らだけじゃ何もできないよな。それに俺も血継限界だし、ますます火に油を注ぐことになるかも」

三代目が見せてくれた裏の理由が分かった。四人で行動する、またそれを義務つけられている俺達の中でも今は一番弱いであろう俺を強くしたかったのだ。これからの任務で狙われる事が多くなるし、それに万が一戦争に発展してしまった時の為に、最前線に赴くであろう俺を鍛えておけば木の葉の死傷者も減ると考えたのだろう。

「砂は木の葉に付くやろうし、戦争には断固反対やろうな。今は国力の回復が第一やろうから。だけど霧と岩は分からねえ。問題は雲

や」

雲隠れとはヒナタの誘拐事件の一件で陰悪な仲になっている。三代目が尽力しているが、この均衡状態も何時まで持つのか分からない。戦争ともなれば、間違いなく俺達四人は最前線で戦うことになる。今この部屋にいるメンバーは単独で五影と対等に、そしてヤヨイとアサヒに至っては国一つと渡り合えるだけの力を有している。雲の上役が馬鹿でなければ、強力になった木の葉相手に戦争を仕掛けないと思うが、あの雷影の事だ。どうなるかは分からない。

「戦争になるとしたら？」

「一年以内、って父上は言ってた」

ヒアシ様がそう言うならそうなのだろう。それに怪我をしている俺に三代目が巻物を見せたことから、始まるならば早い段階だと予想しているはずだ。だが、俺がいくら千手の血を引いていて強靱な肉体を有しているとは言っても、ケガの回復速度が異常になる訳ではない。それでも、毎日ヒナタと五代目に見てもらっているから、予定よりも早い段階で回復しつつある。後一週間もあれば動けるようになると言われているから、一か月もすれば忍として任務を受け持つ事が出来るだろう。

「ヤヨイは万華鏡の能力が分かったか？」

「後少しで掴めそうな感じはするのよね。多分、何か幻術と天照みたいな炎だと思っただけ」

万華鏡の左右それぞれに宿る能力は、人によって違う。だから、イタチと同じように天照と月読が宿ることは無いだろうが、それに

似た能力が宿ることは確かだ。元々うちは一族は火を扱う家系だし、ヤヨイの眼のもとであつたうちはシスイは幻術を得意としていた。多分その影響もあつて、黒炎と幻術を能力として持つことになるだろう。

「お前の方はどうなんや？」

「俺は自分の事が分かったただけだからな。今は基本からやってるけど、一応氷遁と嵐遁、天遁の基本はできたからこれからは応用に入る所だな」

とはいっても、何よりも大事なのは基本だ。それを繰り返すことに意味がある。幸いにも、この入院生活で印を結ぶスピードはイタチ位になっただろうと自負できる。トレーニングと言えるトレーニングを一か月もしていれば早くなるのは必然だが。

「アサヒはどうなんだ？」

「輪廻眼？ ペイン見たいにはしてないけど、一応斥力と引力は使えるようになったよ」

ペインのあれは死体を動かして、長門に元々備わっていた能力の一つずつ分け与えているから、視覚の同時共有とかが出来る。だが、長門と違ってアサヒは足を潰されていないし、外道の術も使っていないから一人で六道全ての術を使用することができる。まあ、天道の能力しか使う機会が殆どないが。

元々日向として育ってきたアサヒは、柔拳法を使う事が出来る。殆どの術を神羅天征で弾いて、インターバルで近づいてきた者は柔拳法で迎え撃てば良い。なんとも卑怯だが、今までのアサヒの努力

のおかげなのだから仕方ない。それに加え、忍術を吸収したり、性質変化を全て扱えるのだから、そのチートぶりにはびっくりだ。：よくよく考えてみたら、良く俺はアサヒとあんな喧嘩をして生きて入れると思う。

「なあ、この班の担当上忍ってわいやよな？　なんか何時も思うんやけど、タクマがリーダーみたいに感じるんや」

「しょうがないでしょ、セツナよりもタクマの方がリーダーとして適してるんだから」

「うう……ヤヨイまでそんな事言うなんて。もう嫌や！　ワイは一人で生きてく！」

「え！？　ま、待ってセツナ！　私が悪かったから！！」

なんかあわただしい二人だ。セツナが出て行ってそれを追いかけてヤヨイも出て行ってしまった。セツナの方はふざけてやっているだろうが、ヤヨイは本気だった。多分、ヤヨイにつかまってからお仕置きされるだろう。そう考えるとセツナを思って涙が出そうになるが、あれは自業自得だ。冥福を祈っておくだけにしておこう。

「で、何でアサヒはさも普通に俺の布団に入ってるんだよ」

気が付いたら、俺の左腕が抱き枕にされていた。俺の布団の中に気付かれずに入ってくるなんて……アサヒ、恐ろしい子！　……いや、なんとなくで言ってみたが、恐ろしい子であるのは間違いないな。

「ん……今日はここで寝るの」

そういう風に幸せそうに言われると思わず許してしまいそうになるから止めて……ってよく考えたら一緒に寝るぐらいなら良いのか？ 別に俺の体に何かをしようっていうわけじゃないんだし、するとしてもキスぐらいだ。別段何か支障をきたすような事がある訳じゃないから、問題は無いのか？

「アサヒ、ヒア」父上には言っているから大丈夫。それとも……私と寝るのイヤ？」いいえ！ 全く問題ありません！」

ズルイ。あんな顔してそんな近くで言われたら断れない。まあ、ヒアシ様が許可したなら———というかそんな許可がなくても断る気なんてさらさらないけど。

第十七話 血継限界(?) (後書き)

少し悩んでいます。

なのははタクマとくっつける予定ですが、他の転生者とだれかをくっつけるべきでしょうか？

第十八話 とある一日（前書き）

グダグダ、キャラ崩壊、その他もろもろ注意です！

第十八話 とある一日

「氷遁・氷柱千本」

体が完全に回復した訳ではないが、日常生活を送る分には問題ないので退院して、日向の家にて療養している。身体全体を動かさずとも術の練習はできるので、その修行の毎日だが、血継限界の性質変化というのは思っていた以上に簡単だった。元々完成形の分かっている術の練習をしてるのだから、今までのオリジナル忍術を開発する事に比べたら簡単であることは分かっていたが。氷遁と言えば白を思い出すが、片手印を結べるという利点を持つ氷遁は使う場面が殆どない。

氷の鏡の中を高速移動する魔鏡氷晶については雷遁で代用できるし、その方が早い。嵐遁にしても天遁にしても、氷遁と同じくそこまで多用することは無い。俺のオリジナル忍術は最強だろうと考えているし、俺にはそれが一番適していると思っている。威力を求めらるなら三遁の術で事足りる。血継限界であることからチャクラ消費が少ないというのが利点であることは確かだが。

「神羅天征」

少し離れた所ではアサヒが輪廻眼を扱う為の修行をしている。物体がアサヒに近づいたり離れたりするのを見るのはなかなかに見えて面白いものだ。どれだけ力を集中させるかで引力、斥力の度合いが変化しているようだ。

どこかは分からないがヤヨイも万華鏡の能力を開眼させるためにセツナと修行をしているだろう。最近セツナの生傷が絶えない気が

するが、ヤヨイとの修行で付いたものなのか」、それとも里で噂になっっているヤヨイとの追いかけてこで付くものなのか。ちなみにその追いかけてこはどちらかがもう片方を追いかけるもので、必ずしもセツナだけが追いかけるのではなく、ヤヨイの場合もあるらしい。ヤヨイの事をセツナが追いかけている時には、セツナが「ワイは大好きやー！！」と叫びながら走っているらしい。

どこのパン屋夫婦だと思ったが、それもしようがないだろう。大抵の場合はヤヨイの手作りパンが問題だからだ。一回食べてみたが、何と言うか……人間が使える言葉では表現できそうもなかった。あれを涙ながらに食べているセツナには同情と共に尊敬する。

その点、アサヒはまだマシだ。ちゃんとしたものを作ってくれるし、普段の料理はかなり美味い。マシ、というのはどこぞの雪の多い地方での年齢不詳の方のように謎ジャムを作るからだ。忍とは言っても、朝食にパンが出ることはあるので、その時に一緒に出されるのだが、アレが出てくると途端に礼儀作法に厳しい日向宗家でもヒアシ様は顔を真っ青にして立ち上がって出て行くし、ハナビとヒナタは逃げるように立ち去る。俺も出て行こうとすると泣きだしそうになるから、留まって食す事にならざるを得ない。

謎ジャムという名が付くだけあって、これもまたヤヨイのパンに勝るとも劣らないくらい強烈だ。その日一日動けなくなることは間違いない。それなのに、謎ジャムを食べられるヤヨイとアサヒは凄いが……。

というか問題なのは長期任務の時だ。ヤヨイの七色に輝くどころか可視光線を飛び越えてX線を出していそうな乾パンと、アサヒの謎ジャムを俺とセツナが食わされそうになる。だが、食べてしまったら任務失敗は間違いないので、そのコンボを食べたことは無い。

そのおかげで機嫌を損ねることになるから機嫌取りがその後で必要になるけど、死ぬ思いをするよりはマシだ。

……思い出したら身体が震えてきた。そういえば、アサヒの謎ジヤムは保存がきくから、現在木の葉では尋問、拷問用として活用されているらしい。中忍試験の監督だった森乃イビキ特別上忍が時々日向家に謎ジヤムを受け取りに来ている。それを一カ月に何回か食べさせられている俺って……考えるのを止そう。

「アサヒ、午後はどうする？ 俺はリハビリがてら出かけるけど」

「うーん……一緒に行く」

「じゃあ、昼食を食べ終わったら門の前に集合な」

女の子は準備に時間がかかる。何でなのかは俺の知る所じゃ無いけど、風呂とかもそうだ。そしてそれは男には分かりえない事なのだろう。

「大丈夫？」

「何とか、な」

松葉杖のようなものを使いながら歩く。リハビリが目的であるから、適当にその辺を散歩してから戻るだけだ。とは言うものの、足よりも腕の方が酷かったから、松葉杖に頼るというよりは、使った腕のリハビリをしているような感じだ。骨は既に九割方治っているのだが、筋肉を使っていなかったから、そのリハビリが主たる目的だ。

一つ一つの動作を慎重に行いながら、呼吸を深くする。身体を動かす為に血管に酸素が流れ込み、それが肉体を動かそうとする。衰えた筋肉は多量の酸素を消費して、多量の疲労物質を血管に送り返す。わずか10分にして身体に限界が来て、倒れそうになる。

「ふう……」

とっさに反応して正面に回り込んで受け止めてくれたアサヒが呆れにも似た安堵のため息を漏らす。何時もなら限界まで動くことは無いが、今日はアサヒが付いてきてくれるから無茶が出来る。けが人の身であるので、無理はできないが、無茶の段階までならアサヒが何とかしてくれる。今もアサヒがクッションになって、その小さな胸に俺が突っ込んでいる状況だ。微かに柔らかい感触とほのかに香る女の子の匂い。思わず感触を味わい、肺をアサヒの匂いでいっぱいにしてしまう。

「はア……んあ」

ずっとそれに包まれていたが、街中だし、アサヒの顔が艶めいてきて、色っぽい声を出している。頬は少し赤らんでいるし、もう

すぐしたら双眸をはじめとした顔が雌へと変化してしまうかもしれない。俺としては願ったりなのだが、今のこの体では100%そうだとはい切れない。そう思って離れてみたら、アサヒが少し残念そうだった。一瞬、もう一度くらいは良いかと思ったが、流石に止めておく。

「アサヒ、茶屋に行こう」

「……うん」

少し疲れたし、予定を変更して甘いものでも食べながら休憩したい所だ。最近はずっとアサヒと一緒にいるが、デートらしいデートもしていなかったなあ、などと思いながらアサヒに手伝わってもらってすつくりと進む。早くケガを治してアサヒと遊びたいものだ。雲行きが怪しい今ではそんな事が出来るかどうか分からないが。

そんなことを考えながら、やっとの思いで辿り着いた茶屋でお茶と団子を頼みながら、注文した物が来るまでの間、少し待つ。今更ながらに思ったが、パフェだのアイスだのあるのが不思議な感じだ。なのに、コーヒーは無いのだからこれまた変なものだ。紅茶はしっかりとメニューに記載されているのに。

「……ん！」

お待たせしました、という言葉と共に運ばれてきたお茶を一服してから、アサヒがパフェを頼んでいた事に気がついた。と同時に、今まさにポッキーのような菓子を口に咥えてこちらを見ているアサヒと目があった。どうやら、薬事件の時のリングのような事をここでやれというらしい。確かにポッキー状のものは定番であるが、他の客どころか店員までもがこちらを凝視している中でやるのは流石

の俺でも恥ずかしい。それなのに、アサヒは顔を赤らめたまま、目はじっと俺を見つめている。俺の視界に入っている人間だけで、期待に満ちている者が九割程度、残りは殺気に近いものがある。

よく見れば、客の中にリーとガイがいた。二人とも俺にVサインをしていると思った次の瞬間、ガイが飛んでもない事をやらかし始めた。

「やーれ！ やーれ！ やーれ！」

手拍子と共に、全くキャラに合致していな様なことを言い始めるガイ。数瞬遅れて修行だと勘違いしたのかリーがそれに乗り始め、段々と客、店員に感染して行く。やがて全員が手を叩き始め、俺の逃げ場が無くなる。覚悟を決めてから、身を乗り出して端を加えてから、そのまま食べ進めて行って、強引にアサヒの唇まで突き進み、中に進入して舌ごと頂く。

途端に満足したのか、拍手と歓声、口笛が鳴り響き、アサヒは予想していなかったのか、動かないでいる。

「青春だー！ー！ー！！！」

「うおおおお！ ガイ先生エエエエ！」

ガイはそれが言いたかったただけなのだろう。俺に再びピースをしてからリーを連れて出て行く。リーは最初から最後まで何かの修行だと勘違いしていたのか、ガイに尊敬のまなざしを向けながら出て行った。見ていた客や店員は俺の行動に満足して自分たちの事に戻った。店長からは良い見物料になったと言って代金をタダにして貰ったから、恥ずかしい思いをした甲斐があったというものだ。

「おーい、アサヒ? ……駄目だこりゃ」

どうやら違う世界に旅立たれてしまったらしいこの茶屋から日向宗家までは結構な距離があるので、この状態のアサヒに俺を任せる事も出来ないし、ましてや俺がアサヒを連れて行く事も出来ない。そう考えて店員に紙を貰って、迎えに来てもらう旨を書いていく。それを口寄せした鳥に持たせて、日向宗家に向かわせる。ほどなくして誰かが迎えに来るだろう。

第十八話 とある一日（後書き）

転生なのはを予告していましたが、なのはの可愛らしさを追求するにあたって、転生なのはの方がいいのか、それともそうでない方が良いいのか迷い始めました。

転生なのはならばひたすら甘い話を、普通なのはならばそこにもっていくための過程も、と考えています。

どちらにしてもアンチ管理局になるので多少はシリアスが入るかもしれないしれません。

そこで読者の方にはどちらが良いか決めてもらいたいと思います。

後は、なのはを可愛くしたいと思っていますので、こんななのはを見たいなどありましたらどんな感想に書いて下さい。

皆さんで可愛いなのはを追求したいと思っています。

追伸

現段階で考えているのは、ジュエルシード、闇の書事件ともに発生しません。主人公が未然に防ぎます。Striker Sはどうなるか決定してませんが、何にせよ原作の話にはほとんど触れずに、日常生活が中心に、それでいて短くなりそうです。

第十九話 久しぶりの任務

「復帰最初にやる任務じゃないだろ……」

漸く五代目からお許しをもらって身体を動かしていた所に任務の依頼。いくつかの術も試したし、今では四代目と戦った時までには身体が回復していると思っっているが、それも動けても短時間しか持たない。況や血継限界の新術についてはもつとだ。

まだ印を結んで術を発動させたりしてみただけだから実戦においてどのように術を入れて行くのか、どんなものと組み合わせるのかと言ったことに関してはまだまだ研究が必要だ。

今回与えられた任務は砂の里に向いて中忍選抜試験についての打ち合わせをする為に三代目の護衛として付いて行く任務。思わず聞いた時には五代目の前なのに「暗部にやらせろよ」と呟いてしまった。それも仕方がないだろう。なんせ今回の任務はいつもの四人で行く訳ではない。元来五影会談の時にも護衛は二人までと決まっているので、今回はそれに則って俺とシズネさんが抜擢された。選抜肢としては他にもあっただろうに、よりによって何で俺なのか……シズネさんは五代目の付き人だから分からないでもないが、俺は全く理由が分からない。護衛としてならば、他にもたくさん候補がいただろう。

「何を呆けておる。行くぞ」

三代目の後を付いて行きながら、後ろにシズネさんと二人で並ぶ。そういえば、俺とアサヒ、ヤヨイは今回の試験を見送ったから俺が護衛として選ばれたのだろうかなどと思いつながら、しっかりと後に

付いて行く。五代目は今頃シズネさんがいないから仕事に忙殺されているだろう。

「何で俺なんですか？」

俺という人選をしたのは三代目だろうが、一応シズネさんに聞いておく。

「さあ？」

何だかはぐらかされた感じがしないでもないが、一体どんな理由で俺を連れてきたのだろうか。護衛だからおちおちと重りを付けている訳にもいかないので、ガイ特製の重りは持ってきていない。だから、ということではないが、移動の際にも修行という訳にはいかない。

そう言えば今回の試験には前回の試験に参加していたルーキーが再び出場するらしい。思えば、ナルトが自来也と旅に出ていた二年半で皆が中忍や上忍になっているのだから、この試験で殆どが合格するのもかもしれない。ナルトが里に帰ってくるまでに試験は四回しか行われないはずだ。その間でネジとかは上忍になってしまったのだから、才能というものは恐ろしいものだ。

「三代目」

シズネさんがいち早く敵の接近に気付いて三代目に声をかける。流石に伝説の三忍の付き人をやっていただけはあると感心しながら、一応戦闘の準備をしておく。歴代火影の中で最強と言われた三代目を襲おうとするなんてそんな馬鹿がいるとは思っていなかったが、どうやらそういう馬鹿がいるらしい。護衛などという面倒な任務を

仰せつかっているこの身からしてみれば、なんともふざけたことだ。リハビリがてらの任務になると思っていたのに、里を出て一日立たないうちに接敵するなど。

「ほれ、何をしておる。護衛の出番じゃろうが」

「……ちよっと待って下さいよ、冗談ですよね？」

下忍に先々代火影の護衛を任せると言うだけで前代未聞なのに、そしてその下忍がケガから回復したばかりだというのに、この爺はそいつに一人で片付けろとおっしゃっている。

「馬鹿なことを申すでない。その為にお主を連れて来たんじゃろうが」

漸く分った。この爺、里の者皆を愛しているとか言っておきながら、俺の事はどうでもいいと思っているらしい。というか、よくよく考えてみればおかしな話だ。何で護衛の中に感知タイプがいないのだろうか。これではかなりの距離に接近されるまで気付けない。多分、この爺は最初から襲われる事を前提にして俺の実力を計る事が目的だったのだろう。

「影分身の術」

一体の影分身を作ってから思い切り上に飛ばして策敵。案外開けている場所だから、上空からならよく見えるだろう。

確認が終わって戦略を練り始める。前方に三人、後方に二人、左右に一人ずつといういかにも教科書通りの配置だったが、それゆえに面倒くさい。三代目もシズネさんも、敵が自分のそばに来るまで

動く気がなさそうだし、これだけの敵の数をいっぺんにかたずけるのは無理だ。三遁の術を使ったとしても前方の三人しか倒す事が出来ない。かと言って雷遁の術で身体が思ったとおりに動くかと言われたらそれもまた怪しい。

「……面倒くさいから全部殺しますよ？」

一応確認を取ってから戦闘態勢に入る。敵さんは気付かれた事に気付いているのか攻撃を仕掛けてくる様子がない。それならばこちらのやりたい放題だ。影分身を一体作ってしまったので、前後を俺自身が、左右を影分身に任せることにする。

「飛雷神の術」

マーキング済みのクナイを投擲して印を結んでそこに飛ぶ。血継限界だとは言え、かなり肉体に負担はかかる。回復してから間も経っていないこの体では尚更だ。

一人目の右横に飛んでからクナイで首を刎ね、帰り血を浴びる前に印を結んで背後にいたもう一人も心臓を一突きする。地面が流れ落ちる血で染まり赤くなっていく。

「全く……どこの——」

どこの隠れ里の奴なのか、と言おうとした所で瞬間的に印を結んで術を発動。

「——雷遁・雷崩拳」

背後に雷遁のチャクラを纏った崩拳を一突き。それで敵はうつ伏

せになる。

「油断してた。もう一人いたとは……雲隠れか」

最後の一人は監視役だったのか、額当てをしていた。既に殺した七人は全く手ごたえがなかったから、恐らくは雇われた族まがいの人だったのだろう。それを俺に当てることで、木の葉がどの程度の力を有しているのかを知り、そのうえで戦争に持ち込もうとしたのだろう。だとすれば、雲隠れは本気で戦争という選択肢を考えているのかもしれない。いくら尾獣が二匹いて、そのうちの人柱力の一人であるキラビーが完全に八尾を従えていると言っても、木の葉にも七尾がいるし、万華鏡、輪廻眼とそろっている。さらには今の火影は三忍の一人に数えられていた綱手だし、水仙人友呼ばれる仙術使いのセツナもいる。

「三代目、砂にはこのまま行くんですか？」

クナイに付いた血を拭いながら少年が話しかけている姿はなんともシュールなものだろうが、それを気にしないでおく。一々クナイにマーキングを施すのは手間がかかるし、そんなことをしていたら金も馬鹿にならない。

「そうじゃのオ……このままじゃな」

今ならば木の葉に戻って対策もとれるはずだが、それをしないとすることは、こうなることを予想していたのだろう。山中一族の心転身の術のようなものが雲隠れにあったとすれば、今の戦闘を報告されるはずだ。そうでなかったとしても、二段構えで今の戦闘をどこかしらで見ていたものがいたはずだ。まあ、俺は感知タイプじゃないから分からないが。そして願わくばそれによって戦争などとい

うバカげたことをやらないように判断してくればいいのだが。

結局あの後忍に狙われるという事もなく、スムーズに砂隠れに向かう事が出来た。途中で泊まった宿において、ちよつとしたハプニングもあったが……眼福だったとだけ言っておこう。そう言えばシズネさんって何歳なのだろうか。綱手の付き人をしているということとは、自来也の弟子だった四代目と同じ年くらいなのだろうか……だとしたら既に三十路越えということになるが。まあ、忍世界の女性は綺麗な人は綺麗だし、鍛えてあるからしわとかも全くない。行き遅れになるということは無いだろう。実際シズネさんは綺麗だし。

……。今なぜか悪寒がしたけど、気のせいだった事にしておきたい。というかアサヒに今の事とか宿での事とかがばれるとかは無いよな？ 白眼じゃ見えない距離だし……怖いから帰ったら何かしよう。うん。

「そういや、サスケとサクラは今回の中忍試験にはどうやって登録するんですか？」

三人一組で出場する事が原則であるので、ナルトが自来也と修行に出かけている今、二人で出る訳にはいかないだろうから、どこかか

ら誰かを引っ張ってくるのだろうか。

「それも含めて砂に來たのじゃ」

それも、ということは他にも何かあるのだろうか。てつきり中忍試験の打ち合わせの為だけに來たものだと思っていたが……ああ、アレか。もしかしたらこの試験中に戦争になるかもしれないから、木の葉としては今度こそ砂に裏切られたりしたら困るから釘をさしに來たのだろうか。それならば俺を連れてきた事にも少しは納得がいく。前回の試験の時に俺の実力は見ただろうし、何より“黒い稲妻”などと呼ばれ始めているぐらいだから、俺と四代目との戦闘を見ていた砂の忍がいたのだろう。今や伝説の三忍の一人である綱手姫が火影に、そして俺達四人の存在というものは三忍とその知名度を殆ど同じくしている。それは大蛇丸を討ち取った事にも起因しているし、何より写輪眼、輪廻眼という事が大きい。

「ようこそいらっしやいました。こちらです」

俺達を迎えに來たのは砂の上忍である……名前は忘れたが、確か我愛羅達の担当上忍だったはずだ。風遁の術を得意としていて、カブトと共にカカシ、ガイ、後もう一人の上忍を相手に互角に戦っていたはずだ。

迎えに來た男の後に付いて行って……思い出した、確かバキとか言う人だ。

「暫くお待ちください」

今は風影がいないらしい。その為の上忍班長のバキと相談役など、そしてその者たちを含んだ上役が砂の里についての方針だったり何

だったりを決めているらしい。二年の間で我愛羅は風影になるだろうが、もしかしたらこの試験の後で即座に抜擢されるのかもしれない。砂を自在に操れるというのはそれだけで稀有で強力な能力だ。かの三代目風影は砂鉄を自在に操る事が出来た。その為に歴代の風影の中でも最強と言われていた。まあ、その人も赤砂のサソリに殺されてしまった訳だが。そう考えると、いかに暁がでたらめな組織であるかが分かる。一人ひとりが五影と同等若しくはそれ以上の戦闘力を有しているのだ。

「では早速ですが――」

どうやら会議みたいなものが始まったみたいだが、そう言った小難しい話は三代目とシズネさんがやってくれるから任せておけば良いだろう。護衛役である俺の任務は三代目が会議に集中できるようにその任務を果たすだけだ。それ以上でも、それ以下でもない。

「それでは今回の中忍選抜試験は個人申し込みということでしょうか？」

「それがいいじゃろうのオ。木の葉としては依存はない」

「ではそういうことでお願いします。……三代目火影様、今日の所はとりあえずこちらで宿を用意してあります。お付きの方は……済みませんが空気が少ないので一緒にということでお願いします」

はい？ いやいや、俺がシズネさんと一緒ですか？ まあ、シズネさんがそこまで気にしていないみたいだから良いけど。というか、完全に弟みたいなものしか思っていないよな。まあ、今の俺はそういう年齢にしか見えないからそうなのかもしれないけど……帰ったらアサヒにばれないようにしないとな。せっかくケガが治ったのに

また殺されるかもしれない……。それだけは勘弁願いたいところだ。
というか、今はアサヒは木の葉にいるはずだから、俺かシズネさん
か、三代目が漏らさない限りはばれないか。

第十九話 久しぶりの任務（後書き）

前回にも書きましたが、転生なのはか、そうじゃないのはか、どちらがいいかアンケートを取っています。

あ、あとアサヒっていうのも候補に入れたと思います。よろしく願います。

第二十話　才仕置キ（前書き）

本編に関係ない話を更新して時間稼ぎをしています。

NARUTO編の終わり方が雑になってしまったと思います。

皆さんが呆れてこの小説から離れてしまわないことを願う日々です。

第二十話　才仕置キ

「ちょ！　待ってアサヒ！　落ち着いて！　話せば分かるッ！！」

案の定と言うべきなのか、砂から帰ってきた瞬間に般若の形相だったアサヒに追いかけられながら色々と投げつけられている。木の葉の里へと入る為の門をくぐった瞬間にアサヒに待ち伏せされていて、いきなり攻撃されそうになったから回避したが、いくら話しかけても俺の話を聞いてくれないので、そのまま外へと逃げている。流石に里の中に逃げ込む訳にはいかないから外に逃げているのだが……いつの間にかかなりの距離まで来ていたらしい。気が付けば終末の谷だ。

「万象天引」

——ッ！！　チャクラで足を地面に吸着！！

その必死の抵抗も空しく、アサヒの方に引き寄せられる。般若を通り越して何か悪魔のような形相になっているアサヒの顔がしつかりと見える。

——ああ、死んだかも……

そんなことを思いながらアサヒの方に吹き飛び、目の前に立つことになる。俺はとっさに両手をあげて身動きを取らないようにしながらアサヒの次の行動を待つ。

「ネエ、ドウイウコトナノカナ。説明シテ欲シインダケド？」

「はい！ 今すぐ精緻にご説明いたします！！」

多分、何か返答をミスしたら命が無くなる。いや、冗談抜きに。

「まず、最初の事についてですが、シズネさんの事を一般的見地から可愛いと思っただけで、消してアサヒよりも可愛いと思っただけではありません！ 次に部屋が一緒になった事についてですが、部屋数が足りなかった為に仕方ありませんでした！！」

「フーン……不可抗力ナンダ。ジャアドウシテ三代目ト一緒ノ部屋ニシナカタノ？」

「そ、それは……！」

確かに、三代目と一緒にの部屋にして貰うという選択肢もあったはずだ。というか、何なのだろうこの状況は。俺が尋問されているみたいだし、どうやって見ても俺が被告にしか見えない。黙秘権……は無いし、傍聴人もいないから全く違うともいえるが。

「モウ答エナクテモ良イヤ。タクマニハ、オ仕置キが必要ミタイダネー——神羅天征」

アサヒの術で遙か後方に吹き飛ばされる。そして身体が壁にぶつかった所でかなりのダメージを被ってから止まる。そのまま身体が落下し、水面に叩きつけられる。

「ッ！ 氷遁・白鯨」

アサヒの“オ仕置キ”という言葉に命が危ないと判断したのか、とっさに反応して身体が反射的に印を結ぶ。頭の中ではアサヒに勝

とうとか、傷つけようとか思っている訳ではない。一刻も早くここから逃げないと文字通り命が危ない。輪廻眼相手では五つの性質変化にはそれに打ち勝つ性質で自分の術がさらに大きなものとなって還ってくる可能性があるので、血継限界の術でないと不味い。

「フーン……抵抗スルンダ。神羅天征」

広範囲に威力を持つ氷の鯨が斥力の一つで無駄となるが、あれのインターバルは五秒ある。五秒もあればアサヒを昏倒させて逃げることもくらいは出来るはずだ。というか、アサヒの意識を失わせないと引力で引き寄せられるから逃げられない。そう思ってアサヒの背後に飛んでから手刀で首筋に打ち込もうとした所で瞬間的に“回天”をされて吹き飛ぶ。キレているのに冷静に対処してくるとかありえない。というかインターバルの間は回天で防御するならあれを打ち抜くにはそれなりの攻撃力が必要だ。

「ソウ言エバ中忍試験ノ時ハ負けチャツタケド、今回ハソウハイカナイカラネ。水遁・水龍弾ノ術」

「水遁・水龍弾の術！」

何時の間に使えるようになったのか分からないが、足もとが水であるから使いやすいのだろう。同じ術をぶつけて相殺させるが、何時引力を使われるかにも注意しなければいけないから大変だ。水遁を使った直後に雷遁・電光石火を使っているが対抗し切れるかどうか。というか、何時の間にか“オ仕置キ”をすることから俺に勝つことに主旨が変わっているような気がするがそれは気にした方が良いのだろうか。

「八卦空掌」

神羅天征を使われるまでは近づく訳にはいかない。それに近づくにしても回天を使われる前に決めなければならない。逃げるのは万象天引があるから無理。なんとも厄介な相手だ。中・遠距離に関して言えば性質変化の術を使う事が出来る。それに輪廻眼の恩恵なのか、チャクラも多くなっている。だからチャクラ切れを待つ事も出来ない。隙を見てどうにかするしかない。何度もアサヒの術をよけたり、術をぶつけて相殺させているが、一向に許して呉れる気配がない。それどころか俺を試すみたいに段々と激化しているようにすら感じる。

「もらった！」

「残念デシタ。神羅天征」

「なっ!？」

漸くすきを見つけて移動して手刀で気絶させようとした所で斥力によって大きく吹き飛ばされる。かなりの力が加えられてみたいで、気が付いた時には初代とマダラの像よりもだいぶ上流側に来ていた。思い切りやられたので身体が動かないが、あれはアサヒが自分で作りだした好きだったのだということに地面に横たわりながら考える。アサヒが来る前に立ちあがって逃げるなりなんなりしなければならぬが、身体が言うことを聞いてくれない。今ならアサヒはかなりのインターバル時間を必要とするのに、どうにも動けそうにない。暫く経ってから漸く立ち上がった所でアサヒも俺に追いついてきた。

「モウ動ケルンダ。流石私ノタクマ」

「アサヒ、もう気が済んだり——」

「――マダダヨ？ コレカラオ仕置キスルンダカラ」

「……ですよね」

淡い期待をしていたが、どうやら無駄だったみたいだ。俺をぶちのめしたら満足すると思っていたのに、これから“オ仕置キ”に入るらしい。動けるだけで抵抗できないから、なすがままになるのだろうか、一応飛雷神で逃げられるようにしておこう。

「地爆天星」

「……え？」

地面から膨大な量の土が上空に持ち上げられ、そこに立っていた俺ごと引力で引き寄せられる。あまりの出来事に思考が飛んでいたが、元に戻って逃げ道がないか探す。だが隙間一つ見当たらず、クナイをどこにも投擲できない。そのまま吸収され、俺の首だけが出ている所で引力が収まる。

「コノクライデ良イカナ。ジャア、マタ後デ迎エニ来ルカラ」

「え……お仕置きってそういうことなの？ ってアサヒ？ え、ちよっと待ってよ。アサヒー！！」

「反省した？」

地爆天星で閉じ込められてから四日目、その間一切何もすることなく、誰にも会うことなく放置された。食べたり飲んだりという事もなかったので、そろそろ死ぬんじゃないかと思う。

「しました。だからここから出して……」

「……うん。良いよ」

漸く解放された。そしてズタボロの状態で閉じ込められて行った眼が、それとも三日三晩一度も何も口にしていないせいか、立ちあがる事も出来ずに地に伏せる。腹に何も入っていないから力がでないし、里まで持ちそうにない。そしてそんな俺の状態を見越していたかのようにアサヒから声がかかる。

「お腹空いたでしょ？ パン持ってきたから」

アサヒにここまでされたのに、今は女神に見える。……あのパンがアレ出なければ。とりあえず、遺書を書いて後の事をヒナタに任せよう。予想が正しければこの後必要になるのは医療忍者だ。

「口寄せの術。……これを届けてくれる？ ありがと」

一声鳴いてから返事の代わりにして、鷹が里の方角へと飛んでい

く。

「アサヒ、一つ聞くけどそのパンは？」

一応聞いておこう。もしかしたら最悪の事態を回避できるかもしれない。というか、何であんな色に輝いているのだろうか。まさしく雨上がりの良く晴れた空にかかる橋のような色をしている。

「ヤヨイちゃんに頼んで作ってもらった特製の“虹色パン”だよ」

……。虹色パン、日本語に訳したら“レインボーパン”。いや、元々虹色も日本語だから訳してはいないが。まあともかく、河川敷に並んでいた屈強な男どもを一瞬にして葬り去ったという伝説のパンだ。

「中にジャムも入ってるんだよ♪」

例のジャムと会わせることでその威力は富士山よりも高く、日本海溝よりも深くなるという伝説の組み合わせが俺の目の前に降臨している。“食ったら死ぬ”。その六文字だけが俺の頭の中を支配する。

「……イヤだった？」

「頂きます!!」

そういう顔をされたら断れるはずがない。まあ、医療忍者の要請も出しておいたから迅速な人命救助がなされることを期待しよう。

「……」

第二十話 才仕置キ（後書き）

前書きにも書いたように時間稼ぎです。
後8話くらいで終わる予定なので……。

なので、転生なのはか、そうでないのはか、アサヒかに関しての意見を頂けると嬉しいです。

それだけでなく、普通の感想もお待ちしているので、多数の意見が寄せられることを期待しています！

あ、あと作者は凡人で非才な人間ですので思ったよりも次のリリカルが短くなるかも知れません。

まあ、全部で十萬文字以上にはするつもりですが。

最後に、150万pvを達成しました！
本当にありがとうございます！！

第二十一話 準備（前書き）

手厳しい感想をいただきました……。。

読者を離さないように精進するばかりです。

とはいっても、すでに完成しているから直せないんですけど……。

もう駄目だと思った方は、23日辺りからリリカルを投稿すると思うのでそれまで我慢してください。

第二十一話 準備

――生きている。

これが意識を取り戻してから思ったことだった。純粹に俺が生きているということに感動してしまった。人間、腹がすいていれば何でも食えるらしい。あのパンは俺が永久封印指定にした。そうでもしないとこれ以降、木の葉の里で死者が続出する。尋問に使ったりしたら間違いない殺傷してしまうだろう。

「……つと。これは」

空には一匹の鳥が飛んでいた。どうやら中忍試験に際して担当上忍が招集されているらしい。今回は雲がどういう風に動くか分からないから俺達三人は出ない事になっている。俺のケガが思ったよりも早くに回復したから試験を受けても良かったのだが、アサヒとヤヨイは事情が事情なので、俺とセツナを含めた四人班以外でチームを組むことは無い。それについてがたがたと上役たちやダンゾウに言わせない為にも、下忍のままにしておいた方が良いというのが俺達と三代目、五代目の考えだ。任務については五代目が俺たちに別枠で用意してくれるのでそれを受け持つことになっている。

とはいっても、俺のケガが治ってから四人での任務は一つも受け持っていない。それは俺が復帰したと同時に三代目の護衛、そして帰ってきてからはアサヒにお仕置きされていたからだ。

ちなみにアサヒが五つの性質変化を全て使えるようになったのは俺が砂に行っていた時らしい。輪廻眼を用いての戦闘方法もその時に確立させたのだとか。それにしても厄介なものだ。実際に相手に

したから分かるが、斥力と、回天のコンボはかなり強力だ。本当の意味での絶対防御なんじゃないだろうか。それに、攻撃にしても性質変化を全て扱えるからそれで中遠距離は問題ないし、近距離線についても斥力と引力、さらには日向の柔拳がある。長門と違って足が動かない訳でもないから、自分で六道の全ての術を行使する事が出来るし、アサヒが一人で居るということはめったにない。常に俺達の誰かと一緒にいる。まあ、俺は今回の事で一つ身にしみて分かった事、というか教訓を学んだ。

アサヒを怒らせない。

単純なことだが、何よりも大切なことだ。あの時の俺とアサヒの戦闘場所であった終末の谷から少し上流側に上った場所は、アサヒの地爆天星よって少し削れていた為に、そこに水がたまり、今では“夫婦喧嘩の湖”などという不名誉な名で呼ばれている。俺としてはその名を耳にするたびにあの時のアサヒの形相が思い出される。光の無い眼、その中には円が渦巻いている。カタカナでしか表記できないような言葉。そのどれもが俺としてはアサヒに逆らってはいけないということを思い知らされたものだ。

「どうしたの？」

「何でもないよ」

アサヒはこういう普通の時に可愛いから困る。いや、困るということは無いか、お小手いる時とのギャップが激しすぎるのが問題だ。まあ、本気で怒ったのなんて俺と喧嘩した時しかないんだろうけど。

「……タクマ」

「分かってる」

三人……いや、もう一組いる。多分今度の中忍試験を受けに来た者たちだろう。感知タイプじゃない俺に気付かれた所を考えるとそこまで実力は高くないらしい。多分前回の試験で俺がやらかしたから俺達の実力を確かめに来たんだろう。だとしたらご苦勞なことだが。俺達は今回の試験は受けないというのに。

「アサヒ、放っておくよ」

既に白眼になっていたアサヒにそう言って臨戦態勢を解除させる。そうでもしなければアサヒは何をするか分からない。何人かが殺氣まがいのものを俺に当てているような気がするがそれからしても下忍の中でも練度が甘い奴らだという事が分かる。

「うん」

さてと、中忍試験が始まるなら俺達の任務は多分火の国の国境付近の警備だろう。砂やその他の忍が木の葉に来るんだから、雲はうかつには木の葉を攻める事が出来ない。が、国境付近は話が別だ。警備が薄くなっているからいくらでも侵入できる。それだけではなく、木の葉が状況を分かっているからこそ、国境に警備を派遣して、木の葉内部の守りが薄くなるという事も否めない。何か問題を起こして、他里の忍のせいにしてしまう事も出来る。疑い出したら切りがないが、戦争になるかもしれないということはそれだけ神経質にならなければならない事だ。

「伝令！ 風間班は火影執務室に集合！」

アサヒが警戒を取った直後に俺も重心を落として警戒してみたが、現れたのは暗部だった。四人全員で集合ということはどうやら任務のようだ。この時期に四人で一度に呼ばれるとなると国境警備に回されるという事でも、木の葉の警備に回されるという事でもないのだろう。もっと他に俺達を任務に向かわせるような事が起こったということだろう。

「任務ですか」

「そうだ。情報によればここに大蛇丸のアジトがあったらしい。お前達四人で調べてこい」

召集によって火影の執務室来てみれば案の定そんな話だった。机上に広げられた地図に何も書き込まれておらず、これが今回の任務の為に用意されたものであるということが分かる。今この場にいるのは五代目、三代目、ダンゾウ、相談役の二人に俺達四人だ。どうやら今回の任務には“根”の者が二人同行するらしい。その為にダンゾウがいる。もしかしたら大蛇丸との関係がばれるかもしれないと危惧しているのかもしれない。それは今回付いてくるのがどういう者かによって分かるだろうが。

「では出立は二時間後とする。それまでに各自準備を済ませておくように」

準備、と言っても二時間かけてやるほどではない。俺の主体は忍術だから、飛雷神のマークを施したクナイさえ持っていれば事足りる。大蛇丸のアジトも二日あれば行ける距離なので、大がかりなものはいらない。準備という点においては、必要なのはヤヨイとアサヒにパンとジャムを持って行かせないようにすることだろうか。それさえ達成できればこの任務はさほど難しくは無いだろう。というか、一番の重要ポイントであるような気がする。ヤヨイの方はセツナとアイコンタクトを交わした時にそれぞれがそれぞれの相手を担当する事になったから任せれば問題ない。

少し長期の任務であるから、アサヒは着替えなどを済ませてから持っていくものを準備し始めるだろう。その時の見極めが一番重要だが、アサヒの部屋に入るタイミングを間違えれば着替えを覗きに入ったと思われるかもしれないから、注意が必要だ。ヒアシ様からの許可は降りたとはいえ、今までに色々なことがありすぎて情事のような事は一度もしていない。したいと思うのは男の悲しい性故だが、それに持ち込むタイミングも重要であることは分かっている。分かってはいるが、もうそろそろ理性というか本能が暴れ出しそうなのも事実だ。

同じ一つ屋根の下に住んでいるのに、まだキスまでしかやっていない。フラストレーションがたまる事この上ない。特に風呂上がりなどの時などがマズイ。長い黒髪が上で束ねられてあって、その為に見える項は吸血鬼でもないのに噛みつきたくなる。シャンプーなど無いのに髪からは良い香りが漂ってきて俺をクラクラさせる。

……というかこんなことを思い返している暇があったらジャムの持

ち込みを阻止するために動こう。アサヒも着替え終わったみたいだし。

「アサヒ、ジャムは持っていくなよ?」

「え、何で?」

「重いだろ。それに途中で割れるかもしれないし。それにもしかしたら――」

そんなことは全くだろうが、まくしたてるように言っておかないと俺が説得される可能性が無きにしも非ずなので、危険だ。そんな事になっては困る。そう言えば

いまさらながらに思ったが、着替えを見られるのは恥ずかしいのだろうか。俺が入院していたときだってアサヒは自分からキスしたり口移ししてきた。薬のためとはいえ、かなり恥ずかしいと思うが……いや、もしかしたらあの時の積極性はアサヒも薬を服用していたからなのかもしれない。口移しの時に持ったのならアサヒも身体の中に薬が入ったはずだ。

うん、そうなのだろう。だとすれば茶屋で顔を赤くしていた事にも頷ける。あの問いは正常だったから恥ずかしかったのだろう。ということは今は初々しいままなのであるという事か……。あの妖艶さが無いというのは、それはそれで残念な気もするが、初々しくて可愛いアサヒも捨てがたいから良しとしよう。それに行く行くは薬の時みたいに艶めかしく、美しくなるのだと思うと楽しみだ。

「……何笑ってるの?」

「笑ってた?」

「うん。ニヤニヤしてた。……何かえっちな事考えてたでしょ」

何故か英語でもカタカナでもなくひらがなに聞こえた。何と言うか……萌える。いぶかしんでいる目が俺を見ていて……って俺はMじゃない。アサヒのそういう目も、表情も好きだというだけで決してMではない……はずだ。どちらかと言えばSのような気が……しないな。

……アレ？　もしかして俺ってMなの？　い、いや！　ノーマルだということにしておこう。何だか自分で考え始めてたら改めて俺が変態な気がしてきた。というか何よりもまずアサヒをごまかしておこう。

「そう言う事考えてたんじゃなくて、アサヒが可愛かったから笑ってたんだよ」

「……私でえっちな事考えてたの？」

ごまかし失敗！？　っていか何でそっちの方向に持っていこうとするんだ？　どうやってごまかせば……って別にしなくても良いか。

「そうかもな。俺もアサヒと同じで変態だから」

「ち、違うもん！　私はそういうのじゃないもん！　もう知らない！　タクマのバカ……！」

「あ、アサヒ！　ちょっと待って、ゴメン！　謝るから」

第二十一話 準備（後書き）

色々と思いをいただいて、結局転生なのはにすることにしました。

……でも、アンチにすると啖呵を切ったのに、転生なのはだから難しいです。

今、四話のプロットを書き始めているのですが、早くもわけのわからない展開になっています（プロットを書き始めるのも今回が初めてです）。

次回作でも崩壊が多数見られると思うので、そのところをご了承ください。

最後に、この小説の終わり方を見直してみました。が、相変わらず終わり方がひどかったです。

まあ、この作者はそのくらいしかできないと思って読んで下さい……。

第二十二話 いちいち小題付けるのが面倒になってきた

「はぁ……」

任務の現場へと急ぎながら漏らした溜息がセツナと重なる。聞く所によればセツナの方はパンを持って行かせないようにさせた所でヤヨイの機嫌を損ねたらしい。今までにこういう風になった時は抱きしめたりキスしたりして機嫌を直していたのに、アサヒの場合は斥力で近づかせてくれないし、ヤヨイの場合は幻術をかけられるらしい。アサヒとヤヨイの二人が結託しているらしく、俺とセツナが二人で協力してもなかなか機嫌を直してくれない。

そんなこんなで必死になっていたらしいのか集合時間になっていたので門の方へ向かったら、居たのはフーとトルネという、“根”の中でも実力者の部類に入る二人。この二人の警戒も必要だが、アサヒとヤヨイが不機嫌な今ではそんな事も既に関係ない。というか真面目に大蛇丸のアジトを搜索する気なら問題ないが、万が一接点が見つかった時に俺達を暗殺する腹ならこの人選はかなりの間違いだ。油女一族の秘術も山中一族の心転身もヤヨイには全く効かない。とするともしたらダンゾウは大蛇丸と接触していないのかもしれないが、その可能性はあるのだろうか。左上半身は包帯に覆われているからそこまでの違いは無いと思うが、ヤヨイもアサヒもダンゾウが写輪眼を保持しているかどうかの判断は出来なかった。どうやら特殊な封印術がかけられているらしく、写輪眼でも白眼でもそれしか確認する事が出来なかった。

もしかしたら、ダンゾウは俺達四人を処分する気などまっさら無いのかもしれない。やり方は強引だが、彼も木の葉の事を人一倍思ったが故の行動だ。舞闘派の筆頭であり、の闇の代名詞を持つ

が、それも強引なやり方の上で付いたものだ。何より三代目がそこまで深刻に思っていないという事がある。まあ、三代目とダンゾウは動機だった上に三代目自身が甘いという部分は否めないが。

「どっちにしてもアサヒの事が先決だな……」

じゃないと、せっかく身体も治ったのにアサヒと一緒にいる意味が無くなる。というか、一緒にいられないかもしれない。そんな事になったら生きていけない。というかこちらに何をして欲しいのかが分からないからご機嫌取りが出来ない。それさえ分かればなんとか出来るのだろうが。それにしてもどうしてアサヒを怒らせる事になったんだっけか……ああ、そうか。アサヒの事を俺と一緒に変態とか言っただっけ。

……冷静に考えてみたらそれは怒るな。それならどうすれば機嫌を直してもらえるか……キスとかそういうものじゃ駄目だよな。怒った理由が理由だし。うーん……でも強引にそういうことをしたら許してくれるかな？ どうせアサヒもヤヨイと二人で俺達の事を悪く言ってるだろうから怒った理由なんて忘れてるだろ。それなら今日の宿は何とかして同じ部屋にした方が良いよな。

「セツナ、今日は野宿？ それとも宿？」

「良く聞いてくれた！ 今日はいのの新術をお披露目や！ ……ヤヨイには相手にされなかったんやけど……まあ、それはさておいて行くで！ 土遁・地下室の術！」

良く分からないが、多分地下に部屋を作ったんだろう。地面がうごめいているし、土遁というからには間違いない。というかヤヨイには相手にされなかったのか……可哀そうだな。根の二人はセツナ

に案内されて一室に入って行ったから俺はアサヒを連れ込む為に多少強引になっても良いから頑張るとしよう。

「アサヒ！ 一緒に——グッ！！」

話しかけた途端に神羅天征を使われた。だが今日の俺はこんなことでくじける訳にはいかない。セツナが作った新術ということは防音ということだろう。つまりはそういうことが出来るということだ。

「瞬身の術！」

瞬身を使ってアサヒの背後に移動する。だが白眼を使ってたのか回天によって近づく事が出来ない。というか、何でアサヒに近づくだけでこんなに高レベルの忍術合戦をしなきゃならないのか分からないが、今はそんな事よりもアサヒを捕まえる事が先決だ。出し惜しみをしている場合ではない。アサヒが本気になったら俺でもどうにかする事が出来ないのだから。

「雷遁・電光石火！」

地面を抉るようなスピードでアサヒに迫りながら捕まえたと思った拍子に神羅天征で弾き飛ばされる。単純だが、斥力というのはどうしようもない力だ。だが、こちらも回天を使われる前にアサヒを捕まえてしまえば問題は無い。

「もらい——ッ！」

捕まえたと思ったら自分の足から火が出ていることに気が付く。とっさに身体の中のチャクラを乱して幻術返しをする。現実に戻った所でアサヒのすぐ傍にいたヤヨイが写輪眼を発動していることに

気が付く。

「おいおい……勘弁してくれよ」

「ごめんね。アサちゃんに頼まれたから」

アサヒとヤヨイを同時に相手にするとかマジであり得ない。この二人を同時に相手にするなら一人で暁を潰す方が楽だと思う。

「もううたで!!」

地面から飛び出してきたセツナがヤヨイを捕える。元々俺がアサヒを捕まえようとすればヤヨイが出てくるのは分かっていたので、その時に虚を突いてもらうことはセツナと確認済みだ。その作戦がうまく言ったみたいだから、後はアサヒを俺がどうにかするだけだ。

「残念でした♪」

「へ? のわっ!!」

セツナが捕まえていたヤヨイがそんなことを言った次の瞬間に爆発して消える。どうやら影分身だったらしく、それをイタチのように爆破させたらしい。だが、それも作戦の中に織り込み済みだ。

「水分身!?!」

「今度こそしまいや!」

「何てね♪ そんなに私が甘い訳ないでしょ」

確実に捕えたと思った次の瞬間にセツナが掴んでいたヤヨイが消えてなくなる。どうやらあれも影分身だったらしい。人柱力のチャクラにももの言わせて初めから三体もの影分身を作るとか反則すぎる。しかも綿密に練っていた作戦がそれだけで崩壊させられた。

そしていつの間にか俺とセツナVSアサヒとヤヨイになっている。いや、初めからそういう構図であったのはそうなのだが、俺達が機嫌を取る為に捕まえるということからいつの間にかあの二人が俺達に勝つ事へと主旨が変更しているような気がしないでもない。今回の事も前回の事もあって思うが、もしかしたらアサヒとヤヨイは戦闘狂じゃないんだろうか。特にアサヒに関して言えば、俺が何かをやろうとするたびに戦っているような気がする。四人が四人とも五影のレベルの忍だからそこまで張り合える相手が少ないというのも理由の一つなんだろうが、中忍試験以来、アサヒに勝った記憶がないから困ったものだ。

亭主関白とかは夢の又夢だし、尻に敷かれているのは今さらだ。それに今までの事からもアサヒには微妙にヤンデレが入っているような気がしないでもない。

「……セツナ、まさかヤヨイって……」

瞬間的にヤヨイの方に意識が持つて行かれる。それも仕方がない。ヤヨイが片方の眼を閉じているし、もう片方の開いている目には万華鏡が見えるからだ。セツナの方を見ると、ヤヨイの眼を見ないようににはしていないから幻術ではないのだろうと考えて、天照のように空間攻撃なのだと思い、瞬間的に回避できるようにしておく。

「そうや……両目とも能力があるで。今閉じてる方は黒炎が出てくるから気いつけや」

気をつけろと言われて何とかなるものでもないと思うが……これが空間攻撃なら避けられないはずだし、黒炎なら当たった瞬間にお陀仏だろう。……アレ？ ヤヨイはそんなものを味方に向けて使おうとしてるのか？

「やたがらす八咫鳥！」

「ッ！！」

開かれた瞳の前から黒い三本足の鳥が現れてそれが分散してこちらに突撃してくる。多分、黒炎を見た所に発動させるのではなく、それ自体を自在に操る能力なのだろう。それゆえに鳥が幾重にも分散してこちらを襲ってきているのだ。俺にとってはそこまで脅威の能力ではない。瞬身と見まがうほどの速度だが、俺はそれ以上の速度で動く事が出来る。

「いらっしやい……八卦百二十八掌」

回避し続けていたらいつの間にかアサヒが俺の背後に立っていた。静電界によって気が付いたのでアサヒに言葉を投げかけられる前に移動して逃げようとしたら引力で引き寄せられてそれが叶わず、むざむざと柔拳を喰らってしまった。しかもその拍子でセツナと分断されて、アサヒと一対一の状況に追い込まれる。だが、柔拳を喰らう直前に身体全体を氷遁で覆ったから点穴にダメージを負った訳ではない。

服についた土埃を払いながら冷静に今の状況を推察してみる。アサヒとの一対一、チャクラはそこまで使っていないからまだ十分にある。アサヒの頭の中を占めているのは俺に勝つということだろう。

そして俺の目的はアサヒの機嫌を直すこと。多分ここで俺がコテンパンにやられたらアサヒの機嫌が直るかもしれないが、それをやってしまったらこれからの任務に支障をきたす。そう考えるとチャクらは使ってもアサヒに勝つ、若しくはアサヒの機嫌を直すために強引にキスをしたりなどという対処法が思い浮かぶが、果たしてそれが可能なもののだろうか。

「考えるより動け、だな。元々考える方じゃないし。雷遁・疾風迅雷」

電光石火ではアサヒには通用しないという事が分かっている。それ以上のスピードである疾風迅雷を使ってみる。いくら瞳術使いといえど、飛雷神以上に速いこの術を眼だけでは捕えることはできないだろう。それにこの術は常に身体全体で千鳥をやっているようなものだから、早くに決めないと後々で身体に響く。

「ちゃんと見とけよ。一瞬で終わるから」

足にチャクラを練って、即座に爆発させて推進力に変換。その際に身体全体を電気で強化して人外の数度で移動する。最早銃弾の速度を越えて、電気の数度にすら匹敵している。が、それにもアサヒは瞬間的に反応して神羅天征を使ってくる。その一瞬で背後に飛び、斥力の影響を受けないようにしてから即座にインターバルの瞬間を狙って再び突っ込ませる。

「回天！！」

「残念、それは雷遁影分身」

回天を使い始めた瞬間に印を結んでそのまま影分身に突っ込ませ

た。雷遁で作られた影分身は電気によってアサヒの行動を制限して、身体を硬直させる。それを機に鍛え上げたスピードでアサヒの正面に回り込んで抱き寄せて口づける。

「！ ん……んむ……あっ……ぷはっ」

「どうだった？ これでアサヒも――」

続けようとした言葉がアサヒの口付けによって遮られる。直前に見たアサヒの顔は恍惚になっていて、目も完全にトロンとしていたから、何とか賭けには勝ったのだろう。キス一つでこんな状態になるあたり、アサヒの事を変態と言っても仕方がないような気もするが、また言ったら不機嫌になるだろうから止めておこう。それにしてもやはりこういう状態のアサヒは可愛い。というか最近妖艶さも加わってきているから我慢できるかが心配だ。流石にこの後も任務が続くのにアサヒが動けないということになっては困るので自重はしておくが。

第二十二話 いちいち小題付けるのが面倒になってきた（後書き）

転生なのはにするとということで、以前のを読み返してみたら酷いのなんの……。

感想であれだけ叩かれる理由が分かりました。

次回のリリカルはそんなことにならないといいなあ、なんて思っ
て書いています。

でも、大多数の人のご期待に添えることはないと思います。
だれか文才を下さい！！

第二十三話 デレ（前書き）

少し進展……かな？

第二十三話 デレ

さてと……簡単にあの後の事を説明しておこう。機嫌を直したアサヒを連れてセツナ作の地下室に行き、その後甘い一時を過ごした。

これだけだ。もちろん、いつもより過度なスキンシップとかはあったが、情事やらには持ち込んでいない。流石にこの後も任務があるので、そういうことは出来ないからだ。それにしてもあの時のアサヒは可愛かった。気が付いたら夜が明けていた位に。

そういえばセツナの方は失敗したらしく、幻術を喰らって散々なお仕置きをされたらしい。まあ、お仕置きと言ってもヤヨイがセツナに対してやりたいようにやっていただけなのでセツナの方も良い思いをしたみたいだが。それにヤヨイもアサヒと同じで怒っていた理由を途中で忘れていたらしく、戦闘に勝つことにしか頭が回っていなかったようだ。ちなみに根の二人は俺達の戦闘が行われている間、流石に物音がした為に一度上に上がったが、あまりの激しさに中に戻ったみたいだ。それも仕方がないだろう。上にあがったら任務の為に同行している班が黒炎やら斥力やら仙人やら人外の速度で戦って動いているんだから。

「見つけた。ここから100メートル先に入口がある」

ある程度アジトに近づいてから白眼で探索をしていると、アサヒが搜索から数分で入口を発見した。それ以外に特筆して情報がないということはカブトはいないということだろう。大蛇丸が死んだと言ってもカブトは未だ健在だ。どういう動きをするかが分からないし、元々はサソリのスパイだったはずだ。暁に入ったという可能性も否定はできない。

「ほんなら行くで。先頭はヤヨイ、その後ろにワイ、タクマ、最後尾にアサヒや。暗部のお二人は両サイドで。中に入ったら二人ずつで搜索や」

根の二人を野放しにするのは気が引けるが、そうでもしないとついてきた理由を知る事が出来ない。それにこちらはアサヒの白眼で監視も出来る。何か不穏な動きをしたらその瞬間に俺が向かえば済む話だ。もちろん、アジトの搜索も怠らないが。

「これは……」

どうやら大蛇丸の実験場だったみたいだ。その内の一室を調べているがどうやら原作で大蛇丸が三代目に術を封印されていた時に使っていたアジトのようだ。椅子があるし、不格好な手の骨董品が置いてある。恐らくはここに暁の一員であることを示す指輪が付けられていたのだろう。薬品などは何も残っていないから、既にここをカブトが引き払った後だという事が分かる。それに実験場にしてはやけに人が少なかったから念の為にアサヒが白眼であたりを見回したが、人っ子一人いなかった。どうやら君麻呂も既に連れ出されているか若しくは処分されているようで、残っているものと言えば禁

術の実験を行った跡だけだった。が、その中でも一際目を引く物を見つけた。

「穢土転生の箱……これは初代のものか」

一と書かれた人一人が入りそうな箱があった。三代目と大蛇丸の戦闘の時に見たものと全く一緒だったから初代の者であったことは間違いない。それに大蛇丸は初代の細胞を持っていたはずだし、もしかしたらカブトが大蛇丸の残滓と共に持って言ったのかもしれない。いや、それか……ダンゾウが自身に埋め込む為にカブトを使っただろうか。初代の細胞で肉体を強化しなければ写輪眼は扱えないはずだ。十分に可能性はある。

「とりあえず……封印！」

初代を穢土転生させたであろう箱を巻物の中に封印しておく。これは後で全員で話し合う必要があるだろう。まあ、ダンゾウが大蛇丸と繋がっていた証拠にはならないだろうから、あの二人が手出しをしてくるということは無いだろう。

「！ タクマ、その机の中に何か入ってる」

「これは……地図？」

取り出したものを広げてみれば地図らしきものだった。いくらか書き込みがしてあり、何箇所かに色に分けてマークがしてある。この場所にもマークがしてあるから、どうやら他のアジトの場所を示したもののだろう。

だが……カブトがこんなものを残しておくだろうか？ どうも罠

のような感じがしてならない。地図をわざわざおいて行く訳が分からないし、もしもいらないなら燃やしてしまえば良かったはずだ。うっかりをするような性格には見えないし、どちらかと言えば几帳面な方だろう。

「アサヒ、そろそろ出よう。もう探しても何もないだろうから」

結局あの後木の葉に帰るまで根の二人が不振な動きを見せることはなかった。必要以上に警戒しすぎたのかもしれないが、何も起こらなかったから良しとしよう。それよりも問題は持ち帰ってきた地図の事だ。いくつかの拠点が書き込まれていた為に、班をいくつか編成して送ることになったのだが、正直雲隠れの里の動きが分からない以上は国境の警備をおろそかにする訳にはいかないし、上忍の何人かも今回の中忍試験に担当として参加しているから木の葉では人が著しく足りていない。その為に俺達は任務から帰って来たばかりだというのに国境付近に中忍試験が終わるまでの間派遣されることになる、大蛇丸のアジトと思われる場所には暗部が何人か送られることになった。まあ、国境へと向かう途中に一つアジトがあるからそこを担当する事になったんだが。

そして今度こそ長期任務ということで、またもやアサヒがジャムを持って行こうとするのを阻止する事になった。今回はアサヒの機嫌を損ねてないから色々とスキンシップをしている内に時間を経たせて持つて行かせない作戦を取ったのだが、いつの間にか朝を迎え、黄色い太陽と挨拶し、冷静になって状況を判断してみたら……シュー一枚だった。

その状況に気が付いてから俺がナニをやったのかに気が付いたが、今となっては後の祭りだ。後の祭り、と言っても俺としてはなんら後ろめたい訳ではないし、むしろ嬉しい限りだ。これで漸く一步進んだのだと思うと、今までの苦労を思い返して涙がこみ上げてくる。

それにしても……昨日のアサヒは可愛かった。さんざんに喘がしておいて言うことではないかもしれないが。それからこの間は俺は自分の事をMなんじゃないかと思っていたが、どうやらそうでもないらしい。昨日の情事でSの一面も発見したし——自分の事について発見というのが正しいのかは疑問だが——ノーマルだということにしておこう。というか、SとかMとか関係なしに俺がアサヒを愛しているということだ。

そういえば俺とアサヒの婚儀の話が進んでいたが、任務が継続きにあるから何度も先延ばしになっている。今回も任務から帰ってきたらそういう予定だったのに、また任務が入ってしまったから先延ばしとなった。流石に結婚してからでないと子供とかが出来た時に不味いのでそこは自重しているが、この世界にはゴムがないから困る。しかも鍛え上げられたアサヒの肉体は——言及するのを避けておこう。これ以上は色々マズイ気がする。

「で、アサヒがそういう状態だから遅れたっちゅうことか」

自分で立てないらしく、今は俺が所謂“お姫様抱っこ”状態でここまで運んできた。流石に里の中をこの状態で進むのは恥ずかしかったが、これでアサヒに手を出そうとするバカも居なくなるだろう。今まで気が付かなかったが、そういうバカ共がいくらか居るらしい。まあ、日向宗家の跡取りであるし、輪廻眼を開眼し、さらには可愛いと来たものだからそういう手の者がいなかったこと自体がおかしかったのだろう。とりあえずここまで来る時に里の奴らに見せつけてきたし、アサヒの首筋やその他色々な場所に俺のものだという刻印をしてきている。これで馬鹿どもは何とかなるだろうし、それにアサヒと俺の婚儀に反対している日向の者もこの噂が広まれば認めざるを得ないだろう。

「どうすんのや。これから任務なんやで」

「心配するな。どうせ遠距離だし、今回は四人だから俺の口寄せが使える」

前は六人だったから口寄せ動物に乗る事が出来なかったが、今回は人数が少ないから問題ない。それに乗るだけなら俺が支えておけば良いだけだから、アサヒもいくらか楽なはずだ。

「口寄せの術」

大型の鷲を口寄せしてその背中に四人で乗る。その際にもアサヒを抱えたままで乗り、全員が背に乗った所で飛び上がる。幸いにも天気が良いし、空の旅を楽しむ事が出来るだろう。

「タクマ、あーん／＼／」

可愛すぎます。あんなに激しく愛し合った後にたかが“あーん”

で恥ずかしがるアサヒ。しかもその手に持っているものがヤヨイ製のパンじゃないし、アサヒ作のジャムでもない。それをありがたく頂いてから、俺達は互いに朝食を食べさせあった。ちなみに朝食はアサヒが急ごしらえで作ってきたおにぎりとお茶。お茶は封印の巻物に入れていたので熱いままだ。そんな事に巻物を使うとか何と言う無駄使いかと思うが、巻物を買ってきてそこに筆で封印の術式を書いて行くだけなので労力的にはそこまで問題じゃない。

「ご飯粒付いてる……（パクッ）」

付いている、というよりもアサヒが食べてくれることを狙って付けてみたのだが、案の定直に食べてくれた。何て言うか幸せすぎる。

「アサヒ、食後にデザートとかある？」

「えっと……持ってきたっていうか、その……。ん！」

突き出されたアサヒの唇に自分のものを合わせて甘い唾液を貪る。しっかりとこちらの唾液もアサヒの中に送りながら、そして一滴もこぼさないように飲み干し、漸く口を離す。

「……これで良い？」

「……もっと欲しいな」

アサヒの耳たぶを噛みながらそう告げる。昨日のアレでアサヒの耳が性感体である事は確認済みだ。何で今まで気が付かなかったのかと過去の自分を叱りたくなるが、今となっては仕方のないことだ。これから先で、アサヒの弱点を使っていくしかない。

「ひゃうっ！　み、耳はダメッ！！　もう……ばかつ」

「グフ！！」

いや、別にザクと違うとかそういうことじゃない。ただ単にアサヒの今の言葉に付属されていた涙目上目使いのコンボがやばかっただけだ。破壊力と言えばペインが木の葉の里を壊滅させた時の神羅天征くらいだろう。というか、これさえあれば無限月読とか使わなくてもアサヒの可愛さだけで人類を幻術にかけられるような気がする。まあ、冗談だが。それにしても今のはやばかった……思わず一瞬意識が飛んでいた。

第二十三話 デレ（後書き）

少し忙しくなってきたので、もしかしたらストックが無くなり次第、一日ずつの更新ができなくなるかもしれません。そうになったら一週間に一度のペースは最低限守るように努力したいと思います。

次の小説について、近況報告

アンチが難しいです。

なのはが前の記憶を持っているが、主人公が管理局と関わらないようにするのに、なのはは六課のメンバーを見捨てたくない。

その部分のせめぎ合いが難しすぎる……。

感想の返信のときに『ひたすら可愛いなのはを目指す』と書きましたが、もしかしたら普通のラブコメみたいになってしまい、なのはとの恋愛シーンが少ないかもしれません。

ご容赦ください……。

第二十四話 チート化（前書き）

ようやく主人公がチートを通り越しました。

あとこれを含めないで四話、二十八話目でNARUTOが終わります。

第二十四話 チート化

大蛇丸のアジトを搜索し終えてから再び口寄せ動物に乗り、国境警備へと向かうことになった。アジトには特に目ぼしいものなど無く、ただの収容施設であつたので、そこにいた人たちを開放してから俺達はそこを後にした訳だ。そしてその後もひたすらイチヤイチヤしていた訳だが、こんなに幸せを満喫して良いのかと思う。ついでにこの機会でアサヒには彼女がなのはの魂を持った、つまりは前世でも俺と恋人関係にあつたことを伝えたが、さほど驚かれなかった。というか、前世があつたなら前世でも、来世があるなら来世でも、と嬉しい事を言ってくれた。

ほぼ毎日のようにスキニップを繰り返しているので、俺がアサヒの身体の中で触れていない個所は無いんじゃないかと思えるほどだ。とりあえずは雲との緊張状態が溶けたらゆっくりできると思うので、その時に色々と考えようかと思う。何を考えるのかと言えば、それはもちろん今後の事についてだ。

結婚はもちろんだが子供を作るのか否かという事も決めねばならない。金も良い具合に貯まっているので、マイホーム(?)を買う事も出来る。が、問題は今から子供が産まれるとしても、出産時期がペイン襲来の時期と被るのではないかということだ。ヤヨイが七尾の人柱力、ナルトが九尾の人柱力である以上は木の葉の里に攻め込んでくるだろうが、七尾もいる以上は時期が変動するかもしれない。それに、その要因がなくとも、正確にペインが何時攻め込んでくるのかは覚えていない。自来也が死んだら、というのは確かだが、果たしてむげに見殺しにしても良いものか。それに、我愛羅に宿る一尾を渡すつもりも毛頭ない。砂を自在に操る事が出来る能力が消える訳ではないが、チャクラがあると無いとでは大きく違ってくる。

それに万が一尾獣を持ちだされた時にも、自来也や一尾ありの我愛羅はいた方がよい。一、七、八、九が確保できていても、二、三、四、五、六はマダラの手に渡るのだから、戦力的にはこれで漸く互角だ。だから、という訳ではないが、雲とはなるべく戦争をしたくない。二尾、八尾を誤って殺してしまったらどうなるのかが分からないからだ。流石に俺達も尾獣を相手に殺さずに倒すというのは無理だ。殺しても良いならヤヨイの幻術やアサヒの引力で足止めた所を俺が三遁の術で持って撃ち込めばそれで事足りるだろう。一度チャクラを全力で込めてみたら、演習場が消し飛んだから間違いない。まあ、そのおかげで三遁の術もチャクラの練り具合によって実用的に活用する事が出来るというのが分かったから、良い事にしたが、多分消し飛んだ演習場の木々はヤマトが木遁忍術で何とかしてくれたのだろう。

「んー♪」

それにしてもそんな事がどうでも良くなってくるぐらいにアサヒが可愛い。さっきから頬を俺の胸にすりつけて匂い付けをするようにしている。小動物のような可愛らしさが、俺を参らせる。ノックアウト状態を通り越して、既に中毒状態だ。時折耳をいじると嬌声が混じるからそれを聞きたくて止められない。初回はKOされたが、嬌声をあげる時の目が俺の雄の部分を高ぶらせる。……というか息子が起き上がる。確実に気付かれているだろうが、俺はそれを隠すようにひたすらアサヒをいじる。そのたびに色々な声を出してアサヒが反応してくれるから止められない、止まらないだ。

「ん？ ……着いたのか」

急激にスピードが落ちたと思ったら降下し始めた。どうやら人の

気配を察知して自分で判断したらしい。かなり優秀な口寄せ動物だ
と思う。羽ばたきによって風遁と雷遁を使えるし、四人乗せると遅
くなるが、一人の時なら走るよりも早い。

「ありがたいな」

礼を言うと、一声鳴いて応えてから煙を残して戻って行った。毎
回のように思うが、何で口寄せは煙が出るのだろうか。全く意味が
無いと思うし、その原理も良く分からない。同じ時空間忍術にして
も、カカシの万華鏡の能力とかは煙が出ないのに。そういえば、飛
雷神は時空間忍術なのだろうか。あれは雷遁と風遁の組み合わせ――
天遁の性質変化だから時空間ではないと思うが……。まあ、細か
いことは気にしたら負けなのだろう。

「ほな任務開始や。ワイらの担当はこれから東に100メートル行
った所や。名目は演習っちゅうことになってるから各自分かれて修
行やな」

修行と言われてもやるべきことは殆ど終えている。雷遁の性質変
化を加えた螺旋丸も成功した。まあ、あれは電気性質を帯びた螺旋
丸が静電気力によって相手に引き寄せられるように当たるだけだか
らあまり使えない。普通に当てた方が早いし、術の割に合わないチ
ャクラが消費される。

今開発というか練習しているのは三通自体を形態変化させることだ。
三通の特性は消滅。触れたものを消し去るのが特徴だ。だから、範
圀の広い今のままだと、対人には使えない。それこそ対尾獣ようだ。
三通を身体に纏って絶対防御とかもやってみたが、十分しか持た
なかったし、他の術が平行して使えないからそれも実用性が無い。

「やっぱ螺旋丸と組み合わせるか」

そんなことをしたらとんでも忍術が出来上がりそうな気がするが、果たして成功するだろうか。まあ、時間はたっぷりあるだろうし、最近では三通を使えるようになった影響か、チャクラ量が半端じゃない。それこそ、今のナルト——九尾のチャクラを含めた状態で——よりも多いかもしれない。人柱力でもないのに、それよりも多いとか、それなんてチート、とか思ったがまあ、俺だから仕方がない。

「ハッ！」

……。

とりあえずいつもの螺旋丸に三通のチャクラを組み合わせてみたが……一瞬にして反発した。とっさに反応したアサヒが引力で引っ張ってくれなかったら木にぶつかっていたかもしれない。というか、アサヒが受け止めてくれた場所がお約束通りに胸だったのが嬉しいかった。まあ、そこまで大きくは——いや、あえて言うなら小さいんだけど。それよりも、この術は反発するとなると、それを抑え込む役も必要になってくるかもしれない。

「右を見ながら左を見ろ……か」

まさしくその言葉が当てはまる。ということはつまり、影分身を抑え込む役として一体作りだせば出来るかもしれないが、完成するのに相当の時間がかかるだろう。まあ、そんな時の為の影分身の術なのだろうが。……頑張るとしよう。

——多重影分身の術

そういえば影分身を作る時と消す時も煙が出る。これも口寄せの時と同じ原理なのだろうか。まあ、そんなことを気にするよりも術の習得に励んだ方が良さだろうか。

「はは……」

完成した術を見て――そしてその威力を目の当たりにして、思わず乾いた笑いが漏れる。いや、この言い方はおかしいかもしれない。乾いた笑いしか出ない、この方が正しいだろう。この術に名前を付けるなら“三遁・黒螺旋丸”だろうか。ルビはブラックホールとしても良いかもしれない。黒い球体に触れたもの全てを消滅させ、いや、跡形もなく消しさる。それこそチャクラでさえも消してしまった。最早、主人公の最終奥義というよりも、悪役が最後に放つ技だと言われた方が納得がいく。

というか、何よりも雲隠れの里との戦争を回避する事が出来て本当に良かった。あんな術をぶっつけ本番で使っていたら敵どころではなく、味方の殆どもやられてしまうだろう。本当に三代目には感謝だ。三代目の尽力のおかげで戦争が回避できたらしい。本人は素直に隠居したいらしいが、マダラが出てくるとなってはそうは問屋が卸さないだろう。本当に歴代の火影の中で最強なら初代よりも強

いということなのだから、マダラにもぜひとも買っていたきたい。そして出来ればこんな術に頼らなくても良いようにしたい。というか、この術なら確実にマダラを消せるだろう。幻影だろうと何だろうと関係ないような気がする。実際、ヤヨイに手伝ってもらった実験で黒炎も消してしまったのだから。土影が使う塵遁の術は立方体のブロックを転がして敵を押し潰し、対象者とブロックを分子レベルまで分解するそうだが、俺のこの術の場合は、飛雷神や電光石火、疾風迅雷などと組み合わせれば不可避の必殺攻撃になる。文字通り、必ず殺す技だ。漫画のように必殺技とかつこよく叫ぶそれではない。当たれば終わり。そして疾風迅雷などと組み合わせたら不可避。最早無敵だ。

だが、それでもアサヒには勝てないだろう。この任務の間の修行で俺のスピードに眼で付いて来れるようになったし、回天の威力も上がってノーマルの螺旋丸を打ち破れるどころか、術者ごと弾き飛ばすような威力になった。日向のものとしては完成形だろうし、その上に輪廻眼がある。死体を使っていない能力を分けてしまえば、視覚を共有できる訳だから、この世界ではアサヒこそが最強だろう。そしてヤヨイこそが無敵だ。七尾の人柱力の影響でチャクラが多いからなのか、“月読”の発動までに時間がかからないし、連発できる。“八咫鳥”は黒炎を発動させてなおかつそれを操る能力だし、二つの万華鏡の能力を開眼させてもう一つ得た能力の、“高天原”たかまがはらは術者を中心として絶対領域を発動させる術だ。

イタチやサスケのように“須佐能乎”すさのおが瞳に宿るものだと思っていたら、転生者だということからなのか、それとも純粹にチャクラの多さが為せる技なのか、“高天原”の絶対領域は術者であるヤヨイに対して一切の忍・体・幻術が通じない。しかもヤヨイは敵に自由に攻撃を加えられるんだからチートすぎる。それこそ回避するためには喰らわ無いという方法しかない。時空間忍術で出ようとした

ら中に戻ってきたし、俺の黒螺旋丸でも、領域を消し去ることが出来なかった。まあ、チートすぎる変わりなのか、その術を使う為にはヤヨイの八割のチャクラが持つて行かれるみたいだが。それでも、そのチャクラ量に見合うだけの効果範囲だ。ヤヨイを中心として半径1キロが全て含まれる。しかも、発動した瞬間に範囲を決定するから、ヤヨイが発動させたら終わりだ。

最強のアサヒと無敵のヤヨイ、どちらが強いのかと言われれば返答に困るが、時と場合によるだろう。ちなみに、三番目に漸く俺が来て、その後にセツナか或いは五影の誰か、暁の誰かが来るのだろう。尾獣と俺のどちらが強いのかと言われれば返答これまた困る事になる。大抵の尾獣には黒螺旋丸を当てれば終わるだろうが、九尾だと分らない。チャクラだけでアサヒの斥力のように弾き飛ばされるかもしれない。まあ、それ以外にだったら大体は勝てるだろう。今の俺は八尾までだったら尾獣よりもチャクラが多いし。

第二十四話 チート化（後書き）

終わりが方が酷いことは作者が受け合います（笑）

落胆させないように頑張りましたが、作者には全く才能がありませんので期待しないでください。

第二十五話 ようやく進展（前書き）

もはや展開がわけわからない

第二十五話　ようやく進展

「アサヒ様、おめでとうございます」

とりあえず、事は早い方が良いということで一年前から計画が練られていた俺とアサヒの婚儀を行った。日向宗家の跡取りが結婚するという事もあって今この場には木の葉の里の名家という名家の当主、及び跡取りが勢ぞろいしている。五代目、三代目も来ているし、木の葉の里の主要な人物が一堂に介している。上忍もちらほらと見かけるが殆どがアサヒに声をかけて、俺の方には見向きもしていない。まあ、しょうがないのかもしれない。日向を継ぐのはアサヒだし、今から名家にパイプを作っておきたいという者ばかりなのだろう。

「ではこれにて終了とする」

ヒアシ様の号が飛び、日向の道場に集まっていたものがどんどんと消えて行く。残るのは日向の者でも、ヒアシ様、ハナビ、ヒナタ、ネジ、ヒザシ様だけだ。この後からヤヨイ、セツナなど内輪だけのお祝いとなっている。俺としては祝われなくても良いから、早くアサヒと二人きりにして貰いたい所なのだが……まあ、そうもいかないのだろう。ヒアシ様としては俺にアサヒを取られる訳だからさびしい気持ちもあったのだろう。その為に最後の別れというところだろうか。……これから何回か、というか何度も帰ってくる事になるのに。

「兄様……いえ、義兄様と呼んだ方が良いでしょうか？」

「いや、今まで通りで良いと思うぞハナビ」

「では兄様、おめでとうございます」

「……俺、今日初めておめでとうって言われたよ」

何だか泣けてくる。アサヒは言ってくれないのはしょうがないけど、来る人来る人皆がアサヒに挨拶だけして帰るものだから、隣にいる俺は暇で暇で仕方がなかった。婚儀の場だというのに、カカシに貰ったイチャイチャシリーズを読破してしまおうかと思うくらいに。

「それは……可哀そうですね。それよりも兄様、アサヒ姉様のお腹が大きくなってるのって」

「ん？ 子供だけど？」

だってアサヒが欲しいって言うから任務そっちのけで頑張ったのだ。警備している間にアサヒが自分の体内を逐一白眼で確認していたのは何だか可笑しかったが。

「そうですか！ それはおめでとうございます！！」

「ってちよっと待たんかア！ 私は聞いてないぞ！？」

「あ、父上に言うのを忘れていました」

いや、アサヒ……それは可哀そうだって。ハナビは小さいから言わなかったのかもしれないけど、父親にはまず最初に報告しなきゃダメでしょ。

「タクマ貴様ア！ ……大切にしろよ」

いや、だから家はあるけどアサヒが宗家を継いだら戻ってくるんだから何で今生の別れみたいになってるんだよ。しかも時期が時期だから子供の面倒はヒアシ様とハナビに見てもらおう予定なのに。流石にアサヒ抜きで暁と全面戦争をやる訳にはいかない。それに、ペインが木の葉に攻め込んできた時には日向の家を全面的に守る予定だ。そうでなければ子供の事が心配だからな。

「分かっていますよ……」

ナルトが里を出てから一年半。後半年もすれば暁が動き始める。俺とアサヒの子供が産まれるのが丁度その位だから、子供が産まれたらすぐに砂に向かう体勢を整えておこう。流星に木の葉からでは砂に到着するまでの間で時間がかかりすぎる。それだったらあらかじめ国交や他の手を使って俺が砂に行くのが良い。デイダラと我愛羅の戦闘は空中戦だから、それに対応できるのは俺だけだ。アサヒのそばについていてやりたいのはもちろんだが、俺しか空中戦を出来ないからしょうがない。それにそういう事もありえることは二人とも分かっていた事だ。

「ナルトが帰ってきたか……」

砂に向かう事三日目、漸く砂隠れの里に到着した所で火影の部屋に配置しておいた影分身が消えて、ナルトの里帰りを知らせた。砂の里の警備も強化してあるから、上手く行けば今日にも暁が襲来してくるだろう。

そういえば赤ん坊は女の子だった。双子でもなかったから、分家の刻印を押される事もない。それにアサヒと話しあって子供は一人だけにするにしている。宗家だとか分家だとかのしがらみを負わせたくない。ちなみに名前はユウヒと名付けた。太陽に関係した名前をと考えて、朝日だから夕日と名付けた。俺の名前から一文字も取っていないのは気にはしていない。日向の子供は太陽にちなんだ名前が付けられるのが決まりみたいだからしょうがないのだ。

「というか来るなら早く来いよ……早く帰りたいんだから」

帰って、アサヒとユウヒに会いたい。そういえばユウヒは生まれながらにして相当の才能を持っている。伝説の三人の再来と言われ、木の葉の黒い稲妻、日向の寵児の子供なのだから当たり前だとする雰囲気は木の葉にはあるが、正直俺としてはそこまで才能がなくても良い。健やかに育ってさえくれれば良いというのは、親故の考えなのだろう。だが、俺とアサヒのネームバリューから逃れる事も出来ないし、それにユウヒ自身も才能は計り知れないからしょうが無いかもしれない。チャクラは既に中忍レベルだし、生まれながらに白眼を発動させていた。これでは期待しない方がおかしいというのも、一理ある。が、親としてはそんな才能とかよりも、ただただ可愛いだけだ。

ヒアシ様も、初孫ということで張り切って可愛がっている。時々、ハナビの修行をそっちのけでユウヒに構っていたりする。しかも、隠居したとばかりに三代目までが日向宗家に来てユウヒの世話をかいがいしくしていたりする。それだけではない。現役であるはずの五代目までが仕事そっちのけで来ていたりする。やはり、子供がかわいいのとは皆一緒なのだろう。だが、親ばか抜きにしてもユウヒは可愛すぎる。それは三代目や五代目が来る事からも分かるが、何と言っても笑った時の顔が最早人間のものではない。まるで天使でも見ているかのような気にさせてくれる。そして……！

「……上に何かいるな」

あれは……デイダラか。この里でそんな鳥は俺以外には持っていないだろうし、俺が術を発動させるのは、我愛羅かカンクロウの許可がなければやらない事になっている。我愛羅はすぐに迎撃に向かうだろうから、とりあえずカンクロウを探した方が良さかもしれない。空中戦と言っても何を使おうか。口寄せして大型の鷹に乗っても良いが……久しぶりにあれを使うか。

「来たか。遅いぞ、カンクロウ」

「な、タクマじゃん。こんな所にいたのかよ」

「許可をくれないか。風影の援護に向かう。この里で空中戦が出来る奴は多く無いだろう」

「必要ねえじゃん。我愛羅は風影だからな」

その油断が命取りになるだけだな。我愛羅は里を守る為にチャクラを大量に使うから後でへばる事になるし、デイダラの能力はこ

れだけじゃない。一応飛雷神を使えるようにクナイは投げられるようにしておこう。

——ボンッ！

「我愛羅！！」

あれはなんとも無いだろ。自動防御があるんだし。それにそんなに心配なら俺が行くって言うのに……って！ 忘れてた！

「カンクロウ、里の周辺を探索しろ。いくら暁でも一人で来る訳がない。仲間がいるはずだ」

「！ わかったじゃん。暗部を派遣するじゃん！」

相手は赤砂のサソリだが、数十分なら持つだろう。それだけ持つてくれれば後は俺が何とか出来る。流石に毒については喰らったら俺でもどうしようもないが、バックアップとしてサクラが来るはずだから、安心して大丈夫だろう。

「口寄せ・両生の術」

これを使うのはヤヨイが人柱力になった時以来だ。鬼鮫相手に使っているから暁には知られているだろう。そしてもしも知られているのならば俺が油断のならない相手だという事も分かっているはず。

「つと……腕を潰したか」

ならばそろそろ終幕のはずだ。この先にデイダラが里を破壊しようとしてそれを我愛羅が防御、その隙をつかれるはずだ。

「我愛羅」

「……何の用だ」

「援護に来た。暁なら二人行動をしている。砂の里にもう一人が入り込んでいるはずだ。こいつを早めに潰してもう一人の対処に向かいたい」

「……分かった」

「また変なのが増えた、うん。あれは鬼鯨が言ってた要注意人物だな……これはそろそろ本気でやばいな、うん」

時間がないし、本気で行った方が良さだろう。それにこれからサソリとやるならチャクラは温存しておきたい。自爆だけはさせないように捕縛するのか……ヤヨイがいたら簡単なんだけどな。

「おいらの十八番だ、うん」

「ちっ！ 我愛羅、里を！」

任せておけば問題ないだろう。ガードは我愛羅がしてくれる。俺は追撃を出来るようにしておけば良い。自爆をさせないように捕縛するのか……面倒だな。

「はい、射程圏。喝！」

「雷遁・千鳥千本！ ……間に合ったな」

これで連続攻撃の細かい爆弾も使えなくなった。残っているのはデイダラ自身が乗っている鳥だけだ。それに我愛羅の砂にも雷遁を撃ち込んでおいたからそちらも爆発しないだろう。

「残念。おいらの作戦は二段構え何だな、うん。喝！……あら？」

「残念なのはお前の方だな。我愛羅のオートガードの砂にも俺の雷遁を撃ち込んである。もうお前に手は残されていない」

「そうみたいだ、うん。ここは逃げさせてもらう」

「そうさせると思うか？ 飛雷神の術！」

とりあえず飛んでからデイダラを我愛羅の方に投げ飛ばしておく。捕縛はその方が良いだろう。俺は捕まえるよりも倒したり殺したりする方が専門だからな。

「あと一人か……我愛羅、そいつは頼んだぞ」

そっちの方が大変なんだが……まあ、何とかなるだろう。

「カンクロウ、発見したか？」

「いや、未だじゃん。報告は上がってきて無い」

「里の外だ。その内のどこから侵入した「報告」！ 暁の一人を発見しました！」やっとか

「良し。三部隊、私について来い！」

確かこの人は……我愛羅達が下忍だった時の担当上忍の人だったはずだ。風遁を得意として居るはずだな。だが例え暗部が向かったとしても邪魔なだけだな。我愛羅のチャクラが普通の状態だったら手伝ってもらうんだが、カンクロウでは俺の援護を出来るかどうか……。まあ居ないよりは居る方が楽かもしれないが。とりあえず両生の術は解いておくか。赤砂のサソリ相手にはスピードでかく乱するしかないからな。毒を喰らいたくはないし。まあ、手は打ってあるからどうにかなるだろう。

「おいおい……」

到着してみたらそこに広がっていたのは夥しい死体の数々。これを一人でやったのかと思うと流石暁だと思うが、それ以上に、予想していたにも関わらず、これだけの現状を見せつけられると気が引けてしまう。まあ、そんなことを言っている暇もないし、そんな風に油断もしていられないようだ。砂の上忍班長が連れてきた暗部の三部隊もすぐにやられてしまうだろう。それにカンクロウのカラクリも全く役には立たない。あれはサソリが作ったものだ。せめてチヨ婆様を呼んで欲しいが、それも対峙している相手がサソリだと分かるまで動いてくれないだろう。

「鬼鮫とイタチの言ってた奴か……」

「そういうあんたは誰だ？ 奇妙な身体をしてるけど」

「赤砂のサソリ……その三体の傀儡の製作者だ」

瞬間、まだ意識が残っていた砂の忍に衝撃が走る。一番驚いているのはカンクロウだろう。傀儡部隊の造形師とまで謳われた赤砂のサソリという名がそれだけの意義を持っているのだろう。木の葉が大蛇丸に対して追い忍を差し向けられなかったように、砂もサソリに対しては同じだったのだろう。だが、こちらとしてはサソリが自分で名乗ってくれたのはありがたい。これで砂の忍が相談役呼びに動いてくれるだろうし、何より……っでもう既に来てるし。流石にサソリの事を知っていた忍がいたのだろう。後は砂の忍に任せれば何とかしてくれるといいのだが。もしもの時は俺も出た方が良いな。かと言って黒螺旋丸で消滅させてしまうのも……仕方ないのか？

と言っても流石に暁の一員だけはあるな……。組織した暗部が瞬く間に傀儡の尾の部分で叩きのめされていく。流石に毒を喰らうようなものは少ないが、サソリ相手では何分持つものか……。

そういえば木の葉に要請したスペシャリスト部隊は……って我愛羅が連れ去られて無いから要請して無いのか？ だとしたらそれはそれで困るが……まあ、俺が要請はしてあるから大丈夫だろう。それにしてもカカシ班が来るのか、それともセツナ班が来るのか。いや、後者は無いか。アサヒが里から離れられない以上は。それにヤヨイの事を里外に出すのはあまり得策ではない。万華鏡を開眼している以上は他国や他里の忍が眼を奪い取ろうと多数襲いかかってくるかもしれない。いくらヤヨイとセツナが二人で行動していると言っても、体力とチャクラに限界が来たら終わりだ。俺達が四人で行

動するなら暁が相手だったとしても全く問題は無いが。だとしたらやはりカカシ班が来るのだろう。ナルトも帰ってきたし、四人一組で行動できる。サスケも上忍に昇格しているし、チームとしては医療忍者のサクラもいるから全く問題ない。それに、この半年ほどは俺がサスケを鍛えているから今ではカカシと同等位の実力を持っているし、原作でイタチと戦った時よりも強いだろう。まあ俺が教えたのは雷遁の形態変化だから、瞳術で言えばカカシ程度でしか無いかもしれない。まあ、それはイタチを倒した後で眼を移植すれば大丈夫だろう。

それよりも、というか今思い出したが、自来也が死ななかったらナルトは仙術を習得しないのだろうか。それは困るが、どちらにしてもナルトには仙術をマスターして九尾を完全に制御してもらいううにならなければ、ナルトが狙われた時に対応できないし、何より俺達四人の内、誰もが火影なんて言う仕事が多いものをやりたくない。それは夢を持っているナルトにやってもらいたい。このまま行けば、一番可能性が高いのはセツナだから、ナルトを妙木山に放り込むかもしれないが、だとしたらますます自来也の事をどうしようかが問題になってくる。自来也の死はナルトを成長させる一代イベントだ。その過程を踏んでこそ、ナルトはペイント対峙した時に、一歩大きく成長するのだし、九尾となる直前に四代目と会うことになる。

「っと、大丈夫なのか？ 我愛羅」

「ああ……チヨ婆様か」

流石に人柱力であるだけはある。この分なら三代目風影の人傀儡が出てきても砂鉄に砂で対抗できるだろう。それにしても意外とサソリも暗部相手に苦戦しているものだ……いや、暗部が苦戦してい

るというのが正しいのか？ 何だか最近アサヒとしか戦ってなかったから強さの基準が分からない。それに仲間内でもセツナとかヤヨイだし、一番最近で敵として戦ったのも四代目……いや、その後に鬼鯨と戦ったか。

「我愛羅、俺も参戦して良いか？」

「ああ……頼む」

風影様に頼まれたとあつては流石にみているだけではまずいだろう。それにチヨ婆様の活躍もあつて既に三代目風影の人傀儡が出てきている。自分の体を使っている訳ではないが、使われる前にこの段階で何とかしてしまつた方が良さだろう。それにデイダラは既に捕えてあるからサソリの方は消してしまつても問題ないか。

「砂の、俺も援護させてもらう」

「くそ、チヨ婆に時間をかけすぎたか！」

援護と言っても既に砂の忍で戦っているのは相談役一人だから、退いて貰うことにしなければならない。そんなに時間をかけたくないし、早く木の葉に戻ってアサヒとユウヒと触れ合いたい。砂に来ている理由は確か誰かの護衛で来ていた――いや、何かを届けに来たんだっけか？ まあとにかく任務は片付けたんだから、これが片付いたら俺は帰っても大丈夫だろう。

「砂の相談役、退いて貰えますか？ 後は俺一人でやるので」

「孫の相手はワシがしたかったんじゃないかのお」

「というか巻き込まれないようにしてください。当たると死ぬので」

長いのは面倒だ。それに今までずっと見ていたからサソリの大体の癖は分かっている。それにデイダラを確保してあるから尋問はそれで十分だ。サソリは消してしまっても構わないだろう。俺としては新術を試してみたいし。

「三遁の鎧」

身体に三遁のチャクラを纏わせる。他の術が使えなくなるが、短期決戦にはもってこいの術だ。これから先にすぐに戦闘がある訳ではないからチャクラの心配をする事もないし消してしまっても構わないなら俺はアサヒとヤヨイ相手以外なら遅れを取ることは無い。

「な、何と言うチャクラじゃ……」

「あれは当たったら不味いな」

最短距離を最速で駆ける。当たれば終わりだ。そして俺に触れるものは全てが消える。何も心配する必要もない。毒も効かないし、砂鉄も問題ない。

「三遁・雷声」

そのまま拳に三遁のチャクラを全て集約させて一気に爆発させる。雷遁の時と同じで驚異的な速度で突きが叩き込まれ、その個所が消滅する。サソリの本体の部分である、胸の部分を消したからもう動けないだろう。本当ならば拡散型の術で一気に決めたかったが、それをしてしまったら今後カンクロウがサソリの事を傀儡として使えなくなってしまうので仕方なく核の部分だけを消しておくことにし

た。

「終わりだな」

このセリフを言っても死亡フラグは立たないだろう。サソリは最早チャクラを結べないし、さらに言えば俺はお守りとしてアサヒとユウヒが映った写真を常に常備している。しかも、観賞用と保存用、それに予備が一個で計三個のお守りを持っている。

とりあえず、サソリとデイダラは終わったから木の葉に帰るとしよう。これから暁の活動も以前にまして活発になるかもしれない。一尾捕獲に失敗したばかりか、メンバーを二人も失ったのだから。だから、その前に十二分にアサヒ分とユウヒ分を補充しておかなければならない。

「じゃ、我愛羅。俺は帰るから」

急いで木の葉に向かうとしよう。ある程度近づいたら飛雷神の術が使えるはずだから、走れば三日の距離を一日で移動できる。なにせ口寄せが出来るんだから。……ああ、早く二人に会いたい！

第二十五話 ようやく進展（後書き）

かなり忙しくなってきたので、次のリリカルからは三日に一更新か、一週間に一更新になります。

読者の方には迷惑をかけてすみません。

第二十六話 小題なし（前書き）

今回すごい酷い出来です。

早く終わらせようとしたばかりにこうなりました。

第二十六話 小題なし

色々と、あった。

いや、これだけでは何を言っているのかが分からないかもしれない。順を追って説明して行こう。まずは、捕えていたはずのデイダラが分身だった。いつの間にか粘土分身を使っていたらしく、まんまと逃げられた。だが、応援として俺が木の葉に要請していたバツクアップチームがデイダラと会い、そのまま戦闘に発展、サスケとカカシの活躍もあってこれを仕留めたいらしい。だが、その影響で万華鏡を使ったカカシは動けなくなり、代わりにヤマトがカカシ班に配属されることになった。サスケが里抜けをしていない以上はダンゾウがサイをカカシ班に送り込むことはできないが、根の者、及びダンゾウは今のところはなんら怪しい動きを見せていない。

だがしかし、右目に写輪眼を宿している事と、腕に十個の写輪眼をこれまた宿し、さらには初代の細胞も埋め込んでいるようだ。中々ダンゾウが何も行動を起こさなかったし、それで居て原作とは全く違った展開になっているから、アサヒとヤヨイの二人が確認した。大蛇丸が既に死んでいることから、どうやら大蛇丸と接触したのは木の葉崩しの前だったようだ。これから先、どのように動くかは分からないが、おそらくは火影になる事が、そして九尾の力を手に入る事がダンゾウの中では最優先事項だろう。その目的を達成する為にカブトと手を結ぶかもしれないし、可能性は低いだろうが、マダラと手を結ぶかもしれない。だとしたら、その処理は俺達四人だけでは間に合わないの、サスケがやってくれるだろう。イタチの真実を知った以上は木の葉の上層部に怒りを抱いているし、三代目以外の奴らは殺したいほどだろう。だが、何がサスケを思い留まらせているのかは分からないが、サスケが上役を殺すことにはなっ

ていない。もしかしたら、サスケとサクラの仲が思った以上に良いからかもしれない。その影響としてなのか、それとも性格が全く変わっているからなのかは分からないが、ナルトとヒナタも良い感じだ。……まあ、ヒアシ様はアサヒに続いてヒナタまで手放す気は当分無いようだが。

そういえば、ナルトはデイダラとの戦闘の時にサスケの実力を目の当たりにして、良い感じに刺激を受けることになり、カカシに修行を頼んだ。だが、カカシは動けない身体であったので、それをセツナに任せ、今ではセツナがナルトに性質変化の修行を付けている。上手く行けば、妙木山に放り込んで仙術の修行を付けさせるかもしれない。まあ、ナルトの成長次第だろうが。

砂は風影の事を暁が狙っているという事が分かってから、里の防衛を今まで以上に固めている。風影には常にカンクロウとテマリが付き従い、護衛している。カンクロウは俺が核の部分だけを消し去ったサソリの傀儡を使っているから、これから修行を積みば暁とも戦闘出来るかもしれない。……まあ、無理だろうが。それよりも、暁が脱退した大蛇丸を含めて既に三人もメンバーを失っているから、動きが鈍くなっているようだ。あれから人柱力が襲われたという情報には聞かないし、砂にも木の葉にも攻め込んできていない。もしかしたら砂以外の隠れ里が木の葉に尾獣が奪われたということを言いたくないだけなのかもしれないが、まあ砂と木の葉が連携して暁の対策に当たっている以上は一尾と九尾が取られることは無いだろう。七尾はもちろん問題が全くないから、今のところ危惧しているのは暁が二手に分かれて砂と木の葉に攻め込んでくることだ。まあ、それも他の尾獣を引き剥がしてからということになるのだろうが。

今のところ、五影会談を開く予定は無い。木の葉が開いても雲と

土は来てくれないだろう。なんせ七尾も九尾も取られていないし、砂に協力して一尾を取らせていないのだから、今や木の葉に遅れをとらないようにと力を蓄えているに違いない。それに、暁の危険性を風影と火影が散々に他里に警告しているのに、全く聞く耳を持たない。このままではちが明かないということで、木の葉では七尾と九尾を取られないようにする方針に完全に切り替えた。他よりも自分。旧い時代の方針だが、木の葉と砂の言うことを聞く耳持たない以上は仕方ない。他の尾獣が取られてしまっても、七尾と九尾が取られなければ問題ない。

それよりも今は重大かつ重要なことがある。それは、ユウヒが初めて言葉を口にしたということだ！……“パパ”ではなくて“ママ”だったのが少しあれだが、まあ、話したという事が重要なのでそれほど問題ではない。……多分、うん、そうはずだ。その日の夜にアサヒをよがらせたのは別に羨ましかったからアサヒに八つ当たりした訳ではない。ただ単に俺がアサヒを可愛がってあげただけ。そう、そのはずだ。決してアサヒが得意げにしていたから苛めてみたとか、そういうことではない。

育児・介護休業法があるのかどうかは知らないが、五代目の取り計らいによって俺とアサヒは暫く任務から外れることを許された。というか、いつにもましてユウヒの顔を見に来ていた五代目に怪訝な目を向けていたら折れたように休息を与えてくれた。三代目とかは完全に暁の事を忘れてユウヒに構ったりしている。自分の孫とか子供を可愛がってやれよ、と思うのだが、それも仕方ない。全てはユウヒの可愛さが為せる技だ。見るもの全てを虜にし、離れようとする時に見せる悲しげな視線が引きとめさせる。将来は絶対に美人になる事間違いないし、というか今からユウヒが魔性の女性になるのではないかと危惧しているほどだ。まあ、とりあえず嫁には出さないけどな。ユウヒと付き合いたいなどという男がいたら、ヒアシ

様、三代目、俺の三人を同時に相手にして勝てるくらいじゃないと許さない。

「つと、そういえば明日だったか？」

砂から帰っていた時に、何の因果が働いたのか知らないが、イタチと鬼鯨のコンビに出会った。暁の中でも良くその二人に出会うが、何かの縁があるのだろうか。流石の俺も一人でその二人を相手にするのも面倒だったし、何よりサソリとの戦闘でチャクラを殆ど使いきってしまったので片方だけが相手でも危なかったのだ。まあ、そんなことはともかくその時にイタチが俺に幻術をかけて、サスケに対して伝言を頼まれた。一人でうちはのアジトに来るようにと。まさかこんなに早くにイタチとサスケが戦うとは思わなかったが、しかしそれも運命だったのかもしれない。その時にイタチにはサスケが真実を全て知っていることを伝えてある。世間的にはサスケがイタチを殺すことで英雄に仕立て上げられるだろうが、サスケとしては兄を越える為の、そして兄の意志を受け継ぐ為の勝負だ。それに介入することは許されないし、さらに言えばイタチの事だから、サスケを殺すことは無い。

サスケとイタチの戦闘に関して問題があるとすればマダラが最後に現れてサスケを連れて行くかとするかもしれない事だろう。それに関しては同行者として俺一人がサスケについて行くことになっているから心配は無いと思うが。万が一暁のメンバーが複数現れたとしても逃げるだけならば何とかなる。それに連絡用に影分身を一家においてあるから何とかなるだろう。今回の事は五代目にも言っていない。知っているのは三代目と俺達四人だけだ。五代目だけならば何とかなるかもしれないが、いたずらに情報を広めて相談役やダンゾウに伝わっても困る。写輪眼を回収されるなどあってはならない事だ。

「時間だ、行くぞサスケ」

イタチとの決戦の日、勝負の場へと向かうサスケはどことなく緊張していて、だがやる気に満ち溢れてもいる。まだ拭いきれない怯えも、怒りも、悲しみも、その身体には混ざって溢れかえっているが、勝負に支障はきたさないだろう。俺が心配するのはこの後のマダラが何かをしてこないかということだ。イタチ自身にもサスケをマダラに近づけないように頼まれた。俺が三代目と繋がり持っている事も知っているし、その上での事なのだろうが……まさかイタチがそんなことを俺に頼むとは思いもしなかった。まあ里よりも弟を選んだイタチだから当然の事なのかもしれないが。

「……始まった」

二人の戦闘の影響で大気が震えている。チャクラで構成された術の打ち合いが始まったらしい。既に幻術の掛け合いは終わったのだろう。少し離れた場所なのに、戦闘の影響がここまで来ている。うちは一族らしく、火遁の術が応酬している。だがしかし、長い時間をかけずに勝負の決着は付くだろう。イタチの体は病に冒されているし、それを酷使してまで使う須佐能乎は細胞に負担がかかりすぎ

る。ましてや失明しかかっている眼だ。満身創痍のイタチではサスケには勝てないし、イタチも勝とうとしない。この勝負はイタチがサスケに力を授ける為のものだ。俺もそろそろ準備を始めた方が良くかもしれない。

「口寄せの術。影分身の術」

口寄せしたその背中に影分身を乗せる。サスケが麒麟を使うつもりならそれよりも上空で待機させなければならない。すぐにでもサスケを引き取れるように飛雷神の術も準備しておこう。暁の一人――確かゼツとか言う人物が地中を勧めたはずだし、何よりマダラが時空間忍術で移動できる。サスケを持っていけたらペインを倒した時に外道魔像とリンクさせる駒にさせられるかもしれない。そんな事になれば月の眼計画が進行させられる。それだけは避けなければならぬ。イタチとの盟約を破るのは好かなかったから、一人で来ている。この状態で暁複数を相手にするのは得策ではない。

何より俺もサスケも帰りを待っているものがある。その為に無事に帰らなければならない。……何やら少年漫画やそれに類したアニメのような展開になっているが、それも俺の選んだ道なのだろうか。……気にしないでおう。元々少年漫画なのだから。

結局、サスケはイタチに勝利して、万華鏡を手に入れた。決着が付いた後にマダラ他暁が現れたが、飛雷神でとんずらする直前に三遁の術を放っておいたから、上手く行っていれば何人かにダメージを与える事が出来ただろう。それにしても、思っていた以上の人数でサスケを捕まえに来た所を見ると、相当に追い詰められているらしい。いや、もしかしたら俺達四人に対する評価が思っている以上に高いのかもしれない。流石に鬼鮫と二回戦闘をしているし、サソリを一撃で屠るのはやりすぎだったかもしれない。こちらの予想以上に俺の事を警戒しているみたいだ。

イタチの遺体もマダラに持って行かれないように俺が連れて帰った。イタチ本人の意向であつたし、サスケもそれを望むみたいだからいずれはイタチの眼をサスケに移植するつもりだ。が、数日はサスケも使い物にならないだろう。気持ちの決着が付くまでは何もできないだろうし、自分の肉親を自分の手にかけて訳だから、そして何よりもこれで一族の敵を討った英雄として持て囃される事になる。それに耐えるだけの気持ちをしっかりと固めないといずれは崩れる。そしてその隙をマダラに狙われでもしたらついて行くことになるかもしれない。

が、何にしてもこれで残っている事もペインの木の葉の里襲来、そして暁と忍連合軍の第四次忍界対戦だけだ。まあ、この通りに事が運ばないかもしれないが、それならばそれで往々にして対応するだけだ。こちらには、というよりも木の葉には過剰と言えるほどの戦力が集中している。輪廻眼に、万華鏡写輪眼が三人、人柱力が二人に、仙人、そして俺だ。三代目も存命だし、同盟国である砂の風影も人柱力のままだ。残りの尾獣が暁に取られたとしても十分に迎え撃てる。

第二十六話 小題なし（後書き）

気が付けばもう全部で五十話近く更新していました。
自分では二か月ちょっとでかなり頑張ったと思います。
……内容はともかくとして。

第二十七話 五影会談

ヤヨイが各地に放っている虫たちの情報によれば、尾獣が着々と暁に回収されているらしい。いや、らしいというのは少し語弊があるかもしれない。現に殆どの尾獣が狩られている。現時点で残っているのは砂の一尾に、雲の八尾、木の葉の七、九尾だ。さらに言えば、アスマが暁との戦いで命を落とし、自来也がペインとの戦いで命を落としたから、もうすぐしたらペインが木の葉に襲撃しに来る。だが、九尾は最後に封印しなければいけないから、もしかしたら一尾と八尾を先に捕獲してからペインが木の葉に攻め込んでくるのかもしれない。そう考えて、俺達四人は砂の里に来ている。ナルトはセツナが妙木山に送ったから今頃は仙術の修行をしているだろう。サスケもイタチの眼を移植して永遠の万華鏡写輪眼を手に入れた。例え木の葉に攻め込んできたとしても何とかなるだろう。三代目もいることだし。

暁で残っているメンバーはペイン、小南、デイダラ、鬼鮫、ゼツ、マダラの六人だ。いや、ペインは全部で七人だから十二人というのが正しいのかもしれないが。どちらにしても大分メンバーが減っているから暁としても手段は選んでいられないだろう。マダラが予想していた道筋とも大分違った軌道を描いているはずだ。

俺とアサヒと一緒に砂に行くということで、ユウヒももちろん連れてきている。ヒアシ様や三代目が頑張って引きとめようとしていたが、アサヒが物理的に黙らせた。それはもちろん二人ともユウヒの事を心配しての事であることは分かっているのだが、俺達としても離れるのが嫌だったので連れてきてしまった。砂漠越えを赤ん坊に強要するなど正気の沙汰だと言われたが、なんら問題は無い。口寄せして空を飛んできたし、その為にセツナとヤヨイには砂漠を走

ってきてもらった。ヤヨイだけでも乗せてあげようとしたのだが、本人がセツナと一緒に行きたいと言うのでそうさせてやった。なんとも素晴らし愛だと感激したものだ。

「ほーら、ユウヒ、おいでー」

「うあー、だー！」

何と言っているのかは分からないが、とりあえず笑っているから良しとする。自然環境の厳しい砂でも、今居る場所はなんら不便ではない。セツナが唯一使える土遁の術で地下室を作り、そこに水遁で水を整備させて、火力はヤヨイが火遁を、俺が氷遁でクーラーのようなものを作り、最早売り物に出してもおかしくないような豪華な家になっている。砂の中心から少し離れた所に作ったが、もちろん暁が攻めてきた時には連絡が来るようになってるし、食事も風影から良いものが送られてきている。

というか、砂でもユウヒの凄さを目の当たりにした。砂に到着したその日に風影、テマリを陥落、その次の日に俺にお礼を言いに来たチヨ婆様を陥落した。もはやこの家も次第に風影の執務室と変化しつつある。というか、我愛羅が一瞬で落ちたのには流石の俺も驚いた。テマリやチヨ婆はそうなるだろうと思っていたが、まさか我愛羅までとは……。ちなみに、カンクロウは顔に変な装飾を施すだけあって流石のユウヒも怖がってしまったので近づけていない。

暁が暗躍しているこの情勢下にあって人柱力よりもガードが堅固なユウヒ。俺達四人をはじめとして、木の葉では日向一族、そして五影の内二人を、さらには三代目を含めたら三人もの五影がガードについている。ユウヒに手を出したものは間違はなくこの世から抹殺される。俺達四人だけでも最強のチームなのに、ともすれば忍五

大国の内の二カ国が動く。溺愛どころか宝のように扱われているからなら心配することは無いが、やはり心配なものは心配だ。何が、と言えはこの状況こそにある。木の葉の黒い稲妻と日向の寵児の娘だから、ということとで相当の期待をかけられているのだが、それに見合うように成長が早すぎる。一歳半の今にして二本足で立っていることはもちろん、何故かは知らないが既にチャクラコントロールをしている。先日布団を回天で弾き飛ばして遊んでいたのは記憶に新しい。それだけではない。その前の日はきゃっきゃと手を叩いて遊んでいたのかと思ったら風遁・烈風掌を使っていた。どうやら俺が使っていたのを見てコピーしたようだ。そしてその前日にはよだれを口から出しているのかと思ったら、濡れている原因は水遁だった。

最早間違いない事だが、ユウヒは確実に俺の資質を受け継いで三遁を使える。もう何が起こっても驚かないと思っていたが、流石に昨日ユウヒが輪廻眼を使っていたのを見た時にはアサヒ以外が数分間固まったままだった。アサヒはユウヒの眼を見て「流石私の娘」などと喜んでいたが、それは全く理由になっていないと思う。というか何が伝説上の眼なのだろうか。何の原因があって眼を持つことになったのかは分からないが、あまりにも簡単に出てきすぎだ。一挙に三人もの人物が輪廻眼を持つことになるなどは、俺も全くの想定外だった。というか、これでユウヒもマダラに狙われることになった。まあ、ユウヒのガードはこの世界で一番堅いが。

さらに、今日からはユウヒも修行をしている。どうせ狙われるなら今の内から修行をしておこう、とか言うなんともバカげた考え故なのだが、ユウヒの異常さと可愛さのせいで最早誰もそれをおかしいと思っていない。唯一正常なのは俺だけなのかもしれない。どう考えてもおかしすぎるのに。……もしかしたらおかしいのは俺だけなのだろうか？

い、いや！ そんなことは無いはずだ。一歳半にして修行を始める方がおかしいに決まっている。まあ、ユウヒ本人は修行などではなく遊び程度にしか思っていないだろうが。ちなみに今日はチャクラを上手く練る為の修行だ。おぼれても大丈夫なように浅い水面の上をユウヒがこちらに向かって歩いてきている。木登りの修行はとくに終わっている。というか、俺の背中にぶら下がるのにチャクラを吸着させて昇って来るからやろうとも思わなかった。水面歩行の業をどうやって教えるかを思い悩んでいたが、どうやらユウヒはこちらが案じていることの数歩上を行くらしい。風遁の術を使っていた時にも思ったが、ユウヒは見ただけで何をやっているのかが分かるらしい。コピー忍者のカカシ？ 誰それ？

「ほらユウヒ、今度はこっちに——って、え？」

ガクン、と引っ張られて身体が宙を舞う。そのままユウヒに近づいて、寸での所で身体をひねってユウヒに当たらないようにした。水面にそのまま叩きつけられるのもあと後面倒なことになるのでチャクラ放出で何とか濡れずに済んだが……今のは何だったんだ？

「ユウヒもしかして……やっぱりか」

どうやら何時まで経っても俺に近づけなかったから自分で引き寄せたみたいだ。よく目を凝らしたら俺の体にチャクラ糸がくっついてるのが分かる。大方チヨ婆が人形遊びならぬ傀儡遊びでユウヒをあやしていた時の事を覚えていたのだろう。というかユウヒの力で俺を近づけることはできないはずだし、ましてや腕を振ってもいなかった。……もしかしてユウヒのチャクラ糸って伸縮するのか！？

というか、本人は俺が悩んだり驚いたりしているのも隅に追いやって俺に捕まって楽しそうにしている。なんとも無邪気な笑顔だが、

それが我が娘ながら恐ろしい。自分が危ない事をしているという自覚が無いからその分だけこちらがひやひやさせられる。

「タクマ、ご飯出来たよ」

「ああ、すぐ行く」

アサヒから声がかかったからユウヒを抱きかかえて向かう。アサヒの声に反応したユウヒが真っ先にトテトテと歩きだしたが、常に目を光らせていないと何をしでかすかわからないので瞬身を使って抱きかかえた。まあ、ユウヒが嬉しそうにしているから問題ないだろう。これで瞬身の術も使えるようになるだろうが。

「伝令！ 里の外に暁と思われる人物を二名発見！ 木の葉の方はただちに迎撃に出てもらいたいと風影様が」

「分かった。すぐに向かう」

これから夕食だというのに、全く面倒なタイミングで来るものだというか予想通りにこちらを先にしてきたか……。

「アサヒ」

「デイダラと……マダラ」

あのコンビで動いているのならマダラは手出しをしないかもしれない。まあ、前はデイダラが準備不足だったから今回は十分に準備をしてきた上で我愛羅を捕獲できると思っているのだろう。だが、今砂には俺達四人がいる。まあ、相手にもマダラがいるが、今回は出てくるのだろうか……どちらにしても問題はこれから向かうこと

で機嫌を損ねるユウヒをどうやってあやすかということだが。いや、セツナとヤヨイの二人だけで大丈夫かもしれない。それに今回は里の外で戦っているから里を人質に取られるような事もない。つまりは我愛羅も戦闘に参加できるし、カンクロウもサソリの人傀儡を持っている。マダラが戦闘に参加しない限りは何とかなるだろう。

「アサヒ、行ってくるよ」

「うん。頑張ってるね」

まるで会社に行くかのような気軽さでキスを済ませてからユウヒの頬にもキスを落として出かける。マダラの相手はヤヨイに一任すれば問題ない。というか、幻術に耐性の低い俺では写輪眼相手にはあまり戦えない。どちらかと言えば土遁の性質を使ってくるデイダラが俺の担当だろう。それにしても……ユウヒが白眼で見ているような気がするんだか、まさかこの戦闘のレベルもコピーできるのだろうか？　だとしたら既に上忍レベルだけど……まあ、ユウヒだから仕方ないか。

「遅れてすまん」

「アサちゃんは？」

「家でユウヒとお留守番。流石にユウヒを一人にはできないし連れてくる訳にもいかないから」

どうやら未だ始まっていなかったらしい。デイダラは全く問題ないが、それよりもマダラの方だ。流石にチャクラを温存しておきたいからデイダラとの戦闘にあまり時間をかける訳にもいかない。今この場にいるのはアサヒを除いた木の葉の忍と我愛羅、テマリ、カクロー。それ以上いるとカバーしきれないから少数精鋭での迎撃だ。

「流石に多すぎるな、うん。でも一尾を捕まえに来たのに七尾も捕獲できそうだな、うん」

「そういうことは倒してから言っておけ」

デイダラは写輪眼を相手にしたいようだがそれはこちらがさせない。ヤヨイの相手はマダラだ。万華鏡には万華鏡で対抗してもらわないと能力が未知数のマダラ相手にはどうしようもない。同じ理由でセツナと砂の三人もマダラの警戒に当たっている。初めからデイダラの相手は俺に決まっていたので、決まっていた事をやり終えてからマダラの相手を俺もするだけだ。

——雷遁・疾風迅雷

この術は雷影の雷遁の鎧よりも数段早く、そして防御力も高い。それに見合ったチャクラ消費と負担がかかるが、チャクラは腐るほどあるから問題ないし、長時間使わなければ八門遁甲のような危険

性もない。時間が勝負だからデイダラが空に飛び上がる前に倒すべきだ。空中だと地上よりもいくらか速度が落ちる。

「ハッ！」

勢いよく地面を蹴り、推進力を得る。回りくどい方法はいらない。このスピードには付いて来れないし、気付いたところには全てが終わっている。脳が動きを命じるよりも早くに相手に到達するから防ぐ術もない。真正面から無策に突っ込んで持っていたクナイに雷遁のチャクラを流して切れ味をあげる。それを地面と水平に滑らせて命を確実に奪う軌道上に乗せる。吸い込まれるように剣が煌めき、音を置き去りにしてデイダラの首が落ちる。

クナイについた血を拭う事もなく、そのままの状態で左足のつま先に力を入れる。踵を左回転にして、そのまま推進力を得てマダラの方に移動。すぐさまクナイを軌道に乗せてその横を通り過ぎる。

「……速いな」

デイダラにワンテンポ使ったが為に時空間忍術を使う隙を与えたのか、クナイがマダラの首を素通りした。デイダラの死に動じる事もなく何らかの能力を発動、若しくは戦闘前に既に能力を使っていたのか。どちらにしてもデイダラはやったから残るはマダラだけだ。どうやらトビという仮面をかぶるのも止めたらしい。

「残るはお前だけだ。……うちはマダラ」

「……イタチが喋ったのか」

既に我愛羅が砂を展開してマダラの事を包囲している。カンクロ

ウも見えないように極限までチャクラを薄くしたチャクラ糸をマダラにくつつけている。セツナも既に仙人モード、ヤヨイも万華鏡を発動させている。もしも尾獣を狩る為に来ているなら、実体化するはずだ。ヤヨイと我愛羅を時空間忍術で吸い込むにしても一度実体化が必要となる。ましてやヤヨイの写輪眼を狙っているのだろう。今回の砂への侵入が尾獣を狩る為なら確実に実体化するはずだ。その瞬間に誰かが一撃を入れればいい。ヤヨイの“高天原”は実体化していただければ効かないし、あれは絶対防御の術だ。こちらからマダラを倒そうとするには俺の術で消滅させるしかない。先ほど首を狙った時に小さく三遁の術を当ててみたが、どうやら実体化している時でないと意味がないようだ。流石の俺の術でも無いものを消すことはできないらしい。

「手筈通りに四人が陽動を、俺かヤヨイが決める」

同じ写輪眼が相手だ。幻術はさほど意味が無い。だが、もしかしたら黒炎によって隙を作りだせるかもしれないし、ヤヨイには七尾のチャクラがある。それに洞察眼に優れる写輪眼ならば、マダラの秘密も戦っている内に分かるかもしれない。

既に先ほどの雷遁・疾風迅雷は解除してある。今この身に宿っているのは電光石火。最初は様子見だ。初代がどうやってマダラを倒したのかは分からないが、多分形骸化した存在である今の状態とは違う術を使っていたのだろう。だから今までに集めてきた情報もさして役には立たないかもしれない。

「砂時雨！」

まずは我愛羅の砂が勢いよくマダラに向かって飛ぶ。だがしかし、それは身体を素通りして背後に消える。マダラが本気ならヤヨイよ

りも先に我愛羅を捕えるはずだから、俺はその瞬間に集中していい。全員が飛雷神のマーキングが入ったクナイを持っているからどこにいても遅れをとることは無い。切り札として初代の穢土転生をしても良いが、それは方法が無くなってからだろう。あれは一応禁術に指定されているから無闇やたらに使うのは流石にマズイ。

「攻撃があたんねえじゃん！ どうするんだよ！」

「休むな。いつかは——ッ！ 新手か」

十分ほど攻撃を繰り返していた所でカンクロウの痺れが切れたのか、声を張り上げた。それにセツナが答えた瞬間、何かを感知したのか右を向き、全員がそれにつられてそちらの方向を見る。と、地面から何かが生えてきたかと思ったら人の形を取り始め、まるでアロエのようになったそれはゼツだった。

「八尾が終わった。ペインは失敗だ」

その言葉に弾かれるように頭が回転する。八尾が終わった、ということとはつまり別働隊がいてそいつらがキラビーを捕獲したということだ。ペインが失敗した、というのは木の葉に九尾を取りに攻め込んだのかもしれない。だが、失敗したなら取られてはいないはずだ。それに、ナルトも仙術の修行を終えたということになる。ペインが九尾狙いなら、だが。

「うちはヤヨイ、それに砂漠の我愛羅……いずれ会おう」

それだけ告げてマダラが空中に、ゼツが地中に姿を消した。それに追うような形で砂の暗部が姿を現し、我愛羅に巻物を渡した。どうやら暗号を解読した物のようだから、ペインが木の葉に攻め込ん

だ旨を伝えたものなのだろう。だとすれば、原作通りに動いてペインは死んだのだろう。ゼツは失敗したと言っていたから間違いない。そうなるトサスケもない今では尾獣を捕えたとしても外道魔像とリンクできる人物が――！

「飛雷神の術！！」

アサヒが狙われる可能性がある。暗部が数人付いているとはいえ、あの二人にかかったら一瞬で終わってしまうかもしれない。アサヒならあの二人相手でも持つだろうが、何分今はユウヒもいる。ユウヒの事を庇いながら戦闘するのは不可能だ。

「アサヒ、無事……」

「……」

無事ではあった。その場にいたのはアサヒとユウヒだけだったから。だが、沈黙が場を支配している。というか、この状況下で動けるはずもない。背中に冷たい汗が流れ、気まずい雰囲気が流れる。だが、それを気にも留めないようにユウヒが楽しそうに笑っている。

「済まなかった。今すぐに――」

「神羅天征！」

「ハグボア！」

自分でも訳のわからない叫び声をあげながら吹き飛んでいく。痛い思いをすることになったが、良いものを見れた。アサヒのシャワー姿何て、そうそうに見れるものではない。というか、何で今更な

がらに裸を見られたくらいで恥ずかしがるのか……やはり女性の事は分からない。まあ、なんにせよアサヒとユウヒが無事でよかったけど。

「人選がおかしいと思います」

「ごちゃごちゃ言うんじゃないよ」

何の理由か知らないが、鉄の国に五影会談の護衛として俺が五代目に付いて行くことになった。もう一人の護衛はもちろんシズネさん。セツナの方が良いんじゃないかと思ったが、ナルトの修行を完成させる為にもセツナを里に残したらしい。ならカカシとか連れて行けよと思ったが、よくよく考えてみたらマダラなどという存在が暗躍している今になって護衛が二人というのは心もとない。だからこそ、血継限界でもある俺を連れてくる事にしたんだろうが、正直言って面倒くさい。いや、本当の理由は面倒だからということではない、前回の三代目のお付きとして砂に行った時のシズネさんとの部屋が一緒だった件があって、アサヒからおしかりを受けたからだ。今回はそんな事が一分も起きないように配慮しているが、帰って来た時にアサヒの機嫌を損ねる訳にはいかない。

ちなみにペインが木の葉に攻め込んできた時に、一番活躍していたのはサスケとナルトの二人だったみたいだ。サスケの万華鏡写輪眼に、ナルトの仙術。どちらもペインを相手にするには十分な戦力として使えた。そのおかげで里に甚大な被害が出る事もなく、五代目もチャクラを使いきることなく終焉を迎えた。この件に関して問題があったのは唯一、ダンゾウの事に付いてだけだ。どうやら裏で暁と取引をしていたらしく、それが予想外にペインの侵入を許してしまったらしい。だが、ここぞとばかりにサスケがダンゾウを始末した為にそこまでの混乱は起きず、結果“根”も解体されて暗部に殆どが統合された。ついでに言えば、激しく戦闘のあった地域に丁度相談役がいたらしく、それも死んでしまった。まあ、俺はサスケがこの機会に乗じて暗殺を果たしたのではないかと思っているが、その三人の死に付いて被害が出ることは無いので大丈夫だろう。三代目は同期の死を悲しんでいたみたいだが。

五影会談が開催されたのは八尾が捕獲された事によって漸く重い腰をあげた雷影の招集によるものだ。木の葉と砂にとってみれば漸くか、と言った所が大きい。今更ながらに開催した所でなんら木の葉にとって役に立つことは無い。あるとしても各里でも力のある忍が尾獣相手に奮闘してもらうだけだ。どうせ、という言い方は少し変化もしれないが暁のメンバーを倒せる訳がない。五影が前線に出る訳は無いだろうし——いや、雷影ならもしかするかもしれないが。まあ、何にせよマダラとやるのは俺達四人だ。

「寒い……」

鉄の国に差し掛かったあたりだろう。急激に気温が下がって肌寒くなってきた。木の葉では雪などめったに降らないから防寒具がそこまで無い。というか、忍だから無いのかもしれないが、流石にこ

れは寒すぎる。途中で何かを買うんだろうが、二人は寒く無いのだろうかと思う。だが、予想に反して二人はいつの間にかマフラーを着用していた。

「何で二人してマフラー付けてるんですか……」

「持ってきていなかったんですか!？」

「いや、途中で買うもんだと思ってて」

というか、木の葉なんて言う温暖な気候の所に住んで何でマフラー何か持っているのだろうか……って五代目とシズネさんは色々な所を旅していたから持っていてもおかしくないか。というか本当に寒い。こんなことなら里で支給されているコートを貰ってくれば良かった。あれは使い勝手が悪いから好きじゃないんだが。それに俺が普段着ているものは特注品だ。飛雷神用のクナイを沢山持つていくことになるし、封印用の巻物とか、何かとかさばるものが多いから普通の服では持ち切れない。だからこそ黒いオーダーメイドの服を着ていて、それゆえに黒い稲妻何て呼ばれている訳だが。

「入りますか？」

「そうしたいのは山々ですけど、帰ったらアサヒに殺されるので止めておきます」

今度は三日間文字通りの放置プレイなどではなく、地爆天星で固められた拳句、何かされそうだ。そんな事になれば流石の俺でも命の危険がある。ギャグ補正がある訳じゃないからそんなことは避けたい。

「そうですか。でもこれから先に防寒具を売っているお店はありませんよ?」

何……だと? そ、それじゃあ俺はどうやって鉄の国まで行けと? クソ、こうなったら一刻も早く鉄の国に着いて暖かい飲み物を貰う事にしよう。それに帰り用の防寒具も。

「というか、後何日くらいで到着ですか?」

「後一日くらいですね。吹雪いていましてから予定よりも早く到着できそうです」

「二人とも、喋ってないでさっさと行くよ!」

五代目は自来也が死んで以来、いつそう仕事にうちこむようになった。案外つらいのかもしれないが、それを決して表面に出そうとはしない。流石に火影にまでなっただけの事はあると思ったが、それと同時にいつの世も女性の方が強いのだと思い知らされる。

「では五影の笠の前に」

その言葉から会談は始まった。鉄の国の長、ミフネが進行を取り仕切り風影の言葉に暁の話が始まる。今の段階で残っている尾獣は一、七、九。八尾が捕獲されたのは予想外だったが、こうして五影会談が開かれた事を思えば良かったのかもしれない。だが、残る六匹の尾獣を相手にするのは流石につらいかもしれない。というか、三遁の使い手だという事が広まっているのか、砂を除いた各里の護衛が俺を危険視している。正直、この会談に来て期待を外された。五影の内の誰もが弱すぎる。これでは暁のメンバーを一人もやれないんじゃないかと思うほどだ。五代目は医療忍者だから分かっていたが、我愛羅を除いた三人はカカシと同じレベル位だろう。もしかしたら万華鏡を持っているカカシよりも弱いかもしれない。

そしてその護衛についてきている二人ずつも期待はずれも良い所だ。雷影が机を壊した時に護衛が俺を除いて全員出て行ったが、反応が遅すぎるし、スピードもまるで駄目だ。ここにいる忍を処分するのに、俺一人でも三分以内にやれる。流石に我愛羅が一尾を使ったらもっと時間がかかるだろうが、正直ここで忍連合軍を作ったとしてもなんら役に立たないだろう。できたとして尾獣相手に足止め程度か、大人数でかかって暁のメンバーを倒すくらいだ。

「ッ！」

空間の歪みに即座に反応して我愛羅のそばに飛雷神で飛ぶ。マダラの体が完全に出てきた所で雷遁・電光石火を身に纏う。そこで漸く他の忍が気付き、それぞれの里の長の護衛に付く。

「流石に速いな……だがこちらの勝ちだ」

「何を——！」

続けて言葉を言おうとした所で背後の気配が消えかかっていたので、振り返ったら我愛羅が地中に引きずりこまれていた。ゼツが地中から捕えたらしく、そのままどこかに消える。俺が反応するよりも早くに持って行かれた。どうやら一尾の事は諦めた方が良さそうだ。やがて暫く経ってからまたマダラが現れる。

「我愛羅をどこにやった!!」

「一尾は我々が捕獲した。残るは七尾と九尾だけだ」

そこからマダラによって月の眼計画が伝えられる。そしてそれに続いて第四次忍界対戦の布告。どう考えても状況が考えていたよりもこちらに不利になっている。まさか俺が遅れをとると思わなかった。だが、一尾を捕まえたということは尾獣の引き剥がしに時間がかかるから、もう少し経ってから木の葉に攻め込んでくるだろう。その間に少しでも軍備の増強に努めなければならない。雷影も土影も忍連合軍の案には渋っていたが、協力は取り付けられた。後は彼らが暁のメンバーを一人でも減らしてくれるように頑張ってくれば良い。そうすれば俺達が尾獣とマダラとの戦闘に専念できる。

第二十七話 五影会談（後書き）

残すところあと一話となりました。

次のリリカルは、ここが五十話を超えているので、題名を少し変更してそこに更新していこうと思います。

とはいっても、主人公も変わらないし、ヒロインは転生なのはさんです。

明日のあとがきで題名を書いておりますので、次回のリリカルからはそちらをお願いします。

第二十八話 終局（前書き）

先に謝っておきます。

酷い終わり方でごめんなさい……

第二十八話 終局

「な……に？」

五影会談を終えて木の葉に戻る途中、里にいていた影分身が消えた。その影響で経験が蓄積されて情報が俺の中に入ってきた。同時に、通常ではあり得ないほどの疲れが襲ってくる。それのおかげで一瞬立ちくらみ状態になり、視界がぶれる。だが、即座に持ち直して気を確かに持つ。

「五代目！ 里が襲撃されました！」

「何！？ ということだ！？」

正確には里から少し離れた所だが、木の葉の忍の中忍以上が総動員して対処に当たっている。暁が尾獣を持ちだしてそれと戦闘しているので、かつて九尾を相手にした木の葉にとってみれば悪夢のような出来事だが、それが今現在起きている。流石にセツナ、ヤヨイ、アサヒと俺の影分身の奮闘で二匹の尾獣を仕留めたが、それでもまだ四匹残っている。一尾が使われていなかったからどうやらマダラは、一尾を封印するよりも先に俺と五代目がいない、そして各里の忍が協力していない今のタイミングを狙ったのだろう。

裏をかかれた、という気持ちが大きい。俺の術ならばマダラを消す事が出来るかもしれないのに、その場にいない。ここから木の葉に戻るまでには最短でも一時間かかる。

「口寄せの術！ 二人とも早く乗って！ 道すがら説明しますから！」

鉄の国からは丁度一的に木の葉の里の上空を通り過ぎてから戦場に向かうことになる。影分身が消えたタイミングでは里に被害は出ていなかったが、忍の死傷者がかなり多い。尾獣を六匹も相手にしているのだから当然と言えば当然だが、それよりも隙を突かれたという方が理由として大きいだろう。俺達の誰もがそんな可能性は考えてもいなかった。アサヒ達三人や、サスケ、カカシ、ナルト、三代目がいると言っても限度がある。ユウヒの輪廻眼の事はばれていないだろうが、万が一の事もあるので日向一族が戦場に赴く訳にはいかない。それだけでもかなりの戦力ダウンだ。

口寄せ動物の上で五代目の治療を受けながら影分身の精神的ダメージによって受けたものと、チャクラとを回復させていく。突いたところにはあらかた情勢が決まっているだろうから、カギとなるのが俺であることは間違いない。いくらチャクラ量の多い俺でも、影分身でチャクラを半分にした後では尾獣レベルのチャクラは無い。せいぜい人柱力くらいだ。それだけでは尾獣を全て消し去るのには足りないし、何よりマダラまでたどり着けないかもしれない。焦る気持ちを抑えながらも冷静に今の状況を判断しながら打てる策を考えていく。もしかしたら、最後のカードを切る事になるかもしれない。本当に追い詰められた時用に残していたが、これが最後の戦いならば使った方が良いだろう。

里から煙が上がっている。火遁や、土遁、尾獣の妖術で被害を被ったのだろう。五代目とシズネは先に戦場まで飛んでいった。俺は里の上空に来了所で降りて、家まで駆ける。周りで色々と被害が出ているが、何はともあれまずはユウヒが先決だ。

そう思って日向の家まで来た所で、いつもと違う雰囲気を感じる。雰囲気というよりも、気配と言った方が良い。何やら人が大勢集まっていて、守りを固めている。一人ひとりが決意を秘めた目をしているのが嫌でもわかる。死に行く、死を覚悟した戦士の目だ。

「状況は？」

手近な場所にいた分家のものに尋ねる。数多くの日向の者がいる中で、俺の知らない顔も多数あった。

「タクマ様！　それが……ヒアシ様が……」

伝えられる事実が胸を抉る。問題の場所まで案内されると、大きく地面が抉れているのが目に入った。そしてその横には鬼鮫の死体。ヒアシ様とヒザシさんで討ち取ったらしく、だがヒアシ様はその際に亡くなった。遺体のそばまで歩いてから黙祷を捧げる。そうして屋敷の中に入り、ユウヒの無事を確かめた。

「……」

幼いながらに空気を感じ取っているのか、俺が勝ってきた事に気付いても何も言うことなく俺の服を握っている。その髪を撫でた所で手に違和感を覚える。

「ッ！ ヒナタは居るか！？」

手に付いていたのは赤黒く染まっていたユウヒの血。鬼鮫との戦闘時に屋敷が大きくゆれたり、崩壊した時の影響で頭を打ったのかもしれない。泣き声一つ上げようとせず、こちらを安心させようとしている姿は、とても二歳の誕生日を迎えて居ないようには見えない。

「兄様、呼びましたか？」

「すぐにユウヒを見てやってくれ」

ヒナタとハナビが一緒にやってきて、ヒナタにユウヒを預ける。二人とも泣き腫らしたであろう目が、真っ赤になっていて、いつもは白い頬も赤くなっている。

「……大丈夫みたいです。少し頭を切ったみたいですから」

ヒナタがほっと一息ついてから俺に報告する。それを聞いて一安心したが、それでも湧きあがる怒りを抑えられそうもなかった。煮えたぎるようにふつふつと俺の中で音を立てているのが分かる。

「ユウヒ、少し待っててな。すぐに終わらせて来るから」

「あー」

舌足らずに返事をしてから、ユウヒは事きれたように目を瞑って眠り始めた。俺の顔を見たことにより安心したのだろう。ユウヒの頭の上で手を往復させてからその姿を目に焼き付けて屋敷から出る。

「何人たりともこの屋敷に入れるな。最優先して守るは輪廻眼を持つユウヒだ。暁はそれを狙ってくる」

「はっ！ ですがタクマ様、何人かお付きを付けた方が」

「問題ない。それに俺に近づかない方が良い。今はキレてるから」

分家の者に指示を出してから戦場に向かう。どうにも自分を制御できているのが不思議だ。

いや、或いは制御できていないのかもしれない。燃え盛る怒りは血を滾らせ、理性を無くそうとする。だが、それすらを理性で抑えつけて、冷静にキレている。それが自分でもわかるほどだ。かつてないほどに自分が何でもできそうな感覚に陥る。

里から少し離れた所に着いてから、あたりに木の葉の忍を探して暗部に囲まれた五代目を見つける。

「五代目、状況を」

「来たか！ 今の段階で残っているのはマダラと六尾、八尾だけだ。だが木の葉も甚大な被害を受けている……何時まで持つか」

「それくらいなら俺が一人でやります」

「そうか、頼む。カツユを連れて行け。役に立つはずだ」

肩に小さいカツユを乗せてから尾獣の居る場所を聞く。どうやらそこにマダラも居るらしい。

「口寄せ・両生の術」

背中に羽をはやして上空から近づく。もはやチャクラの残量などどうでも良い。ここでマダラを殺せれば後はどうでも良い。ユウヒを、アサヒを守るならば他は何がどうなっても良い。

姿の大きい尾獣は空からは簡単に見つける事が出来た。それが俺の目の前に一直線になるようにしてから今までの最大でチャクラを練る。眼下で色々な色が飛び交っている。火遁の赤や、水遁の青、土遁の茶色や、雷遁の光。そのどれもを見無視するように印を結んで術を放つ。

「三遁の術!!」

暴風が吹いて目の前にあったものを消し去る。尾獣と言えど例外ではない。込められるだけのチャクラを込めたから、当たったもの全てを消し去った。そのまま地面に降りてアサヒの隣に立つ。

「アサヒ!」

抱きしめて、たしかな感触を感じてアサヒがここに存在していることを喜ぶ。その直後に瞬時に頭を切り替えてマダラがどこにいるのかを探す。

尾獣を消し去ったとはいえ、それによって同時に何人かの木の葉の忍びも消えてしまっただろう。そんな事が、アサヒを抱きしめて漸く冷静になった頭で理解できた。だが、止まっていられない。冷静になったとは言っても未だ怒りは燃え続けている。暁を完全に仕留めるまではどうにもなりそうにない。

「アサヒ、マダラはどこだ」

自分でも先ほどとは違って信じられないような底冷えした声が口から出てきた。それに反応してアサヒが身を縮こませるが、すぐに持ち直した。

「落ち着いて。私は居るでしょ？」

キスされた、と気が付いたのは数瞬遅れてアサヒが喋り始めてから。自分の中にあつた炎が火を小さくしていくのが分かった。大きかったものが小さく、だが内容を帰ることなく、密度を増した。くすぶらせることなく、最小限に怒りをとどめる。

「もう大丈夫だ。マダラは？」

「あつちでヤヨイちゃんが戦ってる。一緒に行こう？」

無言で返答してからアサヒの後を着いて行く。カツユに聞けば良かったのではないかと思つたのは少し経ってからだった。それに後から気がつくくらいに周りが見えていなかったらしい。落ち着いてみれば、アサヒもところどころ血を流しているし、チャクラの残りも少ない。アサヒが居た、という事だけに関心が向いていて気が付かなかった。だが、アサヒの状態を確認して再び炎が大きくなるうとする。

それを拳を強く握り締めることで抑える。俺のチャクラも残り少ない。尾獣を跡形もなく消し去る為にチャクラのほとんどを使ってしまった。あとは三遁の螺旋丸一発分しか残されていないような気がする

「これは……」

足を踏み入れてから、ヤヨイの“高天原”の領域に入ったのだと知覚した。ヤヨイとセツナがマダラを相手に戦っている。“高天原”のおかげでヤヨイはケガを負っていないが、セツナは右腕を無くしている。多分マダラにやられたのだろう。いくらヤヨイの術と言えど、ヤヨイ自身への攻撃が無効化されるだけで、セツナへの攻撃が無効化させる訳ではない。

「ここまでだ、うちはマダラ。暁のメンバーはあんたしか残っていない。それに尾獣も全て片付けた」

「……黒い稲妻か。だが、こちらにも切っていない最後の切り札がある。そしてその為の条件もそろった」

「そんなものは関係ない。ヤヨイの術は絶対だ。それに……俺も力を抑えるのは止めた。ユウヒとアサヒを傷つけた罪をその身で償ってもらおう」

もはやマダラが何をしようと思っても関係ない。俺が最終手段をとった以上はその時点で勝負の行方が決定している。

「これがうちの、万華鏡写輪眼の力だ!!」

「遅い——奥義 “三遁斬魔剣 終の太刀”」

「黙禱！」

五代目の声が響き渡り、木の葉の忍全員が目を瞑る。何人もが亡くなり、その影響で何人もが今泣いている。死者はおよそ百人。実に木の葉の里の半分以上の忍が無くなった。俺達に関係のある所で言えば、ヒアシ様。そして三代目だ。暁の一人、ゼツと合い討ちになったらしい。セツナはマダラとの戦闘で右腕を失った。

俺がもっと早くに気付いていれば、俺がもっと早くに戻っていれば里にこんな被害は出ていなかった。それだけが悔やまれる。この戦いに英雄はいなかった。木の葉を創設したうちはマダラの反逆に始まり、それを木の葉の忍が討ち取っただけだ。そこには勝者も敗者もない。あるのは忍としての責務。

「……」

唇をかみしめていたら血が出てきた。口の中に鉄の味が広がる。そしてその痛みを理由にするように涙がこぼれてきた。未だ涙を流す事が出来た事に驚いている暇もなかった。すぐにアサヒによって抱きしめられる。

身体を温かさが包んでくれる。最低な俺を祝福してくれるかのような温かさが、今は逆に心に響いた。罵れ、怒りをぶつけてくれ。

そう思っているのにそうしてくれない。俺に対してそんな事をアサヒがしてくれないのは分かっていたが、それで自分がまだまだ弱い事を思い知らされる。

結局、何時まで経っても、何年たっても、何度人生を歩んでも――俺は弱いままだ。いくら力があっても、できない事が無くても、人を生き返らせる事が出来たとしても、弱い。だからこそ、人との間で何かを補うことで人は初めて人間たりえるのかもしれない。

そんなことに気が付くのに相当の年月を費やしてしまった。

第二十八話 終局（後書き）

もう一度、ごめんなさい。

次回からはここではなく、『異世界旅行〜真・リリカル編〜』としてそちらに投稿していこうと思っています。

とはいっても、すべて引き継ぐ予定なので別にする意味がないかもしれないませんが、そこはひとえに作者のきまぐれですので気にしないでください。

初投稿から二カ月と少し、長かったようで短かったですが、ようやく一つ完結になりました。

駄文に付き合って、感想を書いてくれた皆様には感謝の極みです。

次回からはもう少し良くなるように精進しますので、よろしく願います。

最後に、多数のアクセスと、感想、お気に入り登録、ありがとうございました！

正直ここまでになるとは思っていませんでした。

次の小説はこれを超えるように努力します。

今まで付き合って下さった皆様は、次回もよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3647k/>

異世界旅行

2010年10月8日15時08分発行